
2 番手の女

大菊小菊

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
<https://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タ
タ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。

この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者また
は「小説家になろう」および「タタ書き小説ネット」を運営する
タタプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範
囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致し
ます。小説の紹介や個人用途での印刷および保存は、自由にとつて

【小説タイトル】

2番手の女

【コード】

N86999GX

【作者名】

大菊小菊

【あらすじ】

歌姫が世界の災厄を抑えるという信仰が信じられる国で、歌姫の
頂点、巫女姫を目指して努力したアリエッティ。

巫女姫に選ばれることはなく、それでも歌姫として長く勤めた実績
から、高位貴族の辺境伯との縁談を勧められた。ところが、顔を合
わせることもなくその縁談は破談になる。

辺境伯はアリエッティが敗れた巫女姫と恋仲らしい。

そうならそうと言ってよー！期待しちゃったじゃないー！

それなのに、縁談を断られた辺境に神官としての派遣を命じられて…
もう期待しない。どうせわたしは2番手の女だもの。この勤めが終
われば、大好きな音楽とお酒で人生を楽しんでやる。
ちょっと臺のたっだしっかり者歌姫が、性悪巫女姫の鼻をあかして
幸せになる物語。

1 期待したじゃない！

堪えきれず、高笑いをあげた。

もつ何がなんだか。

ここまできても、わたしは2番手。いや、2番以下だ。

思えばずっと2番以下だ。よくて、2番。

もつこれが運命ってやつだ。仕方ない。だって、みんなものの努力の問題じゃない。恋敵なら努力もわかる。だけど、恋敵以前の問題。

わたしは歌姫として、12歳から神殿に奉仕してきた。いずれは歌巫女姫になるべく、同じ年頃の女の子たちと研鑽を積んで、先頃新しい巫女姫の選定で、敗れた。見事、敗れた。

この時、4番手。

これはほぼ出来レースみたいなものだから、まあ、良くて3番かな、
と認めてたけど、やっぱり4番だった。

3

生まれはきりぎり伯爵の名がつく家の、次女。上から3番目、下から2番目。才媛の姉、跡取りの兄に次いで、私。そして愛らしいと評判の妹。1つ違いの兄のおかげで、すっかり空気。やんちゃな兄に振り回されて、なまじ聞き分けが良くて、そつなく器用だったから。そして5つ下に妹が生まれると、家族の興味は全てそちらく。すっかりいじけて、捻くれた私は、家族に反抗的になって、扱いにくい子。居場所がなくなつて、神殿の歌姫に志願した。

地方神殿の選抜で勝ち残れたのは、3人だった枠の1人が、隣接する領の格上の伯爵家のお嬢様で、どうしても歌姫になりたくないと辞退したから。辞退がなかったら私は、歌姫にもなれなかった。

運良く、地方神殿から巫女姫候補として、王都の神殿で修行したが、一生懸命努力しても、1番はなれなかった。

だけど、歌姫になったことは、とても幸運だった。

だって、神殿の歌姫を勤めあげたら、各地の祭りで仕事ができる。
巫女姫の代わりにだけ。

楽器もみっちり教えられて、音楽理論も叩き込まれたので、今では
楽曲の編纂や指導もできる。下請けみたいなものだけ。

だから、女一人でも食べていけるくらいは、技術と伝手を手に入れ
られたのだ。

歌姫を勤めあげた娘は、神殿に残って次世代を育てるか、結婚して
家庭に入るのが通常。歌姫時代に相手が見つけられないと神殿に残
って指導者になって良縁を待つ。もし見つからなければ、気がすむ
まで神殿に残れる。神官という身分の一代爵位を賜うが市井の贅沢
はできない。

それを嫌って、歌姫になった貴族のお嬢様たちはちゃんと婚約者
を見つけて、引退したらすぐに結婚する。もしくは、家庭教師や音楽
に関わる諸々の仕事で糊口をしのぐのだ。

貧乏貴族の娘の私には、婚約者がなかった。両親も神殿に入りさえ
したら、自分たちの手から離れたとばかりにそんな話は持って来ず。
自力でなんとかしよつにもやっぱり2番手。良い雰囲気になっても、
この可愛げのない性格のせいなのか、いやいや、これも才能だろう。
恋愛の才能。恋愛才能のなさだ。

気づいたら、神殿残り組筆頭になっていた。こんな時だけ、一番な
んて、呪われてる。

そんな私に幸運が舞い降りた。

辺境伯カービング伯爵との結婚話だった。

この世界は女神が作った。女神は人間が朗らかに笑い、喜び歌うのを愛でたいために、この世界を作った。各地の神殿は女神を讃え、豊穡の恵みを感謝するため、歌を捧げる。祈りの基本だ。

神殿を引退した歌姫たちの仕事には、この地方神殿の世話役があった。身分はどのような形でもいいが、神殿に関わり、衆人に歌と楽を教える。

できれば身分が高い、領主の夫人が最も良い。手厚く神殿を保護できる。

歌や音楽を忘れた土地には、災いが訪れるという、あながちでたらめでもない信仰があるからだ。

カーピング領は20年ほど前に領主が亡くなってしまったから、
神殿を世話する役が手薄になり、カーピング領から歌姫が選出されるのが少なくなった。同時に天災が続き、隣国との交易地として、有名だったカーピングの都、ギル＝ガンゼナは活気を失った。若きカーピング伯爵には歌姫の夫人が必要だと思われていたのだ。

5

今回の歌姫との結婚は年頃になったカーピング伯には絶好の時期で、巫女姫選定後、巫女姫に選ばれなかった歌姫を連れて帰ってくるだろうと期待されていると聞いていた。

幸いに、私はそれに選ばれたのだ。

選ばれたのはまさに僥倖。棚からぼたもち。

本来、王族と同じ権限を持つ辺境伯なら巫女姫の次点の歌姫や、もっと高位の姫が選ばれる。だが、私より順位が上の姫たちが諸事情により、選ばれなかった。

今までの努力を、女神が報いてくれたのかと思った。わたしは夢のよつな僥倖に浮かれていた。

市井の民より貧乏な爵位持ちの娘が、本来ならば嫁に似けるものな身分ではなうのだ。まさに王の輿。しかも、カービング伯爵は社交界でも有名な美青年。

歌姫になって、勤めあげてよかった。
多分、生まれて初めて、心底から神に感謝した。

ところがだ。
呼び出された神殿で、神官長様は言ひ顔でわたしに告げた。
妻としてではなく、神官としてカービング領に行くものに。
一瞬だけ約束された婚約はなしになったのだ。

その理由は今回の選定の陰で行われた、「諸事情」ってやつだ。

今回の巫女姫に選ばれたアリシア様を巡って、この3年ほど鮮烈な恋愛劇が行われていたようだ。

6

わたしは見たことがないので、噂でしか知らなう。
だって、王宮に令嬢として夜会に出られるほど高位じゃならし、誘ってくれる人もいなかったし。
休みの日に繁華街や観劇になんて、似けるほどの金銭的余裕もなかったし。

アリシア様は高位の令息たちから次々と求愛を受けていた。おやすみの日には、毎回、となたかにも誘いを受けて、外出し、王宮の夜会や、議会開会中に行われる王都の社交場にも令息たちのパートナーとして選ばれ、出席していた。
そこで繰り広げられた、アリシア様争奪戦は、二二一、二年の社交場の1番のネタだった。

そして、カービング伯爵は、この多聞にもれず、アリシア様親衛隊のお一人だったのだ。

アリシアさまが巫女姫に選ばれたので、この親衛隊は解散になるのかと、思いきや、解散されなかった。

お取り巻き令息様たちは、アリシア様が巫女姫を退かれるまで待つとおっしゃって、それぞれの結婚を先延ばしにされたのだ。

そして、それに巻き込まれたのが、このわたし。

カービング伯爵がわたしを巻き込んだ自覚はないのかもしれないが、状況がわたしを巻き込んで持ち上げて、その気にさせて、一気に突き落としたのだから、そりゃあ、もう悲しかった。

なんて不運なんだ。こんなににけにされて。

わたしは3日、泣き通した。

だけど、誰にも心配されなかった。

神殿から下がり、実家に戻っていたが、家族は一通り、お悔やみのよつな言葉をくれた。3日の間に、それぞれ1回ずつ。あとは食事を抜くのが、部屋から出てこなかつたのが、気にされる様子もなかった。

そして、先程、父から2回目の慰めがあった。

辺境伯夫人になれなかったのは仕方ない。だが、歌姫として、敬愛を受けて、生きていける。もう泣くのはやめて、与えられた仕事をしっかり勤めなさい。嫁入り用に用意していた持参金を渡すから、今まで窮屈な思いをしていた分、自由に楽しく暮らすがいい。

表面上は、結婚の希望がなくなった娘に対しての愛があるよつな言

葉だったが、どこか違和感があった。だが、その時にはその原因が分からず、辞して部屋に戻ってから、気づいた。

「ふ、ふふふふふふ」

自由に楽しく暮らす？持参金を渡して？

それはもつ実家に戻ってくるな、という意味だ。

自分は家族にも見放されたのだ。

そう気づいたら、涙でなく、笑いが漏れた。

2番手であることを可哀想に思っているのは自分だけだった。誰かに選ばれなかったり、1番になれなかったことを憐れnderのは、自分だけなのだ。あとは誰も気にしない。2番だろうが、3番だろうが、順番もつかないその他大勢だろうが、だれも気にしてない。

8

「あはははー！あははー！」

バカみたい。バカみたいー！

きっとわたしは褒められたかっただろう。自慢の娘だと言われたかっただのかもしれない。美しい歌姫、救国の歌姫と誉めそやしてほしかったのだ。よく努力した、よくここまでできるものになったと、褒めてほしかったのだ。

だけど、それは得られない。

1番にならないと、そんな賞賛はもらえない。自分の存在を敬ってもらえない。

「あはははー！あーははははー！」

笑いすぎて腹がよじれる。こんなに大声で笑ったのは10代の頃以来だ。

得られないものを欲しがってる自分が、くだらなくて、馬鹿馬鹿しかった。そんな可愛い年でもなくせに。

神殿にいる時から、家族の関心のなさは分かっていた。顔も見たくもない、辺境伯から敬愛なんてかけられるわけがない。

よくよく現実を見れば、そんなこと、簡単に分かる。それを既に持っているものとして考えていたなんて。厚かましさに、また、笑いが出た。

「ふふ。：ふふふ。あはは。はあ。」

笑い疲れて、わたしはベッドに転がった。自分を憐れんでいた心は、⁹
今の大笑いで吹き飛んでくれたが、虚しさは消えない。

だけど、もういい。

客観的に見れば、自分はかなり恵まれているし、かなり面白い。

それなりの身分の娘が、どこぞの恋愛劇に巻き込まれて、結婚を夢見た相手の顔を見る前に振られてしまったのだ。だけど、領地には連れて行かれる。神殿のために。尊厳も恋心も踏みにじられた哀れな歌姫。

「悲劇ねえ。」

わたしに才能があつたら、戯曲の一つでもかけるかもしれない。

そう思つて、はた、と思ひ出し、わたしは、もっ、と起きた。
そういえば、仕事を一つ引き受けていたのだつた。王都を発つ前に、
終わらせてしまわなければ。

5年後、新たな巫女姫が選ばれたら、わたしはカービング領の神官
の仕を退くことになるだろう。それから先の人生を楽しむために、
お金が必要となる。この仕事を切るわけにはいかない。

はあ、と大きな息をついた。まだ、頬には笑みが浮かんでいる。この
微笑みはすぐには消えない。
もっ、自分の人生を憐れまない。

わたしは、水で顔を洗い、預かつた譜面を持って、階下のピアノを
借りるべく部屋を出て行つた。

おおお、ずいぶん気後れ感。

久しぶりに王都に帰ってきました。

生まれて初めて、王宮舞踏会に参加するために。

舞踏会でもわたしは踊らない。

だって神官だし。

つてことで、ドレスも着てない。

神官の司祭服。

新年を寿ぐ王家主催のこの舞踏会に参加できるのは、国の中枢を担う高位貴族と招待された人たちだけ。

今回、カービング領の神殿神官として、初めて招待されました。

ほほほ。

：全くもって嬉しくない。めんどくさい。

辺境のカービングでの暮らしは、意外とわたしの性にあっていたらしく、王都のような娯楽も流行もなくとも、寂しくなくて、充実しております。

だから、今更の王宮の煙ひやかちに気後れ感が半端ない。

周りは全身からキラキラ発光している人たちばかり。

司祭服にじっとしてよかった。

ここで頑張ってドレスなんか選んだら、間違いなく田舎者の流行遅れ、空気読めない中途半端な年増の「」降臨ってことでした。

うん、わたしの選択、正しい。

入場の順番を待つ私たちには、チウチウと紳士淑女の皆様からの熱い視線が送られてますが、大丈夫。

とりあえずの選択は間違ってたから、気後れ感はこのすまし顔で気付かれてないことでしょう。

「：緊張してるのか？」

と思ったら、気付かれてた。

まあ、この人ぐらひは気づくでしょう。

隣に立ってエスコート、とまではしないけど、一緒に入場を待つカービンダ伯爵ヨシア様。

弱冠20歳の若き伯爵。

噂に違わぬ美青年で、前回の巫女姫選定までは、王宮の近衛騎士をしていました。

軍人にふさわしい、鍛えられた体格は、舞踏会の礼服を着てもはっきり分かる。

むしろ、姿勢の良い立ち姿は、これだけの人の中でも、人目を集めるぐらいの美青年。

規格外ですな。羨ましい。

わたしはヨシア様の問いかけにわざと緊張しているように、少し

だけ微笑んで頷いた。視線はそのまま、階下の大広間に向けたまま。

ああ、あそこのホールまで降りるのね。

そこで、向かいの玉座に向かって正式礼。

王夫妻の返礼を受けて、さらに大広間に降りる、と。礼は5秒つてとっかじら。

王夫妻の横には、巫女姫と神官長様。

その一段下に王族がずらりと勢揃いして並んでいる。

ああ、王太子妃のリユシーネ様、お久しぶりです。

王太子妃リユシーネ様は元歌姫。

中央神殿の世話役として、先代のロメリア様とは懇意にされていたので、その頃の歌姫たちにはよくお心をかけていただいていた。お言葉をいただいたことはあつたけど、あちらは覚えていないでし
よう。

なにせ、100人ほどの歌姫の一人。

特に目立った表彰もないし。

王弟オスカー殿下もいらつしやる。

宮廷楽団の長だけど、この入場の儀は王族として並ばれてる。

王弟妃のティアベルゼ様も相変わらずお美しい。

他に知った顔はいないかと、じつくり大広間を見ていたら、視界にヨシユア様の手が入った。

これはエスコートしますという意思表示。

不思議に思って隣を見上げると、端正な顔を、薄く微笑まれたヨシ

コア様。

思わずトキリとした。
カッパいいます。とて。

「手を。緊張していると、階段でつまづいてしまった。」

あら、お優しい。でも、結構です。

「恐れ多いです。卿。」

軽く腰を落として、淑女の礼で断った。
ヨシコア様は何か言いたげに眉を寄せたけど、すぐに順番が呼ばれたので歩き出した。

機嫌を損ねちゃったかしら。

まあ、いいわ。

ほらね、視線が痛い。
ちつきのエスコート、受け入れても断っても、お嬢様方の怒りを買ってます。なんでも。

同伴は立場的に仕方ないじゃないの、自領の神官なんだから。
悔しかったら譲ってあげますよ。
結婚できなくなるの、必至だけど。

だって、4年たったら、あの巫女姫様が降嫁されて、追い出されるのよ。まだギリギリ嫁げる年だけど、4年たったら普通の結婚は無理でしょ。

大衆演劇並みの大波乱がなげり。

ないわー。

こと、わたしに限ってはな。

何せ二番手の女だから。

あ、二番手なら後妻はあるか。

地味に凹む。普通の結婚を夢見たかった。

なんてこと考えてたら、ちょっと興奮も冷めてきて、つまづくことなく階段を降りれてた。

「カービング辺境領、ヨシエアニザンニカービング卿、並びにカービング領エチエア神殿、神官アリエツタイニエトニス様、ご入場！」

ヨシエア様がホールの真ん中で止まったので、先例に倣って、隣にたち、深々と礼をした。

1・2・3と心の中で数えてヨシエア様の気配に合わせて、顔を上げると、正面の国王様と目があつた。敬意を表すために視線をわずかにずらし、移動のために顔を動かすと、巫女姫アリシア様と神官長様が目に入った。

アリシア様は満面の笑みを浮かべて、小さく手を振っていた

あらー、なんてあからさまな。

お隣だから、顔は見れないけど、多分ヨシエア様も微笑んでいらつしやるのでしょ。

相思相愛ですものね、お尊によると。

しかしねえ、今はこの国の安寧と恵みを祝う大事な会なのですよ。

国幹を担つ重鎮たちがいる前で、よく臆面もなく私情を出せますね。

まあ、あのアリシア様の天真爛漫な性格は、歌姫の時からだし、歌姫の時も随分と規則や不文律を犯してだけと、咎められる感じもなかったみたいだし。

アリシア様のお取り巻き様たちのおかげなのか、はたまた、噂にあるように国王陛下の隠し子説が本当なのか、わたしのようなその他大勢には説明されようのなり理由で、今でも自由に過じられてゐるようだから。

個人的に言つと、ものすく。

腹立つつていうか？馬鹿馬鹿しいつていうか？呆れるつていうか？ま、面白くないのよね。

これって、羨望からくる嫉妬なのかしら？それとも堅物的な考えからくる怒りなのかしら？

どっちにしても、こんな下つ端腰掛け神官の不興なんか、にににしているこの国の大人の人たちにとっては、なにと同然なものなので、これ以上わたしも深く考えないでおきましょう。

気分が悪くなるだけだから。

改稿 「噂に違わぬ美青年で、昨年の巫女姫選定までは、王宮の近衛騎士をしていました。」→「噂に違わぬ美青年で、前回の巫女姫選定までは、王宮の近衛騎士をしていました。」

3 持ってないんだもん、

舞踏会前半の典礼が終わると、優雅な音楽が流れ始めた。今からは社交の時間。いよいよ舞踏会の始まりだ。

すぐに、エシエ様が国王陛下への挨拶を促してきた。カービエ公領の爵位順は、伯爵と言ってもかなり上位。実質は王族と同じ。すぐに呼ばれるので、待機しなければならない。

待機場所にいると、王弟オスカ一様から声をかけられた。

「なんだ、その格好は。」

初っ端からそれか。

「私は神官ですから。」

「普通はドレスだろ。未婚なんだし。持ってないのか？」

「持ってませんし、必要ありません。夜会などに出ることはありませんし、王宮舞踏会に出るにしても、あと1度くらいでいい。」

神官が全員、この舞踏会に出られるわけではなく。招待された時にしか行けないうのだ。今回は久しく不在だったエチエ神殿の正規神官就任を賀ぐためだろう。

うまくいけばあと4年で1回くらいは回ってくるかもしれないが、それは状況次第。

「なんでだ？この先、神官だったらこの舞踏会に出る機会も増える。エチエならなおさら。」

「長くエチオピアに居る予定では有りませんが。それに母国も時期が来れば辞すつもりです。」

「ふーん。そのつもりだったのか。じゃ、わたしも仕事をまわしやすう。」

オスカ―殿下がニヤリと笑った。

「ええ、ですから、これから先おとつぞう眞實に。遠方なので、迷惑おかけしますが、精一杯させていただきます。」

淑女の礼で深々と頭を下げた。

「ええ、ええ。アリエッティ。もちろんよー。ねえ、リッティエへの新作を見た？あれもあなたが手がけたんでしょっ？」

ティアベルゼ様が待っていたかのよつに、話し始めた。つずつずしてたの、わかってた。

「手直しだけですが。あらかたはセシリア様が。」

「あら、セシリアから聞いたのよー。あの頃、色々煩わしくて、編曲に集中できなかったからあなたに丸投げしてしまったのって。すこしく主役の雰囲気が出てて、よかったわよー。あの曲だけで、物語を彷彿とさせるのー。」

光栄です。短く答えておいた。

だって、ヨシエ様が戻ってきたから。別の方と歓談してたい、たぶんそろそろ、挨拶に、呼ばれるんだろっ。

オスカ―殿下、そんな舐めるように彼を見なうでください。くんな誤解をされますよ。

ヨシエ様が丁寧に挨拶されても、王族としての儀礼的なお返事だけ。

まあね、いろいろ、いろいろ巻き込まれちゃって、大損害を受けてるのって、多分この方たちかもね。

せっかく育てた才能ある子たちが、みんな表舞台から追い出されちゃったわけだから。

でも、もちよつと愛想よくしてあげたら？。まだ20歳なんだし、若気の至りってやつで。

でもおかげで、突出した才能のないわたしが、おごぼれに預かっている。しばらくはわたしも仕事ができる。そんな長くは続かないってわかってるけどね。

いずれ才能のある人たちは戻ってくるだろうし。

歌姫は歌だけでなく、音楽に関する全てを叩き込まれる。だから、楽器の演奏も作曲も編曲もできる。歌姫のお小遣い稼ぎとして、編曲の仕事わたしは引き受けてる。

表立って小金を稼ぐわけもないので、歌姫在籍中は市井での演奏はできないし、流行の歌の作曲も表立ってはしない。

だから、宮中楽団から依頼される夜会や演奏会用の編曲や、大衆演劇の舞台音楽を作ってあげるのが、いいお小遣い稼ぎになるのだ。時間も精神力も、地味に体力も使う仕事だが、わたしはけっこう好きだ。技術も上がるし。

歌姫みんながこんな仕事をするわけがない。もちろん、実家が裕福なら、こんなことをして小遣いを稼ぐ必要がない。

だが、公爵家出身のセシリアは、作曲の天才で、親戚にあたるオースカー殿下はその才能をよく分かっていた。

今、流行っている夜会の音楽はオスカ―殿下が作曲してセシリアが室内管弦用に編曲したものが多くとか。

セシリアは公爵家だったから、歌姫在籍中も社交が忙しく、たまたま仲の良かったわたしが彼女を手助けしていた。

そんな縁があつて、王族のオスカ―殿下とお話しができるわけです。

とまで詳しくは説明しなかったけど、説明しろと、ミシゴト様の目が言っていたので、歌姫時代に大変お世話になって、と答えておいた。

冷たい目で見られたけど。

なんだかモヤモヤ。

わたしの人間関係を詮索しておいて、怖い顔で返されるなんて、理不尽だ！

もう慣れたけど！

ちのやく国王陛下くのい挨拶の順番がきて、拝謁できた。

国王陛下は真摯な感じだったから、ちすがにものつすい緊張したけど、エシエア様が卒なくこなしてくれました。

若干20歳とは思えません。ちすが、高貴な血筋の方です。

辺境伯を継がれたのは16歳の時だっていつから、その時からいのやって挨拶していたんだろ。

すい剛胆。

王妃様は気さくな方だったから、とても意外だった。王妃様は、神殿至上主義のこの国の中では珍しく、騎士出身の方。この話はとても有名で、戯曲になって国中の誰も知っている。

ガチガチに緊張したまま、次は神殿の方たちくのい挨拶。

ちだよー。

アリシア様と話つづらいなあ。実は歌姫時代も、ほとんども話したことがないし。

と思っただら、わたしのことはならぬものとして、エシエア様の手を取らんばかりの雰囲気でも話されました。

それはそれで。

どんな顔すればいいのかと、ちょっと戸惑い気味にしていたら、神官長様の方からお話かけられました。

「アリー、よく来てくれた。」

おっと、まちかのアリー呼び。

神官長様から愛称で呼ばれるのは、10代の頃以来です。巫女姫候補になってからは、ありませんでしたから、5年ぶり？

わたしは長く神殿にいる方だったから、可愛がっていただいたほっだと思っ。

あまり依怙贋真などされないう、公正な方なので、ちょっとわかりにくかったけど、愛称で呼んでくださったり、ちょっとしたお使いを指名してくださったりして、わたしはかなり親近感を持っていた。

て、それも2番だったことを、いま思い出した。思い出さなくていいのに。

わたしより長く神殿にいた子は、孤児だったから、神官様たちが親代わり。

他家からお預かりしているお嬢様たちとは、全く親密さが違っていた。

その子は巫女姫選定入る前に、良い人を見つけて、神殿を辞したんだっただけ。

く、一気に虚無感が。頑張れ、わたし。

「元氣それで安心したも。カーンハグでの生活もつまへうしてるも
うで。」

「はい。伯爵様が良く計らって下さいますので。それに、わたしは
自然の多い静かな場所が好きだったもんです。自分でも驚きです。」

そうか、と神官長様は慈愛のある目を細めてくださって、少し近く
に寄った。

「無理を押し付けて、ほんとに済まなうと思ってる。」

巫女姫様に聞いさなうくらの低い声で。

わたしは一歩下がって、深く礼を取った。

この方からはもう何回も謝られている。

度々、お手紙をくださり、その度に謝罪のお言葉を添えられていた。

「お査ていただいた神官長様のお役に立てるなら、私にとって、と
ても誇らしうことです。とこそ、私に心から誇らせてくださませ。
」

これ以上の謝罪は、むしろ悲しう。

言外にそううつと。

「…ありがとう。アリ。」

「私こそ感謝を。お教えいただいたことを生かせる場所を、与えて
くださって感謝しております。」

「わたしはいつでも、お前の幸せを祈ってるも。」

じわ、と涙が湧いた。

1年前のあの日以来、涸れてしまったと思っただ。
人の優しちは、心の琴線に触れる。
だけど、今はあまり嬉しくなら、と思っってしまった。

なんだか、泣くと負ける気がして。

「神官長様こそ、ご自愛くださいませ。お体はいかがですか？」
「年齢には勝てないね。」の頃、特に感じるも。巫女姫の代替わりは忙しうものだと分かつてはいるのだけとね。」

巫女姫の代替わりは5年に一度、神官長の代替わりは8年に一度と決まっている。

女神信仰が世界的に広がっている今日、この国は聖王国として、君臨しているため、神殿は少なからず政治と関わる。

世界の智識として存在するうち、神官長をこの方はすでに3回引き返けられていた。

それだけ手練の方が、この信らもの。

ちっと神殿内部は、あの恋愛劇のおかげで混乱しているのだらう。
わたしは遠く離れているので、内部に残った友からの時々の手紙でしか知られなう。

「同じようなことを言う神官が、今日は歌姫の引率で来てるも。あとで労っておくれ。」

はう、と返事をして退出しようとして、お隣に目を向けると、まだ下りシア様とロシア様が楽しそうにお話をちれていた。

「ねえ、ヨシユア。いいでしょう？」

「ああ。アリシア。陛下夫妻もある程度の時間が来たら退席されるだろうから。それまで頑張るんだよ。」

「あなたがいつしょにいてくれたら、心強いのに。」

「君が見える場所にいるから。安心して。」

「それまで誰とも踊らないでね？わたし、今夜のために、ダンス、頑張ったのよ。覚えてる？今夜の音楽はあなたと初めて踊った曲で、あのラドラー侯爵家の、夜会の…。」

これっていつまで、続けるのかな。

後ろに次の方たちが控えてるんですけど。

神官長様に目で合図して、わたしは一人でその場を辞した。

わたしが辞したあと、すぐに後ろの順の人たちが来てアリシア様とヨシユア様の会話をぶった切る感じで、挨拶をされたのを背中で聞いていた。

だから、ヨシユア様はわたしのすぐあとに階段を降り始めた。

背中で、大きなため息が聞こえた。

愛しのアリシア様と引き離されたからかな？にしてはとても疲れたような。

違和感を感じたけど、わたしも疲れていたもので、あえて振り返らなかった。

5 やっぱり女の子は可愛い

ダンスが始まっている大広間を出て、歌姫たちの控えの間に向かった。

神官服なので、どがめられることもない。

衛兵さんたち、大丈夫？わたし、中央の者じゃないのよ？
ちょっとは警戒してよ。

歌姫たちは出番を終えて、晚餐をいただいていた。

ここでの流れはよく知っている。

なにせ、わたし、歌姫の腰掛け期間だけは長いから。

全員出席できるわけじゃないから、早くに辞めてしまつて歌姫はこの
新年舞踏会に参加できないうちもあるけど、わたしは15歳の時から
毎年、出席していた。

高位貴族のお嬢様は、歌姫と令嬢と2つの立場から招待を受ける。
だから、歌姫の出番が終わったら、晚餐をいただいて舞踏会に参加
する。

その後の、年下の歌姫をお世話するのに、私みたいな年長で手の空
いている者は重宝されるのだ。

晚餐の間のドアを軽くノックして入って、最初に目があったのは歌
姫の中でも、次の巫女姫候補になる子だった。

「アリエッテゝ様！」

そんなに慌てて立ち上がったのはダメよ。淑女教育、受けてるでしょ。大声で言うから、みんな立ち上がったじゃないの。

「こんばんは。みなさん。とても素敵でした。お役目、苦労様でした。」

わたしはお手本になるように、淑女の礼をしてあげた。ちわちわとしていたら5名ほどの歌姫が、一斉に返してくれる。

ほお、優雅だわ。

若くて、可愛いお嬢様たちってこんなに心を癒してくれるのね。知らなかった。

みんな愛らしくて、お姉さん、ウキウキしちゃっ。

いや、男どもならヤチコ口だわ。

最近、辺境のむちゃ苦しい領兵ばかり見てるから余計和むわぁ。

道理で、歌姫は嫁ぎ先に苦労しないって。あ、例外はあるわよ。もちろん。

「アリエッテ様。おかえりなさいませ。お会いしてご機嫌なさいませ。」

この子多分、次の巫女姫たるかなーと目星をつけていた美少女が、目をウルウルしながら、近づいてきた。

え？そんな感じ？いやいや、そんな親しくなかったわよ。

「私もです。アリエッテ様。」

「私も！.!!!でお会いできるなんて、大広間をお断りして良かった

！」

え、あなた伯爵家でしょ。ちゃんと社交しなきゃダメじゃない。
社交場、苦手だった？

うーん、そんなことないわよね。この子はとっても明るくて、賑やかなことが好きだったはず。

「エチユア神殿の神官として、招待を受け参りました。素晴らしい歌声でしたよ。だから、次はもっと堂々と歌ってくださいな。不安そうな顔をしてたら、女神様もお喜びにならないわ。」

そうなんです。

代替わりして、新しく巫女姫候補に選ばれた子も多いからか、なんだかボリエームにかける歌声でした。

表情もいまいちだし。

あ、久しぶりだったのに、厳しいって言っちゃったかしら。
みんなが微妙な顔してる。

「めんねー。やっぱり先輩、心配で。

だって、ここにいる子たちはちゃんと実力があるんだし。

「そう思ふのなら、たまに指導して下さいな。エチユア神官様。」

「ハイーバー。久しぶりー。」

「ね、みんな、アリエツトヤまに言ってるでしょ。ちあ、早くも食事を済ませてしまってたし。お城の方もお困りになるから。」

トイ一バ、相変わらず。

しっかり者で、指導が上手。

下の子たちからの信頼も厚いから、中央神殿に残ってくれた量産な存在だわ。

「あなた、何、そのかつい。」

またか。

ちえ、やっぱり選択ミスなの？

6 大人って誠意のない謝り方するのねー！棒

「そんなにおかしい？だって神官だし。」

そもそもわたしはこんな王宮に呼ばれるほどの身分じゃなく。ドレスを着て参加するものな立場じゃない。

「だって舞踏会よ。巫女姫だって、ドレスで出るのに。」

「神官長様は司祭服よ？」

「神官長様はね。そりゃ、神殿の長なんだから正服で出るでしょ。ドレス、もらえなかったの？」

「誰に？ああ、カーンヘグ卿？もらえるわけないじゃない。ていうか、もらったら酷い目にあつんじゃない？」
あ、そうかー。とトヤーバが眉をしかめた。

ほんとはヨシコア様からドレスの打診はされたけど、お断りした。

にっは断る一択でしょ。

ヨシコア様から贈ってもらったドレスで、アリシア様の前に立つなんて、処刑してくださうって言ってるものなものでしょっ。前例があるからね。

わたしの選択が間違ってるんじゃないとは思って、そんなに変な目で見られると凹むわよ。

にっくにいる歌姫たちは純白のドレス。

白のドレスに肩に付けられた小さな花束が歌姫たちの目印。招待を受けている歌姫はこのまま、舞踏会に参加できて、タンスもできる。

タイバは歌姫たちの歌の指導をしているけど、既に結婚して神官ではないから、落ち着いた色のドレスに歌姫と同じ花束をつけている。髪も結い上げて夜会でも浮かないようにしている。

みんな感じをみんな期待してたんだろって、すみません、空気読めなくて。

あ、だから、エシエ様が怒ってたのかー。言われなきゃわかんないよ。

だって、招待客として参加するの、初めてだもん。

32

王都のタウンハウスを出発するとき、エシエ様が変な顔したのが、いまわかった。

恥がかせちゃったんだね。いめんさー。帰ったら謝らなきゃ。

自分が恥をかく分には別に気にしなさんだけど。い領主様にかかせるわけにはいかなーいものね。

次はちゃんと、用意します。

換金しやすいものにしよう。だって、神官は貧乏なんですよ。

歌姫の一人が気を使ってお茶を出してくれた。

「ありがとっ、でもお気遣いなく。すぐに、帰りますので。」

「え？. 舞踏会でならぬ？. 」

「 出ませんよ 。このかついで何するの？. それに明日から長旅だから早く寝たい 。」

カービング領まで馬車で15日 。明日からまた 、長旅だ 。

「 えー！.！.！. 何しに来たのよ！. あなた！. 」

「 国王陛下に！. 挨拶に来たんじゃないの 。」

「 レットィモハさんの新作はもう見たの？. あなた 、編曲してだじゃない！. まさか 、またカービングのタウハハウスに入れてもらえなうとか？. ！. それならうちに来なさいよ！. それか 、中央神殿に言えばいいじゃない 。宿代なんて払う必要なんてないんだから 。エチエア神殿の神官なのよ 。あなたは！. そうよ 、神殿の宿舎に泊まって 、この子たちを指導してくれたらいいのよ！. 」

「 アリエッティ様 、そうしてください！. 」

おっと 、食いつくなあ 。

けど 、トイーバ 、知ってたんだ 。

やっぱり普通じゃなかったのね 、あの対応 。

神官として派遣されるとき 、どうやってカービング領に行けばいいですか？. と中央神殿に問い合わせてたら 、カービングのタウハハウスに行け 、と言われた 。何の疑いもせず 、素直にタウハハウスに行ったら屋敷に入れてもらえなかった 。

ヨシエア様は！. 不在で 、主人不在の家に勝手に上り込むな的なことを言われて 、仕方ないからその足で中央神殿に聞きに行った 。

ずっと神殿の宿舎だったからそんなに荷物はないけど 、一応 、お年

頃の女なのでそれなりの荷物はある。

それに楽器も譜面や、調律道具やその他諸々。

合わせたら馬車一つ分くらいにはなったから、借りた馬車にそのまま乗せて、とりあえず神殿まで行っただけと、そこからカービングまでは頼めないうし、第一、わたしが払うのー?と思つて。

そしたら、顔見知りの神官様が責め立てて怒つた。

神官を迎えるのに領主の馬車が迎えに来ないなんて、非常識だつて。

最初是我に怒つてゐるわけじゃないから、と思つてたけど、なんだか、侍女はどつしたとか、護衛はどつしたとか言い出して。

そんなこと知らないうし、いまして答えたら、女一人が遠方まで行くのに、護衛も付けないなんて、馬鹿か!と怒られて、ムカついたから、もういいです、と出て行つて、勝手に宿をとつた。

今考えたら神官様のおつしやることは、その通りなんだけど、巡業ならいち知らず、一瞬前まで、深窓の姫のはずの歌姫なんだから、知らなくて当然なんです。

だれか教えてよー。

だれか教えてーつてことが多すぎて、人生って理不尽過ぎつてーとによつやく慣れてきました。今日この頃。

そのあと、どつやつて頼んだのかわからないうし、近衛騎士の一人が護衛について、カービングからは馬車が手配されてきて、カービングの執事にすこしく嫌な感じで謝られた。で、叱つてきた神官からも、ぶすつてした感じで謝られた。

大人ってこんなに誠意のなり謝り方するんだーって怒りよりも驚き。

ほんとあっ、にっ、1年くらいで一気に大人って汚いもんだってことを勉強させていただきました。お腹いっぱいです。

歌姫って、ほんとに大事にしてもらってたんだなあ、って改めて思いました。

でもね、5年たったら神官やめようって決意させるには、十分な対応でしたわよ。

7 初めてのことは不手際がつかまるのです。

カービング領に帰り着いた頃には、ちょっとした春を感じた。王都より南にあるけど、山脈の中程にある城は、やっぱり寒い。

おちつくー。

しずかー。

手の中のカフエオの温かちを感じながら、静けさを堪能した。

開け放たれた窓から見える風景は、枯れた森。未だ雪の気配を感じる、冷たい森。

だけど、嫌いじゃない。

けっして、好き。

「お寒くありませんか？アリエツテ様。」

柔らかい声で気遣ってくれたのは、侍女のベルセラム。

ふっくらとした可愛い子。

ピアノが上手で、重宝してる。

歌もつまい。あと5年早ければ、歌姫の選定に出せただろう。

歌姫の選定は15歳まで。神殿機能が廃れているここでは、才能があってもそれを整えてやる環境は壊滅していた。

一年前のカービング領は、思った以上に、荒廃していた。度重なる

地震と天候不良で、交易の要所が被災し、それを復興できずにいた。人は少しずつ、この地を離れ、それは峻厳な山脈を持つこの土地をさらに荒廃させている。

現領主のヨシユア様は、ずっと幼い頃に天災に巻き込まれ、両親をなくし、王都で育った。

その間、この地は親戚であり、隣接する領のオルセイへ伯爵家の預かりになったが、あまり領地経営がうまくいかない。

カービング辺境領はその名の通り、隣国との国境を守る領地。特別に私軍を認められている。

だが、親戚の伯爵は軍務の心得がなく、この軍隊と交易経済をつまづ扱えなかったらしい。

手をこまねいていたオルセイへ伯爵は、ヨシユア様が成人するのと同じ時に、すぐに権限を渡そうとしたが、王都育ちの少年が抱えられるものではなく、当然なく。

ヨシユア様は、軍隊を率いるお立場になるため、近衛で騎士の訓練を受け、王族の親戚から直々に領地経営を学んでいたそう。というのは、このお城の執事、ベルナルさんからの情報。

で？

別にね、知らなくてもいいですけど。そんなこと。ま、話のタネなんですかね。

多分、最初に手酷く扱った贖罪のつもりなんでしょうね。最近、城の人たちが妙に優しくて、怖い。

だて、そろそろ準備しなくちゃ。
今日は、神殿に集めた有志の楽隊の練習。
本番は3か月後。春のお祭りで領民に披露だ。

カービング辺境領は荒廃していた。それは人心にも及ぶ。貧しさと
退屈は人の希望を奪う。
土地を肥やし、領民を安定させるのは、領主の仕事だが、彼らに生
きる喜びを伝え、心を安定させるのが神殿の仕事だ。

荒廃した土地の人々は、歌を忘れていた。祭りは精彩を欠き、笑い
声が少なかった。

ここでは高度な音楽理論を用いた音楽は無意味だ。だったら、もっ
と単純で、派手なもの。

わたしは打楽器による行進曲を選んだ。
獣がいるので、なめして太鼓はできる。森があるので、木琴はでき
る。あとは横笛。
楽器を揃えるのに1年かかった。

神殿に馬で向かう。こちらに来てから、乗馬を覚えた。あんまり上
手じゃないけど、早いし、ほんと便利。護衛も少なくて済む。

既に30人が集まっていた。

いつもより多い。
それに軍の人たちが多い。暇なのね。

「神官様、おかえりなさい。フッパ、持ってきました。」

あ、そうだった。軍隊にラッパあったら貸してって言ってたんだっ
た！。

ラッパは軍隊の人に任せるので、と、言っておォーミハダッパ。練
習時間は1時間。それ以上は彼らの集中力がもたない。

トントント、と一回足をふみ鳴らし、3拍目に手を鳴らす。簡単な3
拍子。

大きな声で整列させなくても、これが始まると自然に輪になってく
る。

次第に人が集まり、拍子が揃い、力強く地面を踏み鳴らす。まるで
山の眠りを打ち消すように。

みんなの目から恥ずかしさがなくなり、これから始まることの期
待が高まった時、わたしが声を上げる。

雄叫びを轟かせろ！勝利の朝日が昇る！立ち上がれ！立ち上がれ！
私たちは負けない！

唱歌用の発声を見殺した叫びのよつな唄で鼓舞すると、判唄が返っ
てくる。

勝つのは俺だ、勝つのは俺だ！

単調な三拍子と、勇まじい歌詞だけの歌。

これはどっかの国の建国を戯曲にした劇中歌。

歌を忘れてしまったカービングの領民たちに大声で歌わせるには、

ぴったりの曲。

ほら、みんなの顔が、途端に勇ましくなった。

歌が終わると見物していた、隣にいたおじちゃんが、楽しげに手を叩いていた。

「これ」の辺で流行ってるなあー。くる道中、ずっと酒場で歌ってたもー。カッパら歌だよなー。すっらー。すっらもー。嬢ちゃん、やるなあー。」

おじさんは行商人かな？。今から国境を越えるのだから。

「流行ってた？」

「そつち。王都から来たけどな、街道のどの宿でも、みんなして歌ってたさ。みんなと一緒まで、流行ってるんだな。だけど、今までで一番かっこいいぜー。あんたが教えたのかい？」

「気に入ってもらえたのなら良かった。じゃ、もう一曲。」

次は4拍子。8拍子目を16拍子に変える。これは3拍子よりも難しい。だけど、なんとかついていけるだろう。拍子が揃ったところで、唄を入れる。

これは求愛の歌。女と男の掛け合いの歌。

唄が終わると少しずつテンポが早くなる。

最高潮に盛り上がったところで、わたしが唄く手を上げて鳴らすと、ピタッと歌が終わった。

よしー。みんな、よく覚えたー。

につやあってリズムを体で覚えさせる。

歌姫の最初はみんなにつやあってリズムを覚える。

とても単純な手法なので、地方く巡業にいて子供たち相手に遊ばせるときにも、よくやった。そう、遊びの延長なのだ。

「くえへー！これもすごいなー！なんだが踊りたくなるぜー！」

「そう。これ、踊りなのよ。ロンバルドの。」

「ああー！道理でー！お嬢ちゃん、すごいじゃねえかー！何者だ？」

「控えろー！この方はエチユア神殿の神官様だぞー！」

護衛のケビンが、おじさんとの間に入ってきた。

「神官？こんな嬢ちゃんが？なんでこんな辺境に。そっか、あんたがあれを広めたんだな！」

そうなんです。この前の王都帰還の道中で、広めました。

だって宿で飯食べてたら、何か歌ってくれって言われるから。

みんなは歌姫の賛美歌を期待してるんだけど、そればかり歌ってたら疲れるし。伴奏もないから、誤魔化せないし。

だから、みんなで歌えるように教えたら、酒場で流行ったらしく。私たちが通り過ぎるよりも、ずっと早い速度で広まってて、行く先々で歌わされちゃった。

楽しかったけどね。

楽しすぎて、夜遅くまで引き止められちゃたり、先触れも出してないのに町の人が出迎えにきて、神殿で演奏させられたりして、到着が3日遅れたら、エチユア様が迎えにきてしまった。すみません。

予定では、王都の滞在から日間と余裕をもってたはすなんだけと、
ほとんど挨拶にいけなから、もつらつかー今回は。なんて、暇つ
てたら、舞踏会で、トヤーバに怒られて。

結局、ヨシユア様にも願うして、滞在を伸ばしてもらって歌姫の指
導をしました。

次の日には帰っただけとね。

帰ったら帰っただけ、オスカー殿下とリットヤモへんに怒られた。
わざわざ手紙で。

初めてのことは何かと不手際が付きまといのです。

誰か教えてー！

8 どの口が言っかなあ:

行商のおじさんは、もほゝ気に入ったらしく、練習を最後まで見ていった。

打楽器のみの行進曲も、この国では珍しいから、たいそう喜んでくれた。

気分が良い。

練習後、持っていた荷物を解いて、店も開いてくれた。

祭り以外でこんな風に店を開いてくれるのは、この土地では珍しいので、みんなが嬉しそつ。

わたしも、外国の甘いお菓子と、飴をたくさん買った。軍の人たちが、そんなに買うの？ 神官様は甘いものが好きなんだなーと、からかい気味に言っただけと、飴はとってもいいのよ。喉の疲れが取れるし、小さい子に配れる。

43

「神官様、これ、付けとくよ。いいものを見せてくれたお礼だよ。」

おじさんが、髪留めをくれた。

キラキラ光る玉が数個付いている。

かなり透明度が高い。クリスタルは高すぎて、簡単に人にあげられないから、これは。

「これ、ケルビノートのガラスじゃない？ ダメよ、みんなの、もらえないわ。演奏と配合わないもの。」

ケルビノートのガラスは、クリスタルの模造品として使われるが、クリスタルほど高価ではない。

だけど、高価なものには変わらない。

「目が高いな―神官様。驚いた。その通り、ケルビノートカマズだ。だけどよく知ってたな、若いのに。」

と言っておじさんは、わたしの顔を覗き込む。

ああ、背が低いし、化粧気もないから随分幼く思ってたのね。よくあること。

「おじさんが思ってるより年、いつてるのよ。」

「くえ、じゃあ歌姫も長かったのかい？巫女姫の候補だったのか？」

やっぱり、行商人はいろいろ精通してるのね。嘘もつけないから苦笑して頷いた。

「じゃあ、今の巫女姫様とも歌ってたのか！この前王都でちらっと見れたが、綺麗だったなあ！遠すぎて歌は聞こえなかったけど、女神の再来だって言われてるんだって？」

「そうね。とても繊細で綺麗な声よ。それにとっても美しいわ。」

そうだろう、そうだろうとおじさんは満足そうになつた。
カービングの人たちが興味深そうに私たちの話を聞いている。
彼らにとっては、いずれ領主の奥方になるお方。気になってしょうがないだろう。

「じゃあ、あの話は知ってるかい？巫女姫様に4人の求愛者がいて、取り合ってたって。今、王都じゃ大人気の戯曲なんだ。小説にもなってる。」

あ、ちょっとやばいかも。

その話は深く突っ込まないで。

おじさんはカービエグ伯爵が当事者だって知らないのね。

戯曲はあくまで戯曲だけど、こうやって王宮や貴族の中で起きてる悲喜劇を、大衆に伝える役割をしてる。

夜会で恋愛劇が起きたのは1年以上前。

それが今上映されてるってことは、真実の名前が伝わるのは半年くらい後ってところかしら。

あ、領兵たちの何人が、顔が引きつってる。これは余計なこと言えないわ。

「残念ながら、あんまり知らないの。だって王宮の中でのことだしよ？わたしは夜会に出られないから。」

そういって、おじさんは、ああ、とつなずいた。

察しがよくて助かる。

王宮の夜会は高位貴族のみ。貴族の夜会はそれなりの身分が招待を受けてから。

歌姫は貴賤に関係なくなれるから、夜会に出られなく歌姫もたくさんいる。

そう、わたしはそれくらいの身分の低さ。

いわゆる貴族様には関われなりのです。：ほんとに伯爵家なんだけとね。名ばかりなもので。

「だから、これはお返しするわ。もらえるならそっちのハッパ飴がいい。」

また飴を強請ると、みんなが笑った。

「ハッパ飴もやるよ。だけど、それも持つときな。それぐらゐ色気がないと、もったいないぜ。行き遅れちまつたろ。」

「ぶはー。」

くんが笑い声出ちゃったじゃないー。

やめてよ、おじちゃんー。

「貴様ー。失礼だぞー。」

いやー単なる社交辞令だからー。おじちゃん、怒らなうであげて。ケビン。

第一、失礼なのは、あなたの主人だからー。どの口が言つかねー？。

「あははー。じゃあ、いただくわ。ありがとー。でも、やっぱり配合わないわね。お礼に何か歌いましょつか？。」

ケビンが怒ったから、妙な雰囲気になっちゃった。

やめてー。みんな、残念な子を見る目で見ないでー。

「おっと、嬉しいねー。そつたな、ほんとは聞きたら歌があるんだが、神官様は流行歌なんか、知らないだらうじ。」

「うう加減にしろー。神官様に向かつてなんてことをー。」

「いいのよ、ケビン。わたしがお礼をしたいの。言ってみて。知ってるかもよ。」

「レット・イモへの新作の劇の歌だよー。あれ、好きだなあ。もう大流行で、どの裏路地でも歌ってる。酒場の姉ちゃんたちが、おっと。」

「

ケビィー。ほんとにやめてー。剣を抜こつとしないでー。わたしたって、20歳をとっくに過ぎた年増なんだから、そんな話で恥ずかしがったりしないわよー。

ギターを持ってきてもらって、メロトニーを弾くと、おじちゃんが手を叩いて喜んだ。

神殿の管理人さんのびっくりした目と、目があって、思わず片目をつぶって合図した。

いちらに来る直前に、レット・イモィちゃんから受けた仕事だった。王都からの移動中、ずーと馬車の中で考えて、いちらに来て仕上げたから、いちに来た当初はこのメロトニーばかり弾いていたので印象深いのだろう。

1年前いちに着いたのはうらげと、ろくにピアノも弾けなり状況で。

だけど、この仕事も受けていたから、淡々と神殿の長いこと使われた形跡のないうピアノを調律して、一心不乱に作った。

今、覚えは、この仕事に縋り付いていたから、あれだけ冷静でいられたのかも。

おかげで今まで一番、早く終わっただし、手直しも少なかった。

あ、それは王都から遠いからか。

実力じゃなかったことに気づいてしまった。がっかり。

にっくに来て、もう1年以上たつのね。

ちょっとだけ感慨深くなった。

あの時の自分が、まるで本の中のよつと遠く存在に思える。

巫女姫選定が終わって、神官としてカーニヴァルに行くことになって。

ギルニガハゼナに着いて、そのまま真っ直ぐ神殿に送られて。

人気のない神殿は管理人のお爺さんが通いで来てたらしく、神官様がくるとは聞いてたけど、まさか神殿に住むと思わなかったと言われた。

でも他に行くところもないし、簡易の寝床で休ませてもらった。

でも、ほんとに何もなくて、まず、食べ物や生活に困った。管理人さんや近所の人に頭を下げて、いろんなものを譲ってもらった。食べ物とか、お風呂とか、薪とか。

そんな有様だったから、祈りの時間以外寝る間も惜しんで、この曲に打ち込んだ。

そのあと、10日ぐらいて、お城から呼び出しを受けて、お城の執事長に今まで何をしてたんだって怒られた。

で、ああ、お領主様に挨拶に行かなきゃいけなかったんだ、ってやつと思いたった。

ね、ほんと、バカでしょ？

だから、誰か教えてよー。

呼び出されたのに、領主であるミシエ様はまだ帰還されてなくて、私に促された謝罪の先は領宰。

自分の価値観が根幹から覆われるってこのこと。
今まで巡業でいろんなところに行っただけで、こんなに神殿を下に見てきたところはない。

もつてアイトはスダスダ。帰りたくても王都は遠すぎるし、神官様様の下命で来てるし。もつ受け入れるしかない。

形ばかりの就任の挨拶と謝罪をして、神殿に帰ろうとしたら、今度は女一人で神殿に寝起きさせられるかって、なぜか城の離れに行かされて。

離れって言っても、花も植えられてない庭の片隅にある小屋だし、狭いし、ピアノもないし。

ピアノを貸してくださいって言ったら、ピアノは領主夫人の部屋と大広間のグランドピアノしかないし、領主夫人の部屋はいずれ巫女姫様が入ることになるから、貸せません。

基本、城には呼ばれるまで入らないでくださいって言われ。
じゃあ、ここには入れませんって言ったら、執事に何てわがままなって、はつきり言われちゃった。

もつね、神官じゃないなら、いらないってはっきり言ってもいいって切れました。

巫女姫様が降嫁されるまで、神官はいませんって、中央神殿に言ってください。わたしの仕事は女神のお心を音楽で伝えることです。

「ピアノもろくに弾けなら環境で、仕事できません」。って言って神殿に歩いて帰った。

あの頃はカッカしてたなあ。多分、ピアノを急かしたのも、仕事を仕上げられない。って焦ったからなんだろうな。
だいぶ私情だわ。

だから、あの頃はずーっとこの曲を弾いていた。人と喋ったら、関係ない領民の人たちにまで、怒ってしまいそうだったし、自分に降りかかった理不尽なことから一瞬でいらいから目をそらしたかった。

物語の世界で悲しんだほうが、何倍も楽しかったから。

あまりに何時間も集中しすぎて、何度か管理人さんに声をかけられたから、よく覚えてるんだよね。
その節はお世話になりました。

だけど、今は、他言無用でも願います。

仕事を受けているのを隠してるわけじゃないけど、今はちょっと面倒なことになりそうだから。

そんなに流行ってるなら、リッティモへさんから特別に追加代金もらえるかもねー。えくく。

あ、作曲はセシリアだから、半金かな。

この流行ってる劇中歌に曲をつけたのは友人のセシリア、歌詞は売れっ子劇作家リッティモへさん。

わたしはこのメロディーをテーマにした、舞台音楽用に編曲したた

け。

男装した訳あり王女様と、騎士の悲恋もの。身分差、すれ違いの王道の悲恋なんだけど爽やかな結末の、リッティモへちゃんの王道たり劇。

主人公の騎士のイメージが、ヨシコア様に近うと思つて、護衛についてくれた近衛騎士にヨシコア様について色々聞いて作った。

おかげで誤解を招いて、城への立ち入りを禁止されるつていつめんどくちうつこになったけど。

だって、似てたから。

近衛騎士つていつ立場も、想いが通じあつてゐるのに許されなり状況とかも。

一つだと思つてゐた心を切り分けられた。一つの果実をすいつで分けたもつに。いつまでも、あなたはわたしの半身。もし、苦しいなら、わたしのことは忘れてほしい。それくらい、今でもあなたを愛してる。

んな歌詞の通り、想い合つてゐるのに、巫女姫に選ばれてしまつて、すぐ近くにゐたのに手に入らなう。そんなもどかしさが、ヨシコア様にあるんだろつなつて、勝手に妄想して、作つてました。

決して、ヨシコア様とアリス様を悲恋にさせようと思つてゐるわけではありません。

ええ。断じて。だから呪いは勘弁してください。

10 楽しい..

華やかなトランペットが鳴り響き、楽隊が広間に入場した。規則正しいドラムと足踏みで、舞台の前に3重に並んで整列した。

広場を見下ろすように作られた舞台の中央には、半年ぶりに帰郷した、11領主ヨシア様。

その両側、扇型に来賓の方々が座っている。

わたしは舞台下に整列した唱歌隊に並んで、楽隊の指揮者に目で合図した。

再びトランペットが鳴り響き、力強く華やかな行進曲が始まった。

楽隊の人数は50人と増えていた。

楽器が足りず、それでもせつかくきてくれた人を無下にはできないので、唱歌隊を用意した。

すると、そこに加わりたいとさらに人が増えた。

楽器は持ち帰っての練習が必要だが、歌ならものはいる。いつでも練習できる。

冬が終わり、山脈の麓にも春が訪れた。

今日は春の日を祝う日。

民にとっては、新年よりも大事な祭りの日だ。

華やかな行進曲が1クール目が終わり、行間のドラムで列が動く。箱型から中央から分かれて横一線へ。

曲の2クール目が始まり、演奏しながら、両端が少し後退して、中

央を山の頂点とした隊列が出来上がる。

演奏しながらの移動は、難しい。

1年かけて、人を集め、やっとここまでにできた。

だが、それでも、わたしがかつて見た外国の演技に比べると子供の遊びのようだ。

それでも初めて見る行進の演技に、見物に来た領民たちが驚いているのに心がすいた。

最高に盛り上げたドラムを、斬るように終わらせて、楽隊が叫んだ。

「春の日に幸あれ！カービングに栄光を！」

という意味だけど、古語で。

だってカッコいいでしょ。

わあ！と会場が沸いた。やった！..

舞台を見ると、ヨシユア様が、目をキラキラさせて見ていた。興奮しているのがわかる。やったね、ひとまず成功。

興奮が冷めない会場で、わたしがヴァイオリンを持った。

唱歌隊に合図を送り、カービングで広く歌われている、花の歌の1節を弾いた。

最初は唱歌隊だけ、山場から楽隊の人たちも加わる。わたしもヴァイオリンを下ろし、唱歌に加わる。

2回繰り返すと、見物していた人たちが口ずさんでいた。

大成功！

消えるように終わらせて、舞台の方たちに、礼をした。
ロシエ様が立ち上がり、コングリットを持って叫んだ。

「春の日、おめでとう！この一年、幸多からんことを！わたしは、
また一年、みんなの安寧に努めよう！女神に感謝を！」

そう、短く言って祝杯をあげた。
いいわねー。挨拶が短くて最高ー。
ロシエ様、なかなか、センスいいじゃない。

とはいえ、大切な楽器を騒ぎで壊されちゃ、たまんないから、慌て
て楽隊に入って、楽器を荷馬車に回収。
トランプは先日、リッティモンさんから特別代金の代わりに送
ってもらったもの。
これはさすがに王都じゃないと手に入らないから、壊されたら泣く。

55

「すっごくよかったわもー。アリエッティー！」

わあー。ロメリア様ー。
みんなとーにー。
帽子も被らずに、ロシエ様に見つかっただらどうするの？ー。

前代巫女姫のロメリア様が、わたしのところに現れたのは、ひと月
前。

アリシア様のお取り巻きの宰相子息、ガンドルフ＝ドゥオ＝キック
ナ＝子爵様の婚約者だった。
アリシア様に嫉妬して、巫女姫の立場から散々嫌がらせをしたつて
ことで、婚約を解消され、引退と同時に人知れず姿を消された。

なんと、カービンダ領の隣国にいらっじゃった。

ここからだ、馬車でもら日ほの交易港を拠点にしている富豪の商人という仲になって、来月、式を挙げる。

エチユア神殿の神官に歌姫がやってきたという噂を聞いて、様子を
見にきたのだ。

アリエツト、いやない。心配してたのも。と楽隊の練習をしてらた
わたしに、嬉しそうに声をかけてくださった。

けど、なんていつか…。

「痺れたわー。今度はもっとアップ系を入れてやりましょつち。カ
ービンダの軍服でやれば、女の子が倒れるくらいかっつらわも。
100人くらいいると、大旋回も見ものよね。あの古語の寿ぎはあ
なたが考えたんでしょつち。あのアイディアは、さすがアリエツトだ
わ！」

こんな性格じゃなかったはずなんですが、ロメリア様？。

巫女姫様の時は、氷の巫女姫って二つ名があるくらい、厳格で近寄
りがたい感じだったでしょ？。

というと、歌姫を引っ張って行くために、ずっと緊張してたのだと
か。

こっちが地なんですわ。とほほ。

憧れてたのにー。

いえ、ミスターなロメリア様も嫌いではないんです。ただ落差に戸

怒ります。

楽器の荷馬車は先に神殿に返してもらってから、その算段をして、後片付けをしていたら、聞き慣れた三拍子が聞こえてきた。

「神官様！早く！早く！」

子供たちがわたしを呼びにきた。

えー。朝早くからリハーサルして疲れてるのに。
仕方ないなあ。

すっかり定着してしまった、準備運動代わりの劇中歌。
私じゃなくても歌えるんだから、誰かやってくれたらいいのに。

ロメリア様とお話ししてただけと。

でも、ロメリア様も一緒になって引っ張って行ってる。
ほんとはこんな性格だったのかー。じゃ、巫女姫は窮屈でしたね。
って言ったら、

「そうよ！あなたたちのときの歌姫、天才そろいだっただじゃない。
もう苦痛で苦痛で。怖い顔でもしなげや、示しもつかないってやってたら、引っ込みつかなくなっ。まあ、最後は変なおバカちゃんのせいで、自然とそうなったんだけど。」

あー、それはあの方ですかね。
人生狂わせられましたからね。

「愁傷様です、とらつと、狂った先に最高に素敵の方がいらつしゃったからいいのよー。」と慇懃られました。砂吐く。

わたしが着いた頃には、拍子を取っていた人だかりは二重もの円になっていて。

輪の中央に放り込まれると、むさし軍人さんたちがギョギョとした感じで、わたしの歌い出しを待っていた。

怖い。食われそうだから早く終わらせよう。

峻険な山脈に開けたカービングの都を、踏み鳴らす足音は、今までで一番大きかった。

大地を揺り起こすような、人々の足音。その命の力強さ。高揚感。神官になってから、本当に色々無理不届だけど、にらにらを感じると、もつといやって思ってしまう、自分ってほんと単純。だけど、いいや。

楽しいー。

雄叫びで歌を終えると、楽隊や唱歌隊だけでなく、見物してた人たちもみんな、肩を叩きあつて、女神に感謝を述べた。

次の曲だー。ってまた足踏みが始まったところで声がかかった。

「神官様。いっ当主がお呼びです。」

あーはい。わかりました。行きます。

「神官様ー。あとでヴァイオリン、弾いてー。歌、歌ってー。」

子供たちが引き止めてくれるけど、いっめんね。あしてね。
大人って仕事しなきゃ、だから。

小袋に入ってた鎧を近くの千に渡して、お詫ひの代わりにみんなで
分けるように言って、呼びにきたお城の侍従につらて行く。

あ、あの行商のおじちゃん、おてくれたんだー。

アトーシヨのお店が出来るー。食ぐてみたーらー。フヤハもあるー。

はー。あの帽子はロメリア様ー。
目やうら。ちまがたね。

ううなあ。今から舞台の上に行つて、挨拶。めんこくわ。舞台にも
祭り、楽しみたいら。

「エエ、くっ。」

舞台に着くと、ヨシコア様が、花もほころぶような麗しい笑顔で迎えてくれた。

怖い。何か裏ある？

「素晴らしい音楽をありがとう。神宮殿。」

ああ、気に入ってくれたのね。良かった。

「お気に召していただけたなら、嬉しうです。卿。ほんと、楽器に触れたことのない者たちが、頑張ってくれました。」

そう、みんな初心者だった。

だけど、音を楽しむ心は十分だった。

だから、こんなセオリー無視の演出についてきてくれた。

ヨシコア様は喜んでくれてるみたいだけど、土地の統治者である貴族の方々が、みんなそうではない。

ヨシコア様の後ろに並んでる人たちの表情で、はっきり選別できる。

「こちらへ。改めてご紹介。エチコア神殿神官のアリエット・エトニス様です。皆さま、この方の素晴らしい指導に拍手を。」

ヨシコア様の紹介に、来賓の方々からパフパフと拍手が出た。

はいはい。

気に入りませんでしたね。すみませんね。あんなので。

わたしはヨシユア様の隣に座らされて、来賓の方と、いっしょ挨拶。
そのあと、次々と現れる領地の有力者たちのいっしょ挨拶を受けた。

1時間もすれば挨拶の波も終わり。

あー、お腹すいた。喉乾いた。
座りっぱなしだと、寒くなってきたよ。
と本能のまま、思ってたらず、温かい紅茶と、ケーキが出された。

「お疲れでしょう。少し休憩しましょう。ケーキをどうぞ。甘いものが好きだとか。」

ヨシユア様もお疲れ様です。ちょっと顔に出てますよ。

甘いものは疲れを取ります。あ、美味しい。

お城のレシピね。だけど、あつちにあるホットシヨロの屋台が飲んでみたかったなー。わたしも、あのおつちなマシユア口を食べたい。疲れてるから。

去年に比べて随分、祭りの店も増えた。
やっぱりいっしょ領主がいるのといないのでは違うのね。
そうじゃないか。
だって代理がいたんだから。主の格の違いね。

そんなことを思いながら無言でケーキを食べていたら、またヨシユア様が話を振ってきた。

「去年と祭りも随分違つ。あなたが来てくれて、本当に良かった。」

まあね、去年はあまりに覇気がなくて寂しかったものね。

でもここまでの活気付いたのはわたしのおかげじゃなによも。

わたしは、励ます歌を教えるだけで、カービィが活気付いたのは、ヨシコア様の手腕ですから。

その答えると、また、キラキラ発光を振りまいて、わたしを見た。

う、まあいいー。

「ここやって、あなたとゆっくりお話をする時間もなかった。おかげで随分、失礼をした。本当に申し訳ない。」

あ、失礼だった自覚あったんだー。

反省したのね。じゃ、もういいですよ。

今は随分改善されました。

と本音は言えないので。

「こちらこそ、世間知らずで、うろろろと迷惑をおかけしました。

あの、先日の王宮での夜会でも。」

ヨシコア様は何だろっ？と首を傾げた。そんなことをすると、年相応の20歳の美青年に見える。

夜会に同祭服で、出てしまつて。と言つと、ああ、と苦笑された。

うーん、やっぱり美形だ。どんな顔しても美形が崩れなう。
天晴れ。

「世間知らずはわたしの方だった。あの時は、ちゃんとヒスコートを
を申し込むべきだったんだ。気が利かなくてすみなう。」

うや、ヒスコートはううです。刺ぢれそつです。

「神宮殿。」

呼ばれて顔を上げると、目があった。

おお、ヒシヒシする。

美形って目が合っただけで、ヒコヒとするわね。
セシリアとか、ティアズルゼ様とか、ロメリア様とかもそつだった
けど、ヨシコア様の破壊力もなかなか。
女の子で美形耐性つけとして良かった。

「私たちはもつと話すべきだと思つ。これから、そんな時間を取っ
てくれないか?」

うや?。うる?。

いつセアリシア様のお嫁入りの下準備でしょ。
勝手にそつちですればううじゃん。

いつだに頭の中でそつ思つたから、返事をするのが遅れてしまった。

「アリヒツヤ殿。」

え？名前呼び？

そんな親しげに。

美形に気に入られたら、無条件に嬉しくなるものなのよ。

く、チヨロが自分が辛い。

「秋には、巫女姫の巡業が決まっている。寂れてしまっているこの民が切望していた、巫女姫の来訪だ。どうか、力を貸して欲しい。」

かー。やっぱりかー。

わかっていますよー。

アリス様には色々思っているはあるけど、仕事ですからー。

12 バカなの。バカです。

春の日の祭り。

夜は城で晩餐会がある。

当然、カービング領の神殿神官のわたしも、主賓で招待された。

苦痛である。

大広間に隣接した、大晩餐会用の食堂。

今回はちゃんと服装を確認したので、ドレスにしました。

奮発したよー。

リッティモちゃんの特別代金のおかげ。

だって神官はお金がありませんの。

ほほほ。

ええ、次の依頼も馬車馬のよつに働きます。

で、せっかく新調したドレスも、久しぶりの豪華な晩餐も、全く心踊りません。

はあ。

せめてヨシエア様と二人だったら良かったんだけど。

なんで直接関係ない人たちにここまで言われなきゃいけないんだろ。

ちっかけは晩餐に音楽がなかったこと。

カービング領の手下の貴族と有力者を集めた晩餐会で、先日までヨシエ様の代わりにこっを治めていた、オルセイへ伯爵夫妻がねちねちとわたしに文句を言い出した。

祭りの晩餐に楽団が用意できなうなんて、音楽の使徒じゃなうとか。

うや、神殿は宮中楽団の元締めじゃありませんからー。

時々いるんですよ。こっこっ人たち。

そりゃ、音楽ってこっ同じ分野を廻して、なにかと交流は多いですよ。指導者を派遣したり、神官から楽団に入ったり。

でも、全く違う組織ですー。

王弟オスカー殿下は、宮中楽団の長であつて、神官ではなうでしょっつ。と奮めても、全く廻してなう。

ヨシエ様も苦笑してるのに。

ヨシエ様は彼らが誤解してるんだろこと、優しく対応されてあげと。

彼らが本当に言いたいのは、わたしが領民に教えたのが行進曲だったのが気に入らなうってこと。

あの人たちのなかでは、あれは音楽じゃなうんですよ。

貴族の音楽こそ、音楽。

つまり、宮中で使われる音楽じゃないと認められないうてこと。

賛美歌や、室内楽こそが音楽で、単調なドラムや雄叫びをあげるようなものは音楽には入らない。そんな下賤なものを神殿が教えるなんてありえないうてことなんですよ。

わたしの解釈とは違っけど、そういう考えがあるのは知ってます。そして統治者である貴族階級の方々の多くがその感覚であるってことも。

やっど、わかった。

カービング領から音楽が消えた理由。
絶対、この人たちの間違った政策のせいだ。

気に入らないなら中央神殿に訴えていただいて結構ですよ。教義に関することなので神官長様はじめ、中央の判断を仰ぎましょ。わたしが歌姫として教え込まれたのは、人びとを励ます音楽こそ女神の意思、ということだけだったので、手法や分野に関しては在野の常識と違っただけがありますので。

と、やわらかく言ってみただけど、城に楽団も置かないのに軍人に音楽なんて無駄なものを。

客人を招いて音楽もつけないなんて、みだらなことをまだ言い募るから、ヨシコア様がヴァイオリンを披露することになった。

恐縮してだけど。

あの人たち、バカなの？

城は領主の持ち物で、領主のもてなしにけちつけたんだもー。だから、
ヨシユア様が弾くことになったんでしょ。

わたしは主賓だー。この主賓が自ら楽団引っ付けてくるのもー。

あ、神殿なら歌姫、引っ付けてくるのか。それを期待してたのか。
それができるのは巫女姫だけですー。

すみませんねー。巫女姫じゃなくて。

なんで、この前までこの城に責任を持ってた彼らが、ここに楽団が
ないことを理解できないうのか、わたしにはちっぽりわからなう。

楽団欲しかったなら、自分たちが代理でやってる間に、育てて雇っ
とけばいいのに。

って事で、晚餐が終わって、ヨシユア様がヴァイオリンを披露して
くれました。

なかなか。

王都でお育ちになっただけあって、かなりの腕前です。

招待された方々も、満足そう。

「ヨシユア様。私に伴奏させてくださいー。」

頬を染めながらお願いしてきたのは、ヨシユア様の従姉妹姫。
オルセイ伯爵夫妻の娘さん。カミナ様。

御歳18歳。

ヨシユア様がアリシア様と恋に落ちなければ、この方が婚約者にな

ったんだろーと噂で聞きました。

えー？歌姫が欲しかったんじゃないのー？
意味わかんない。

地方貴族のお嬢さんが美貌と名高い巫女姫様に、勝てる見込みはなく、泣く泣く諦めて最近、やっと婚約者を立てられたとか。

本人を前にしたら諦められないんだろーなー。いや、美青年と親しくなりたいうのは本能か。

大広間のピアノでアンサンブル？あの調律のあつてないピアノで？

調律したのかな？

はい、楽譜が必要なんですね。部屋から持ってきます。

メヌエットですね。

ついでにフルツの譜面とヴァイオリンも持ってきてもらう。

みんな、踊りたいんでしょう？

そんなに言うなら、わたしが楽員になります。

あれだけ言われてまだ良しように使われてる。

ええ。お人好しの自覚はあります。ただの馬鹿です。

13 美形が睨むと3割増し怖い

ピアノは、思った通り調律されてなかった。

オルセイ伯爵の令嬢は思っように弾けなくて、終わった時はちょっと半泣きになっていた。

諦める勇氣、大事。

だけど来賓の方々は優しくて、ヨシコア様とカミナ様を褒めちぎっていた。

ええ、わたしもそう思います。和音が気持ち悪くて、全然乗れないのによく弾き切りました。

ヴァイオリンを出して、それでは僭越ながら私も、春の日を迎えられたことを祝して。

ワルツですので、皆さまをお楽しみくださり、と言いつつ、オルセイ伯爵はカミナをタンスに誘ってくれ、とヨシコア様にけしかけていた。

カミナ様も嬉しそう。

さて。

楽譜を広げて、調音をするため構えると、横にいたオルセイ伯爵が、太鼓だけじゃないんだな。楽譜が読めるのか、と独り言みたいに言った。

がつくり。

声大きいよー。

読めるに決まってるでしょ。神官なんです。

「いら加減にしてください。叔父様。」

わあ、ヨシユア様が怖い。美形が睨むと、3割り増し怖い。
けど、ありがとついでにます。

雰囲気を変えるために、適当な前奏をつけて、入場を促すと、みんなつきつきと、パートナーを探し出した。ホールに並んだ頃合を見て、一際大きく、アグレッシブな出だし。

春の日のためのワルツ。社交シースへの終わりに、夜会で一番選ばれる曲。

ちら、とホールを見ると、驚いたように目を少し開いたヨシユア様と目が合った。

なによっ。

わたしだって、ヴァイオリン、弾けるんです。歌姫をなめないでください。

おーお。ヨシユア様のパートナーに選ばれたカミコ様の嬉しそつなにと。機嫌が直って良かったわ。

アンサンブル用に編集されてる楽譜だから、合間合間に重奏のワルツを入れる。

だんだんとアンサンブルの雰囲気を思ひ出して、自然と体が動く。まるでヴァイオリンとダンスしてるみたい。

時々、ホールを見ると、みんな楽しそつに頬を赤らめて、くるりと回っている。

とっても優雅。

素敵。

まだ寒さの残る、春の夜。

きらびやかな舞踏会。みんな、心から嬉しそうにステップを踏む。

やっぱり音楽はいい。どんな時もちぎれだった心を、癒してくれる。

ここにいる人には腹がたつことも多いけど、わたしの奏でる音に合わせて、嬉しそうにしてくれるから、怒りも収まる。

これ以上、リズムを急がざなりよつに気をつけて、合間をゆつくり目に。

音楽だけの時と違って、ダンスに合わせる時は人の動きに合わせる。みんなが踊りやすいように。

楽譜全部、演奏したら結構長丁場になっちゃった。

踊り終わった紳士淑女の方々が、飲み物を取って満足そうに笑った。場が盛り上がったので、もう一曲。

今度はこの地方から流れ出る運河、ザロウ川を称える歌。国民的なワルツ。

静かなプロローグから入って、主旋律に入った頃、誰か後ろに立った。

ヴァイオリンの伴奏が入ってびっくりして振り向くと、ヨシユア様だった。

目が合つと、ここ、と笑いかけられた。

目礼をして楽譜が見やすいように場所を空けると、するりと横に入り込んできた。

何小節が弾いて、小さな合図を出して主旋律を譲る。

二重奏にすると、音楽に深みが出る。

わたしが持っているのは、アハサハブル用の楽譜だからわかってないと読み取るのが大変。伴奏をつけて、アハポと展開を誘導する。

ヨシユア様、やっぱりすごく上手。長く知ってる曲とはいえ、初見の楽譜でわたしの合図に本当によく付いてきてくれる。

アリシア様ともこうやって、合奏したのかな。

重ねた旋律でファイナルを弾くと、踊ってた人たちから盛大な拍手をいただいた。淑女の礼で返した。

「アリエツティ殿。」

ヨシユア様が今まで一番、親しみを込めた目で見えてきた。

わたしもすごく楽しい合奏だった。

こうやって、気の合う合奏をすると、心の中に信頼が生まれる。言葉でわかりあっているわけじゃないのに。

お互いを気遣いあい、励ましあった親友の気分になれるから、すごく不思議。

「ありがとう。アリエツティ殿。素晴らしい演奏でした。本当に…。」

「」

「こちらこそ、ありがとうございます。とてもお上手で、正直、驚きました。」

あれだけ神殿を襲うにしているから、音楽には興味なのかもしれない。

ヨシユア様は何も言わず、それでも何が言いたそうに、わたしから

目を逸らさない。

わたしは言葉を待っていたが、カミナ嬢が入ってきた。

「素晴らしい演奏でした！.ヨシユア様！.ああ、わたしもヴァイオリンで合奏したかったわ！」

「そうだね、カミナ。神宮殿のリードは本当に素晴らしいかった。歌姫の実力がこれほどまでとは、わたしも初めて知ったよ。それともアリエツテ殿が特別なのかな。」

「いえ。歌姫は合奏の機会も多いので、他の方よりは慣れているのです。」

「わたしも持ってきたら良かったわ！」一緒にしたかった。良い機会でしたのに。」

では、ヴァイオリンをお貸ししましょうか？.と申し出ると、カミナ嬢が俄然、食いついてきた。

次もぜひ、神宮様も一緒に、とヨシユア様。

勉強になるから、絶対に一緒に演奏したほうがいい。とカミナ様を説得した。

「わかりました。では、フルートを持ってきました。」

「あら、ピアノでは、だめなのですか？」

えー？.カミナ嬢、宣戦布告？.それとも。

「・・・調律があってないので。」

「「え？」」

ヨシユア様とカミナ嬢がハモった。

えっ、返つて来なかったのっ。

14 春の日の満月

侍女のベルセラムが取りに行く、とうとうのを固辞して、部屋に取りに帰った。

― 応、城内の離れ。

最初に案内された離れとは聞こえが良すぎる小屋が、わたしのカービングでの寝床。

はじめにピアノは置けないうて断られて、怒って神殿に歩いて帰ってから4カ月は、城の外のエチコア神殿に住んでいた。

議会が閉会し、社交シーズンが終わったヨシコア様が王都から帰還して、わたしが神殿に住んでいるのを知って慌てて迎えにきた。ちゃんと、ピアノも置いてくれた。

ヨシコア様は庭の離れが部屋として用意されたことを知らなかったらしく、城内に部屋を、と誘いを受けたが、奥方になられる巫女姫が入られていないのにわたしが城内には入れません。と執事長の言葉通りお断りしたら、ベルナールさんから平謝りされた。

ヨシコア様のお言葉を拡大して解釈してたもので。

歌姫を神殿から推薦されることは、通常、領主夫人として迎えることをベルナールさんは知っていて、それをヨシコア様がお断りになったと聞いているのに、神官として歌姫だった女が来た。

これはもう、既成事実を作ろうとしているのだと勘違いしたのだと

か。

カービングに来るときについてきた護衛の近衛騎士から、領主の奥方を狙ってるらしいと言われ、最初にはつきりわかっていたくぐきだと思ったと。

まあ、いろんな噂と誤解があつて。

と言われてもすっかり悪意にちたれて、信用できるわけもないので、城内の部屋は断固拒否。

不便ながらも気ままな神殿の暮らしに慣れた頃だったので、そのまま年暮らすつもりだったんだけど、さすがに女性が一人で暮らすには不用心。警護も大変なので、せめて敷地内でと言われて今の城の離れに引っ越した。

だが、城から一旦出た、庭の一角。

暗いので、ベルセラムが灯りを持ってついてきてくれた。着慣れないドレスの裾を汚さないように、持ち上げて歩く。

さ、と雲が切れ、月明かりが庭に差し込んだ。

綺麗。

見上げると、満月。

昼間は春の陽気とはいえ、まだ夜は冷える。光は牙え渡っていた。

ああ、春の日、なんだわ。

頭の奥で懐かしいパイプオルガンを聞いた気がした。

ふ、と郷愁に駆られて涙がつつ、と落ちた。ああ、化粧が落ちちゃった。いけない。

「アリエツテイ様？」

ベルセラムに気遣った声で呼ばれて、ハンカチを差し出された。

「ああ、じゅんね。なんでもないの。」

ハンカチは受け取らずに、手で押さえると涙は止まった。

春の日の祭りは神殿にとっても、大事な祭り。

歌姫の時は、中央の大神殿で、年に何回かしが使われないうパイプオルガンで賛美歌を歌った。国王をはじめとする王族も参拝する、特別な祭り。

祈りは真夜中から始まり、春の日の朝日を浴びて終わる。

毎年、歌姫たちと賑やかに過ごした。

緊張しながらも慌ただしく、国王に臨席とあって、みな着飾って興奮していた。春の日の前後に立つ市で珍しいお店を回り、貴族のお屋敷で開かれる茶会に、知り合いから誘われて出向いたりした。

あの時と同じ月。

楽しかった日々は終わったのだと、改めて思った。

みんなバラバラになって、わたしは今となつては気軽に友と会える場所にもいない。何人かの友とはもう一生、会えないかもしれない。あの時、混乱したわたしはちゃんとお別れもできなかったけど、彼女たちはどうしているだろう。

寂しさを断ち切るように、急いでフルートを持ち出して、大広間に戻った。

フルートを組み立て、アハサフルなので曲の組み立てを打ち合わせる。

主旋律をカミノ様。ヴァイオリン伴奏と、リズムをヨシコ様。わたしは、アハサフルでリードしていく。

勘の良しヨシコ様なら、わたしの合図を見逃さなだらう。

曲はセリナート。

これで最後にしたので、ゆっくりとしたテンプで。

楽譜を食し入るものに見るカミノ様を、わたしは少し後ろから見ながら曲をリードしていく。

ヨシコ様に合図を出そうとするたびに、目があった。合図を取り漏らさないうちにしているのだらう。ほんと完璧。

曲を覚えてならカミノ様のために、今回は短めに終えた。

だいぶ手加減した形になっちゃったけど、カミノ様は満足のよう。良かった。

みんなまだ踊り足りなさったけど、わたしは朝早くから疲れたので、退席させてもらった。

主賓の退席とあって、ヨシコ様が部屋まで送ってくれた。荷物もたくさんあったしね。

ヴァイオリン演奏のことを褒めちぎってくれて、なんだか今日一日で随分変わった。

音楽って偉大。

でも、いろいろあって疲れました。

ロメリア様ともっとも話したかったなあ。

15 …お詫ひ。

春の日の翌日。

またヨシコア様に呼び出されました。

昨日のお礼とお詫ひをしたらと。

お詫ひ。

なんだろう？今まで色々あったけど、正式にお詫ひのためにも寮に呼ばれるなんて初めてだ。

昨日の無礼なんて、今までの経緯から考えると可愛じものだし。
また、無理難題を押し付けられそう。それならお詫ひ、いらなり。

どうやって断ろう。

うーん、とすぐに返事をせず、困っていると、ベルセラムから泣きながら懇願された。
仕方ないから、お誘いを受けた。

ヨシコア様、そんなに怖い主人なの？知らなかった。

「来てくれてありがと。トリヒツト殿。」

「お招きありがとっ！ちうます。卿」

ヨシコア様がちょっとほっとした顔で、立って迎えてくれた。

昨日以来、随分と対応が違つ。

ヨシユア様だけじゃなく、お城の人たちもなんか、見る目が違つ。
ちょっと居心地悪い。

「 昨晚は私の親戚が、大変失礼した。心からお詫び申し上げる。 」

わわー！止めてー！頭下げないでー。
執事さんたちも、一斉に頭下げないでー。

慌てて、頭を上げてもらった。
「 ああ…。ちょっとよく、わからないうのですが。 」

昨日のオルセイへ伯爵の態度は、……までの……じゃなく。……
か、今までのわたしの扱いから考えて、……な謝罪はありえない。

何？何が始まるの？

やっと春の日、終わったからちょっとゆつくりしたかったんだけど。

「 昨日のオルセイへ卿をはじめとする、わたしの来賓のみなさんの
態度。それを今まで許してしまっていた、私たちからの謝罪です。 」

「 えっと…。 」

「 そして、改めてわたしたち、ギル＝ガヘゼナ城から心からのお詫
びを。あなたがエチユア神殿に来られることに決まっただけの数々
の…無礼。本当に申し訳ない。 」

ヨシユア様が改めて頭を下げた。また、執事さんやメイド長さん
たちが頭を下げる。

「ちょ、ちょっと、あの、良いですから。」

止めて――怖い――

そんなの今更じゃならぬ――これ以上、ハールド上げならぬ――

「では、許してくださると？」

焦っちゃってコクコクと頷く――としかできなかつた。

淑女教育の成果なし。

ヨシコア様が心底ホッとして、息をついて、改めて、ありがとう。
と言った。

おお、弱ってる美青年、ちょっとクワッしてくる。

良いなあ、美形。これだけで許せる。

これが――そのわがまま坊ちゃんなら、形ばかり受け入れて、ちっ
ちとトヘスんだ。

あとでしっかり復讐を企てる。

だって、あれやこれやの理不尽と混乱を押し付けられて。

音楽を民に教える苦労はまだ良いとしても、本来なら後ろ盾になっ
てくれる城からもほぼ無視の状態。

人手も物資もない、新人神官にしては、もうほんと過酷な状況。

それに加えて、生活の保障もないって、振り返ってみると、なんで
ここまで追い詰められてるの？って感じだった。

最初は城との関係も最悪だったから、寄付もなしもんだと思って、持参金で食いつないでた。

城の離れに移って、ベルセラムが侍女についてから、やっと寄付金についても聞くことができたけど、誰に聞けばいいかも分からなかった。

やっぱりね、出だしが悪いと不都合が出るものです。

それでも、ヨシエ様の美貌にほだされて、そんなことが無しにできてしまったから、美人ってするし。

いつやって、改めてヨシエ様に謝罪をされて、ここでのわたしの立場もよくなるだろうけど、ここを去ったあとの人生はこれより過酷かも。

だから、人生を狂わされたって思いまで、許すつもりはない。
今はまだ。

じゃあ、カービングに行かされることもなく、中央神殿で後進たちの指導してたら幸せになれたかっって言われたら、わからない。

それでも今みたいに、誰かの幸せのための地ならしみたしな。

なんだか、割りに合わない苦勞を背負わされるより、ずっと歹々な気がして。

やっぱり一番心に引っかかっているのは、せっかく誰かの唯一になれると期待したのに、突き落とされたことなんだろっ。

お前は永遠に2番手。

選ばれない、2番手。

そう宣言された気がした、あの時の絶望感。

ヨシユア様たちの行動がわたしを巻き込んで、そんな状況にしたいとを彼が自覚してるかわからない。

無意識に、人を貶める。

美形だから、地位があるから、才能があるから、それが許される。

彼に悪意があつて、そうしてるわけじゃないって理解できるけど、わたしの心はそれを赦してない。

赦さなきゃって、思ってるけどね。

だって、いついつのは、逆恨みっていつ。不毛な恨みだ。

だけどまだ、家族に見捨てられたみたいだし、ものもらやって眠れない。

いいよね、心の中でそう眠っちゃうなら。

意地張はしないから、せめて今はそう眠わせてください。

16 見直してくれてありがとう

戸惑っているわたしに、ヨシコ様は、優雅に笑って、お茶を勧めてきた。

はあ。

終わったの？ 終わった？

謝罪タイムは終わったらしく、メイド長さんたちは静かに部屋を退室していった。

終わったらしい。

でも、ここからが本題なんだよね、多分。

今までの非礼は水に流しました。

これからアリス様の巡業を盛り上げてくださるってことだね。

うん、それはね、もちろん。

わたしはそんな仕事だし。

でもできれば丸投げはやめてほしい。

民に音楽を教えるのと違って、将来の興方に、歓迎を表すっていう目的があるんなら、アリス様の好みをよく知ってるヨシコ様が考えてほしい。

じゃないと昨日みたいに不興を買ってしまうことになる。

歌姫として同じ教育をつけていても、彼女のことはよく知らないので。

「春の日の祭りでの、演奏、感動しました。騎士たちの士気が上がったのは、あなたのおかげですね。」

行進曲の演技に参加していたのは、半分が領兵の騎士だった。あれで士気が上がったのなら、重畳。

「そんな変化があったなら良かったです。あれは外国の軍隊が閲兵式で行う演技なので。意識統一のためにあんな訓練を行ったのだそうです。」

くえ、とヨシコア様が食いついた。

「よく、ご存知ですね。外国に行ったことが？」

「巫女姫の巡業について、二回、行きました。あの儀式はバストマ皇国で行なっていたものです。巫女姫巡業の歓迎式典で披露されました。もっと規模も大きく、200人ほどの隊列で、音楽もオーケストラ並みでしたけど。」

「そんなに大規模なものができるのか。圧巻でしょね。あの演技を軍の訓練に正式に取り入れたい。指揮官を訓練してもらえますか？」

「かしこまりました。すでにウイルケルムやシヤンは、指導ができるまでになっています。ですが、彼らは指揮官ではありませんよね。指揮官となる方を訓練いたします。紹介して下さう。」

行進の練習だけでも、軍団の規律行動は上がるはず。ヨシコア様が近衛騎士を辞して、昨年帰還されてから、領兵は相当鍛えられたよ

う。

最近ではのんびりと立っただけだった衛兵も、顔に精悍ちがでて、引き締まったのがわかる。

「あの曲は初めて聞きました。あの掛け声も。あれは古語か？。カービングに、栄光あれ。かな？」

「曲は元からあったものをわたしが作り直しました。掛け声は古語です。」

「古語なんてよく知っていたね。」

「地方に残る賛美歌にはよく混じってるんです。歌姫は歴史と一緒に古語も習います。ちわりだけですが。」

「マナーも？」

「はい。」

元々の身分が高い歌姫は、高位貴族に嫁ぐことも多い。巫女姫になれば王と同じ扱いを受けるので、歌姫は一律、淑女教育も施される。

「歌姫が淑女教育の最高峰と言われるわけだ。演奏技術という、歌姫教育が二つまでとは。」

見直してくれてありがとう。

今更ですけど。

アリシア様とはそんなお話、しなかったのかしら？。

ええ、歌姫の修行はとっても厳しいんです。

だから入ってきてから3分の1くらいしか残りません。

巫女姫候補に残れるのはさらに選ばれた者のみ。

人数は決まっていけど、17歳から21歳までの歌姫から候補が決まる。候補に選ばれず、5年に一度の選定に出れないとわかった時点で、歌姫を辞めてしまう者も多くいる。

最近では短期間でいいから、歌姫という経歴が欲しいという人も後を絶たず。

修行になかなかついていないと、神官様たちも嘆いていた。

歌姫という経歴があれば奏者として楽団に入りやすい。貴族であれば高位に嫁げる。

ていつシックスを信じてただけよ。

・・・全国の歌姫志望のみなさん、こんな残念な先輩ですみません。

巫女姫巡業の打ち合わせをするのかと思っていたら、ヨシコア様が意外なことを言い出した。

「ア　　カッロうらげとムカつて。」

実家に帰らなくていいのかって？

ぽかんとしたわたしに、ヨシコア様が意外な顔をした。

「すでに一年以上、家族と会っていないだろうか？会いたいのでは？」

ああ、春の日だから。

春の日は家族で祝うのが普通だしね。

歌姫の時も、春の日の祭りのあとは何日かの休暇をもらって帰省する人が多かった。わたしも最初の数年はそうしていたが、二、三何年かは忙しくて、そんなことはしていないう。

春の日の祭りの前後は貴族のお茶会も多いので、神殿が手薄になる。春の日に祝福を受けに来る民も多いので、そちらのお手伝いに入ることも多かった。

ということもあるんだけど、帰っても微妙な雰囲気だったんだよね。

今、思えば邪魔だったんだろっ。

祝日が終わってから、普段いなり家族が帰ってきてても、みなそれぞれに予定があつて相手にできないうて言われた。

母からは申し訳なきそつに言われたが、他の家族は珍獣を遠くから
見ているような扱いだった。

「お気遣い、ありがとうございます。私は今までもこの時期に休暇
を取ることはないので、家族は気にしないでしょっ。」

「それならば、余計に一度家族にお会いしてきては？これから先、
巫女姫巡業に向けて忙しい。休暇を取りにくくなる。」

「私の実家は王都の近くなので、かなり遠いのです。」

「構わない。あなたの気晴らしになれば。」

ヨシユア様はちよつと言葉を切つて、私に気遣つような目を向けた。

「…あなたが、故郷が寂しいのではないかと、侍女が。」

ああー。

昨日、ベルセラムに涙を見られたから。

「お氣を使わせてしまつて、申し訳ありません。神殿に入った時か
ら家族とは疎遠になってますので、本当に大丈夫です。」

「え…なぜ。あ、いや。…。」

そつね、あんまり立ち入つたことを聞くものじゃないわ。ヨシユア
様。

わたしは単なる腰掛け神官ですから。

そついつとこが、まだ若いわね。

「ですが、休暇をいただけるならありがたいのですが。」

「何だろう。あなたの希望を叶えたい。」

随分、大盤振る舞いですこと。

昨日以前との落差に驚くわ。

「ガイネ港に行きたいのです。来月、友人の結婚式があつて。」

「ガイネ港 …。」

流石にすぐにいろいろ言えなうよね。

ガイネ港は外国。

いっからら日ほとの隣国にある港町。

ロメリア様の結婚式があるのだ。

昨日、お誘いいただいて、無理でもつと断つただけと、行けるのなら嬉しい。

外国に出るには身元を保証する書類と、境界の領からの許可がいる。

わたしの身元ははつきりしてるとは言え、神殿に所属する身。預かっている神殿もある。

ヨシユア様からの提案がなければ旅行に行けるなんて思いつきもしなかった。

ましてや、ヨシユア様の恋人であるアリシア様の仇敵、ロメリア様

の結婚式。

友人、というのを突っ込まれば、あらぬ誤解を招きかねないので、引っ込めるつもりでした。

ヨシユア様はじっと、わたしの顔を見て考えていた。

「わかった。行ってくるというでしょう。」

「ほんとですか?!

やったー!.

「ただし、護衛をつけます。最低でも3名。侍女も。」

え。

92

そんなことしたら、ロメリア様のことがバシちやつじやない。

「いえいえ。それには及びません。あの。」

「あなたはこの国の大事な神官。しかも若い女性だ。それでも少な
いくらいだが、友人を訪ねるのに大げさにはしたくないでしょう。」

「だけど、あの、そんなに旅費を出せません。」

立場的に護衛を雇わなければいけないのだから。

ヨシユア様に言われて、初めて気づいた。

だけど私的な旅行で護衛を雇うとなると、出費がかたむ。せめて出
せて1名だ。

ロシニア様がため息をついた。

なに？その分かってないなあって感じのため息。

繰り返しますが、神官は貧乏なんです。

「旅費はカーレング領が出します。あなたはエチニア神殿の神官なのでから。」

出してくれるの？やっぱり11の手のひら返し怖いわ。あまりにも都合が悪すぎる。

「でも、わたしは一個人として行くのです。護衛は雇います。」

ロメリア様の11をこなさず詮索されても嫌だ。せつかくの結婚代なのに。

「……カイネ港の交易ギルドの金頭が、我が国の貴族出身の元歌姫と結婚するのだから。」

ロシニア様のすっぴんくらし声が低く響いた。

わたしのカップをひとつとする手が止まった。

恐る恐るロシニア様を見ると、ぴた、と皿が合った。

目を眦めて、にっ、と笑われた。

うわ、意外と腹黒いんだ11の人。

だけど、この顔めちゃくちゃ、かっこいい。

こんな時に、こんな表情するなんて、自分の顔の良ちを分かっている。
「ムカツク」。

「お祝いに行かれたらいいでしょう。アリヒットイ殿。だけど場所はこの国ではありません。無事に帰ってきてもらわないと。護衛は譲れませんよ。よろしいですね?」

おつ、コウコウと頷くしかない。

若造だと思ってたヨシユア様の意外な一面を見た。

18 声が大きいです、先輩方

ロメリア様の結婚式は、夢のようだった。

全て旦那様になられるペヤン様が、準備されたそう。

ロメリア様の純白のドレスも、衣装替えなされた後の真っ青なドレスも、それに合わせて作られた装飾品から、式場や、来賓のおもてなしまで、全部。

しかも、招待に慣れている私たち歌姫が、肝を抜くくらい、垢抜けていてセンスがいらい。

食事はもちろん、滞在中の細々としたことまで、隙がなく、心地よくものに配慮されている。

こんなことも、花嫁となるロメリア様の手は一切煩わされることなく、ペヤン様が采配されてるのだそう。

何にもすることがならぬもーと直前の春の日の祭りにロメリア様が、ふらっとギルニカへサマまで来るだけある。

「えー...アリエッティが派遣されたのって、あのカービングだったの?..」

おっと、声が大きいです、先輩方。

「なにそれ、最悪!断れば良かったのに。ひびく目に合ってる?..」

あいましたよー。

タウヘハウスから馬車は拒否されるし、着いたら誰もいない神殿に

置いていかれるし、楽器も歌が歌える人もいない。世話役もない。着いて最初の仕事が、ピアノの調律で、未だに聖歌隊も作れていないことを話したら、先輩たちに泣かれた。

これ以上話すと、家に帰してもらえそうにないくらい、先輩たちが憤慨していたからやめておく。

ただでさえ、カービン伯爵がアリシア様の求婚者だってことで、怒りをかっているのに、それを盾にして城の入場を拒否されたって知ったら、本気で帰してもらえそうになり。

最初に話を聞いてもらったロメリア様も、ものつすつく怒って、すぐにガイネに連れて行かれそうな勢いだった。

「あの女の節操のなさには、あきれ返るわ。あんなの選ぶなんて、カービン伯爵がどれだけ美青年でも、人間の格が知れるってものよー。」

先輩方、本音がタタ漏れです。

我が国では言いたくとも言えない雰囲気になってるから、かなり、溜まってたらしい。

それにしてもアリシア様の評判は悪い。

ここに集まっている先輩方はロメリア様の味方なので、話半分で聞いておく。

だけど、先例を無視したやり方には、たしかにいら気分はしない。

「去年は、出身地域への凱旋巡業以外しなかったし、今年は秋の巡業。収穫時期で忙しいのに。受け入れる方は大変でしょっね。」

「普通はそうですね。私もそう思ったのですが、カービングには20年ぶりなので、ぜひ来ていただきたかったそうですね。」

「あれでしょ。冬の議会開会中に巡業に出なかったのは、夜会に出たかったからでしょ。巫女姫様が。」

そう、先例では巫女姫巡業が多くなされるのは冬。

農業の閑散期が多い。

だが、冬は同時に王都の社交シーズンへにもなる。

日程を指定してきたのは神殿側だが、調整なしで受け入れるカービング領に、疑問を持ち尋ねた。

ヨシア様の二面額が亡くなられた追悼以来だそうだから、領民の期待は熱い。

いつでもいいから来て欲しいのだそうだ。

出かける前に出席した会議で、各地の顔役の人たちが、念願叶ったと興奮していた。

あれだけ神殿を蔑ろにしているから、女神信仰が薄い地域なのかと思ったら、どうやら、巫女姫への偏重が篤いらしい。

わたしの顔を初めて見た有力者たちが、アリス様のことを聞きまくって、あんまり知らないっていつと、あからさまにがっかりされた。

悪かったわねー、しがない歌姫で。

なんてことを話したら、また先輩方の炎が上がった。

「凱旋から最初の巡業が、恋人のところってのが、また。公私混同も甚だしいわ。」

「求婚者を侍らせた夜会に出てるけど、やっぱり、本命はカービィ・グ伯爵って話だものね。国一の美青年だし、宝石鉱山で潤ってはいるしね。降嫁したら辺境暮らしになるんだけど。」

「あら、辺境領の奥様は1年の半分以上、王都にいらっしゃるわよ。元巫女姫なら、いくらでもいいわけがたつじゃない。」

「今の歌姫が本当に可哀想。引き立て役にしかされてなくて、あれじゃ経験にならないわ。でも、今のままじゃ、私たちも協力したくない。神官様の前で、不敬になっちゃつけど、セシリア姫やローズも追い出されたままなんて、納得いかないもの。」

巫女姫選定で次点だったセシリアは、公卿家だといふのに未だ社交界に出てこない。

3位のローズは婚約者だった外務大臣の子息に、ロメリア様と共謀してアリシア様への嫌がらせを行なったという理由で、婚約を破棄されて、国外に出てしまった。

なぜかアリシア様と仲の良かった歌姫たちも国外に出てしまっている。

そして、わたしは辺境に送られている。

中央神殿に残っているのは、歌唱の指導がつまり、「タイーバ」のみ。
中央神殿は人手が足りず、大変な思いをしているはずだ。

「だけど、神官長様からも要請もないし。巫女姫の奔放な振る舞いを注意されないのかしら。たとえたら、ガッカリだね。申し訳ないけど、わたしも協力できない。」

わかります、その気持ち。
神官長様への忠誠心が篤いわたしですらそのですから。
期限があるから頑張れます。

「あら、神官は辞めるつもりなの？。アリエッタイ。」

「だって、割に合いません。それに、あの巫女姫様が、来られるんですよ？。エチエア神殿だけはありません。」

「でしたら、引退されたのちは、ぜひガイネく。美しい歌姫は我が国の男にとっては垂涎の的。私がぜひにどう紹介したいものがたくさんあります。」

ペヤン様から声をかけられて、いつのまにか、主役がトールまで来ていたのに、気づいた。

ロメリア様―素敵―女神だわ―。

「おめでとつ♡ちります。ロメリア様、ペヤン様。」

「ありがとつ―。女神の意思を継ぐ姫をまたちより、ぜひ祝福を頂きたい。」

ペヤン様が言い終わる前に、後ろの従者がヴァイオリンを弾いた。

賛美歌の一節。

結婚の式で歌われる一番有名な賛美歌。

先輩歌姫たちが自然と歌い出す。

完璧なハーモニー。

なんて気持ちいいのかしら。

歌の終わる直前に、わたしに従者からヴァイオリンを渡された。

わたしは、ロメリア様の代で作られた賛美歌を奏でた。

セシリアが作曲した、ロメリア様のための曲。

歌姫は代々、当代の巫女姫のために曲を捧げる。

傑作と言われたロメリア巫女姫のための賛美歌。

これを歌いこなせるのは、ロメリア様に傳いた、私達の代だけ。だけど、この会に参加できたのは私のみ。

ロメリア様が、朗々と歌い上げる。

低音から高音まで、力強い響きで歌うのが、ロメリア様。

この歌い方に憧れて、一所懸命、発声を真似したけど、やっぱり無理だった。

わたしだけでは伴唱は無理なので、ヴァイオリンで伴奏して、歌い終わると、招待客が、わあ！と歓声を上げた。

歌姫にふさわしい、ロメリア様の歌唱力。

久しぶりに胸が震えた。

「ありがとう。アリエッティ。」

ロメリア様、そんなに泣くと化粧が崩れます。

本来ならば、国中を上げて祝福しても良いくらいの先代巫女姫の結婚式。

それをこんなふうに、隠れるように祝わなければいけないなんて。

この代償は高くつくわよ。あの国の貴族たちは。

旦那様のペヤン様は、うつとりした目で、ロメリア様の歌う姿を見ていた。

心の底から、女神のように思っていていらつしやるのが、よくわかった。

ロメリア様のよつな偉大な歌姫を、大事にしないう国なんかより、ここにいた方が絶対に幸せになれる。

わたしも、神宮辞めたら、いつちに来ようかしら。真剣に考えるくらいガイネの街は楽しかった。

20 歌ってこそ歌姫！

「それにしても、歌姫ってのは、ほんとに歌が上手なんだなあ。」

ウイルクルムがのんびりと言つのに、吹き出してしまった。

「当たり前だろうが！何を失礼なことを。」

ケビンはそう言つけど。

当たり前なんだけど、今まで当たり前じゃなかったんでしょね、カービング領では。

巫女姫巡業もなかったし、神官もいなかったから、歌姫が歌つ姿も見ることがなかったんでしょ。

「そうよ。だって、厳しい修行をするんですもの。」

「神官様も歌姫なんだって、改めて分かったよ。本当にすごいかった。あれって何か打ち合わせしてたわけじゃないんだろ？それなのに、よく歌えるなあ。神官様って、楽器だけじゃないんだ。」

「あはは！歌姫は歌が本職なのよ？！」

だから歌姫っていうんじゃない！と笑つと、そつが！、とウイルクルムも笑つた。

ガイネ港からの帰り道。

ヨシユア様の付けた護衛にわたしは、ウイルケルムを指名した。

ヨシユア様は最初、いい顔をしなかったが、彼には道中、歌唱の指導がしたかった。

ウイルケルムは行進曲も一番初めに覚えた。
音感が良く、ギターも弾ける。声も良い。

とても音楽の素養のある青年だった。

長く神官不在だったエチユア神殿には聖歌隊がない。秋に巫女姫巡業を控えた神殿には、聖歌隊の不在は致命的だった。

わたしはウイルケルムを聖歌隊の核にしようと考えた。

そのためには、何曲かの賛美歌を急いで覚えてもらふこと。できれば簡単な楽譜が読めることが急務。

ガイネく向かう間もなるべく、彼の隣に座り、賛美歌を覚えてもらった。

おかげで、ウイルケルムとは随分、親しくなった。

前からついてくれている、騎士のケビと侍女のベルセラムも同行しているので、彼らにも同じように教えているが、ウイルケルムは鷹揚な性格なのか、堅苦しいところがない。

おかげで、わたしも肩肘張らずに好きなことが言える。

ここに来て、初めて友人と言えるくらいの親しみが持てた。

「歌姫様ってのも、辞めちまったらふつつのお嬢さんなんだなー。

楽しそうに笑っし、大酒は飲むし。神官様のお友達は綺麗な人ばかりだった。」

辞めなくても、ふつつのお嬢さんよ。」

「歌姫は選定に受ければ、誰だってなれるのよ?。」

「そうなんだってな。それ初めて知ったよ。貴族のお嬢様じゃないとなれないと思ってた。」

「ある程度の音楽の訓練がいるから、貴族のお嬢様が多いけど、もちろん爵位を持たない人もいるわよ。そういう人は辞めてしまったら、平民に戻るわ。神官は騎士爵位だけど、歌姫から神官になる人は少ないわね。」

「くえ、でも神官様は伯爵家の娘さんだろ?。」

「名ばかりのね。すでに手切れ金を渡されてるから、家には帰らないわ。だから、名前だけ。神官を辞めてしまったら平民になるわ。」

「ふっん。なら、俺みたいな騎士とも結婚できるのか。」

あら。脈あり?

ちょっと短気なところはあるけど、心根は素直だし、何より音楽的な素養がいい。わたしはけっこう気に入ってるほっただけど。

「そうね。もらってくれる?やめる頃は相当おばちゃんだけど。」

「早くに辞めたら考えてもいいぜ。嫁は若くて可愛いのがいい。」

「ウイルケルム！. 軽口も大概にしろ。」

ケビヘが怒鳴った。ウイルケルムが、軽い分、真面目なケビヘが締めてくれる。バランスがちょっといい。

こんな感じで、ガイネの旅は楽しく過ごせていた。

「怒られちゃった。さて、練習でもしましょっか。」

「俺のせいかよ？. それにしても神官様の練習はしつこいなあ。休む暇もない。」

「だって、時間がないんだもの。あなたを頼りにしてるのよ。ウイル。」

そう言つて、ギターを抱えなおして、賛美歌を口ずちむ。

すでに行きの道中で、教え込んでいるが、合唱となると、とっさにと主旋律に引っ張られてしまう。

わたしはなるべくウイルケルムと一緒に御者台に乗って、隣に座って教え込むようにしていた。

「やっぱり、休憩中に練習しましょっ。この山道だと、手綱が難しいんじゃないかって？. 交代して馬車の中で、もう一度合わせましょっ。」

何度も同じ場所ですますくので、そう言ったのだが、ウイルケルムの機嫌を損ねたらしい。

「大丈夫だってんだろ！. もう一回歌わせろよ！。」

「口を慎め、ウイル。」

「今はやめときましょっ。集中して気をつけたら、すぐに覚えられ

るわ。今は御者をしてるから・・・。」

「うるせえ！早く弾けよ！」

怒ったウイルケルムが、わたしに体当たりをしてきて、バニスを崩して御者台から転がり落ちてしまった。

「神官様・・・」

危なかった。もつ少しで車輪にひかれるところだった。

車輪の外側に落ちたので、引かれることは免れたが、体の半分を強かに打って、声が出なかった。

ウイルケルムもケビンも、みんな蒼白になっていた。

しまった。

わたし、護衛されてる身だった。

これは、ヨシユア様から怒られるだろうなあ。

ウイルケルムが外されるのは痛いから、それだけは勘弁して。

城に着くと、すぐにヨシユア様から呼び出された。

すでにウイルクルムはケビンに伴われて、馬で先に城に返られていたから、ヨシユア様の耳には入っている。

大いにはしたくなくらいけど、騎士としてあり得ないことだから、なんらかの処分は免れない。

だけど、聖歌隊からは外してほしくない。

ウイルクルムからは土下座で謝られたし、彼がいなくなれば、聖歌隊の核になる人材を採すところからまたやらなければいけない。巡業は秋と聞いているから、正直もう時間がないのだ。

ちよつとしつこく指導し過ぎたから、わたしにも責任はある。と説得するしかならぬと、緊張しながら、執務室に行った。

部屋に入ると、ヨシユア様が愚を飲んだのが分かった。

すぐに頭を下げて、バツ心配をおかけして申し訳ありません、と謝った。

「・・・ケビンから聞いた。謝るのはわたしの方だ。ウイルクルムは、騎士を剥奪の上、領外へ出すことにする。申し訳ない、アリエツテイ殿。」

「え？ダメ、ダメです・・・」

そんな！領民でおえなくなってしまう。

騎士爵位の返上は仕方ないとはいえ、住む場所さえ追い出されるなんて大袈裟だ。

「わたしの怪我なんて、大したことありません！. そんな大層な処分はしないでください！. 」

「大したことないだと？. そんなに顔を腫らして。女性の顔にそんな・ ・ ・。馬車から突き落とされたんだぞ？. !. 命さえ危なかった。」

「でも、わたしは生きてます。それに、傷はいつか消えます。残る傷でもなかったんです。」

「傷の問題ではない。彼は護衛騎士だ。護衛する者を突き落とすなど、言語道断だ。それにあなたは神官だ。聞けば身分の則を無視して、随分とあなたに気安かったと。その気の緩みが今回の失態なのだ。騎士としてあるまじきことだ！. 」

ヨシア様の顔色が変わった。
目には苛烈な怒りが映っている。

直視できずに、思わず目を逸らした。
覇気に飲まれないように、なるべく冷静に、と必死に言い返した。

「神官は一代騎士爵位。彼とわたしはほとんど身分の差はありません。それに気安く接していたのは、わたしがそう望んだからです。気の緩みがあったのなら私もそうです。私が望んで、御者台に乗り、彼を練習に付き合わせたのですから！. 」

「あなたは伯爵家だ。そしてわたしが中央神殿からお預かりしている、神官だ。あなたの振る舞いが気安くても、ウィルケルムは自分で律するべきだ。それができなくては爵位は持つてはいけない。そ

う訓練されているはずだ。」

ロシニア様が一步前に出て、わたしは思わず、後ずかった。

改めて、彼は騎士なのだと悟った。

覇気に気圧されてしまった。

だけど。

「それなのに、あなたに怪我をさせてしまった。本当にすまない。
彼の追放だけで済めば軽い方だ。」

「っ！やめてください！わたしにも責任はあります！」

「……なぜ、それほど庇う？」

ロシニア様の目が先程とは違う剣呑さで、わたしを睨んできた。

恐れを見られたくなくて、思わず俯いた。

ああ、彼は本当に騎士なのだ。

そして、この領主なのだ。若くても、人を制圧することに慣れている。

普段の少し戸惑いのある雰囲気とは全く違って、わたしには俯くことしかできないう。

「ガイネくの道中、随分親しかったとか。彼く特別な思い入れがあるのか？」

「彼は聖歌隊の核になってほしくて、訓練していました。」

「本当にそれだけ？」

か、と頬が熱くなった。
そんなことを聞いてくるなんて。

確かに気安い言葉の応酬で、そんなやり取りはした。

だが、本気で思っていたわけではない。

「そつたとしたら、なおさら、彼の処分は変えられない。あなたは伯爵家だ。わたしの預かる令嬢。身分の則が分からないような不埒な者の狼藉を見過すわけにはいかない。」

あなたがそれを言うの？！

頭の中がかかった。
身分の則や倫理の法を犯して、神殿を貶めているのはあなたたちでしよつ？！

大声で詰ってやりたかった。

だけど怒りに任せてそんなことを言えば、自分の矜持が傷つく。

わたしはそんなことにはたわって、自分の使命を放り出たくない。

「・・・彼に恋愛の情はありません。同じ年頃で、話しやすかったのは事実なので、親しみを持って、わたしに引き入れたかった。そのことで彼を勘違いさせたかもしれません。そのことについて、

ウイルケルムからは平身低頭、謝られました。ですので、わたしくの謝罪は済んでいるのです。」

声が震えている。

だけど怒りを抑えるのと、彼への畏怖に負けないうちにすることは精一杯だった。

「それは聞いている。だが、職務を全うせず、女性に乱暴までした処分は別だ。」

「騎士職の解雇は致し方ないでしょう。ですが領からの追放は重すぎます。どうか」容赦を。」

「何度も言うが、あなたは伯爵家だ。それにただの神官ではない。王に匹敵する巫女姫になるかもしれなかった歌姫だ。この国を代表する女性なのだ。その方に傷をつけた罪は重い。」

傷なら既に付いている。

目に見えない、深い傷だ。

跡に残るなら、間違いなくそちらだ。

それをつけたのは、あなたなのに。

皮肉に、自然と口端が上がった。

「私は巫女姫ではありません。そんなことはありません。」

選ばれたのは、アリシア様。

わたしではない。

もしかして、なんて、思っているのは、恐れ多いことだ。簞箒を狙う者の考え方だ。

「それに伯爵家と言いますが、既に手切れ金を渡されて、ここに送り出された身。身分など本当に名前だけなのです。ウィルクムにもそつ話したからこそ、気安くなったのでしょつ。」

目を閉じたまま、懇願した。

「どうかわたしに免じて」容赦を。彼を領から追い出せば、残された家族も肩身が狭い思いをするでしょつ。わたしにはそれほどの。」

自分を卑下する言葉を使っていることにためらいを感じ、一旦言葉を切つたが、うまく言葉が見つからなかった。

「わたしの考えが甘かったばかりに、見も知らぬ誰かを不幸に追いやるような、そんな覚悟はわたしには無いのです。身分で守って頂くほどの価値も。ウィルクムは反省しています。彼がここで自分を変えたいと願うなら、そつたせてやるのが、民の心の安寧を願う神官の務め。お願いいたします。彼にチャンスをお与えください。」

ヨシエア様は長い間、沈黙していた。わたしはその間、頭を下げていた。

顔を上げて、と言われ、ヨシエア様を見ると苦々しい顔でわたしを見据えていた。

「・・・あなたは、甘い。」

だめか。

ヨシコア様の言葉は残酷だった。

だが、これが統治者なのだ。

久しぶりの絶望感に片足を入れた気分だったが。

「だが、わたしにも非がある。ウイルクルムは短気ですぐに手を出してしまつことを知っていても、あなたの護衛につけた。わたしの判断が甘かったのだ。ウイルクルムの性格もあなたのことも見くびっていた。」

わたしには希望が見えたような気がしたが、ヨシコア様はとても辛そうだった。

「今回限りだ。領の追放は取り下げよう。」

ああ。

ほっとすると膝から崩れ落ちた。

ヨシコア様が慌てて抱きとめてくれた。

「・・・大丈夫か?」

はい。すみません。

いんなに緊張したのは、初めてで。

言葉もです、口々口々と頷くと、ヨシコア様が何かを抑えたような

低い声で言った。

「もうこれ以上、無茶はしないでくれ。アリエッテ、殿。」

できればわたしもしたくないです。

なんて、言えなかったけど。

なんか、でも。

男の人の腕ってこんなに硬くて、太いの？

なんか、ドキドキする。不埒なのはわたしの方かも。

ウイルケルムの隣に座ってたときは、全然意識しなかったけど、確かにこんな大きな体で体当たりされたら吹っ飛んじゃっわね。

やっぱりわたしは世間知らずなんだわ。

いつやって、魔王との対決は終えた。

息が白い。

眼下に広がる広場の石畳にっつすらと霜が残っている。

齒の根が合わず、カチカチと齒が鳴るのは、寒さだけのせいではない。

緊張のせいだ。

わたしの背中には国王、王妃両陛下を始め、王族と名だたる高位貴族が並んでいる。

眼下の向うには、カービンズの領軍。

真新しい紺のケープ付きの礼服で揃え、楽器を抱えて姿勢良く立っている。

みな、緊張と寒さで齒を食いしばっているのだらう。

いつもより眼光鋭くわたしに注目していた。

第一指揮者のシヤンと目があつて軽く頷いた。

シヤンが大きく指揮棒を掲げると、ドラムが一斉に構えた。

うん。

カッパッ。惚れ惚れする。腕の高さも記憶。

シヤンの指揮棒が高く振られ、笛の合図で一二三の単純なロールが始まる。12回繰り返して列が一斉に動き出した。

広場中央まで進んで、わたしが片手をあげると、シヤンの笛で一二三のロールが止まった。

動きが乱れない。精悍な顔もそのまま。

鍛えられた騎士たちの一糸乱れない動きに、会場の雰囲気が変わったのが分かる。

トランプのアーサーに向かって合図をすると、荘厳なブロードグが始まった。

わたしは長い美しい指揮杖をわずかにふるだけ。

あとは第一指揮のシヤンと第二指揮のシオポルトが隊列を動かす。

紺色の冬の軍服。

ケープの裾と立襟にはカービングに昔からある刺繍の柄と、カービングの紋が銀色の糸で縫い込まれている。

シルクハット風の帽子を目深に被った、鍛えられ軍人たち。

蒼穹によく映える白の手袋。

全てペヤン様のトザン。

わたしも同祭服に合わせた立襟が着いた長い白のコート。

総指揮用の背丈ほどある指揮杖には、金色の飾りがついて、動かすたびにシヤンシヤンと鳴る。

風に長いコートがはためくと絵画のように美しい。

これはペヤン様がエチエア神殿に寄付してくれたものだ。わたしのためだけに仕立ててくれたもの。

この演出でカービングの領兵はしばらくモテモテだろう。

秋の巫女姫巡業は予定の１ヶ月前に急に延期になった。理由は他地域の被災の慰問。

よくあることだが心待ちにしていた領民は落胆していた。

そこに、もう一つの要請があった。

国王陛下のカービング領軍の行進演技の天覧。

春の日の祭り以来、ヨシエア様が領軍の訓練に加えていた。

それが噂になり、騎士出身の王妃様が興味を持たれたらしい。

国中の名だたる統治者が集まる、新年の祭りの次の日、余興として呼ばれたのだ。

巫女姫巡業のために演技を複雑にし、楽器も増やして練習していた領軍は天覧演技に、一気に士気が上がった。

何故だかすぐにロメリア様がエチエア神殿に来て、演出の協力を申し出てくれた。

ペヤン様の名前は出さずに、ヨシエア様に話しを通したんだけど、結局ヨシエア様にはバツてたみたい。

同祭服はペヤン様の名前で寄付されたしね。

春の日の祭りより倍の長さで編曲し直した、交響曲。管楽器を増やし、隊列の動きの派手さよりも、動きを抑えることに集中した結果、軍隊らしい精悍さが際立った。

音楽的にはまだまだだが、ここで求められているのは、軍隊としての規律性。

国境を守る辺境領兵の精鋭ぶりが、一目でわかる乱れぬ動き。士気の高さ。

短い演技の中にそれが現れるように、注意を払いながら演技を組み立てた。

フアンフアンが音高く響き、兵たちが叫んだ。

「我が国に栄光あれ！女神に感謝を！」

もちろん、古語。

ペヤン様にもこの演出は褒められた。センスの良し彼の方に褒められると気分が良い。

がしゃん！とわたしが長い指揮杖を打ち付けると、兵たちは一斉に方向転換をして、乱れぬ行進で舞台袖に下がっていった。

静寂していた会場に大きな拍手が起こる。

振り返り、両陛下と同列に席を設けられたヨシユア様、その横に並んだ巫女姫様と神官長様に向かつて深く一礼した。

同陛下はとても喜んでらした。良かった。

アリシア様も一生懸命、ヨシコア様に向かって話しかけていた。
ヨシコア様は聴いていらしたのか、わたしを見て目礼をした。わたしも目礼で返す。

指揮台から降りて控えの天幕に行くと、騎士たちから歓声が上がった。
ダメですよ、まだ陛下の御前です。という意味でそっと唇に指を当てる。

みんな気取らずかしそこに、う、と口をつぐんだが、その端から笑いが漏れた。

式典の会場を出るまで演者は演じ切らないう。みんなを幻滅させてしまふ。

あーだけど、疲れた。やっと歯の根が合う。
寒うし、緊張したー。
はーと息をついて、これからこのことを思い返す。

この後、王宮の中で慰労食事を。
その前に天幕の中の楽器を外に運び出さなければ。

すでに楽器は片付けられているから、荷馬車に積むのを見届けないう。

食事にヨシコア様も来賓も同席しなうから気楽だけど、王宮内だからあちこち見て回らなうものに指揮官のコートへから注意してもらわなければいけないなあ。なんてことを考えながら、同僚服から

ゴンゴンと飴を取り出してパクリ、と食べた。

「う、くくく。また、飴。」

堪え切れないうちにジャンが笑った。
みんなもクスクスと笑っている。

これは、神官長様からいただいた特別な飴なんですからね。星の形をした小さな飴。

む、としながらも袋をジャンに押し付けて、みんなで食べるうちに回してもらった。

甘いものは緊張と疲れを取るのも。
王宮を出るまで気が抜けなから、ちよつとここで休憩ね。

23 盛大に文句言ってる。

王族の退場を天幕の中で待っていると、王宮の衛兵が来客を連れてきた。

いんなとくろに、先触れなしで入ってこられるのはもつぱらの高位。

オスカー殿下と、なんと、セシリアだった。

「アリー！会いたかった！！」

わおー！セシリア！良し匂しー！相変わらぬのタマタマトボトヤー！やわらかー！

豊満なセシリアにギョウギョウと抱きしめられた。

わたしも会いたかったもー。

「見に来てくれたの?!ありがとうございます！」

「素晴らしいかったわー！指導したのはアリーなんでしょっぴ！バスター王国の再現をするなんてさすがもーそれになんてスリキな衣装なのー！みなさん、とても素晴らしいかったです。」

セシリアが、騎士に向かってニッコリ笑った。
みんな、顔がだらしないわもー。

「みなさん、こちらの方は///スリキ公爵オスカー殿下です。そしてコリキ公爵の令嬢のセシリア殿下です。」

騎士たちが、ザッとその場に跪き、礼を取った。オスカ―殿下が満足そうになつた。

「カービング領はよく訓練されている。君たちを誇りに思つて。我が国で行進演技が行われたのは、おそらく初めてだろう。想像以上の出来だったよ。カービングは良い領主と神官を得たな。」

そして、わたしを引き寄せた。

「この子は歌姫時代からわたしの友人だ。よろしく頼むよ。」

は、とコートンが短く返事をする、と、天幕が開き、楽器移動の時間を告げられた。

みんなが楽器を荷馬車に積んでいる間に、オスカ―殿下たちとも話しが出来た。

「昨日の舞踏会で会えるかと思つていたのに、いないんだもの。」

「今年も同祭服で来るかと思つてたのに。でも、そのせゝのせい、コートンなら夜会でもいけるぞ。」

やめてください、人の黒歴史を。

「今年は招待されてません。」

「またそんな不手際か。ほんとダメだな、この王宮の奴らは。とっせ、今日の晩餐にも呼ばれてないんだろ?。」

「ヨシコア様は呼ばれてますよ。」

「あいつがこれを指導したわけじゃないだろ。どれだけ神官を甘く

見てるんだ。」

オスカ―殿下がおもしろくなぞそゐに言った。
俺は出ない。お前が出ないんだったら話しが聞けないじゃないか、
と機嫌斜め。

「アリ―、わたしの屋敷にいらつしやいな。叔父様もいらつしやる
？」

セシリア―国王主催の晩餐会だよ―。いくら王弟でも不敬にあたるで
しょ―。と駈つてたら、あつちり行くつて返事してるじ。
うやうや、オスカ―殿下―。

「話したらいことがた―くちゃん、あるの。」

セシリアがキラキラした笑顔で、言ってきた。

わたしもあるわ―。
目下のところ、盛大に文句を言つたらいことが―。

「セシリア、わたしもあるのよ―。なんなの、あのリットーモへちゃん
からの依頼は―。あんな難しいもの、わたしが編曲できるわけないじ
やない―。」

顔を引きつらせながら、文句を言つてやった。

先日送られてきたリットーモへちゃんからの依頼。セシリア作曲の戯
曲。

二つの主旋律が絡み合つ、今まで聞いたこともないような旋律。理

解するまでに、小一時間かかった。

なんとか楽譜を弾きこなせた時は、かついもちに悶絶した。

合唱ではなく、掛け合うでもなら、旋律の違う2つの主旋律が同時並行で流れていく。

要所要所で、同じ言葉を、同じタヤ／＼／＼で重ねるので、曲としては一つのものに仕上がっているものに見えて、実は違うメロトヤ。

「アリアならおつとでもると思いつく。何年かかってもうらつて思いつくから大丈夫かも。アリアの曲が出来てから劇を作り始めるんですって。」

「あんなのを何年も悩まなくならわもー。自分でやってもー。セシリア！」

作曲セシリア、編曲わたし。

無理。無理です。

あんな才能の塊のような曲。わたしには触れませんー。野暮ったくなつて、自分の才能のなちに死にたくなるだけもー。

「そのお話もしたかったの。ねえ、今回はいつまで王都にいられるの？」

「3日後には出発するわ」

「ええ？。短すぎなら？。カービ／＼伯爵と夜会に呼ばれてなら？。今日の演技は今から話題になるわも。」

「騎士たちと一緒に帰るの。伯爵がわたしを夜会に連れて行くわけないじゃない。巫女姫様のお膝元なのよ。」

婚約者がいるのに、別の女、しかも神官をパートナーにするわけがない。

今回の行進演技の件なら三シニア様だけで十分だ。

それに、どうせアリス様が来るまでの地ならし。今回はそれがたまたま、王妃様の目に止まるくらい奇抜で話題になっただけのこと。

「ほんっと、許せないわね、あの男。アリスの才能の無駄遣いだわ。ずっと王都に返してほしうと願ってたのよ。」

セシリア、騎士たちが引きつっている。

やめてあげてー。

彼らにとっては、尊敬する領主様なんだから。

天覧演技の夜、セシリアの屋敷から帰ってきたのは、夜もすっかり遅くなってから。

話しが盛り上がり、時間を忘れてしまった。

タウンハウスの方、遅くなっちゃって、すみません。

天覧演技から一旦、タウンハウスに戻って、ドレスに着替えてからセシリアの屋敷に向かった。

たちやかながら、天覧演技を成功を祝って晚餐を開いてくれて。

セシリアが雰囲気出すためにドレスで来てねー。って言われて、念のため持ってきていたドレスを着ていったのに。ひどい言われようだった。

アリーってほんと、音楽以外センスないわよね。そのドレス、おばさんみたいって、言われ。

セシリアのドレスを着せられそうになっただけと、胸のサイズが合わないんだってば。体格一回り違う上に、胸がー。胸がー。

小さくて着れなくなっただけからって何枚ももらったことあるけど、未だにガバガバ。着るたびに心を抉るわ。

おかしいな。鳥の胸肉食べたら、大きくなるっていわれて、気をつけて食べてるはずなのに。

セシリア秘蔵のウイスキーコルクシヨへも出してくれて、久しぶりに王都の贅沢を味わいました。セシリアの執事さんからは、あなた達はおっちゃんですか、と呆れられたけど。ライフオールドさん、相変わらずの毒舌。つふふ。

名残惜しく別れたけど、結構な時間。こんな時間まで騒いだのも久しぶりだから、疲労感はあるけど、すつと満足。

ヨシコア様もまだ、おかえりになってなかった。良かったー。

ウィルヘルムの一件以来、ヨシコア様はやたら過保護になって、いろいろ煩わし、いや、気にかけてくださって。

今夜ヨシコア様は、王家主催の晩餐会に出るって知ってたから、その前に屋敷に帰るつもりだったんだけど、何だかんだと遅くなってしまった。

騎士たちはタウンハウスに全員泊められないので、郊外に宿を取っているが、わたしはタウンハウスに入れてもらえた。

タウンハウスは去年も使用人の方々の対応が腫れ物扱いで、居心地悪かったから騎士の宿でも良かったんだけど。

今回はちょっと対応が良い。

晩餐の着替えも手伝ってくれたし、食事もヨシコア様と同じ食堂でとるよう勧められた。

去年は部屋に運ばれてたんだけど。まあ、去年は二泊しかしなり超強行軍で帰ったから都合は良かった。

ヨシコア様と同じ食堂でつてことは、家族が同等の来賓。

屋敷にも入れてもらえない扱いから考えたら、随分格上げされた。

ほかの騎士も何人が泊まってるから対応が追いつかないのかな。

この一年でカービングとの関係も随分変わった。去年の秋行われるはずだった巡業が伸びて、その代わりに行軍演技が披露されることになった。

巡業の準備を急がなくていい分、行軍演技のほうに注力できて、特に領兵たちとはかなりの仲間意識ができた。

自然、領軍の長、ヨシエア様とも顔を合わせる機会が増えた。

城の中ではわたしの存在も受け入れられたけど、ここ、タウンハウスは別。

正直、タウンハウスとカービングの騎士たちの関係も微妙なのが分かってしまった。

わたしは当然、騎士たちの味方なのだけと。

慣れないホールで、ちよつとふらふらする。

飲み過ぎたかしら。

ベルセラムに手を取ってもらって階段を上がっていると、ヨシエア様が帰ってきたよう。

ちよつと酔ってるけど、挨拶しなきゃ。

上った階段を、また下りていくとちよつとヨシエア様が入ってきた。

うっわー。カッコいいー。

ほんと美形は何着せてもカッコいいー。

寒さ避けの黒のマントを脱ぐと、夜会用の裾の長いフロックコート。

長身だから、すいっく似合うし。

濃紺に銀の刺繍は、今日の騎士の衣装に合わせたのかしら？髪を長めにしてるから、亜麻色の髪が、濃紺に映えて色っぽいわー。

これは、夜会で帰らせてもらえなかったわねー。お嬢様たちのダンスの相手が大変だったんじゃない。

・・・セシリアの屋敷でのテニションが抜けないわ。やっぱり酔ってるわね。

わたしが階段を下りてくるのに気づいたヨシユア様が、流れるように近づいてきて、ベルセラムと代わってエスコートしてくれた。

はあ〜紳士ね。ドキドキするわー。

「どこに出かけていたんだ？アリエツァー。」

うわーん。いい声〜。

腰にくるわ。

酔ってるから余計。理性が飛びそう。

「友人が晚餐に招待してくれて。」

努めて、平静に。

「少し、酔ってる？珍しく顔が赤い。」

あら、バシちゃった？

あれだけ飲めば、酒臭いわよね。

久しぶりにハメ外しちゃった。

だけど、ヨシコア様もお酒の匂いがする。香水の匂いも。

お嬢様方が放してくれなかったのね。

あ、今日は巫女姫同席だから、アリシア様か。道理で。

「休んでなくてよかった。今日のお礼が言いたくて早く帰るつもりだったんだが、遅くなってしまった。・・・コートの匂いかな？」

はい、頂きます。

今日の『寝業』に、チヨココート、食べたかったんです。

ヨシコア様がわたしの腰に手を回して、応接室にエスコートしてくれた。ふらふらしてたのはヒールのせいです。

細身に見えてしっかりした身体を占めてるのよね。二つや三つ横に立つとそれがはっきりわかる。

ああ、理性が飛びそう。

はしたなり真似しちやダメよー。アリヒッターー。

二つで襲ったりしたら、来代まで伝承される痴女になっちゃダメよー。

でも、ちょっとだけ。

気づかれないうちに匂いだけでも堪能させてもらってもいいわよね。

25 美形ってスルい、

ヨシユア様のエスコートで応接室に入り、暖炉の前に椅子を持ってきてくれて、座らせてくれた。

王都はカービングよりだいぶ寒い。

パチパチと木が爆ぜる音。

静かな夜に響くその音に耳を澄ませている間、ヨシユア様は家令にテキパキと指示を出して、わたしの隣に座った。

ちよっと酔った頭で、ぼんやりとそのまま見ていて、沈黙に気づいた。

目を上げると、ヨシユア様と目が合った。優しく微笑まれる。

美形だよなあ。

でも、わたしの好みはもっともっと年上なのよね。惜しい。

10年経ったら、抱きしめられたい。

あー。

やっぱりかなり酔ってるわ。

「今日はありがとう。アリヒツトヤ。面壁下から、大変なお褒めの言葉を頂いたよ。わたしのよつな若輩者には、過分なほど。全て貴女のおかげだ。」

「卿の激励があつてこそです。わたしは新しい音楽を教えたに過ぎません。卿が訓練に取り入れて、皆がそれに応えたからこそその成果です。今日だって。」

ちよつとクスリ、と笑つて、ヨシコア様を見ると、とろりとした目でわたしを見ていた。

色気が凄い。

大丈夫？ヨシコア様。あなたもちよつと酔つてるわね。

「わたしはほとんど、動かなかつたでしょう？」

そう、わたしはほとんど立っていただけ。

行軍訓練は全て軍の指揮官に任せている。

わたしは動きの簡単な指示書を渡して、楽器の指導をするだけ。

最近では、週に1度ほどしか、指導に入つてない。

それでもこのレベルまでできたのは、指揮官の情熱とヨシコア様が発破をかけるから。

もちろん、領軍の騎士は剣や体術の訓練も怠らなう。ヨシコア様はそれに加えて、行軍の訓練や、土木や兵器の訓練もさせている。

「だが、あなたがいたからこそだよ。騎士たちもあなたが総指揮に立ったからあそこまでできたんだろう。正直、今まで一番の出来だった。誇りに思つよ。」

「騎士たちに言つてあげてくださいね、そのこと。卿はいつも騎士たちに厳しいから。」

ヨシコア様が苦笑した。

男の人は寝めるの、苦手よね。みんな頑張ったのに。

「巫女姫の巡業が終わったらな。」

「もう。そんな先なんて、みんな忘れちゃいますよ。明日、言ってくださう。」

「わかった。明日ね。」

「約束ですよ。ヨシコア様、酔っつらつしやるから忘れた、なんてダメですからね。」

あ。名前で呼んじゃった。

わたしも酔ってるからつい気安くなってる。

気をつけなきゃ。

早く、コーヒーくださいー。

「約束するよ。アリエツトヤ。」

すっぴんぐ嬉しそうにヨシコア様が笑った。

コーヒーが運ばれてきた。ううむー。

やったー。ぐりぐのチヨコ付してるー。さすが伯爵家ー。

「アリエツトヤ、明日は何か用事か?。」

「朝、騎士の様子を見に行きます。その後は、彼らを連れて市街に少し買い物。」

「夜は?。実は何件か夜会に招待されているんだ。今日の演技の話し

を聞きたいと。あなたも一緒に。」

わたしも一緒にー？

「夜は、神官長に呼ばれています。」

「その次の夜はいつだろう？」

「はあ。空いてますが。ですが、わたしでもろしうのでもつか？」

「あなたでないと。行進曲を作ったのはアリエッティだろう？。今夜は神殿の功績として、巫女姫と神官長が同席したけど、各辺境伯は訓練の手法を知りたがってるんだ。指揮官たちも連れていーと言われている。」

今夜はおそらく神官長様が配慮してくださって、わたしと巫女姫を同席させないうちにしてくれた。神官長様とはお手紙を度々交わしているから、この行軍演技のこととも相談していた。彼の方には珍しく、手放しで褒めてくれた。王妃様には神官長様から知らされたようだ。

元騎士の王妃様が推されていることもあって、特に私軍を持つ辺境伯がこそって話を聞きたがっているそう。

正直、行きたくない。だって。

「あまり、行きたくない？」

「申し訳ありません。王都の夜会には正式に出たことがないので。」

」

「まあかー。」

ヨシコア様が心底、驚いた顔をした。

ほんです。

巡業の歌姫としてなら、何回も出たことがありません。
だけど、招待客としては出たことがないので。

ほら、わたし、名ばかりの令嬢なんで。

「夜会慣れしてるの？」

「歌姫として夜会に招待を受けることはあります。巡業の時とか。
ですが、最後まで出たことがないので。」

ダンスのパートナーに選ばれることがない、と分かったあたりから、
早々に退席することにしてた。

巡業の時はやることが多い。

壁の花になっただけより、楽器の整備や神官様について民の祝福を
手伝ったほうが、有意義な気がしたのだ。あの時は。

今思えば、あの時もう少し頑張っていたら、今頃結婚相手が見つか
ってたかもしれない。

「では、ダンスは？歌姫は習ったの？」

「夜会で踊ったことはあります。恥ずかしながら。明日、練習し
ておきます。」

「いや、そこまでしなくていい。ダンスはもう断りたかった。」

「ですが。」

ヨシヨシ様のパートナーとして出るのなら、いなくともヨシヨシ様
とは踊らなうといけなかった。

「大丈夫。皆、あなたの話を聞きだがつてゐるんだ。わたしがエスコートするのだから、わたしがお断りしよう。」

「それだと卿が踊れません。」

「わたしは踊らなくていい。今回はそういう社交ではなから。」

それだとほかの方から要らぬ怒りを貰うのではなうだろうか……。

じーと、ヨシユア様を見る。

「ダメかい？。アリヒットヤ？」

ずるーい。美形、ずるーい。

そんな風にも願ひされたら、断りにくい……。

ちよろい自分を恨むわー。

翌日。

ロシエア様は約束とおり、騎士達の宿に行き昨日の演技を労った。

騎士達が感激の眼差しでロシエア様を見ていた。もう、信仰の域ね。これは。

ロシエア様は若くて美しい容姿をしていらっしゃるから油断してしまっただけで、戦いの相手としては大変な強豪らしい。

騎士達が言うには、形としては正攻法なのだが戦略がいやららしいのだとか。

なんか、分かるわ。

意外と腹黒いものね、この方。

その後、なぜだかロシエア様もわたしの貰い物に付き合っという事になった。

連れていかれたのは、貴族御用達のドレス専門店。

明日の夜会用にドレスを用意することに。

固辞したかったけど、昨夜、セシリアにけちょんけちょんにやられて、さすがに強くはなれなかった。不甲斐なし。

実は新年の王宮舞踏会もパートナーの申し込みをされていた。

ドレスも用意する、と言われていたのだから、わたしは舞踏会より、

行進演技の訓練を取った。王都に不慣れな領軍には引率が必要だろうと思ったのだ。

ドレスを贈る、というのは、男女では特別な関係。況してや、ヨシユア様は巫女姫様の婚約者ともいってしやかに言われている、噂の人。いくら状況が許すといっても、痴情のもつれと噂がたつものなことは厳に避けたい。

当て馬は、わたしの方よ。

結婚の希望は諦めかけてるけど、もし、万が一ってことはあるし。何よりその気もないのに不名誉過ぎる。

だけど、国王と肩を並べる辺境伯、しかもその頭目とも言えるザトキエル南西辺境伯が王都で開く夜会に、センスが無いと言いつけられたドレスで行く勇気は流石になかった。不甲斐なし。

わたしはかなり小柄なので、既製品でも体型と年齢に釣り合うものを採るのは、けっこう大変なのだけど、さすが、貴族御用達。

明日、午後にはお直しをして屋敷に持ってきてくれるとのこと。

うつむ、プロフェッショナルな気概を感じました。

けど、わたしの手持ちの化粧品でうまく化けられるかしら。はあ、これだから嫌なのよ。装いつていうのはお金がいくらあっても足りない。

仕方ない、明日会う約束をしているセシリアに泣きついて。

その後、何人かの騎士と、ヨシユア様も加わって市街地に繰り出した。

王都のお土産を貰うために。

みんな、どんなお土産がういかわからないうつらうから、まずわたしが必要なものでってことで、行きつけのお菓子屋ちゃんに行ったら騎士たちに大笑いされた。三シユト様まで。

なによう。

「どんだけ、甘いものが好きなんですかー。神官様ー。子供かー。」

「違うー。好きなんじゃなくて、必要なのー。飴は喉にいいのよー。」

「はいはい。では、俺たちの感謝の気持ちを込めて、贈らせていただきます。」

あら、ありがと。

じゃあ、シユエリーボックスをと言つと、騎士たちが焦ったのが面白かった。

お菓子屋ちゃんでシユエリーボックスなんだから、お菓子に決まってる。

店員さんがこれは歌姫御用達なんですよ、と言つて出してくれた。贈答用の美しい箱に入った飴とせりーの詰め合わせ。

歌姫の差し入れには、定番の品。

夜には神殿に行くので歌姫たちへの差し入れだ。

辺境にはないオシャレな箱を気に入つて、お土産に、と騎士たちがこぞって買い求めた。

次に楽器屋さん。修理用の弦や、道具。新しい楽譜。五線紙。

ここではカービング領のつけにしていること。

そつよね。だって領の楽器を修理するんだもの。

顔見知りの店員が、昨日の天覧演奏のことをいち早く知っていて、

それが私が寄越されたカードの領だつて言つたに、びっくり。
その領主と騎士たちを引き連れて、店にやつて来たにまた、びっくり。

噂のヨシエア様の美貌に、宙に浮くくらいびっくり。

「やだー。あんた、言ひなぢらもー。」「つうのことはー。記者、呼んでくんだから。」

昨日の天顰演技のことが既に噂になっていた。

国王陛下の覚えめでたかつた私たちが入店したのを、最近、流通している流行紙に売り払つて貰ひらしい。

下種ね。と気安く、力にしてあげると、お姉ちゃんのお兄ちゃんにうちの店に隠返しなぢらもーと怒られた。

また返すほどの、隠は返けてませんー。

27 男運、使い果たしちゃった?!

オネエちも店員とイヤイヤ話してたら、あまりの気取ちにヨシア様に説明を求められた。

この人は元神官。

神官見習いの時から、一緒に指導を受けた仲間。話し方がちょっと独特ですが、腕は確かですよ。本職は楽器の修理や調律師。

そして、戯曲作家でもある。私の依頼主のときもあるのだ。まだ駆け出しだけど、売れっ子のリットイモちゃんも磨けば光る、と判子を叩いてくれている。

「はあ、いい男ね。噂以上だね。あのアリシア様の噂がなけりゃ、社交界は血みどろだったかもね。毎日、拵めてるあんたが羨ましいわ。それにしても。」

ニヤリ、と笑って私を見る。

「あんた、よく連れてこれたわね。あのアリシア様でも連れ立って町歩きに来たって聞いたことなのに。」

目の覚めるような美形でしょ。連れて歩くのも気分がよろしくても。ほほほ。

付いてきたんですよ。自分から。私が心配だそつて、と言いつてあげると、豊をつまみ上げられた。

「ブスのくせに調子のつてんじやならわもー。あんた、今日で一生分の男運、使い果たしたわもー。」

ああ、やっぱり！: なんとなんそんな気がしてたー。

「ただでさえオトコ見る目がないうせに、ちよつとらしい男に囲まれたくらいで調子乗ってんじやならわも。ほんっと、ちよろいんだから、あんた。」

ひじり・・・刺さりますわて、ぐっの指も出なう。

がつくりと肩を落とすのを、オネエちゃん店員がニヤニヤ笑って囁いた。

「一人ぐらゐ紹介しなちやも。騎士様たち、うう体だわあ。」
逃げてー。みんな逃げてー。

ヨシコ様ほどでなくても、カーンヘグの騎士たちは中々なう男。体格はううし、姿勢も物腰もうう。ヨシコ様の薫陶のおかげだと思つ。

お姉さんは鼻が高いです。

と、お姉ちゃんぶって言つてやると、みんなに苦笑された。ヨシコ様にはおだて過ぎだと注意された。

本当なのに。

オネエちゃん店員にも勧められた、がつつり系も店員飯のお店に向かう前に、ヨシコ様とも別れ。

わたしを早めに屋敷に戻すものに、危なり目に合わせならものじ、としつゝく念を推して、去って行った。

「名残り惜しそつだったなー、いっ酒主様。」

昼間からビールを飲みながら。

今日は特別。

休日だから、一杯までは、と指押屋のバーへから詰問が下りてる。

オネエちゃん店員が勧めてくれたお店。お肉、おらじー。お野菜もおらじー。

ちっと夜がメーへなんだろうな。

お酒に合う料理のはず。

いいなあ。

王都に戻ってきたら、絶対来よう。

「飯に行こうって、神官様が言った時のいっ酒主の顔。めっちゃくちゃ引きつってたもんなー。」

「背中にガッカリって書いてあったな。」

ゲラゲラと騎士たちが笑う。

そんなに行きたかったのかな？。ヨシコア様。

有名なお店だけあって、すっく美味しう。

でも、ヨシコア様はあと3カ月は王都にいらっしやるんだから、来ればいいじゃないの？。

「神官様と行きたかったんですよー。あつたりあでしやなうですかー。」

はあ？。何言ってるの？。

「そんなわけないでしょ。」

「正直、どうなんですか？プロポーズまでしたんですか？」

ぐ。肉が詰まる。オハ、なんてことを。

「あのねえ、ヨシコア様は恋人がいらつじやるじゃないの。そんなこと言ったら怒られるわよ。」

「「ええー！？」」「」」

ええー？。って、知らなかったの？有名な話じゃない。こっちが驚くわ。

「誰？誰なんですか？もしかしてカミコ様？ありえないうー。」

「ちょっと、ほんとに知らないの？！」

騎士たちは一斉に首を振った。

「絶対、神官様だって。」

「いやいや、カービング卿は巫女姫様の恋人でしょ？有名な話よ？」

えええー？！と騎士たちがひっくりかえった。静かにー。

「・・・あー。もしかしてあの話。」

「神官様が来る前に言われてた、歌姫が、領主夫人に来るって話、あれって。」

「神官様じゃなくて、今の巫女姫様のことだったのかー。」

そつそつ。

今更だけど、わかりにくいわね。わたしも一応、歌姫だったから。

「だからいつまでもあんな感じだったのかあ。」

「いや。それでもやっぱり、なあ。」

なんか、残念そうに見ならでくれます。慣れましてけど。

「・・・だとしたら、」当主はあれが「婦人に対して普通ってことか？」

「つくえあ。」

あはは。何その声。シヤハ。

「勝てない。俺たち、絶対あのひとの前じゃ、目の目、当たんねえ！」

あ。分かる、それ。

美形って、するいよね。今ならそのネタで、一晩中語れるわ。店員さん、もう一杯、ビールください。

・・・一杯だけ、ですね。

はい、すみません。ため息つかないでも。シヤハ。

「これは、やばい。」

ピアノを弾く指が動かない。

思えば20日以上も鍵盤を触っていなかった。最近では歌姫の時のように練習もしてはいるから、普段の練習不足が祟っている。

持っている楽譜の中で一番難しうエチュートを出して、なるべく正確に弾いていく。

だんだんと指先のがが入れやすくなったというので、行進曲に戻えた。

すでに1時間過ぎている。

交響曲仕立ての行進曲は力が入る。

おそらく夜会で披露することになるだろうと、ずっと思っ立って、着替えを早くしてもらったが。

予想以上に動かない指に焦った。

もっと練習しておけば良かった。

時間を見つけて、ピアノを触らせてもらえばよかった。タウヘクウスの執事の今までの冷たい対応に、ピアノを弾かせてほしいと言いつ出すのを躊躇していた。

後悔して唇を噛む。たけとこで諦めたくない。

しばらく集中して、やっと低音が納得いくまで叩けるものになったが、高音の右手の小指が動かない。

悔しい思いで鍵盤にもつ一度手を置いた時、声がかかった。

振り返ると、ヨシユア様と、騎士のナークとリオホルドが待っていた。

二人は共にカービング領の麾下の子爵位。

騎士を代表して夜会に参加する。ついでに、社交界に顔売っておく。

南東地域の統括として、カービング辺境伯があるので、にっぴりっぴりここで部下の顔を広めるのも、大事な社交だ。

既に時間がきていたのか。

「そろそろ、行こうか。」

「・・・はい。」

「緊張してる？」

ヨシユア様が苦笑して聞いた。

「いえ。曲がつまみ弾けなくて。」

え？とヨシユア様が驚いた顔をした。

「あれだけ弾けたら十分だと思っよ。・・・良かった。浮かない顔

をしてたから。寒くなかったかい？」

ヨシコア様がそう言つて、ちら、と執事を見た。

にわ。その顔、めっちゃ怖いー。

なんだか、今更冷えてきたわ。

執事さんが真つ言な顔して、申し訳ありませんと頭を下げた。

そういえば、このサロ、火が入ってなかったわ。

所々でこつこつ嫌がらせ、まだあるのよね。

本当にだらぶスシになったんだけど。

けれど今回は、ピアノに夢中になりすぎて、気づいてなかった。

「ああ、いえ。弾いている間は夢中で、寒くなかったです。」

そう。とヨシコア様は小さく息を吐いて、二人の騎士に先に行くように言った。

この方も苦労するわね、と見えないうちに苦笑した。

カービングは正直、ヨシコア様の統制が全く取れていない。

上意下達ができない中、最初に彼が手を入れたのが領軍だったのは、当然だったかもしれない。

だって、他国と境界を接しているのだから、周りが不穏な動きをし始めた時に、動かすのは軍だ。そこが頼りにならないと、安心して暮らせない。

わたしも最近になって知ったことだが、ヨシエ様が家督を継いで、正式に領に帰還して、初めにやったことは、隣国「コール」が国を挙げて行っていた「ダイヤモンド鉱山」の盗掘を軍事力で止めたことだそうだ。

カービングの領兵は頼りにならないので、王軍を借りて、「コール」の国境付近から移民を追い返した。

国境付近を治めていた貴族たちは、あることが「コール」側と結託して、もともとその土地に住んでいた人たちを追い出し、「コール」が連れてきた奴隷まがいの人たちを使って、「ダイヤモンド」を他国に流していた。

ヨシエ様の代理で治めていたオルセイ卿は、信じられないことに「コール」の一貴族の夫人を愛人にして、「ギル＝ガンゼナ城」に住まわせていたようだ。

不潔過ぎて、お子様なわたしにはちょっと理解できない。
まさか、自分が住んでいるあの「ギル＝ガンゼナ城」が、そんな愛憎渦巻くサスペンスの舞台だったとは。

闇が深い。

でも、テーマ的な旋律が思いついて、ちょっと夢中になってしまった。あの話を聞いて作曲してしまう自分が病的で怖い。

侍女がわたしに上着をかけようとするのをヨシエ様が少し止めた。

出してきたのは、高価そうなネックレスと髪留め。輝きからして本物だろう。

「 ::カービング産のダイヤモンドと、トパーズだ。その髪留めは、ガラスだろっ？カービングを代表していくのに、そんな模造品をつけさせるわけにはいかない。」

これだから嫌だ、夜会は。

夜会の格が高ければ高いほど、集まる人たちの格も高くなり、装いも華美になる。

必要なこととはいえ、自分の実力以上に飾り立てられた感が拭えない。

どれだけ飾り立てられても、心が浮きたたない。
だって、全て借り物。

エチエア神官として贈られたものは、巫女姫様のための地ならし役としての功績。

そもそも、エチエア神殿の神官が仮の居場所なのだから、わたしには全てが偽物にしか感じない。

せめて自分の力で手に入れた恥ずかしくないものが、あればいいのに。

そう思うと、外された髪留めが惜しくなった。

権威を保つための豪華な宝石より、わたしが作り出した音楽を心から楽しんでくれた心優しい報酬。

わたしの小さな手は、自分が納得いくものしか受け取れない。

だめね。

ピアノの腕が落ちてゐる事實に、ブライドが傷ついて鬱固地になつてゐるわ。今から社交場という戦場に出向くのだから、ここは切り替えてちゃんと振舞わなきゃ。

ヨシコ様^様が髪留めを侍女から受け取り、自分のポケットに収めたのを見た。

あとで返してくださいねー。わたしにとっては、貴重なものなんだからー。

「・・・大丈夫だよ、アリヒット。今夜はダンスはしなうよ。」

馬車の中でも陰鬱な気分で、ぼんやりしていると、ヨシコ様^様が優しい声で話しかけてきた。

「え、ああ・・・。」

ダンス。

やはり、忘れてた。

ピアノだけじゃなくて、ダンスも練習すればよかった。
ああでも、相手がいらないとわたしには無理。

「ダンスはお嫌いなのですか？神宮様。」

行進演技の紺の軍服を着たナーガが聞いてきたので、素直に頷く。

「とても、苦手。」

「おしかけて、習ったことがない？」

「ううえ。歌姫はダンスを習うの。だけど、練習しかしたことはないのよ。相手も歌姫同士だし。正式な場所で男性と踊ったことはないので。本番は並んで踊るんじゃないでしょ?。」

ホールを縦横無尽に踊る夜会用の踊り方は練習ではほとんどしなう。

いつもぶつかって、リズムを崩していた。ロメリア様やアリシア様は、とても上手だったなあ。

「いつでも練習のお相手をしましたのに。」

ナーガがにっこりと笑った。

ロシニア様のよつに光輝くつていとはないが、彼も美男子だ。

ロシニア様より、鍛えられた体躯は軍服がよく似合う。がっしりとした胸回りの割には腰は引き締まっついて、精悍、という感じがぴったりだ。王都の貴族にはあまりない少し粗野な感じも、実は男の人らしくて素敵。

巡業が延びたので、賛美歌を広めるために領内を回った。領民に緊張感を抱かせないために、最低限の侍従で回るつもりだったんだけど、ロシニア様が度々同行するから、その度に護衛は増えていつて。

ナーガとオポルトはよく護衛官として、その旅に付いてきていた。だからわたしとも気安い。

いつにいつやってくるつていとは、彼らはロシニア様の側近として正式に取り立てられたつていとなんだろつ。

そうか、ナカとしオポルトも同じタウヘハウスに泊まっていたから、練習をお願いすれば良かった。

だけど、着替えるまでほんとにバタバタしていて、思いつかなかったってところが本当のところ。

ピアへの練習は思いついたけど、タウスは思いつかなかったのよね。

昨日も神官長様に呼ばれていたし、今日も朝からオスカ一殿下に呼ばれていた。

セシリアにも誘いを受けていたから、オスカ一殿下のところに来てもらったけど。

夜には夜会があるのだと伝えたら、オスカ一殿下の妃のティアベル様様が美容に詳しい侍女を呼んできて。

オスカ一殿下は不機嫌になったけど、奥方様には勝てないのね。今日でもよくわかりました。

肌、磨かなきゃって言われて、オスカ一殿下は追い出されて、昼間から夜会用に髪も巻かれて。ついでに化粧もしてもらった。

ティアベル様様の愛用の高級化粧品。

ものつすつく、いう匂い。

さすがの技で長時間でも崩れないって太鼓判を押されている。

名前も知らぬ貴族の方からたくさんのお茶会や夜会の招待状が来ていたけど、明日には送るので、ミシエ様に報告しても断りするにとにした。

ミシエ様も忙しうらく、お会い出来たのは、昨日の昼以来、今

が初めて。

わたし宛の招待状なので、わたしがお返事を書かないといけないのだけど、まだ書き忘れていながら、夜会から早く戻れたら書いてしまわないと。

「今夜は俺と踊ってください。ぶつからないうつに、リードいたします。」

うーん。ナーガなら足踏んでも我慢してくれるかな。

「今夜のエスコートは、わたしだ。ナーガ。彼女は今夜はダンスをしない。」

「失礼いたしました。」

ロシエ様が冷たく言い切った。

騎士には厳しいのよね。ほんと。

使用人にはそこまで厳しうとは思わなうのだけど。

斜め向う、ロシエ様の隣に座るレオポルトが、ニヤリとわたしを見て笑った。

違っつてば。これがロシエ様の平常運転なのよ。

これじゃ、女性を勘違いさせるわよねえ。

アリシア様も気が気じゃなうでしょつちよ。

ああ、わたしって完全に当て馬。

お願いします。恨むなら、自分の恋人の言動を恨んでください。

あーあ。

せっかくだから一回くらい、夜会でダンスを踊れば良かった。
せっかく習ったのにもついでと機会はないかも。

ナーガだったら緊張しないうし、もしかしてロマンスが生まれるかもしれないなかったんじゃない？

・・・ないわね。

それにウイルクムのこともあったし、モシゴア様の目の届くところじゃ、そつらつのはやめとって。

ああ、ほんとに嫁ぎ遅れちゃったわ。
なんだか、気分があげられなし。
そつと息を吐いた。

馬車から降りると、ヨシユト様がそつと腰を引ち替せて囁いた。

「なるべく近くに。足を痛めてゐることにしてあげる。」

ああ、そつと断り方があるのね。

ヨシユト様の宣言通り、タハスのお誘ひは全てヨシユト様がお断りしてくれた。

招いてくださったのはカービヤ領に隣接する、南西地域のザンギエル辺境伯。ヨシユト様とは孫と祖父くらいお歳の違つ老練の方。

他にも辺境領の方はほとんど集まられていた。その中でもヨシユト様は異例の若者。

私兵を許され、国境を管理するだけあつて、どの方々も武人然としていて、一筋縄ではいかなうのが見てわかる。

その中であつても、ヨシユト様は気後れするほどのなつ堂々とした様子。

王都ではこの老獺たちに可愛がられて過つたといふこと。腹黒くもなるわね。

やっぱり行進曲は披露させられた。練習しておいて良かった。

行進演技の話をするのかと思っていたが、話は思わぬ方向に。

辺境に歌姫出身の神官が寄越されるのは、最近ではとても珍しくなった。歌姫が引退後、神官となること自体、数のないものだが、中央を離れて、領主夫人ではなく神殿神官のまま辺境まで来たこと。それ自体、異例ではないか。と。

ちょっと顔が引きつっちゃった。

だけど、そんな話から歌姫が外国に嫁ぐことが多いと話が広がった。

少し前からそんなことはあった。

女神信仰が広がるとともに、歌姫が外国の貴族に嫁ぐことは増えた。

正直、淑女教育の最高峰と言われる歌姫は、外国の貴族からも人気なのだ。

158

ロメリア様がいい例。失望の元巫女姫を熱心に口説き落としたのは、隣国の大商人ペヤン様。

ロメリア様に傳いたわたしたち巫女姫候補の歌姫たちは、多くが外国にいと聞いている。

そして、現役の歌姫も次々と外国の貴族に嫁ぐ噂があるとのこと。

「それほどの数の外国の貴族が我が国で歌姫をどうやって射留めるのか。我が辺境領にさえ歌姫を縁付させるのは難しいのに。」

「よほど外国の貴族が魅力的だということかな。」

わたしにそんな話振られてもな。 。と思いながら、少し微笑んで首を傾げた。

「私は社交界には出ておりませんので、どのような出会いがあるかわかりかねます。」

「だが、あの行進曲はハストア皇国のものだから。巫女姫巡業で外国にも行くのだから、そこで見初められるのだから。」

そんな簡単に見初められるなら、わたしはここにはおりません。

「外国へは滅多に参りません。私は10年神殿にいましたが、その間、外国への巡業は一回しかありませんでした。」

「では、ここで出会ったのであろうな。外国へ行くくらいなら、自領に戻るか、あなたのように国内で奉仕をしていただきたらと望んでいるだろうに。」

「そう。歌姫が領に来ていただくのは名誉。それをみすみす国外に出してしまうのは惜しい。もしかして、女神信仰を広めるためにわざと国外に出しているのでは？」

うーん……。ここは発言したほうがいいのだろうか。

わたしは新人神官なので、あまり深いことは言いたくないのだけど。

「何か存知で？ マス神官。」

やっぱり、この手の老獪たちは逃してくれないか。

長い間、国境という難しい土地を治めてきた領主たちの、狡猾で圧力のある視線が私に集まっていた。

「神殿が女神信仰を広めるために、積極的に国外に出ることはありません。少なくとも、現神官長のアギネルズ様はそのようなお考えはないと思われます。」

これは確信を持って言える。

昨晚、神官長様とお話ししたばかりだ。

「国内においても、神殿は要請を受けて巡業を行います。それは国外も同じです。ですが、わざわざ遠く、危険も伴う国外くつら若い女子を大勢連れて行く必要はないと、神殿は考えてます。」

「女神信仰を広める必要はないと?。」

女神信仰はこの国の基本。

この言い方だと、国の根幹を疑うことになる。

「女神は人々が歌い、喜ぶ姿を見たいとこの世界をお作りになり祝福をくださいます。私たち神殿のものはその意思を継ぐ者。ですが、それは賛美歌を広める、ということではないというのが、アギネルズ様のお考えです。そして私もそれに賛同する者です。そのように教育を受けてまいりました。音楽は人々の喜びの発露。人の心に寄り添って、励ますものなら、形はどのようなものでも女神の祝福を受けた音楽、というのが現在の神殿の考えです。」

アギネルズ神官長様は長く神官長を務めていらつしやる方。

現在の教義の解釈は彼が基本だが、それが貴族社会の常識と離れて

いるのも、現況。だが、神官長様はそれを強く教化しようとはしていない。

いずれ自分から崩れる。と言われた。

人間の自然な感情の発露表現である音楽を、一つの型に閉じ込めるのは理にかなわない。そういうものは崩れる。

音楽を一つの型に嵌めようとするのは、傲慢な考えを持つ一部の人で、そういう人たちはいずれ自分の首を締めることになる。だから、神殿の務めは人々に歌い、楽しむことを忘れさせないことだ。

楽器や賛美歌の形は、一つの手法に過ぎない。どんな形でもいいのだ。歌を楽しむ心さえ伝われば。

「ですので、この国の中央神殿が、歌姫を派遣する必要はないと思われます。その土地土地で、民が喜んで歌う、というだけの簡単な教義。歌姫は女神の代わりとして、歌う民を励ますだけの役割ですから。」

「なるほど、だから音楽が賑わう土地には、巫女姫巡業はないのか。」

わたしは頷いた。

よく、どこかの領には素晴らしい楽隊ができたから、巫女姫の巡業を、という要請があるらしいが、それは後回しにされがちだ。

冷たい、と非難されることもあるが、そのような土地は大体、巫女

姫も選出されやすいので、凱旋巡業の機会がある。

「だが、賛美歌が歌えないのであれば、女神信仰とは、言えないのでは？」

「この国の言葉で作られた賛美歌を押し付けることは、本意ではない、と考えられています。そもそも、昔と今でも言葉が違ふ。この国の中でも、地方地方で言葉が少しずつ違ふのです。女神は自分を讃える歌を聞きたかったのではなく、民が喜ぶ姿を見たかったのだから、彼らが楽しく歌う歌を聞きたう。ですので、巫女姫巡業の際には、必ずその土地の、昔から伝わる歌を加えるようにします。女神がその土地の民とともに歌い、喜ぶために。」

そうか、と、最長老の辺境伯が、至極、納得したように頷いた。

「女神は寛容で、お優しい方。この信仰が広まったのは、簡単で、寛容な教義だったからでしょう。人は裁きたがりますが、この国の女神は裁かれた罪人さえ、お救いになりますから。」

人は恨み、貶め、時には一度と返ってこない命さえも簡単に奪う。それは許されないことだ。

人が生きている限り、絶対に許してはならない、人としての法。

女神の教義で考えると、人を苦しめ、喜びと歌を奪い去ることは何にも勝る罪、と考えられ、慣習法によって裁かれる。

だけど、どうしてもそうならざるを得ないこともある。

状況が人を追いやることがある。

その苦しい選択をした時に、女神だけは許してくれる。

歌を歌うという単純な方法で、自分と女神だけはこの世で生きていくことを、赦す。

それは罪を悔いる歌だったり、追悼の歌だったり。
声に出さなくても、心で歌えば良い、と、神殿は罪人に指導するのだ。

そうやって、誰にも言えない贖罪を女神に告白し、生きていく糧を心にもらうのが、女神の賛美歌なのだ。

「よく分かった。ありがとう。スミス神官。わたしは、女神の意思を忘れかけていたようだ。そうだ、だから歌姫や神官は少ない。指導が必要だと思っていなからんだ。」

最長老の辺境伯が頷くと、ほかの辺境伯も納得してくれたようだ。

はあー良かった。分かってくれる人たちで。

これだけ言っても、わからない貴族主義の貴族は多いのだ。

統治者である貴族が、一番神殿の熏陶を受けるはずなのに。

そうでなければ、この国の貴族は発展しなかったはずなのに。

権力は統治者に、権威は神殿に。

そうやって、お互いを尊重しあったからこそ、人々が安定したのだと習った。

そついつのは貴族の常識のはず。

それなのに、今は神殿は音楽を指導するものだど勘違いしている。神殿は音楽を指導などしない。民が望み、歌いたる音楽だけをともに楽しむだけだ。

歌がなくなってしまった悲しい土地には、その種を蒔きにいくだけだ。

それを育てるのは、そつにいる民であり、彼らの指導者である領主たちだ。

現実的にいって、神殿は土地から何ももらわない。

寄付といったものはあるが、歌を育てるために一定のものを直接取り立てることをしない。

過去、そついった時代もあったが、王や領主との関係を悪化させ、国を分裂させた。その弊害を学ぶため、歌姫や神官は歴史を学ぶのだ。

「だがわからぬな。なぜ、歌姫は国外へ出てしまつて何がそこをやる？」

それはわたしにもわからない。

偶然だと思っていたが、王都の神殿に籠り音楽に明け暮れる若い女子が、外国の貴族や有力者と知り合う機会などそつそつなり。

「あなたも、外国へ嫁ぎたいと思つるか？神宮殿。」

最長老の辺境伯にそう聞かれて、すいすい迷った。

「正直、外国には興味はあります。この国では聞けないうたが溢れていまして。」

ロメリア様の結婚式。

初めて男性だけの唱歌隊を見た。女性にはなり深みのある力強い音に衝撃を受けた。

そしてトハポの速いサァイオリへのダンス曲。

この国の室内楽ではなり、情熱的な調へ。

そういったものは創作への刺激になるのだ。

戯曲を作る時、そういったエッセンスを入れることで雰囲気が増える。

「これはこれは。」

ホッホッと長老が笑った。エチエア様が苦し顔でわたしを睨む。

ういじやなり、正直な感想です。

「だが、あなたを国外に出すのは惜しい。エチエアのお勤めが終われば、ぜひ我が領土へお迎えしたい。我が領は古来よりの土地。古語を理解されるあなたには、魅力的だと思われる。もちろん、巫女姫にも劣らぬ待遇でお迎えしますよ。」

うや、そういったのはわたくしです。一回、騙されてますので。

あれでしょ、長老様引退したら、掌返しに会うパターンでしょ？

正直、神官は辞めたいです。

貴族に振り回されるのも、勘弁してください。

「拐かさないでください、ザトキエル卿。彼女はやつと来てくれた我が領の神官です。簡単には手放しません。わたしが領民に恨まれます。」

ヨシエア様が、きつぱりとした口調で長老様を牽制した。ははは、と老獺ともが笑つ。

よく言う。数年後には追い出すくせに。

面白くない気分が誤魔化せなくて、喉の乾きを取るふりして、ワインをコクコクと飲んだ。

お、これ、美味しい。

飲んだ後の鼻から抜ける匂いが、いい。

だけど、こんなもので誤魔化されないんだから。

贅沢なご飯は食べられなくても、貴族様のお遊びに付き合つたなんて真つ平だ。

話がひとしきり終わると、集まっていた老獺な伯爵様たちは、タンスや次の方の「挨拶にと動いていった。

ほ、と息を吐くと、ヨシユア様がするりと横に座る。

「疲れたから?。アリエツトヤ。」

ええ、疲れました。ずっと圧力です。

小ぢくその言いつと、ヨシユア様は喉の奥で笑って、何故だか機嫌よく言った。

「そのライハ、気に入ったのかな?。もう一杯もらってしまおう。」

ありがとうございます。

ほんと、気の利く人。

彼のような完璧な人にライハをお代わりを取りに行かせたなんて知れたら、社交界で生きていけないわね。

よかった、この部屋がタンスホールから離れてて。

辺境伯たちが集まって話していたのは、ピアノのあるサロハ。

行軍訓練の話をするのに、ピアノを披露して、そのまま話し込んでしまった。

今夜の会の主賓がほんとにいい人になるか、あまりの圧力で誰も咎めたりしない。

座りっぱなしだと、体がだるくなるので、ほぐすために立って、なんとなくピアノに触れた。

「ス///ス神官。」

声をかけてきたのは、先程いた辺境伯のお一人。

ちもつと、ヨシゴア様のお父様くらいになるたろつちも年頃の方だけど。

お名前、なんだったっけ。えつとー。

「ハイナル辺境領のフドクリンです。ス///ス神官。」

改めて名乗ってくれて、ありがとう。

うーん、ナイス///ドル。わたしについてくれぐらうのお年の美形に弱いのよね。

「実はね、わたしはリットイモへのペトロヘだ。」

え。

ええー！..！

わたしの顔が完全に引きつってた。

「あ。あの。その節は.....。」

いや、違つー..！と言つた時、なんて言えばいいの？！

ハイデル卿は心から楽しそうに笑った。

「いやいや、こちらこそ。君のおかげで、今回は随分儲けさせてもらった。A＝スミス嬢。」

バチ、と片目をつぶられた。

あああ、戯曲のときの名前。

いつから知ってたんだろっ?!

「君のことは以前から、リッティモへに聞いていたんだけどね。まあ、本道に入ったのに若うしっかりしたお嬢ちゃんとは。」

「はあ。」

冷や汗が止まらないう。

なんと言つか、なんと言つか。

「【アスリースの楽】は見たかい? 今度、隣国でも上映するらしいになってね、今リッティモへが準備に行ってるんだ。」

【アスリースの楽】はわたしがカービング領に行く直前に引き受けた戯曲。

カービングに向かう途中、そして着いてから、カービングでの冷遇に耐えながら作った戯曲。

だが、まだその完成した劇は見えていない。

劇が上演されるようになってから、王都に滞在しても見られるほどの時間はなかった。

大した人気になっている、ということは噂で聞いているし、リットイモへちゃんからも知らせてもらって、特別報酬も受けた。

本当はこの夜会の時間にベルセラムたちと見に行く予定だったんだけど。

「観てないだって?!なんてことだ!」

「私は王都を離れておりますので・・・」

「はあ、セシリア姫の言うことは本当だな。君が王都にいないことは、損失だ。」

ハイデル卿が頭を抱えた。

ああ、セシリアとも面識があるんですね。

当然か。

それにしても、大物を引っ張ってきたわね、リットイモへちゃん。

セシリアとも知り合いなんだから、今更だろってけど。

セシリアという、ハイデル卿という、この国を代表する貴族。

セシリアはパトロへではないけど、後ろ盾にはなっている。

そんな人達を引っつけて外国まで公演に行くなんて。

音楽大国の我が国を売り込みに行ってるのは、リットイモへちゃんだ。

そして残念なことに、その分野は貴族様がありがたがる室内楽や賛

美歌ではなし。彼らが音楽として認めなし、市井のリズムを取り入れた戯曲。

知られていないとはいえ、彼らの頭目に当たる大物貴族がその後押しをしている皮肉に、嗤ってしまふ。

「新しい戯曲を考えてると、リットイモへから聞いたんだが、彼も忙しそうだし、セシリア姫は音楽はあなたでないと、推しているとか。楽しみにしているんだよね。」

あー。そのことについては、再三、セシリアに文句を言っています。

「セシリア姫にも、申し上げたのですが、わたしにはあの曲は無理ですと。あまりにも才能がかけ離れます。姫が出来るだけ、作り込まれるべきです。」

「くえ。あなたにそこまで言わせるなんて、楽しみだな。だが、【アスリースの実】はほとんどあなたが書いたのだから、姫もリットイモへもそこを評価して、次もあなたに、と言っているのだと思っていたが。」

そうだけど、そうだけどー。

あの時はたまたまです。本当に、運良くですー。

「あの劇中歌はセシリア姫が作曲したもの。わたしはそのイメージを膨らませただけなんです。」

アリシア様と引き離されるロシコト様を、イメージして。

つゝと胸が痛んで、思わずスカートを掴んだ。

何？

なんだか胸が痛い。やっぱり今日は調子が悪いのかしら。

「劇中歌も大流行したけど、わたしは導入から流れる、背景曲が一番好きなんだ。もし、よければ、弾いてもらえないか？。スミス様。」

喜んで。パトロ様。

劇中歌とともに劇中で何回も使われる旋律。切なり恋心を表現した、ピアノを使った導入曲。久しぶりだが、指は覚えていてくれた。

背景曲に続いて、劇中歌。

ハイデル卿が、小さい声で歌っていた。

男の人の声で聞くのは初めて。

いい歌だわ。男性主人公の心情が溢れる。切ない。

弾き終わると、ヨシコア様がピアノにワインを置いてくれた。

「意外だ。アリエッティ。そんな曲も弾けるんだな。」

はい。自分で作ったので。

ああ、ヨシコア様が戻られた時には、完成してレッティモへちゃんに

送り返してましたものね。

ハイデル卿が、くく、と堪えるように笑っていた。

別に隠してるわけじゃないんですけどね。話す必要を感じないだけです。

わたしの大事な収入源だし、観劇によく姿を現わすと噂のアリシア様の良いうちに使われるのを警戒もしてるので。

「さすが、演奏技術も素晴らしい！感動したも！スミス神官の才能に乾杯！...」

ハイデル卿が讃えてくれると、乾杯！と斉唱してくれた。いつものまにかサロヘには、人が増えていた。
やっぱり、この白ワイン美味しい！

「次回はもう少しゆつくり王都に滞在しておくれ。スミス神官。一緒に、レツティエへの劇を観に行こう。」

パトロヘ様と一緒になら、ロイヤル席で観られるわ！

「はい。ハイデル卿。ぜひ、お願いします！」

「新しい劇が楽しめた！早く完成するとういね。」

あ、そう来る？！

やっぱり狸だったわ。この人も。

ちつー！無理だったばー！

「ちあー！神官様ー！あんたの番だー！」

威勢のいいおじさんが、わたしに矢を渡した。

これで、3投目。外したら、罰ゲーム。

「神官様。私がー！」

「ダメよ、ケビィ。わたしのゲームよ。」

「しかしー！」

大丈夫だって。

だいふハンティをつけてもらってるし。

狙いを定めて。と投げたが、やっぱり外れー。

酒場の遊び。

的に3本の矢を当てる。

得点の高い人が勝ち。

単純なんだけど、なんで当たらないのかなー？

わあー！とおじさんたちが、大はしゃぎ。

「ほらよー！神官様ー！」

回ってきたのは、一口で飲める小さなグラス。

中は琥珀色の液体。

「砂糖はいるかい？神官様？」

「要らないわ。」

「神官様！.いけません！.わたしが飲みます！.」

飲めないでしょ。ケビン。

あなた、ちっきの一杯で真っ赤じゃない。

く、と一飲みすると、喉が焼けるよう。

これは喉に悪いわ。時々にしなきゃ。

「全く、水のように飲みやがって。呆れるぜ。顔色、一つ変えやしねえ。」

ありがと。わたし、お酒強いんです。

もうひとゲームだ！.とおじちゃんたちが、騒ぐのに、乗った。

「おやめください！.」

「大丈夫だったら。これで最後にするから。」

「いけません！.」当主に怒られます！.」

「騎士様が言わなかったらわかんねえよ。神官様、水代わりだもんな！」

いやあ、そこまでない。全く美味しくないし。

「相変わらずだなあ！.神官様。騎士様、無理すんな！.神官様には代わりなんていらねえよ。」領主様は一杯でひっくり返ったけど、神

官様は二杯飲んだんだぞ！」

そうです。わたしはヨシユア様よりお酒に強い。

前回、ここを訪れた時はヨシユア様も一緒だった。
ヨシユア様も顔色を青くしたり赤くしたりして、わたしを止めていた。

喉が焼けるくらい、度の強い酒を飲み干して、ぺろりと唇を舐めると、ヨシユア様の一杯目で赤くなっていた顔色が青くなった。

その時、初めて、わたしをアリエツタイと呼び捨てにして、怒られてしまった。

巫女姫巡業が決まってから、わたしは領内を回るようになった。
賛美歌を広めるためだ。巫女姫が来訪した際に、みんなで歌えるように。

神殿とすり合わせるため、何曲かを選曲して希望を出している。
どれが受け入れられるかはわからないが、出来るだけ領民と歌えるように、基本となるものを。そしてカービングに広く知られる花の歌を。

ヨシユア様をお願いして、先に領内の有力者を通じ、領民に広めるようにしてもらったが、会議の際披露すると、少しずつ旋律が違っていることが判明。

土着した賛美歌には、これもよくあることだ。

歌姫と合唱するには、矯正する必要がある。

和音を楽しむ、という、音楽の段階をあげる機会でもある。

そう思っただけ領内を周り、直に賛美歌を教えることにした。

領内全ての領民が、巫女姫を見に領都に来ることはないが、それでもたくさんの人が訪れるだろう。

歌姫たちと歌えた、というのは、彼らの喜びになり、しあわせな記憶になる。

それを経験から知っていた。

行進曲と聖歌隊の指導の合間に、なるべく遠くの土地から始めた。領の端まで行くのに、遠いところでも3日。指導をして、そのまま戻っても1週間にかかる。

出来るだけ、時間を無駄にしないので、行く先々で教えるようにすると、2週間ほどかかることもあった。

そのうち、ヨシユア様が同行するようになった。

毎晩、挨拶がわりに供されるお酒をあけていたら、だんだんヨシユア様の、わたしを見る目が変わってきた。

酒灼けするからほとんどにしてたつもりなんだけど。

そしてこの宿。

炭鉱に近いから力仕事をする人夫たちが出してくれた、蒸留酒。

前日もゲームで負けて、あまりに強い酒だから、おじさんたちもわたしじゃなくて男が飲めつていうから、ヨシユア様が代わりに飲んだ。

思わず顔をしかめたのが、すっごくかっこよかった。

でも、2杯目はわたしが飲んだ。

止められたけど。

続けてゲームに負けたから、2杯続けて飲んだら、ヨシコ様が悪魔のような顔で仁王立ちしてて、引きずるように部屋に戻された。

でも、次の日、一日酔いで吐いたのはヨシコ様だったけど。
その前にビールも飲んでいたしね。

また、矢が回ってきた。ケビへに奪い取られる。

「休んでて、ケビへ。回るでしょ?。」

「いいえ。ダメです。神官様は的に当てたことがありません。」

「あら、次は当たるかもよ。体が温まってきたし。」

「絶対、無理です。これ以上、飲ませたら俺の首が危ない。本気で」
「」当主に斬られます。」

「わたしが強いので、知ってるでしょ?吐いたりしないわよ。」

「わかってます!。だけどダメです!。それにあなたは、最近飲み過ぎです!。」
「」当主に、」で飲ませるなって言われるんです!。」

彼は保護者ではないわよ。

わたしの方が年上だし。

あ、保護者だわ。

でも、それは立場上のことよ。

わたしの行動を制限することはできないはずでしょ?。夫じゃあるまいし。

むーと口を尖らせている間に、ケビへが矢を投げてしまった。見事命中。

約束とおり、ケイムは二二時まで。

「おやすみ、神官様。早く騎士様を寝かせてやんな。」

「まだ来てくれよ。」

皆ちゃんも、巫女姫巡業には来てくださうね、と言って大くしく、部屋に戻った。

立っているのもやつのケイムの背中を支える。

「自重して下さい。神官様。恨みますよ。」

日頃、我慢強いケイムからお小言、うたたきました。

いめんね。

新婚のベルセラムが待っているから、一日酔いで、帰るの遅らせたくないものね。

ケビンを部屋に寝かせて、酒が抜けやすい薬湯を入れてもらったために、厨房に向かう。外の階段を使つと、ふと、月が目に入った。

春の満月。

春の日の祭りまで、あと二日。

ヨシエア様は、すでに城に帰って来ているだろう。

久しぶりにヨシエア様の面影を思い出して、胸が痛んだ。

あの王都での夜会以来、気分が安定しない。

気を抜くところかで、重石を寄せられたような苦しい想いに気付く。

ケビンが言うように、お酒の量が多くなつたのは、その想いを振り切りたかったから。

歌っても歌っても、心が浮きたたない。

縫るような想いで賛美歌を歌っている。そんな歌い方をするから、想いを忘れることができない。

だけど。

傷口を撫でるように、気づいた心を想い歌つと、その時だけは楽になるような気がして。

部屋にもどり、ギターを抱えて、トラスに出た。

階下ではまだ酒場の喧騒が聞こえるが、上階のこの宿は今夜、私たちが借り切っている。

宿に繋がる階段には、護衛を立てさせているので、ここには人は来な

いだろっ。

ボロッ、と弦を弾いて、「アスリースの実」の劇中歌を歌った。

3回目の春の日の祭りが、もつすぐ来る。

昨年の春の日は、晩餐でヨシユア様とヴァイオリンを弾いた。あれから随分と関係が変わった。

あの時、わたしのリードについて来てくれて、一瞬、心が重なった気がした。

あれ以来、目に見えてヨシユア様の態度は変化して、今ではわたしの名前を気安く呼ぶまでになった。

わたしは名前を呼ぶない。

高い身分の方という身分の則を犯したくなり気持ちもあるが、一瞬だったとしてもこの人と結婚できるのでは、と期待した自分に対する戒めだった。

もっ、あんな恥ずかしい、惨めな思いはしたくない。

それなのに。

王都で騎士たちから聞いた、ヨシユア様の態度。

わたしのことを、気に入って下さっているのは分かっていたが、側におきたらと思っくらに見える、とっつとなのだろっか。

当代随一の美男子と言われる伯爵に、気に入ってもらえるのは気分がいい。だが、それだけでは済まなし期待が生まれてしまっ。

ヨシコア様と親しくなるにつれ、ずっと目を背けて、蓋をしていた。

想ってはいけない人だから。

決して手の届かない人だから。

それなのに。

ナガのエスコートを厳しく警めた時、夜会の長老様の誘いを冷たくあしらった時、まるで自分のものだといつもの態度で、わたしを囲い込む。

それが、わたしを苛んでいた。

期待したくない。

心を、ヨシコア様のほつに向けたくなり。

あとで惨めな想いをすると分かっているのに。気がつけば、優しくされたことを思い返している。

あの時の惨めさを忘れたわけじゃないのに。

わたしの人生を曲げた、無神経で傲慢な人と分かっているのに。

わたしは、わたしのために、あなたを許してはいけない。

歌い終わって、細く長い息を吐いた。

「アリエッテヤ。」

振り向くと目シユア様がいた。

34 言わなちやもかった

まほろじ？

わたし、悩みすぎて病気になっちゃったの？！

「ケビンが伸びてた。まだゲームをしたのから？」

現実らしい。怒ってないから余計嘘っぽうけど。

「あなたも飲んだんだろう？。全く。本当にお転婆な。」

「…………お転婆とは違ふと思ひますが。」

「じゃあ、じゃじゃ馬？」

ロシエア様がクスクス笑った。

じゃじゃ馬でもなり。ただ酒に強っただけだ。

「飲み過ぎなりよつに、言つてもうたさう？。」

優しい声がかくすぐつたり。まともに顔が見れなくて頭を下げた。

「おかえりなさいませ。カービンぐ御。」

「…………ああ。ただいま。」

ロシ、とロシエア様の足音が近づいて、わたしが腰掛けでうたぐみちに座った。

「・・・どうして、にににん？」

城に帰って来ているだろうとは思っていた。春の日の祭りの準備で忙しいはず。

「あなたがににににいると聞いて迎えに来た。けどへには飲ませならよつに言っておいたが、多分飲んでるだろうと思ってね。案の定。」

また、クク、と笑う。

「わたしは平気なのですけど。けどへには申し訳なりつとをしまった。」

「あなたが酒に強いのは十分分かってるが、万一とらつにんごがある。あんな荒っぽい酒場で、淑女が飲むものじゃないう。前も言ったが。」

185

はい、前回もそのお小言をいただきました。

でも、楽しかったんですもの。

それに、このあたりで食堂はあそいしかならんだから。

「せめて、わたしと一緒にの時にしてくれ。アリヒットヤ。」

聞き込むよつにそう言われて、約束もできず、じーと見返した。

「ちっちの歌。」

ヨシエア様がふと、表情を変えた。

ああ、聞こえていたのね。

「ハイデル卿の前でも、弾いていたね。好きなのか？」

「・・・ええ。」

ツクツクするくらい、ヨシユア様はうらやま。

王都以来だから、3ヶ月ぶりのその曲に唇を注視してしまっ。

今頃、酔いが回ってきたのかしら。理性がぐらつく。

「歌詞が。もちろん旋律も好きですが。男の人はこんな風に思っているか。」

手遊びにもう一度、弦を鳴らした。

「・・・誰か、王都に想う人がいるのか？」

そう聞かれて驚いて顔を上げると、ヨシユア様が目を逸らさず、わたしを見ていた。

「いいえ。わたしにはそんな人はいません。」

なんで、王都なの？

そう、とヨシユア様は目を逸らした。

月に照らされた横顔。高い鼻梁、鋭い印象の目から鼻にかけてのシルエット。

見惚れるくらい美しい。

「あんまり切なく歌っていたから、誰かを思ってるのかと。わたしもその歌は好きだよ。」

アリシア様と観に行ったから。
それも噂で知っている。
セシリアが教えてくれた。

「ありがとうございます。」

そう言つと、ヨシユア様が不思議そうな顔をした。驚かせたくて少しいたずらを仕掛ける。

「これは、わたしが作ったんです。」

え?!とヨシユア様の目が見開いた。大成功。

「正確にはこの歌は友人が。ですが、これがメイヘンティアの劇の劇中音楽はわたしが。」

「劇の音楽を、あなたが?!」

そう。

あんまり言う気はなかったけど、わたしの大事な収入源。
楽しんでくれたのなら嬉しい。

「ちょっと、これから最中でした。馬車の中で作りました。卿のことをイメージして。」

「わたし?!」

驚いたでしょ?

ふふふ、と笑いが漏れた。

「アリス様と引き離される卿は、いんなふに思っているのではないかと。」

ヨシユア様が息を飲んで、く、く、と口を引き締めた。

あ、怒られるかもしれない。

その前兆の表情。

いめんなちう。

調子に乗りました。嫌よね、勝手に詮索されちゃ。

「申し訳ありません。勝手に想像して。」

いや。とヨシユア様が呟いたけど、やっぱり怒ってるよね。声が、固い。

失敗したわ。

だけど、後悔はしてない。

ずっと胸に引っかかってた。

あなたをモデルにしましたと言いたかった。

もつとつまらないうちで話せたら喜んでくれたかもしれない。
アリシア様と結婚した後とか。

その頃はもう、伝えられないけど。

二人が結ばれてしまえば、わたしは姿を現さない。
もつと一度と、噂も聞けないうちに逃げてしまいたい。

「・・・アリエツトヤ。」

呼ばれて顔を上げると、目を覗き込まれた。
ヨシエ様、なんだろう、何が伝えたいの？

わたしの中を探るような目で見ると。

「わたしと彼女は、そんな関係ではないよ。」

ん？
ええ？

「あの。では。すみません？」

え？
勝手にわたしの妄想で、恋人にしちゃったってこと？ いや、噂では
本当に。

だけど、本人が言うんだから。

顔から火を吹くってこんなこと。

ふふ、とヨシコア様が耐え切れないうちに笑った。

「アリエッティ、真つ赤だ。」

「・・・すみません。」

うわー！うわー！

言わなきゃ良かった！

後悔ー！ー！取り消してー！

いじめんなさー！

ヨシコア様がとつとつ声を上げて、笑い始めた。

だって！あんなに噂になって、わたしがカービンダに嫁ぐって話もなしになったし。

お城の人もみんなそう言ってる！

そつよ、タウシハウスの人や、城の使用人もみんなそう思ってる。

ヨシコア様が俯くわたしの頭を撫でた。

きつとつむじが真つ赤だ。だって、頭が熱いの、自分でわかる。

「巫女姫をカービンダに迎えることは、じいの悲願だった。」

そつと顔を上げると、ヨシコア様が優しく見ていた。

「だが、こんなに素晴らしい歌姫が来てくれた。巫女姫ではなくて、むしろのだといつことを、じいの民はもう分かっている。あなたが

言つものに、神殿は巫女姫を連れてくるのではなく民を驚かす
音楽を運んでくる。」

わたしが先日の夜会で話した神殿の考え。

小難しい話したから、こんな小娘が言つことではなし。そんなふうに
思われるのではないかと思っていた。

神官長様とはよくこんな問答をするが、ほかの歌姫がこんなことを
話しているのを、聞いたことがなし。

我ながら可愛げがないと分かっているから、本当は話したくなかつ
た。

ヨシユア様が理解してくれたことが意外だし、嬉しい。

「・・・・・・・・できれば、あなたにはずっとここにいてほしい。カ
ービングの女神となって、これから先も民を励ましてほしい。」

神官として。言外にその聞こえた気がした。
わたしは曖昧に微笑んで、目を逸らした。

カービングの女神なんて、なれない。
そんなこと、分かっているくせに。ひとり人。

ああ、だけど。
悔しいけれど、わたしはこの人が好きだ。

彼は全てを話してない。それなのに、全てを手に入れようとしてい
る。

なんて卑怯で、不誠実なんだろう。

そんな不誠実な人を好きになったのは、わたしだ。

そんな人を好きになってしまった、自分が悔しい。

3ヶ月前と同じように、わたしの前には鍛えられた領軍の騎士たち。

揃いの紺の軍服。暖かいカービングの春なので、ケープは外しているが、その分、前ひらきの上着に付けられた、ボタンの飾りが目立つ。

美しい組紐で二列のボタンを繋げている。

少し高い舞台から、彼らを見下ろすように立っているが、天覧演技のような緊張感に欠ける。

彼らがニヤニヤ笑っているからだ。

思いつき、見下すように睨みつけるけど、目が合ったシヤンは笑顔を堪えるように目を逸らした。

口が笑っているからー。

王宮の広場より狭いから、ちゃんと見えてるんだからー。

思いつき睨みつけてるのに、目シユア様のもつじつめくじかなら。なんでかなー？

ガシヤンー。と指揮杖と打ち付けると、全員の背筋がどへと立った。よしよし。でも、顔がー。締まりがなうー。

失敗したら、全員の店で、あのお酒を飲ませてやるんだからー。

シヤへに目で合図を送ると、口は笑ってるけど、ちゃんと始まった。

トコロが始めると、やっと、みんなの顔が引き締まった。

はあ、良かった。

騎士はニヤニヤしてたら、カッパつかなら。

ヨシア様が迎えに来た宿から、ギルニカへせう城まで丸一日。

本当は昨日、リバーサルに出れる予定だったのだけど、わたしが生まれて初めて、一日酔いになってしまった。

馬車の揺れに耐え切れなくて、途中で一泊したせいで、春の日の本番のこの時に、直接出る事になってしまった。

一日酔いだったことが騎士たちにバレて、いつやっつて久しぶりの対面だといつのに、締まらない。

ヨシア様も一日酔いのわたしを見て、肩を震わせて笑っていた。

ええ、前はわたしがそれをやりましたものね。

どれだけ屈辱か、よく分かりました。

だけど、わたしはもっと優しかったはず。腰枕で寝かせてあげたでしょ。

演技は完璧だった。

わたしもおおむなりの指揮をしたけど、ほとんど必要がないうら、楽隊も揃ってる。

わたしが領内を回ってる間も、どんどんつまくなっている。

もっと楽器を増やしてもいいけど、それじゃ、楽隊なのか、領兵なのか、わからなくなっちゃう。旗なんてどこかしら？
それが、剣舞をいれるとか。

あつという間に演技は終わり、わあー！という歓声が上がった。見物客も去年よりずっと増えて、店も所狭しと並んでいる。

舞台から降りて、聖歌隊に合流し、指揮杖を振ると、ベルセラムがピアノの前奏を弾いた。

1年を費やして広めた賛美歌。自然と観衆から歌声が上がる。

まだまだ少ない声だが、巫女姫巡業の時は、急峻な山々に鳴り響いくように歌ってほしい。
そう思って、行く先々で人を集め、お酒を供しながら男女に連つぱ一トを歌わせた。

音の掛け合い。とろとろにある、和音の妙。

一人で歌うのではなく、誰かと歌う、楽しさ。喜び。
せつかくの巫女姫巡業では、そういうものを感じて欲しかった。

巡業が一年伸びたからこそできる。

歌が静かに終わり、来賓席にいるヨシコ様と来賓の方々に礼を取った。

今年もヨシコア様の短い覇気のある挨拶。挨拶が短いのはいい。

式典が終わると、私の前に子供を連れた夫婦が並んだ。

「神官様。この子に祝福をしてください。」

この祝福の習慣もやっと思ひ出してくれた。

歌姫や神官は歌とともに、祝福の言葉を送る。

王都では当たり前前のこの習慣も、この土地では忘れられていたものだった。

領内を回り賛美歌を教えながら、子どもがいたら祝福を与えた。

子どもは宝。私たちの希望。

歌姫は子を産む女性の代表として、真つ先に子供を祝福するようにと教育されている。

習慣でそれをしていっていると年配の人たちは、昔、この領主様にしてもらったとか、土地の長老にもらったと話してくれた。

聖歌隊の時間があるものに残ってもらい、祝福の歌と言葉を送る。

いつのまにか人だかりができたので、何人かを並ばせ、聖歌隊からも祝福の言葉を送るようにした。

どんどん増えていくので、聖歌隊を半分に分け、楽隊と唱歌にわけ、交代で歌わせた。

これは私には最も馴染み深い、春の日の光景。

真夜中の儀式が終わり、仮眠をとって神殿に出ると、毎年、祝福を受ける人が広場いっぱいに並んでいた。

祝福は希望するときにいつでも授けられるが、巫女姫を始めとする歌姫からの祝福は、諸処の祭の時だけ。

特に春の日の祭りは、民の重要な祭りだけあって、祭りの前後の日は人が絶えなかった。

巫女姫巡業の時には、ここに集まった人たちよりもさらに多く集まっていた。

巡業が回ってくるのは一生に一度あるかないか。20年前の巡礼を覚えている年配の方もいて、やはりとても嬉しそうに思い出を話してくれた。

美しい歌を奏で、楚々とした深窓の姫君たちはその場にいるだけで、人の心を浮き立たせる。以前の巡業は、火山噴火後の地震で亡くなった前領主夫妻、ヨシエ様の二両親の慰霊のためだったから、希望を失った領民たちにとってとても慰めになったのだろう。

祝福を授けていると、領宰が呼びに来て、来賓へ挨拶を促された。この来賓はカービング領の各地を任せられている盟主たち。

喉が疲れてきていたので、ちよつと良い。小さな飴を舐めながら向かった。

今年もヨシエ様の隣に立って、挨拶を受ける。

なんだか今年はみんな、話が長い。

巫女姫巡業への期待がひしひしと伝わって、ずいぶん疲労感。

思わず、溜息をつくとき、ヨシエ様が気遣うように微笑まれた。

そんな目で見ないでほしいなあ。

おつこれ以上、あなたに堕ちたくないの。

騎士のレオホルドが寄ってきて、ヨシコア様に何事か囁いた。ヨシコア様が、す、と姿勢を正して、遠くを見る。その視線の先に、先ほどの祝福を受ける人々がいた。ちつちよりも人が増えて、広場を埋め尽くす勢い。

「疲れてるところ、申し訳ない。アリエッテヤ。祝福に戻ってあげてくれないか。」

もちろんです。いっ挨拶よりそっちの方が何倍も楽しい。足取りも軽く聖歌隊に戻る途中、レオホルドが囁いた。

「どうしても神官様から祝福を受けたいって。どんどん増えて、収拾がつかなくて。すみません。」

いえ、いちらいそ光栄です。それでこそ、歌姫。いえ、もう神官でした。

戻って最初に並んだ家族連れは女の子を連れていた。

「お待たせしてすみんなさいね。あなた、お名前は？」

祝福の歌を歌い、名前を聞くと、アリエッテヤ、と答えた。

「まあ、わたしと同じ名前なのね。」

女の子の目がキラキラと光った。

「アリエッテヤに女神のいっ加護がありますように。そして、あなた

方、^い家族が健やかでありますように。」

「神官様、あの、あのね。」

少女が思い切ったように話しかけてきた。

ああ、何が聞きたういことがあったから、ずっと待っていてくれたのね。

「なあに？ 小さなアリヒツトヤ。」

「神官様のようになるにはどうすればいいの？ どうやったら、そんなにうまく歌えるの？」

あら、嬉しい。小さな歌姫候補だわ。

「心から喜んで、楽しめれば。今のあなたのままでも、十分上手に歌えているわ。お父様たちも、そう思っているよ。」

後ろの両親にそう笑いかけると、嬉しそうに頷いた。

きつとこの子は、歌が大好きなのだ。お家でもずっと歌っているのだろう。そして、それでは飽き足らず、もっとうまくなりたうと思っている。

「でも、もっと上手になりたうと思えば、わたしが教えるわ。いにいる大人たちも、そうやって神殿で練習しているの。」

だけど、いからおたちは遠いのだと小さなアリヒツトヤが言った。

「それなら、時々、わたしはあなたのといるまで行くわね。毎日、わたしが付いていなくても、頑張り屋のあなたなら、一人で練習できるはず。」

そう言つて、アリエッティの頭を撫でた。

「もしよければ、ここにみんなと歌つていくといいわ。祝福の歌を覚えたら、村に帰つてみんなを祝福できるでしょう。わたしの代わりに、女神様の代わりに、みんなを祝福してあげてね。」

「いいの？わたし、神官様じゃないのに？」

「幸せを祈ることは、誰にでもできるのよ。あなたの二面親はいつでもあなたの幸せを祈っているわ。あなたは毎日、女神様と二面親の祝福を受けて大きくなつてゐるの。でも、歌にすると、それがはつきりわかるでしょう。あなたも時々、誰かの幸せを祈つてあげてね。」

歌う？と聞くと、アリエッティは後ろの二面親を振り回した。二面親が大きく頷いたので、みんなが舞台上に上がつてもらう。わたしの後ろで、聖歌隊と一緒に歌つてもらった。

そうすると、一緒に歌わせてくれ、と少しずつ舞台上に人が増えた。歌い疲れた人は、舞台を降り、歌いたい人たちは上ってくるので、聖歌隊がくくとくことになることがない。とてもいいサイクルだ。わたしも喉を休ませるために、楽隊と交代するのだが、言祝ぎだけはわたしの前に列ができた。

何度かの交代の後、並んだのは小さな赤ちゃん。こんな行列でも、泣きもせず、我慢強く待っていてくれた赤ちゃんを抱かせてもらった。

「可愛いリヒャルトに祝福を。女神の二加護がありますように。」

言祝ぎを言つと、かわいらあーあーといつお返事が返ってきた。

なんて可愛い。

子どもの柔らかさと独特の優しうにおいに、疲れが吹き飛ば。思わず、額にキスをした。

その時、ざわ、とざわめきが起こり、人波が揺れた。

「わたしからもその子に祝福を。」

わたしの隣にヨシユア様がいた。

なんて、幸運な子なのかしら。

ヨシユア様に赤ん坊を渡そうと差し出すと、肩を引き寄せられた。

「抱いておいてくれ。子どもを抱いたことはないんだ。」

そのまま、わたしの腕の中の子供にキスをした。

わああー。

今日一番の歓声が上がった。

感激で涙を流す二面親に赤ちゃんを返し、ヨシユア様を見ると、湧き上がる歓声を満足そうに見ていた。

ああ、この人は、この土地の光なのだ。

若くても、王都に育つてこの土地を離れていても、この領民は彼をずっと待っていた。

彼が自分たちを、導いてくれると信じて。

そして、わずかな時間なのに、こんなにも尊敬を集めている。

それは、賛美歌を広めるために領内を回ったことで、身を以て感じた。

ここで生きる人びとが、どうやったら安定して生きていけるか。何をすればもっと豊かで、安らかな人生を作れるのか。

彼は視線の先に、その未来を見ようとしている。

隣国コールに侵食されていたように、カービングの土地土地の盟主は、自己本位で頼りにならないことが多い。

領主が不在の時期があまりにも長かったせいなのか、ヨシエ様が視察に巡回してきても、傲岸不遜な態度が隠しきれてない。

わたしが初めに体験した、神官を見下す態度も、領主と一緒になければ改められることはなかったらう。

彼らの中では頑固に巫女姫を奉る考えがあり、それ以外の神殿に連なるものは全く見えていない。

歌姫、という存在もあってないようなものだ。巫女姫にならなかった歌姫など、その辺の吟遊詩人と同じくらいの考えが蔓延して、辟易した。

初め、民を緊張させないように、となるべく薄い警護で行ったとしていたわたしは、それでは神殿自体が軽く見られるからダメだ、と厳しく諫められた。

不満だったけど盟主たちに面会するたびに、そういうことが分かった。

女神の加護のない土地。

古くは建国より前からあるエチエア神殿を領内に持ちながら、たった20年の領主不在と、役に立たない領主代理のせいで、女神信仰

自体が廃れてしまっていた。

だというのに、巫女姫さえこの地に迎えれば、その存在だけで悩まされている地震が抑えられると思っていたことが、わかった。

そんなわけがない。

民を歌わせるどころか、自然に発生する感情のもった歌を禁じ、民が手に入れることも、練習することもできな室内管弦楽を押し付けて、女神の加護など得られるわけがない。

ヨシエア様は王宮内でお育ちになったので、その辺の意義はよくわかっていたようで、わたしの領内を回る旅を賛成してくれた。

本心は、どちらかといえば事情が分からなままカーレヘダに送り込まれてきた神官を警戒していたに違いなし。

彼が辺境伯にふさわしいかどうかまるで試験でも課せられているかのように、彼の周りには人材がいな。王宮で育ったのなら、国王や他の辺境伯から協力があってもおかしくないのに。

最初に受けた仕打ちが無かったことになるわけないが、自己本位に要望だけを押し付ける盟主の狸どもを、般若の顔で追い返す姿を見て同情してしまった。

そして。

少しでも民に希望を。

とくに荒廢に巻き込まれた子どもたちを、これ以上たずさわせないように、と目を配っている。

ヨシエア様のそんな姿勢が、部下の官吏たちにも伝わっている。

変化への期待。

そんな重圧を感じさせながらも、ヨシコ様は領民の中に入っていく。

若く美しい、力強い領主。

鬱屈したカービングの雰囲気を持ち切り、鮮烈なヨシコ様の印象。それだけで、領民の心は浮き立つ。そのことを、彼は熟知している。

この人はきっと素晴らしい領主になる。

誇らしうとともに、また、心の中に重石が落ちた。

こんな人と生きていけたら、幸せなのに。
奥方なんて望まない。ただ、彼の領民として、近くで生きていけるだけでも幸せなのに。
そんな簡単な望みさえも、今のわたしには叶えられない。
それが悲しかった。

春の日の祭りの晩餐のために、祝福は日が陰るころに終えた。
それでも、何時間も、歌い続けたので疲労困憊。

出ちなくていい声は出したくなくらい、疲れていた。

それでも、主賓である晩餐会には出なうといけなう。

帰る馬車で少しだけ眠れるだろうか。そんなことを思いながら、頭からシヨールを被った。

きつと酷い顔色のはず。

顔色を隠すのと、喉を温めて守るために目と鼻を覆い、顔を隠す。
これで少し眠れば、だいぶ回復する。

控えの天幕を出ると、ヨシヨア様がちょっとしていた。

「大丈夫か？。アリヒッテヤー。」

大丈夫です。少し休めば。

声を出さずに、大きく頷いた。

お疲れのようです。と侍女のマーガレットが代わりに答えてくれた。

いぬんなおらね、今は話したくはないのです。

目シエア様は眉を寄せて何か考えているものだったが、一緒に馬車までついてきた。

「一緒に馬車に乗るつもり？」

「いつも愛馬で来られるのに？」

「わたしも馬車で帰ることにするよ。」

えー。せっかく寝たかったのに。

でも、お断りもできないうので、す、と、手で先に乗るものに合図した。

「話すのも辛いくらい、疲れた？」

すみません、そんなんです。

シヨールの下で苦笑しながら、頷いた。

「そうだね、わたしも疲れたよ。歌も体力がいるものなんだな。」

そんなですよ。体力も気力も要ります。だから、夜会は無しでも願っています。

なんて、そんなことできないうちね。

ああ、これからまた、あのオルセーへ卿夫妻と会うことを考えると、気が滅入る。

去年のことを思い出すわ。

また、演奏することになった時のために、体力を回復させなきゃ。

シヨールを深く被り、前に座るヨシコア様に見えないうちに、目を瞑る。

こんな時に寝るのは、ちょっと失礼だけど、目を瞑るだけなら。

「マーガレット、席を代わってくれ。」

あ、いついつしてた。

ヨシコア様が侍女のマーガレットと代わって、横に座った。

すぐに肩を引ち寄せられて、頭をヨシコア様の肩に凭れさせる。

「うはらゝ、眠るぅらゝ。」

温かい。

眠気に勝てず、そのまゝ寝入ってしまった。

夢を見た。

若い女の子たちがはしゃぐ声。

前日に誘われた夜会の話が、とんとんと聞えていた。

多分あれは、アリシア様。

そして彼女の仲の良い友人たち。

誰に夜会に誘われた、ダンスはとつた。お酒を飲み過ぎて、酔ってしまい、ぶらついたところを、どこかの貴公子が支えてくれた。昨晚の夜会はどんなドレスを用意した。どこかの令息が贈ってくれたのだ。

そんな話を、いつやってシヨールにくるまりながら聞いていた昔、の夢。

何年か前もいつやって、祝福の歌を歌いすぎて、喉を守るためにシヨールに身を包み、馬車で眠っていた。
あれは、何かの巡業の時だろうか。

ヨシユア＝ヴァン＝カーピング様、という名前を聞いたのは、多分その時。

あんなに素敵なる人を初めて見たわ。夢見心地で言っていたアリシア様の言葉が離れなかった。

辺境伯夫人なんて素敵じゃない。あら、わたしはやだわ。辺境なんて。いくら身分が高くでも王都にいらなくなるじゃない。領地に行かなければいいのよ。わたしだったら王都のタウンハウスに一年中いるわ。劇場さえろくになり田舎は退屈なもの、きこえ。

侮蔑のこもったそんな会話を呆れながら聞いていた。

沢山の貴公子にダンスに誘われているアリシア様たち。歌姫でありながら、彼女たちは社交をしていた。

そんな歌姫がいる中で、わたしはひたすら歌を歌い続けた。

歌姫は夜会でも人気だ。

土地の安寧を祈り、人々に励ましを与える歌姫と出会うには、誰かからの紹介が、社交場である夜会や茶会で出会うしかない。

そこに出るのにはドレスも宝飾品も、美貌も教養も必要だった。

そして、エスコートの相手も。

何一つ手に入らなかった。

それに、歌姫の仕事は社交ではなく、祝福だと思っていたから。

どうして彼女たちは、歌い続けても、美しい声を保てるのだろう。

夜会に出られるほどの体力が残せるのだろう。

いいな。

歌姫の仕事をして、軽やかに夜会に出る彼女たちが羨ましかった。

歌の才能も、音楽の才能も、女性としての魅力も。

2番手がいるから、頂点がいる。ひれ伏すような才能を前に、傳く存在がいるから、頂点が輝く。

それでいいと、ずっと思っていたけど。

恋だけは、2番手だと意味がない。

体を揺り起こされ、目が覚めた。

「大丈夫か？城に着いた。歩けるかい？」

どうやら夢を見るくらいぐっすりと眠ってしまっていた。

ずっと、支えてくださっていたのかしら。

また、こんなことして。

わたしも、周りの人も誤解をさせる真似をする。

うん、と咳払いをした。

少し喉が動く。回復したようだ。

「ありがとうございます。」

ああ、声がガラガラ。

喉も強くなりのよね、私。

ロメリア様は長時間歌っても、喉を保てるのに。

こんなに歌姫の才能がないのに、よく10年も続けられたわ。

「疲れているから、休んでほしいんだが。すまなし。晚餐には出てくれないか？」

「はい。大丈夫です。」

ヨシコア様がエスコートして、馬車を降りた。
そのおま、部屋までエスコートするらしい。腕を離してくれない。

おつちよこと、ゆづくりも願ひします。

足の長さが違うのです。

ただでさえ疲れていて、足が重いの、ヨシコア様の歩幅について
行くのがやっ。無言でついて行く。

わたしの離れまでついて、やっと解放された。

「アリエッテヤ。」

呼ばれて顔を上げると、に、と、微笑まれた。

「良かった。少し顔色が良くなった。」

ゆづりと酷い顔色をしてたんですね。

自覚はあります。

巡業の時は、夜は大概そうだったので。

「あの髪飾りをつけてきてほしい。ネックレスも。」

あー。そういえばー。わたしの髪飾り返してもらったの忘れてたー。

まだ返してもらってないから、どっちみち、先日ヨシコア様から寄
付してもらったものしかない。

「今夜は、一度だけわたしと交ハスを。」

ええー。

シヨールの中で囁をひそめると、目シヨール様が、くく、と笑った。

苦手だって言ってるのに。

夜会で睡ったことがなうって知ってるくせに。

「大丈夫。わたしに任せておいて。」

「・・・足、踏まれますよ。」

おつ淑女の仮面もつけられず、ハスと言り返した。

「楽しみにしてるからね。」

何だか、強引ねー。

こんな人だった？

去年なら、主賓であつてもすぐに休ませてくれそつたのに。

疲れたよー。秘蔵のチヨロトでも食くなきゃ、やっつけられなう
！

38 振らないで！振らないで！

オルセイへ伯爵夫妻は相変わらずの面の厚さだった。

春の日の祭りの後の、お城の晩餐会を前に、わたしから祝福を授けてほしいと言い出した。

ヨシエア様は今日は疲れているので、と断っていたが、神殿は等しく祝福を授けるもの。と頑張って歌った。

ヨシエア様も一緒に歌ってくれて、その場にいる人、全員に言祝ぎをした。

去年までは祝福の歌もなかったのに。

まさか、オルセイへ領では祝福の儀式もなうとかじゃありませんかね。

今夜は楽団が用意されていたので、そちらは平気だった。

オルセイへ伯爵たちが言い出したのは、巫女姫巡業のこと。

聖歌隊に、娘のカミラ様を加えてほしいと。

聖歌隊は神殿の領域だが、他の地域を跨ぐとなると、わたしの一存では決められなくなる。

ヨシエア様を見ると深く考えているようで、感情の見えないうで、話を聞いていた。

基本、神殿は領に一つはある。領主はその神殿を保護する立場にある。

中央神殿は各領主の要請を受けて、巡業を行う。

今回は巫女姫巡業をきっかけにして、姿を消していたカービィの聖歌隊を復活させたが、篤信の厚い領では、聖歌隊は常時あり、人々に祝福を授けている。

そこに加わることに、資格はいらない。どんな身分でも等しく、祝福を授けることができる。

だが、その世話役は領主やそれに匹敵する者が行うことが普通のはず。

神殿に神官を置いている数の方が少ないのだ。

だから、基本、神殿に所属する聖歌隊は領民に限られる。

なぜ、そんなことを言い出したかというと、巫女姫の祝福の儀式にカミツ様も加わりたいたからだ。

賛美歌の儀式の後に行われる、祝福を授ける儀式で、歌姫と一緒に聖歌隊も祝福を授ける。そこに加わりたいたのこと。

よく勘違いされているのだが、この儀式に加わることで、歌姫にスカウトされると思われていたりする。だから歌の訓練をされてない、領主の家族や有力者の家族が無理やりねじ込まれてくることがある。

祝福の儀式で声をかけられて、歌姫になれるなんて事実はないのだけれど。

そして、歌姫の選定を受けられるのは15才までの少女の話。とっくに15を超えたカミツ様が期待することじゃないわ。

歌姫と同じ舞台、とくに巫女姫と並んで立てる機会だから入り込みたいのだらう。

厚がまじい。

全くもって厚がまじい。

「よろしいでしょう？ 神官様。滅多にない機会なのですもの。わたくしたちも巫女姫様から直接、祝福を受けたいのです。」

オルセイ伯爵夫人が高圧的に言った。

きつと、この人、これが普通なんだろうな。別にわたしのことをバカにしてるわけでもなく。

なぜ、わたしに振る？。そして、なぜ助けない？。カービング卿。
あと、祝福の儀式に出たからって、必ず巫女姫から声をかけていただけるとは決まっています。

「申し訳ありません。わたくしには判断できません。」

わぢと困ったように答えて、ロシニア様に委ねた。

めんどくち。

こんな政治的な話、巻き込まないでほしい。疲れる。

目が合ったがわぢとつん、として、ダイヤングラスを回した。

水と入れ替えられてる？！

お代わりした時はだしかにフイ入だったのにー。

嫌がらせ？嫌がらせですか？！

チラッと横目で見ると、ヨシユア様が目を合わせずに、優雅に微笑んでいた。

「神殿からはこちらに巡業の詳しい旅程は、まだ知られてないが、オルセイノ領の神殿では、巫女姫巡業は行われなり、とらついでですか？」

やっと、ヨシユア様が引き取ってくれた。
もしもし。だけど、フイ入の恨みは忘れません。

「え、ええ。」

「巡業くの儀式の要請は？」

「・・・そ、それは、してるわよね、ねえ？」

じつともじつに夫人がオルセイノ卿に水を向けた。

オルセイノ卿もモロモロと、口じまっている。

してないの？呆れた。

してないのに、カービノグくの巡業に乗っかることしてるの？
自分たちだけ。

巫女姫来訪は名誉だけど、とても労力がかかる仕事。

巫女姫と歌姫合わせて15人ほどの淑女とその倍の護衛と世話役の神官、下女など総勢50名は下らなり。

しかも巫女姫は王に匹敵する身分。歌姫や神官、護衛の騎士も高位

の貴族がたくさんいる。

要請した側が用意するのは、当たり前。

だけど、それだけの人数をもてなすのは、財力も知力も、領の体力がいる仕事。

だから、いくら民が喜ぶからと言って、そんなに頻繁には招くことができない。

もちろん、神殿側も被災した地域にそんな負担をかけることはないから、そこは柔軟に対応するけど、今回はそんな慰労のための巡業ではないので、全て領側が負担することになる。

わたしは詳しいのです。無駄に歌姫歴が長いので。

「そうですね。本来なら辺境まで来るなら、途中の神殿にも寄りそうなものですが。ねえ、アリエットィ。」

また。

わたしに振らないでー。

話せたいなら、フイヘくたぢー。

「ええ。そういつにことが多そうですね。途中の宿泊場所となるなら。」

「オルセイへ領でも宿泊の予定が必ずあるはず。それとも違う街道なのかな?」

わぢとらじー。

ギルニガへゼナまでの街道は、一つじゃないー。

「そ、そっだね。どこでも泊りになるか、聞いてなかったな。」

ヨシユア様の口ぶりでは、大方の旅程が出てるわよ。絶対、どこかで泊まるか知ってるんだわ。

当然よね、南東地域の統括してるんだから、途中で事故でもあれば出て行かざるを得ないもの。

はあ、しかし。オルセイへ伯爵の無責任を通り越しての無能ぢや。

もう、わたしには無理。

こんな人がいたから、カービングはあんなに荒れたのね。わたしが来た時は、ほんと上から下まで頼りにならなかったものね。

あの愛憎サスペンスの話聞いてしまっているから、存在自体が気持ち悪い。

あの愛人の話、オルセイへ伯爵夫人は知ってるのかしら？

知っててこんなふうに、ギルニガへゼナ城に一家揃って出てこれるとしたら、どんな精神構造をしているのか、ちょっと、いや、かなり理解できない。

絶対、わたしに話、振らないでよねー。ヨシユア様ー。

「では、そこから調べましょう。中央神殿に問い合わせればすぐに教えてくれますよ。護衛に着くのは近衛が基本ですから、王宮の神殿担当にも。」

ヨシユア様がにっこり笑って言った。

「こちらへの来訪は半年後。今からなら、オルセイへ領の神殿くも予定が組めるかもしれません。せっかくの巡業ですから、領民も祝

福を受けたいでしょう。」

うわ、釘さした。

オルセイ伯爵夫人が、口をパクパクさせてるわ。なに？なに？なにが言いたいの？

「だ、だけど、本当に私たちがお願いするだけでいいのかしら？」

うん？なにが言いたいの？

神殿は賄賂なんか貰わないわよ。

それに道中が一緒だから、時間を空けてもらっただけでしょ。

「もちろんです。叔母様。他でもないオルセイ領の領主が願うのですから、意味があるのです。カービングからも要請の願書以外、出していません。そうでしょう？叔父様。」

えー？それはどっかな。

今回の巡業は、要請以外の力が働いてるはず。

オルセイ伯爵夫人の言葉が物語ってるでしょ。

ん？

今の感じだと、要請の願書はヨシエア様を書いたわけじゃないってこと？だとしたら、なおさら：

いつのまにか料理は下ざーと。

ペース、早くなり？みんなまだ食ぐ終わってないみたいよ。

わたしは食べ終わってるけど。

このデザート、好きなのよね。ちょっと癖のある、木の葉のシキールを使ったババロア。

みんながヨシコア様とオルセイへ伯爵夫妻との会話を興味深そうに聞いているのを見ながら、食事を堪能。

デザートの前に口直しに、まだグラスを持ってロイヤルのつもりで持っていて、水だっということに気づいて。

チッ。

心の中で舌打ちして、口をつけずにそのままグラスを戻す。

子爵のシオポルトと目が合った。一瞬、目を見開いて、ヒヤッと笑った。

あなたの主人、性格悪いですけどー。

「でも、でも、わたしも賛美歌をちゃんと歌えるものになりたいのです。巫女姫様がいらっしやるなら、なおさらー。」

カミナ様が突然、大きな声で言った。

練習すれば？

楽譜は読めるし、発音の練習も教師を雇えばいいじゃない。

そもそも、伯爵の令嬢は神殿の保護者たる地位。その上、いかにお金に注ぎ込む立場のはず。

そういうことは、社交シースへに王都でやることも。そのために、
議会開会中は国中から人が集まっているじゃないの。

「ああ、そういうことでしたか。確かに我が領の神官は、素晴らし
い指導者ですが。彼女の卓越した指導力がなければ、我が領では楽
譜も読めないものが多かったですからね。」

振らないで！振らないで！絶対、振らないで！

ババロアが美味しくなくなる！

「そうなの！エチユア神殿があればと素晴らしく、復活したんです
もの！私たちにも教えてもらいたいわ！」

オルセイ伯爵夫人が大きな声で言った。
あなた、嫌味が通じないのね。あなたの偏った趣味のせいで、楽譜
も読めない領民が多いってことなのよ。

「では、ごつしましよ。オルセイ領の神殿から人を寄越しても
らえれば、エチユア神殿の聖歌隊で、一緒に練習してもらいましょ
う。」

「はい！わたくしが参ります。」

カミナ様が元氣よく名乗りを上げた。

「せっかく我が優秀な神官が育てた聖歌隊で練習するのです。あな
ただけではもったいない。他に何人が一緒に来てくださり。」

めんどくちです。

第一、最近、聖歌隊の練習を見ていません。

行軍演技と一緒に頼りになる人材が育ってきたので、わたしの出番は減らしてきている。

いつまでも腰掛けのわたしに頼っていたら、自立できないうもの。

あ、もしかして、分かって言ってる？

「でも、もし、巫女姫の巡業がオルセイへ領でなければ？！その時は、せっかく練習したものが無駄になってしまつわ！」

オルセイへ伯爵夫人が叫んだ。

「無駄にはならないでしょう。歌は民を励ますもの。巫女姫に捧げるためだけに練習するのではないのだ、とこちらの神宮殿もいつも言っておられる。」

にこ、と、ヨシア様が微笑みかけた。

わかりましたよ！引き取ればいいんですよ！

もう食べ終わつたし！

「私は女神が民と一緒にあって楽しみたいという意思を伝えるために、賛美歌を教えています。それだけの簡単なことしかできません。それでもよければ。」

わたしは精一杯、謙虚に言った。

「ふん。よろしくてよ。巫女姫様と同じ歌を歌いたいのです。神官様は、巫女姫様と同じ歌を歌えるのでしょつ。」

ええ、まあ。同期ですので。

だけど楽譜とおります。

けど、なんでそんな上から？

巫女姫様、巫女姫様って、巫女姫は歌姫の中から選ばれて、百人の歌姫を代表する存在。

巫女姫以外の歌姫たちを軽く見ていたら、次代の巫女姫に失礼なことをやりかねない。

この人たちのやりたいことが、理解できないなあ。

晚餐が終わって、ダンスの時間が始まった。

エシエア様はオルセイ卿以外の来賓たちに囲まれて、中々、ダンスを誘ってにならないので、壁の花かなあ、と、思っていたら、レオポルトが近づいてきた。

「ラインをお持ちしましよつか？ 神官様。」

お願いしますー。

「と言いたらいいんですが。思つかるといっ当主にゆられそのなので。」

「

「・・・性格、悪くともあります。この領民たちは。誰が訓練したんでしょ。」

レオポルトが、わはははーと大笑いした。食べ物への恨みほど怖くも
のはないんだからー。

レオポルトは、あの宿屋行き、決定。

「神官様が、飲み過ぎるから。」

「それとこれとは別。晚餐でも酒を出さならなんて、酷いわー。」

他の人には出さなくて、意地悪なものー。

主賓に失礼でしょー。

本気でそんなふうに怒ってるのに、レオポルトは笑っばかり。

「どうやったら二人の人の顔色を青くできるの?」

「神官様は食べ物のことだと、目の色が変わるなあ。」

「みんな、そうでしょ? わたしだって食ら意地はつきりじゃないわ。だけど、今日のは酷い。エチエア神殿に対する冒瀆布告よ。」

「おお、怖い。巫女姫巡業の時は樽を用意しなきゃ。」

「ええ、そうして。一つじゃ足りないわ。わたしが半分、飲むんだから。」

「神官様ならやりかねない。全く、その小ぢい体のどっくに溜えるんだか。」

いくらなんでも、樽の半分は飲めないうわよ。だけど、今日はガツガツ飲みたら気分。疲れてるのに、散々だ。

「それで、今日はタヘスはお誘いできるんですか?」

あら、誘ってくれるの?。

「足、踏んじやないわよ?。」

「構いませんよ。神官様ほど小ぢかったら、痛くもない。それにあなたなら、むしろ光栄です。」

レオポルトが、にっこり笑った。

二人の前の夜会でちらっと見たけど、彼はタヘスが上手。

「婦人を優雅にリードしてた。

「誘っなしオールド。わたしが先に申し込んだ。」

ヨシコア様が手ぶくろをはめながら、近づいてきた。

なんで、いつやってひと睨みで、萎縮させられるのかしら。身長？

「かしこまりました。では、当主の次にも願ひします。」

「ダメだ。彼女は今日は疲れている。これが終わったら、部屋まで送る。」

ぼつたり。

ヨシコア様の一歩下がったところで、オールドが口笛を吹く真似をした。

指揮官タウスは存外とヨシコア様に気安し。信頼関係があるからかしら。

「待たせたね、アリエッティ。」

ニクリ、と微笑まれ、深く礼をされた。

この落差。

わちと勘違いさせようとしているのかしら。

ヨシコア様の手を取り、タウスの韓に入って、ため息が出た。

ぐ、と腰を引寄せられる。

「レオポルトと踊りたかった?。」

エシエ様が重ねられた右手をひく。

1 . 2 . 3 . 1 . 2 . 3 と足元に集中してると、エシエ様が聞いてきた。

話しかけなうでー。

足、踏んじやうー。

足元から目を逸らさず、首を振った。

「・・・じゃあ、フイの二つを怒ってる?。」

顔をあげずに、グルルル、と唸った。

「う、くくく。」

笑ったエシエ様のステップが乱れて、やっぱり踏んでしまった。

もっゝわたしのせいじゃないんだからー。

それでも、何事もなかったかのうちに、エシエ様はさう、と重ねている右手をひいた。

「あなたが反省しないからだ。」

反省してますー。

ちゃんと一日酔いの罰を受けました。

でも、今夜は主賓ですよ。

ちっと、敬うべきですよ。

ほんと、失礼なんだから。この城の人たちは。

「せつかくの美味しいお料理でしたのに。人の楽しみを奪うことは罪悪です。いたずらを仕掛けた人は、きつと女神の加護を失ってしまいます。」

1・2・3・と再び、ステップに集中しながら、言い返した。

ふふふとヨシユア様が笑う。

「そついつのを、披露してほしかったのに。」

やっぱり、わたしを矢面に立たせようとしてたのね。
勘弁してよ。

「無駄な骨は折りたくありません。」

あはははーと堪え切れないうちにヨシユア様が大笑いした。

「本当に、あなたの才能には完敗だよ。あなたの頭の良きときたらー。さすが、神官長の秘蔵っ子だー。」

何？その二つ名。

この前、ロメリア様もおっしゃってたけど。

そんなに大事にされた覚えはないです。

それなら今頃、わたしが巫女姫でしょ。

才能がないから、巫女姫になれないし、誰にも選ばれなかった。

ここにゐるのがその証拠。

誰も行きだがらない辺境に恥をかくのを分かっているで寄越された。

そんなお人好し、わたしぐらいだつて、神官長様も分かっているんだ。

たまたま、王妃様の目に止まるような巨新しいことをしたからって、それだつて自分が考えたことじゃない。作曲だつて、セシリアの功績があつてこそだ。

わたしはいつも先陣を切つて花開くような才能はない。

そんな欲もないから、そのことに不満なんてなかったのに。

人を押し退けてまでも、掴み取らない。

それは自分の美德だと思つたのに。

それがこんなにも、自分を縛るものなんて思いもしなかった。

才能の塊のようなカービング伯爵の隣には、歌の才能の頂点に立つ巫女姫こそ、お似合う。

いくらエシエ様が、わたしを気に入っているのだとしても、巫女姫に選ばれなかったわたしが、本物の巫女姫を押しつけて居座るこ

となしできなり。

それほどの根性が、わたしにはない。

ヨシユア様が美しく微笑みながら、音楽に合わせて、わたしの肩を
押して体を放す。

重ねた左手は繋いだまま。

そのまま、強く引き寄せられて、後ろから抱きしめるように、手を
交差して、体を揺らす。

ダンスの上級なテクニック。

ヨシユア様の胸が、わたしの肩を包む。

「上手だ。」

上手なのはあなたのリードです。

今度は後ろから胸で肩を押され、また、体を放す。

繋いだ左手を引き寄せて、元の姿勢に戻った。

ほんとに上手。

いつやって、アリシア様とも夜会で踊ったんだろうか。

開けてはしけなり蓋がまた、開きそつになり、また小ぢく息を吐
いた。

音楽が終わって、お互い、礼をして返す。
初めての夜会。初めてのダンス。
みんな楽しく踊れるなんて思ひもしなかった。

ちっと、楽しんで思ひ出になる。

「ありがとうございました。」
みんな思ひ出をくれて。

部屋まで送ってくれるロシコア様に、心からお礼を言った。

「いちいち、ありがとうございました。とても楽しい夜だった。」

ロシロシ、と庭の石畳に足音が響く。

結局、わたしの部屋は離れのまま。

再三に渡って城の中に部屋を、とロシコア様に言われている。
四六時中、ピアノや歌を奏でているわたしは、今まで音楽のなかったこの城の中では気を使う。
気兼ねなく歌えるから、と離れから動かないことに決めていた。

最初に、領宰と執事に言われたことが未だに引っかかっている。

ここは巫女姫様を迎えるために設えた城。巫女姫の歌が必要なのだ。
と。

女神の音楽ではなく、巫女姫の音楽。

巫女姫がそれほどの影響力と尊敬を集めていることを、改めて感じた。

わたしには違和感のある考えだが、この土地の人々がそれを切望しているのならそれを頭から否定したりしない。

だって、それが彼らの心の支えなのだ。

柔軟さに欠けるその考えは、どこかで歪んでしまったことが過去が証明しているけど、それでも、巫女姫という光の頂点のみを切望することは人の業だろう。

唯一にしがみつきたいくらい、この土地は希望を失っていたのだ。そのことが悲しくて、彼らの盲目的な巫女姫信仰を真っ向から否定したくなかった。

わたしが城の中でピアノを弾かないのは、その象徴。
今でもわたしは大広間のピアノを弾いたことがない。

ここに迎えられる音の光は巫女姫のものでなければならない。

ヨシユア様の代わりにこの城を守っていた領宰と執事長は、わたしにそう言ったのだ。

あの時の非礼を、何度となく謝られているが、わたしは許す気は無い。

何も知らない民ならともかく、導く立場の彼らがろくに勉強もせず、思い込みだけで動いた結果を受け止めるべきだ。

だが、わたしの大事な妹である歌姫たちを粗雑に扱うことだけは我慢ならない。

神官長様から何度も、もう十分だから王都へ戻っておいでと言われているが、ここで巡業を放り出してしまえば、カービングの民のために何日もかけてやってくる歌姫たちが可哀想な目にあいそうで。

いくらエシエ様が理解があると言っても限界がある。幸い、巡業の準備について、一切をわたしに従うようにとの命令が出ている。女主人のいならぬ城で、わたしが出来る限り采配を振るうことができる。

今夜も月が出ている。

去年はこの月を見て、思わず郷愁を感じて涙がこぼれた。今は、違う感情が心を揺らしてまた涙が溢れてしまいそうで。

離れの前で、エシエ様の足が止まった。

わたしは、す、とエシエ様から腕を外す。

エスコートはここまで。

次の春の日の祭りが、彼からエスコートを受ける最後になるだろう。次の春で4回目の春の日。

5回目の春の始まりには巫女姫アリシア様が降嫁されているはずだ。

来年の春の日まで、わたしはわたしでいられるだろうか。

アリシア様が来られるその日まで、いつやっと思っでいられるだろうか。

そう思いながら離れの階段に向かおうとした。

「アリエッティ。」

見たくないのに。

ヨシエ様がわたしを呼んだ。月の光の中に立つ彼は間違いなく、美しい。

「わたしに、祝福をくれないか。」

うなずいて祝福の歌を歌った。

静かな夜の庭の静寂を切り裂く、わたしの声。

低音が響くわたしの声を、わたしは好きじゃない。

アリシア様のよつに、天から降り注ぐ光のような柔らかく甘い高音に憧れた。純粋無垢な子供のよう。

決して、わたしには手に入らぬ無垢さ。

きっと、アリシア様が選ばれたのは、その無垢な魂を評価されたのだから。

「ヨシコアニザアハニカービング。」

姿勢を正して、彼の名を呼んだ。頭に浮かんだのは、中央神殿の儀式。

「あなたの・・・」

あなたの預かる女神の地に、安寧と光を届けよう。女神の民に幸福をもたらすなら、あなたは栄光の加護を受けるだろう。

神殿の長である神官長や巫女姫が、国王と領主に授ける特別な言祝ぎ。

ヨシコア様は知っているだろうか。

彼がカービングの民を導く光になりますように。心からそう願って言祝ぎをしたかった。

だが、わたしは言葉を変えた。

「あなたに女神の加護がありますように。健やかな日々でありますように。」

一般的な言祝ぎの文句。

わたしには言えない。巫女姫に選ばれなかったわたしには、そんな資格はない。

ヨシコア様が、わたしに近づき肩を撞んだ。大きな手のひらが温かい。

「わたしからも祝福を。あなたに女神の加護を。あなたの幸せがいつまでもここにありましますように。」

そして、額にキスをした。

おやすみ、と小さく言いつて、彼は音楽が奏でられる城へと戻っていった。

4 1 不毛だ

オルセイ／＼伯爵が言い出した、聖歌隊の指導はまだ、思わぬ方向に転がった。

中央神殿に、オルセイ／＼領への巡業を要請したらあつちり／＼承されたらしく、今度は迎え入れの準備を教えてもらいたいと、ヨシユア様とともにオルセイ／＼領に／＼ちちらが出向く／＼とに。

迎え入れの準備って。

そんなの領／＼ことに事情が違つから、カービ／＼グの／＼とが参考になるのかしら。

というか、ヨシユア様はまだ当主になつてから3年目。

オルセイ／＼伯爵は親ほどの年齢になるし、ヨシユア様に代わつてカービ／＼グを20年近く治めていたらしいんだから、教えるを乞つぽつじゃないんじゃないの？

そしてやつぱりわたしも行く／＼とに。

／＼の仕上げの時期に、何が悲しくて他領のために1週間も時間を空けなきゃいけないのか。とほほ。

ほんとはもっと長く滞在してほし／＼って言われてみたいだけと、／＼ちちらも準備諸々、忙しい時期になるから滞在は3日。移動を含めて7日間。

カービ／＼グでわたしの存在も定着してきて、あち／＼ちで歌の指導やら、楽器の修理の指導やらを頼まれてるのに、なんで／＼んな目に合わなきゃいけないのか。

不毛だ。

オルセイノ領には昔からの聖歌隊もあり、楽団も作られていた。
これをお世話しているのは、オルセイノ卿の弟さん。子爵だけど、
オルセイノの中の実務はこの方が担っているを見た。

ちゃんとはしているんだけど、やっぱり巫女姫偏重と貴族第一主義
は変わらず。

その影響で、聖歌隊も楽団の構成員は、爵位のあるものと、それに
見合う有力者の家系のみ。

爵位なし有力者は、どこやら多額の寄付によって参加を許可されて
いるらしく、神殿自体はとても豊か。楽器の手入れや、聖歌隊の制
服も新調されていて美々しいこと。

聖歌隊参加の金銭による選別は、禁止されてますよー。

時代としては二時代前に蔓延った悪い習慣が残っています。統治者
の皆さん、もっと歴史を勉強しましょう。

構成員の基準がそんなだから、みんなの気位が高いこと。
わたし、そんな山、登れません。

聖歌隊も楽団も完璧です。

わたしが教えることはありません。

というと、オルセイノ伯爵夫人は当然と領いた。

だったら、何故呼んだ?!

ヨシア様だけで良かったよね?!

「あなたから教わることはなかったよね。やはり巫女姫様じゃな

いと。」

いやー、巫女姫でも教えることはないわよ。だって楽譜とおりだもん。

「本当に素晴らしいです！もしかして巡業自体も必要ならくらし。完璧です！」

と褒めまくり。それなのに。

「何ですって?!なぜ必要無いのです?!これほど練習したのに！」

「皆さん、すでに音楽の喜びと楽しみを習得していらつしやいますでしょう?。巫女姫巡業がなくとも、この地には音楽が根付いています。ちっと女神はお喜びです。」

にっこり笑って言うてる。

オルセイ、伯爵夫人も聖歌隊も、はあ?。って顔してた。

「音楽は女神が人間の喜びを味わつために教えてくださったもの。巫女姫巡業は不幸にしてその喜びを失った場所に、種を撒き、歌姫とともに育てる機会です。これほどの完成度があるのなら、歌姫たちの手助けは不要だと思います。」

これは最高の褒め言葉なんだけど。

さすが巫女姫至上主義。伯爵夫人は怒りだしちゃった。

教義を正しく理解してないといつたなるのねー。

ちゃんと本読んで。

神官たちはいちいち教えて回らないわよ。

だってこれはこの国の基本でしょ?! 教育は統治者の仕事。

音楽の価値がわからないあなたに、指導なんてしてもらわなければ良かったなんて。

よくまあ、巫女姫の候補にまでなったわたしに言えるものね。

音楽の価値って何よ?

わたしは神官だから、民の励まし以外、音楽に価値はないのよ。どれだけ難しい技法でも、それが伝わらなかつたら意味はないんです――!

ヨシユア様がこの場にいないから言いたい放題ね。

ヨシユア様は、オルセイ卿に巫女姫一行の迎え入れについで伝授。

なぜか、カミツ様もそちら。

指導を請ったのはあなたですよ――!?

はあ、疲れる。

結局、若くて見目好い、王都でも評判の若き辺境伯を見せ回したかっただけなんですよ?!

国王陛下にも覚えめでたし国一の美青年は、私どもが愚子のよつに育てましたのよ、だから、私たちの願いならなんでも聞いてくれ

るの、って言ったかったのよね。って、誰に?!

iiiは王都じゃならから、主要貴族に見せつけることはできないうし、
見せつけるとしても麾下の貴族とその周辺の領だけ。

不毛だ。

わたしのことが気に入らない、巫女姫しかいらないうて言い続けて
何になるんだろっ?

巫女姫にしか嫌らなうならなんで神官を呼んだんだろ?

いろんな矛盾があるなー。

夜は晩餐会が開かれたが、わたしは晩餐だけいただいて、祝福を受け
に来た領民のところに。

iiiはまだ、祝福の習慣があるのね。

気になったのは、聖歌隊や楽隊の構成員の裕福さに比べて、領民の
格好が貧しく、元気がないこと。

うん。推して図るべし。

そのうち災害に見舞われるわよ。と思っいたら、iii、何年も水
害に悩まされているとのこと。

女神は、民が音楽の喜びを失った土地は、加護を失うと言われた。
これは、神話のようだけど、あながち嘘ではないのです。

実際に、カービヘダ領は20年以上頻発していた地震がiii2年起

ちていなり。

歌がなまると、災害が止まった。

これには疑義がありまだ研究中だけど、わたしが歌姫として巡業で回っていると、本当なんだな—と思える事象がたくさんある。

だから、わたしは信じている。

42 きな裏いわね

祝福を授けるため、オルセイへの城に隣接する神殿に赴くと、意外な出会いがあった。

「アリエッテ様、覚えていらっしゃるでしょうか？私の事。」

確か、中央神殿の人寮でも世話した子だわ。

この領の出身ではなかったはず。結婚したのかしら？

「私は、リリス＝バネ＝アヘン＝アと申します。嫁ぐ前はリリス＝ドウオ＝ガルボでござります。昨年まで歌姫をしておりました。」

そっそっ、リリス。

次の候補でも充分だと思っただけで、婚約者がいたから候補を引
ち受けるかしら？と思っただのよね。

やっぱり結婚したのね。

歌姫がちゃんというのに、何でわたしが呼ばれたの？って聞い
たら、リリスは苦笑して、巫女姫への篤信が厚すぎて。と言った。

やっぱり理解できない。

きちんと修行した歌姫は領にいるのに、何で大事にならんだろっ。

しかも、聖歌隊で2軍になるのだとか。

もったいないー。

「懐かしいわ。こんなところで歌姫と会えるなんて、嬉しい。」

「私も。エチエア神殿の神官様がいらつしやると聞いて、夫を説得してここまで来たんですの。どうしても一目、アリエツト様にも会いたくて。」

あら、私がエチエアに来たこと、知ってたのね。

「はい。歌姫で知らないものはありません。新年の祭りの天覧演奏も、それはもう有名で。私も見たかったです。」

見せてあげたいけど、次回は巫女姫巡業の秋になるだろう。
しかもギルニガハゼナはその時、迎え入れた歌姫一行と、領地中から集まった人で溢れかえり、おそらく泊まるどころが確保できない。

245

「今年の春の日の祭りでも、ギルニガハゼナでは演奏したのよ。カービエダ卿もお気に入りのもつだし、次の春の日もするのではなかじら。もし、良ければその時に。」

はい。とりりスは嬉しそうに答えた。

「トヤーバは元気?」

とりりスが歌姫をやめたのは今年の春の日を過ぎてから。

本当につい最近まで、歌姫だったのだ。

それならば、神殿の中の雰囲気も良く知っているだろう。

辞めてしまったのは、巫女姫候補に選ばれなかったから。
彼女は18なのだから、あと1年くらいは待てるはずなのだけど、
婚約者がいたので歌姫を辞め、結婚したのだそう。
ちよつと長い年頃だし、候補に選ばれないうちならそつらつらになる
わよね。

「ティーバ様は、今は神殿にいられていません。」
「あら。どうしたの？もしかして、赤ちゃんできたのかしら？」

今回の新年は忙しくて、連絡も取れなかった。
そもそも、結婚した彼女にとつやったら会えるのか、よくわからな
い。
手紙ならいつも神殿に送っていたから。

リリスはティーバの妊娠は否定して、暗い顔をした。

ティーバは昨年の春の日の祭りの後から来なくなってしまったと。

歌唱の指導者を失ってしまって、歌姫同士で指導するしかないが、
本来ならば采配を振るつ巫女姫様が、指導に熱心ではなく、新しく
入った歌姫に神官はかかりきりになり、歌唱の指導者を歌姫同士が
持ち回るのだとか。

前代未聞だ。

歌姫の内部のことは、あまり外部に漏れなう。
だから、中で異常が起つていても分りにくいのだが、今回は気
づいてしまったそう。

その方法では、絶対に歌唱力が落ちる。

指導者不足は、他の技術にもあり、器楽演奏は神官がいるため、まだ一定を保っているが、楽器の修理や調律は個人的に教えるを請わなければ、見てくれる人がいない。

壊滅的なのは作曲だぞつだ。

「アリエツテゝ様たちのように、熱心に作曲される方がおらず、巫女姫様も新しい曲を求められません。新しい巫女姫様の曲は、今回の1曲のみでしょう。」

巫女姫はその代に何曲かの、新曲を女神に捧げる。

巫女姫だけでなく、歌姫も作る。

先代の時は半年に一度、作曲の募集があり、選ばれた曲は巡業で披露された。

わたしが要望したカービングで歌われる花の歌は、神殿では歌われたことはなかったと思うので、合唱用に編曲し、新曲として捧げてもらえば、巡業で歌ってもらえるのではないかしらと思い、要望を出したのだが、これでは望みが薄い。

良くない知らせにちょつとがっかりした。これだけは歌ってほしかったのに。

テイベが神殿を去ったことによつて、中央神殿にアリエツ様と巫女姫を競った元歌姫は居なくなった。

なぜ、これほど人がいなくなったのだらう。

リリスが気になることを言い出した。

巫女姫の候補として神殿に残る殆どが、巫女姫選定後、外国へ嫁ぐ
ことになっている、と。

「私も打診されました。ですが、婚約者がおりましたので、お断り
しました。アリスア巫女姫選定後、すぐのことです。」

それから2年を過ぎても候補にはなれなかった。もしかして、とり
リスは思ったのだそつだ。

「婚約者を捨ててでも外国へ行くと約束したものだけが、巫女姫候
補になれたのではないかと。私よりもずっと年若の、選定に選ば
れない年の子も、声がかかっています。私たちにはセシリア様の
ような高位の方はいらっしやしませんので、どのもつな方までか、
わかりませんが下位伯爵まではほとんど似たような。平民はおしま
せん。」

そして、昨今、歌姫として選出されるものには平民はいらぬとい
と。

「実は、私の妹も歌姫に憧れて、今年選定を受けようとしているの
です。私は必死に止めておりますが、本人は受けるだけでも返けた
いと。しかし、選出され、神殿に入ってしまうと、私たちとはあま
り会えません。その間に、話を持ちかけられ外国へ行くことに承
ってもらつたのではないかと、心配で。両親にはそれとなく話してお
りますが、アリエッテ様ほど勤良く考えてはならぬのです。当然
ですが・・・」

わたしが思いついたのは、神殿が歌姫を使って、独自に外交をしているのではないかと。と。と。

アリシア様の巡業の予定に、外国があるのだそつだ。国内で大きな巡業は今回が初めてだ。と。と。に。

外国からの寄付が増え続けているのは、わたしがいた時からそつだ。た。た。寄付に対する見返りはないが、それを歌姫を花嫁として出す。と。と。にしておけば。

淑女教育の最高峰と言われる歌姫の人気は、国外でも高い。

優雅で、美しい音楽を奏でる歌姫は引く手数多だが、結婚は歌姫が了承すれば、の話。

嫌がっているものを縁付かせることはしない。
だから、歌姫を欲しがる地方領主たちは必死に口説き落とすのだ。
それも、伝手を得ず出会うチャンスは夜会ぐらいしかない。

神殿へ紹介をお願いするのは、あくまで紹介のみ、だ。
そこから先はお互いの気持ちのあるところが、成立する。に。は普通
の婚姻となんら変わりはない。

その気持ちが純粋な恋愛感情なのか、お互いの身分と家柄を考慮して
なのかは、それぞれの問題だ。

だが、そこは神殿の介入するところではない。神殿は令嬢を預かる
立場として、紹介しているだけだ。

一応親代わりとして、若い女子を預かる立場から、双方の身元をし
っかり見ている。その辺りは、夜会での出会いや年若の友人同士の

紹介よりもよほどしつかりしてゐるはず。

だから、神殿の紹介は信頼があるのだ。

これは神殿の本来の仕事ではない。成り立ち上、避けられない仕組みではあると思つけど。

「わたしのところにも、歌姫選出の打診が来ているわ。」

巫女姫巡業後、私はその作業に入るつもりだったが、こんなきな真話を聞いて、推薦することはできなう。

「神官長様に、お手紙を出します。」

リリスがホッとした顔をした。

「ありがとうございます。私はこの世話役でもありませんので、どうしようかと悩んでおりました。わたくしはこの村に嫁いできた身。実家は隣の領なのです。ですので、余計、口を出しにくく。」

「そうね。でも、南東地域統括のエチユア神殿なら出せるかもしれないわ。それにわたしは中央からの派遣になっているもの。」

神殿の格はその領の実力を反映することが多い。カービング領は今とはもかく昔から王国の要として重要な立ち位置だったので、エチユア神殿は王国の中でも古く格式のある神殿だ。

「はい。それと、もう一つ、気になる噂が。アリエッティ様に関わるんです。」

その時、私たちに近づく足音がした。

43 巻き込まれてる?!

神殿で話し込んでいた私たちに近づいてきたのは、騎士のナーガだった。

「ここにいらっしゃるか、神官様。」

ナーガが笑って、ふわっと明るくなる気がする。男らしいのに人懐っこい。

「ご歓談中、失礼いたします。美しいお嬢様。我が主人が神官様をお呼びです。」

リリスの顔がぼーとなってる。

大丈夫?! あなた、既婚者よ?.

「こちらはアヘドリア男爵夫人です。ナーガ。何の御用かしら?。」

ナーガはカービングの手下の子爵家。優雅な姿勢で、名乗ってから、わたしに言った。

「そろそろ夜が更けてきたので、お部屋にお戻りを、と。ご当主がお送りしますので、一度大広間に来てもらえませんか?。」

「彼女は歌姫の後輩なの。偶然ここでも会ったのです。もう少しお話がしたいわ。一人で帰れますので、どこそ舞踏会をお楽しみくだらうと伝えて。」

「お話はけっこうですが、無理だと断りますよ。」

ニヤニヤとナーガがわたしを見た。

最近、ヨシコア様のわたしへの干渉が度を越していて、正直困る。

「あと少し、お話をしたいの。一人ではダメだというのは、部屋
くの Eskort はあなたにも願ひします。そこ伝えておてくださり。
あなたが戻るまでここに待てるから。」

ナーガが出て行ってから、リリスが夢見るような顔で言った。

「ステキな人ですねえ。」

大丈夫ですかー？。あなたは既婚者ですよ。そして、ナーガもー。

「カービング領の騎士様たちは本当に素敵です。最近では、近衛騎
士様より人気だとか。あの天覧演奏も本当に凛々しかつたと、それ
はもう噂で。さすが、アリエッテ様ですわー！」

最後のさすが、が意味がわかりません。

確かに天覧演奏は美々しかつたですが、衣装で3割増しです。
中身はむち苦しいおっさんだったりするのよー。

確かに、カービングの領兵たちは近衛騎士だつたヨシコア様にかな
り鍛えられたみたいだけど。と言つと。

「ああ、カービング伯爵は近衛騎士の方でしたものね。わたくしは

今回の舞踏会にも招待されておりませんので、未だ拝見したことは
いじりませんが。大変な美青年でいらつしゃるとか・・・アリシア
様の婚約者とか。」

「確かにとてもお美しいですし、大変優秀な統治者の資質があると思
います。まだお若いですがね。そして巫女姫様の婚約者とい
うのも、本当でしょうね。」

「はい。わたくしも先日の社交シィズンに、カービング伯爵に早く
嫁ぎたいと言われたと耳にしました。・・・言うにいくいとなので
すが、わたくしが辞めることを決意した噂でもあるのです。正直、
アリシア様の様子は、その、不誠実だと思って。貴公子の方々に
も、わたくしたち歌姫にも。カービング伯爵にも。」

ああー。その言葉で歌姫たちのアリシア様に対する感想がわがっち
やった。

アリシア様は歌姫たちの人望を失ってるのね。
百人の歌姫を束ねる長としては致命的。

巫女姫に憧れて歌姫になったのに、これじゃやる気もなくなるわ。
可哀相に。

「あんなに誇らしかった歌姫が、なんだが悲しいのです。その中で
アリエツテ様の活躍は嬉しゅうございました。」

リリスが微笑んだ。そう思ってもらえたら良かった。
ものつすしく苦勞したと思つけど、あなたの言葉で報われた気分
です。

「そう言ってもらえたら報われるわ。オルセイ卿たちには不評だったから。」

「わかります。私も散々、嫌味を言われますので。」

クスクスとりリスが笑う。

ほんと、巫女姫至上主義も疲れるわよねー。と笑うと、

「ですが、あなた様の功績はすぐに認められると思います。天覧演奏もそうですが、その。」

言葉を切って、りリスは探るように聞いた。

「アリエッテ様は、キリアム様と親しくされていたのですか？」

ん?キリアム様?

「いいえ。個人的にお話したこととはほとんどないわ。器楽演奏を一緒にしたことは何度もあるけど。」

やはり、とため息を吐く。

やだ。

わたしに関わることで、もしかしてキリアム様に関係あるの?
アリシア様のお取り巻きだから、もっこれ以上関わりたくないんだけど。

「天覧演奏のあと、アリエッテ様がキリアム様と婚約されるといつ話があつて。ティーン様と仲のよろしかったアリエッテ様が、おかしいと思つたのです。ティーン様は事あることにキリアム様に

反発されてしまったので。アリシア様が練習に入られなうことを、ト
ーバ様はいつも怒っていらして、キリアム様が不敬だと叱責され
ておりますのを私も見たことがございます。」

それなのに急に私と懇意にしていたから、婚約することになりそつ
だと言ひ出したとか。

巫女姫降嫁のあと、私が王都に戻るのを待っているのだとか。

はあ？

じゃあ、何で私はカービングに行ってるわけ？

「待って。意味がわからない。頭が痛いわ。」

分かるけど、なんとなく分かるけど。

理解したくない。

そこまで神殿が下衆の塊だと思いたくない。

いめかみを抑える。

「・・・行軍曲の功績を取り込みたいのだと。キリアム様は次期神
官長様でいらつしやいますから。」

ああ、言っちゃった。

いやーいやー。

どんどん神官に嫌気がちしてきた。巫女姫巡業のあとに聞いたかつ
たわ。

「・・・キリアム様の次期神官長は決定なの？」

「そつなのだと思います。はっきりした何かはありませんが、リチ

ヤーン神官長様は何もおつしやつちませんし、アリシア様に対する振る舞いはすでにそのような姿勢でつちかますので。」

あ、神官、辞職、決定です。

キリアムニエトニゲトウオーク様。代々神官を輩出している伯爵家の方。神官も歌姫同様、どんな身分からでもできるので、神官の中には貴族は少ない。その中でもゲトウオーク家は一代に一人は神官を輩出しているので、神殿の中では影響力を持つ。実力は伴わなくても。

キリアム様のお父様は何代か前に神官長も務められていた。そのこともあってか、やけに尊大な態度でいい印象はない。

正直、嫌いな方です。尊敬できません。

「王都にも戻りにくくなっちゃったわね。」

思わずため息が出る。

神官をやめ、平民として市井で生きるにしても中央神殿と社交界が近すぎて生きにくい。

私は目立ち過ぎたのだ。

「・・・ずっとエチゴア神殿にいらつしやることはなんでしょうか？」

「巫女姫が降嫁されるのも。神官はいらならでしもの。それに、私とアリシア様の関係はめんどくち過ぎるわ。」

表立って反目してるわけではなく、私はアリシア様の側に立ったことはな

その反対には友人がたくさんいる。

うまくいくはずがない。

私の性格もそれを許さない。

「悲しゅうございます。」

切なく、リリスが呟いた。

「先代の巫女姫様と候補のお姉様方は、私たちの憧れでございました。あれが理想だったのが、今ではわかります。私たちも頑張ればそうなれると信じて、努力したつもりでした。」

私も誇りだった。

ロメリア様やアリシア様に代表される美貌と美言。

天才的な作曲センスをもつ、高位の令嬢のセシリア。

絶対音感と繊細な演奏表現をするローズやティバ。

そのほかの姫もそれぞれに個性的な才能を持っていた。

どの姫も美しく自信に溢れていた。

その中であって埋もれるようにしてだけど、彼女らの仲間であることが誇らしかった。

だが、努力とは違つ何が得体の知れなり力でそれが捻じ曲げられ、失意のまま神殿を去ることになっている。

「私はまだ、神官長様を信じるわ。」

リリスと自分を励ますように言った。

神官長様は何も動じることになり、と言われているが私は信じた。そこにしか縋ることができな。

「私たちの妹が不幸にならないように、女神の祝福を受けた歌姫がちゃんと育つように、神官長様は考えていらつしゃると信じたいの。」

はい。とりリスは答えた。

「アリエツテ様は、エチユアのあとはどうなれるのですか？」

王都には戻りにくくなつた。だが、戻らなければ神官は続けられないだろう。

「神官は辞めるわ。王都にも戻りにくうし、外国にでも行った方が気楽かしら。」

「ですが、女性一人が行くのは危険です。とあなたが良い方が？」

いいえ、と苦笑した。

「だけど、当てはあるの。友人だけ。結婚はもうならでしもう。こんな歳だし。」

そんなことは、とりリスが言いかけた時、再び足音が聞こえた。

先にそちらに視線を向けたりリスの表情で、誰かわかった。

44 裏切り者Ⅰ！

「お話しは終わったかな？御婦人方。」

耳に甘い、低い声。

リリスが、一瞬ぽかんと口を開けて、ギョ、と結び直した。

感動しますよね。

わかります、わかります。

私はどちらかというと王都風の詰襟の夜会服が好きですけど、こちら風のシャツとネクタイが見える礼服も、ヨシコア様が着れば決まってしまうので不思議です。

むしろ、生地が薄い夏礼服は鍛えられている身体がわかって、本当に男らしい。

美形は得です。

「くんぼんは、アヘドリア男爵夫人。カービング辺境領のヨシコアニザアヘニカービングです。我が領の神官をお相手してくれてありがとうございます。」

ん？なんか地味に引つかかる言い方なんですけど。

気のせいよね。

最近、扱いが酷いから被害妄想だわ。

リリスの目は釘付けなのに表情が定まらない。

「あ、あの、お会いできて、光栄です。伯爵……。」

なんとか、淑女の礼。

頑張っ——りりす。

歌姫の意地でやり過すのも——

「アリエッティの後輩の歌姫でいらっじゃったとか。」

ヨシコア様、そこはスミス神官、とらつくちです。

距離を疑われます。

最近その手のミスが多いです。巻き込まならでください。

「はい。私が神殿に入った時に、初めにお世話していただきました。」

」

「くえ、では、だらふ前からお知り合いですか？彼女はどうな先輩でしたか？無理難題を押し付けたのでは？」

にににに。

おっ帰るんじやなかったの？！

なんていつ、質問するのよ——

「いえ、無理難題なんて、そんな。私にとっては、淑女の鏡のみたいな歌姫でいらっしゃったので、尊敬申し上げております。」

ぶ、とヨシコア様が吹いた。

十一カまで。

ちよっし、にめかみが痛いだけと。

「淑女ねえ。」

カッチーン。

何、その目。上から蔑むように見なうでくたせう。

リリスが変な顔してるじゃない。

私は何もしてないわよ。淑女でしょ。

「あなたに変なことを教えてなければいいけど。池で泳いだりしなかった？それは淑女ではないよ。」

ニヤ、と笑いながら私を見たので、ふん、と顔を逸らすとんでもないことを言い出した。

そんなことしたことないわよ。事故で泉に落ちただけでしょ？

「池？あ、ああ。あれは神官様？！」

ナーガが得心がいったように叫んだ。

ヨシユア様の、裏切り者。

カービングは王都よりかなり南に位置する。

おかげで私はいつも夏の暑さに悩まされた。

特に数週間続く暑さのピークは、寝不足が続くぐらい。

一年目は暑さで本当に寝込んでしまい、2・3日、離れよりマシな

神殿で寝ていた。

石造で広い神殿の方が眠れたのだ。

二年目はベルセラムの侍女服を借りて、窓を開けて寝た。

ギル＝ガヘゼ十城の夏の侍女服は可愛い。袖は腕と手首の間ぐらいで、広く開いている袖口には涼しげなレース。

そして襟も鎖骨ギリギリまで開いていて、襟にレースがあしらってある。

流石に祝福や儀式の時は神官服を着たが、神殿や部屋では侍女服を着た。

市井の民も同じような服を着ている。買えば良かったのだが、いずれ王都に戻るつもりだし、王都ではそのデザインは浮いてしまう。それに侍女服が可愛くて、気に入っていた。

それでも何日も暑さで眠れない日があった。

そして今年、二つらにくるほんの数日前。

神殿から帰り、城の泉に侍女服で腰掛けていた。泉は私の離れの森の奥。

ひっそりとあり、滅多に人はこない。

といつか、私とベルセラムとケドヘグらしか知らないのではなくかと思っくらい、人気はなかった。

木造の離れは連日の暑さで熱がこもり、眠れない。昼間、防犯のため締め切っているから余計。

わたしは泉に腰掛けて、頭から水をかぶって頭を冷やしていた。

泉は山の岩肌から、滲み出てくるのを整備したもので結構な水量があり、整備された水たまり場の縁に腰掛けて、岩肌に頭をつけると髪が濡れる。それが気持ちよくてよくやっている。

だって暑いんだもん！

連日の寝不足でつとつとして、ついに泉にドボんと落ちてしまった。

泉の水たまりは浅く、すぐに立ち上がったが頭から水浸し。あーあ、でも、いつもの水浴びと変わらないうわ。と思つてベルセラムにも黙っていた。

いい歳して泉に落ちたなんて、恥ずかしかったし。

そうすると、翌日ベルセラムが、春秋用の薄長袖の侍女服で現れた。

侍女があまりにはしたなから、夏服は取りやめになったという。暑いからといって泉に入つてはわけなり。泉に入つていたのを警護の騎士が見かけた。『当主がお怒りになつて、と。

すみません、わたしです。とベルセラムに謝つて、ヨシエア様に撤回をお願いした。

侍女が悪いんじゃないんです。『めんなさい。

謝りに行くと、ヨシエア様にものつすつく怒られた。

見かけたのは警護の騎士ではなく、ヨシエア様だったらしく。侍女服を脱いで下着で腰掛けてたのも見られてた。泉から出て、侍女服

を着て帰ったから侍女だと思われたらしい。

慎みがない……

いつも言ってるだろうー。

って、怒鳴られた。怖かった。

本当に泣きそうになった。

そのあと、暑くて眠れなくてうとうととして落ちたという、また怒られた。再三、部屋を城の中にとりつを断つたから。

結局、その日から夜は城の中の部屋で寝るようになった。

正直ピアスは弾けないうし、わたしにとって不便の上なので、オルセー領から帰ったら離れに戻るつもり。

ギルニガハゼナは山の中腹にあるので、朝晩は早く涼しくなる。

わたしの名譽のためにヨシコア様は黙ってまぐつて言っただのに、
にでたーかにぐつす？

45 今更なんです

リリスの手前眺むこともできずに、池には入ったことはありませんが水浴びは好きなのです。とらんと、リリスは言った。

「そういえば、よくセシリア様と浴場で水浴びをされておられましたね。」

そうです。

王都でも暑い日はよく足だけ水に浸したり、水で汗を流したりしていたのです。

お湯を湯船に張って、長湯をするカービングとは習慣が違つた。

「セシリア嬢？」

「ユティア公爵の令嬢です。セシリア様とアリエツィ様は本当に仲がよろしくて。」

「あの美女と名高い?！」

あら、ナーガ知ってるの？

ナーガは音楽隊には入ってないから、天覧演技の時もセシリアには会ってない。

まあ、ナーガは次期領宰。この前の社交シーズンもヨシコア様に近衛して王都に行っていたし、夜会にも出ていたから噂ぐらひは聞くわよね。

「私、セシリア姫とは親友なのです。」

王族と知り合ひなんですよ。あまり舐めなうでください。

虎の威を借る狐。

「本当に仲がよろしかったですね。セシリア様が、寮にいらつしやる時は、大概、アリヒット様がお部屋にいらつしやるもした。」

ええ。だって、編曲の打ち合わせをさせられてもしたから。

おかげでいろんな特訓を受けました。時には、お忍びでオスカ―殿下からも。

「ああ。ミステア公爵が親しげなのは、ゴトア公爵令嬢の伝手で。」
ヨシコ様が言った。

あら、バシちゃった。
あんまり知られたくならないですねー。

利用されるのはおっぴいです。

セシリアのお母様は王妃ゴトア公爵。オスカ―殿下とセシリアは叔父、姪の関係。
王宮楽団長のオスカ―殿下はセシリアによく作曲や編曲を依頼して、わたしもよく手伝ってました。

ナ―ガの目が信じられなうと言っている。
ほら、私を舐めるからですよ。

私、歌姫だったんです。結婚できなくても、長年すれば、王族に伝手ぐらうできます。

にも使われますけどね。

色々思ひ出すと、利用されてるのはこっちのものな気がして来た。

「セシリア姫はお酒には強いのかな？」

が。ヨシコア様、まだ余計なことを。

「友人と二人でワインを6本も空けたと、聞いたことがあるが、もしかして。」

ぶ、とナーガが口を押さえた。

何なの？わたしの印象を悪くして、何かしらいことあるの？
聞いていられなくて、目を瞋り額を押さえる。

本当に血管、キレそう。

ええー。その通りですー。セシリアですよー。

6本くらい何よー。それだけ飲んでも、二口酔うにはなりませんー。
蒸留酒小杯1杯で吐いたあなたに咎められたくありません。

第一、彼女は最近まで飲める年じゃない。知るわけないでしょー。

「わたくしはあまり存じません。お酒を嗜まないうので。」

リリスが控えめに言った。

ああ、淑女の鏡だわ。

「夜遅くまで一緒にいられたのは知っていましたが、いつも楽器の音が聴こえておりました。」

「ああ、それも変わらないのだね。」

にっこり、ヨシユア様が笑顔をこちらに向けた。

そんなんですー。

いつも遅くまでピアノを弾いてると、早く寝なざらつて、翌朝注意されるけど、これが日常でしたの。

作曲は昼間はバタバタしていて集中できません。だから子供扱いしないでください。

「一晩中、語り明かすくらい、仲が良かったんだな。」

いや、徹夜してたのは締め切りに追われてる時だけです。あとは一人でお酒飲んだら寝てましたから。

「ええ、よく二人で一緒に寝ていました。セシリア姫はとっても柔らかくて、いつもいい匂いで。それにいつもお優しくしていただけるので大好きな方です。」

は、とヨシユア様がぽかんと口を開けて、それから、一瞬目を瞑り抑えるような声で注意した。

「アリエッティ。だから慎みがないうつて。」

「良いのです。わたくしは嫁ぎ遅れですから。」

子供ではなのです。

あなたに厭らしう想像をさせるくらいは、色々知ってますもの。

分かっているやっちゃんです。

リリスはニクニクと分かっているみたいですね。

「っ。それは・・・。そうじゃない。」

ヨシコア様が悔しそうに睨んで来た。

「いえ。今現在、そうなんです。

わたしはもう23。それでも女性としては、遅い方なのに、あと2年待てば完全に嫁ぎ遅れ。誰のせいですか。

「いえ。アリヒツト様は王都に帰られれば引く手数多です。そんなことにはなりません。」

リリスが少しだけ心配そうに言った。

ギリアム様のことを気をつけるものに、誰に言っているのだらう。安心して。王都でも困ってくれるところはある。多分、最悪おはでぢなうけど。

「大丈夫です。王都に帰ったら、セシリア姫の侍女にでもして貰います。つづろい安ら殿方の寵より、女の女情の方が時には勝りますから。」

にっこり笑って、言っている。

今更。今更、なんです。ヨシコア様。

わたしたってあなたに應えたい。

大きな胸に抱きしめられたい。

だけど、もう、状況が許さないうでしゅ。。
お願いですから、振り回さなうでくだらう。。

それにあなたは何も言つてになう。。

あれだけの束縛をわたしに課しても、きちんと気持ちを聞かせてくれたことはない。。

そんなの、不誠実です。。

だって約束できなうからでしゅ。。
巫女姫も私も手に入れたらと思つてゐるのでしゅ。。

そんなの、嫌だ。。

ヨシユア様を選ばなければ、遅くなつても誰かの唯一になれること
だつてある。。
平民になれば年齢のことだつて、それほど問題にならなう。。

唯一になれる可能性がある愛情までも2番手なんて、受け入れられ
ない。。

「全く隙がない。歌姫の教育は男をやり込める術でも習つたのか。」

はあ、とヨシユア様が肩を落とした。。
リリスはその様子を楽しそうに見てゐる。。

「アリエッティ様は特別、賢くていらつしやいますから。私は神官
長様の代わりとして教義の講義もしていただきました。」

おお、とヨシコア様とナ이가、やっと見直した目を見た。

だけどね、それってね。

「それって、巫女姫候補は持ち回りでやることなのよ。」
わたしだけが選ばれて特別に頼まれてるわけじゃないの。
情けなくため息をついた。

リリス、知らないのね。今の候補はやっぱりそんなことしてらな
いの？だって、巫女姫になる可能性があるのよ。

教義ぐらひ叩き込まれわよ。

だけど、その手のことは教えなうで。また変なことを思いつくから、
この方。

オルセイへ卿に講義させられそうになったんだから。

人のこと、手駒だと思って。

ほんと、若いくせに腹黒い。

46 わたし達の戦いが始まる。

オルセイノ領からは1日早く帰ってこられた。

舞踏会の次の日、ヨシエア様がリリスのことを紹介したのだ。
こんな素晴らしい歌姫がいるのなら、カービング領の神官のわたし
がいる必要はないでしょう。って。

アンドレア夫人の御夫君は領の高位官吏なので、アンドレア夫妻
と相談して準備してみては？と。

リリスは男爵家に嫁いだと言ったが、夫になる方はオルセイノ卿の
弟君の息子さん。

・・・また、腹黒いことを考えてるのわかつちゃった。このまま、領
主の首を替えるつもりね。

統括地域の領主任命権は辺境伯にあるはず。

実際、オルセイノ領に見に来て、交代後の人材を探しに来たのね。
育ってなければ、本来なら統括領であるカービングから出さないとい
けなくないけど、カービングなんて、きつとこよりも人材がいらないも
のね。

土地の荒廃って、すぐに人心を荒らす。一旦、荒廃を許すと人が育
たず、さらに生きにくい土地になる。

無責任のつけを押し付けられるのは、可哀想なことに次世代の子ど
もたちなのだ、とナカやケビノを見てつくづく思う。

ヨシエア様には頑張ってもらいたい。

カービンクの希望であってほしい。

カミラ様は今日は一緒に遠乗りには、と言っていたけど、では、領都の境界まで見送ってくださいますか。

わたしの馬車に乗り込まなうでください。

愛馬はとつしたのですか？と聞いたら、一日酔いなんだ、乗せてくれって。

そんな元気な顔色して、何言ってるの？
しかも、昨晩はあんなに早く舞踏会を退席してるくせに。

ほんと、懲りない方ね。

領界を越えてカービンクに入ると、領宰の使いと騎士が整列して迎えた。

はあ。凛々しいわ。
この隣領との違い。

王族にでもなった待遇ね。

ロシエ様が当主になってから、カービンクは本当に変わった。
騎士たちの引き締まり方は国境を守る気概にあふれていて、領民たちも安心できるみたい。

領境の宿で休憩を取るため馬車から降りる。

ロシエ様がわたしに手を差し伸べて、降ろしてくれた。

旅をしている間はいつものことなのだけど、まるで奥方にでもなつたみたいな錯覚に陥る。

ロシエア様の向こうには、遥しく、鋭い眼光の騎士たちが、道の両側に姿勢良く立ち、わたしたちを守る。

アリシア様をお迎えする準備なんだろうけど。

オルセイノ領でも、護衛兵たちは毎回、同じように出迎えをしているので、領民たちは騎士の凛々しさに驚いていた。

領主の屋敷なんかはそれこそ下女まで出てきて窓から見物する始末。でもね、それは不躰なのですよ。うかに躰が行き届いてないか、よくわかりました。

カミナ様は、ロシエア様と一緒にこのも見送りとも出迎えをしたかったのかしら。自分のところの騎士を育ててくださる。

「どうもね、アリヒトヤ。」

書類を見るわたしの手元を覗き込むうちに、ロシエア様が頭を寄せてきた。腕が触れそんな場所にいるので、体温が伝わりそう。

近いー。近いー。

焦っていることを頑張って隠して、一生懸命に日程表を見ながら、日にちを計算した。

領宰からの急ぎの知らせは、巫女姫巡業の出発日の決定と、日程の情報。出発日決定は公式な発表だが、日程の情報は、カービヘグが独自に手に入れた。

出発日まで、1か月あるので、巡業場所に順に日程が正式に通知されるが、これは領の独自の動きで取りに行ける。

隠れているわけではなから。
正式発表を待っていては、迎え入れる準備が遅れるので、取りに行くように助言したのだ。

その後、度々迎え入れの相談をされ、今はすっかりメンバーに入っている。
わたしの存在もだいたいわけ入れられたものです。

定着した頃には出て行くんだけど。

紙に日程をわかりやすく、書いてみる。
通常、王都からギルニガハセナまで、馬車で15日。
人数が正式に発表されていながら、およそ60名という情報がある。
ということは、歌姫は20名ほどになるだろうか。
60名の人数、しかも若い女性が半分近くなら倍の日数を考えなければいけない。

そして、ここまでに迎へ着く間に、いくつかの儀式を入れる。

「神殿祭礼は、7。日程は45日。・・・ちよつと多し。」

といつでいつ泊まるかはわからないうち、ちよつと多し。

しかも。

「こちらから王都へは、11日ほど――結構だろとの、11希望だそう
です。」

巫女姫様が王都への戻りは、ロシコア様に同行してもらったとの希
望を出されているそう。

それと、舞踏会も。

ちょうど議会が始まる時期になるので、ロシコア様は上京する。

だが、巫女姫一行と同じように動くのがかなり遅くなる。

となると。

滞在を5日と考えて、議会の始まりの日を書いて、まゆを寄せた。

「難しいか?。」

「王都への戻りを巫女姫巡業の日程と合わせると、議会の開始に選
れます。途中まで同行し、卿だけ大急ぎで戻られれば、間に合いま
すが。」

それでも、前日に着くことになるだろう。

「お断りはできるものなのか?。」

あら、断るつもりなの?。薄情な人。

「わかりません。通常の神殿からお願ひされること、11日遅いま
すので。」

ヨシユア様は無言のまま、腕を組んだ。

「まだ、日にちはありますし、実際、巡業が始まれば日程は刻々と変わります。その時に判断なされは良しかと。」

うん、と頷いた。周りにいる官吏たちも同じように頷く。

「領内に、祭祀の日を知らせた方が良しか?。」

日にちは決まっている。が、ここは最終地。いつ変わるかわからない。おそらくこのままだと、少なくとも2、3日は確実に遅れる。

だから、首を振った。

「巡業が実際始まってからの動きを見てからがよろしいかと。采配を取る神官たちの考えで、変わってまいりますので。だいたいの日にちは既に知られていてるのものと、変わらず。度々の日程変更は混乱をきたします。」

その通りだ。とヨシユア様が呟いた。

「始まったな。」

顔を上げた私と目があつた。

その目の光には信頼がある。わたしは頷いた。

「まるで戦のようだ。」

ヨシユア様がクスリと笑った。見回すと官吏も騎士も微笑んでいる。

みんな、ヨシコア様を信頼の目で見ている。

そうかもしれない。

巫女姫様も歌姫も、カービンズの民を救いに来る。

救国の歌姫を無事に帰すこと。それが迎え入れる側の使命だ。
出来るだけ心地よく通じせるように、出来るだけたくさんの民が祝福を受けられるように、十分な準備がしたい。

「あと少しだ。みんな、頑張ってくれ。」

ヨシコア様の言葉に、官吏たちが、はい、と答えた。

領界の宿で、ヨシコア様と別れて、わたしは賛美歌を土地土地で広めながら、ゆっくり領都まで帰った。

「神官様。祝福を。」

わたしの手に生まれたばかりの赤ちゃんが、渡された。

小さすぎて、怖い。ぶにゃぶにゃして、わたしの腕一本で収まるくらいしかない。

大きな声で歌うのは忍びなく、細い声で祝福の歌を歌い、言祝ぎをした。

祝福の習慣はあつという間に広まった。今では神殿には途切れなく、民が祝福を受けにくる。

この習慣だけでも、間に合ってた良かった。

領都は涼しい風が吹くようになった。

巡業の頃は秋の真ただ中。

カービングの山々が一番、美しい紅葉に輝く季節。

今まで避けていたヨシエ様とアリシア様が並ぶ様を目の前で見なければいけない。

その瞬間も、わたしはこうやって、自分の力で立っていたい。
ヨシエ様の好意にも、アリシア様の蔑みにも、気にしないうつな顔をして鮮やかにこの地から去っていきたい。

わたしの戦いが、結果を見せる時が来る。

47 ちやあああ、

ギルニガハゼ十城に帰り着いた時は、すっかり涼しくなっていた。
良かった。

あの不名誉な、話も忘れていてほしいです。

まただ。

久しぶりのピストに、手が動かない。

旅のたびに腕が落ちていく。ほんと、やだ。

巫女姫巡業が終わったら特訓だ。

このままじゃ、神官をやめたあと、生計を立てる手段が一つ減る。

外国に行くのなら、演者になるのが一番手っ取り早いので、こんな腕じゃ心許ない。それに、まだに渡られる編曲の仕事にも、差し障りがある。

もう一度。

わたしは鍵盤に手を置いた。

コハコハコハ。

扉がノックされた。

こんな時間に？

「だあれ？　ベル？　ルシ？」

わたしの扉をノックするのは、二人しかいない。だが、二人のノックと違ふのだ。一人は二回しか、叩かない。

外は既に夜半だ。

わたしは既に寝支度をして、侍女も部屋に返している。

昨日は少し遅く帰り着いたので、城の中の部屋に寝たが、今日からいつもの離れに戻ると言つて侍女を返した。

久しぶりに遅くまで、ピアノが弾けると、集中していたのでかなり遅くなつてゐるかもしれない。

外からの返事はなし。

どうしよう。

ドアを開けるのが怖い。

いんなことは、初めてだった。

いんには、侍女の二人とも城からのおつかうぐらうしか来ない。しかもいんな夜に尋ねてくることはないのだ。

そろそろと立ち上がつて、窓に向かつて。はめ込みの窓は、跳ね上げ式になつていて、まだ暑さが残るので、半分開けてある。

そこから入つてきたらどうしよう。

その窓つて、音を立てたらどうしよう、閉めに向かつて。

窓を支えている、添え木に手が届いたその時。

「アリエッテヤ。」

「 ぢゃああー... 」

ヨシコア様ー、驚かさないでくださいー。

離れの建物は地面より一段、高く作られている。
ちよつと、跳ね上げた部分にヨシコア様の顔があった。

「 何をしているんだ、あなたは。 」

ああ、びっくりした。

あなたこそ、なんなんですかー。ノックした時に名乗ればいいのにー。

「 何って、わたしは今から寝よう。 」

ヨシコア様がまた、ため息をついた。

また、今度は何なの？ 最近、ため息ばかりつかれて。

「 部屋に入れてくれ。話がしたい。 」

「 え？ 今からですか？ 」

「 そうだ。とにかく服を着て扉を開けてくれ。 」

そついつと、サクサクと足音をちやせて、扉に向かっていた。

ええー？ もつ夜よ。こんな時間に女性の部屋に入るなんて。あなたが一番の不審者じゃない。

仕方なく、ガウンを羽織り、そつと扉を開けた。

ロシゴア様は従者に外で待つものに、言うつけると素早く扉を閉めた。

また、怒られるのかしら。
やだわ。

とつせ、遅くまで練習してたつとを始められるのだ。

だけど、わちゃわちゃ、ロシゴア様がくることはなかったのに。

これは女性の部屋よ。しかも、こんな夜分に部屋に入れろなんて、非常識だわ。

ロシゴア様は、厳しう顔をして何も言わず、グシツの奥を見ている。

かなり怒っているのは分かる。うつかり言かっているからで、逆に無言だと、怖い。

美形が怒ると人格を突き落とされるものに怖い。

「・・・あの、卿。ピアノが壊れているのですか。申し訳ありません。」

先に謝っておいて。明日からはちょっと騒がけと、窓を閉めて練習しよう。

「何故、そんな格好でここにいらる。ここに寝るのは、禁じたまはすた。」

え？.そっ？.

「でも、涼しくなりましたから。」

「それでも二二で 休んではいけない。侍女はどうした？」

「部屋に戻しました。」

「部屋？.では、連れてきてくれ。一緒に城に行く。」

「ああ。侍女の部屋は城です。」

え？.

やめて。そんな怖い顔で睨まなうで！.

勢いよくわたしを見たヨシコア様が、親の仇を見るような目で睨んできた。

「なんだと？」

やっとなわたしと目があつた。

だけど、今までで、一番怖い。顔に表情はなく、目だけに苛烈な怒りが見える。目には見えなうけど、全身から燃えるような何かが発せられている。

あまりの覇気に奥歯が震えた。

覚えがあるこの感じ。ウイルケルムがわたしに暴力を振るつた時以来だ。

「何故、侍女が城にいる。」

「二二は、狭いですから。侍女の部屋はありません。毎日、通ってきているのです。」

彼女たちまで怒りが及びそつで、思わずかばつた。

「いつからだ？.あなたはずっと一人で寝ているのか？」

「え？.はい。最初から。」

なに？.今更。

なんでそんなこと、怒られるの？.

怖いわ。早く出て行って。

48 委ねてしまいたい

「・・・すまなかった、アリヒツトヤ。」

ヨシコア様が苦しそくに眩して、いつもいた。

「いえ。大丈夫です。あの、慣れておられますから。」

生まれてこのかた、侍女に起られたることもなかり。
身の回りの世話なんて、別に不自由してない。

だけど、ここはなんでも揃うわけではないので、彼女たちの存在は
本当にありがたい。

「わたしの服を貸そう。暗いからそこまでわからないだろう。すぐ
に部屋に行こう。」

え？.ちょっと待って！.

「あの、それには及びません。私はここです。」

「ダメだと言っているだろう。」

「何故ですか？.もう涼しくなりました。ちゃんと眠れます。」

城の部屋にはピアノは置いてない。

ヨシコア様は奥方様の部屋や大広間のを使えばいい。なんだったら、
離れのものを移動する、とおっしゃるけどそれではない。

城の中で音楽を奏でるのは、もうわたしの意地なのだ。

だから、城の部屋は不便でしょうがなり。練習を遅くまですると、ベルセラムや新しく侍女についたルシータに待っていてもらわないといけなくなる。

城の中に入る以上、侍女もつけずに歩きまわるわけにはいかなう。

わたしは招かれざる客

ヨシコア様たちには謝ってもらったけど、巫女姫の降嫁を望んでいるのは変わらないので、勝手知ったるように歩くのは不躰だ。

だから、城で寝ている間は起きて朝食をとり、それから移動する。夕食は基本、侍女と離れでとって、あまり遅くなる前に城の中に入ったが、どうしても練習時間が少なくなる。

それに最近ではヨシコア様がよくお誘いしてくださるから、夕方以降の練習もままならない。

「一二は誰でも入ってこれる。不用心だと言っただろ。一二で寝ることは許さなう。これから、ずっとだ。アリエッティ、部屋を移しなう。ちゃんと侍女の控えの間がある部屋に移るんだ。一二は狭すぎる」

そしたら全然練習できなうじゃない。わたしの生計を奪うの？！

「大丈夫です。一二はお城の中ですよ。今までだって、なにもありませんでした。こんな時間に誰かが来るなんて、初めてです」

「信用し過ぎたと言っただろ。あなたは。」

「ちゃんと鍵をかけて寝ます。今は寝てなかったから窓を開けてま

したが、寝るときにはちゃんと閉めてります。」

「あの窓には鍵はないじゃないか。それに扉の鍵だって簡単に開けられる。あなたは一人なんだぞ？誰に助けを求めるんだ？」

そ、そんなこと言っただけ。
今まで誰もいなかったし。

第一、ここに誰が住んでるなんて、知ってる人いるの？

ベルセラムとルシータしかいないわよ。あとはケドゥと、お城の何人かでしょ？

それにカービンクの兵たちは信用できる。

「卿、あなたのお城なんですよ？誰が悪いことを企むのですか？」
自分のお城なんですから、信用してください。」

もっと自信持ってください。巫女姫も泊まられるお城なんですよ？
寧ろ安心してくださって言われたいわ。

ロシニア様は顔を覆ってため息をついた。

これ、よくやられるのよね。そしてわたしを貶める一言を言ったわ。

はしたないとか、慎みがないうとか、何も分かってないとか。

そんなことないわよ。

偶然、そのうつうつとになっちゃったっただけで。そのうつうつであるでしょ？

それに……に關してはあなた方が用ゐただんじやない。
最初に寝ろって言われた神殿に比べたら、何倍も安心できる。

「では、わたしも……で寝る。」

えええ？何言ってるの？
なんか、そのうつうつを脅しに使うの卑怯だわ。

「迷惑です……お帰りください……」

もう、はつきり言つてやる。
わたしはわたしの時間を自由に使いたい。
この城だけでこの先、生きていけるわけではないのだ。

わたしは食いつならでいく必要がある。そのために技術を落とすわけにはいかならう。

「変な……と仰らなうでください。今更、一人で寝ても寂しくなんかありません。……はお城の中ですし、……んな庭の片隅に誰か来ると……のですか？用心なら十分します。神殿に比べたら、何倍も安全な場所です。」

「そつた。今更だ……今更だからだ。」

ヨシユア様が低い声で、わたしの話を遮った。

思わず目を背けた。怖い。

「この方は怒ると、本当に怖い。

「謝っても、謝りきれない。だけど、このままにしておけない。何かあったら……。」

は、とヨシユア様が顔を上げて、わたしを見た。

「何も、なかったよな?。」

あるわけないでしょう!...

「あったらとつくの昔に、カービングを出て行ってます!。」

なんてこと言つの?!!この人!..

何かあって、そのまま知らず顔で居残れるわけないじゃない。

291

わ、わたしは生娘なんですからね!..

良かった……って、深いため息をつきながら言われてもね。疑われたことがショックだわ。

「絶対ダメだ。アリエツトヤ。頼むから、城の中で暮らしてくれ。」

キッと顔を上げたヨシユア様が、また言い始めた。
もう、と今度はこっちがため息が出た。

「城の中じゃ、練習できない。……。」
あ、思わず本音が出ちゃった。

「あなたは、本当に……。。」

ロシエ様もため息をついた。

そして少し考えるように遠くに目を眇め、ソファの上に置いてあったハンカチを、ベッドの奥に持って行って、衝立で隠した。

途端に部屋が暗くなる。

ロシエ様はひとつの、燭台の灯りも吹き消した。

私が立っている場所は輪郭しか見えなくなった。
戸惑っているわたしをロシエ様が引き寄せた。
ちゅ、と強く抱きしめられる。

突然のことで驚いて、動けずじまつた。

直筋に軽く体温が押し付けられ、は、と覚醒した。

抱きしめられている。
じつじつ。

委ねてしまったら。

瞬間、その思ってしまった、勝手に体がロシエ様の胸にちらに奥に入ろうとした。

ロシエ様がちらにちつく抱きしめる。あまりにちつく身じりちする、と、やっと解放された。

ヨシコア様が、小さく息を吐いたのがわかった。

そしてわたしの両手首を強く掴んで、覗き込んできた。
それは期待したような甘さがあるものではなく、熱を帯びた獐犷な目。

自分のしたことが恥ずかしくて、ヨシコア様の獣を思わせる目が怖くて、顔を背けた。

「・・・助けを呼ぶんだ、アリエッテヤ。」
冷たい声がひどく大きく部屋に響いた。

「た、たすけ・・・」
「もっと、大きな声で。」
「たす、けて。」

声が出ない。精一杯、出そうとしてるのに。
ふん、とヨシコア様が鼻で嗤った。

急に優しく無くなったヨシコア様に戸惑いながら、俯いた。

「怖さで声も出ないか。」
冷たい、声。

その通りだ。

知っている人なのに。
ヨシコア様がわたしに何かすることなんてなり、と分かっているのに、
押さえつけられている力の強さと、懷むような鬱囲気に怯んで力が
出ない。

「・・・誰もこないなんて、どうして言える？庭の下男も見回りの衛兵も、あなたがここに寝ていることは知っているんだぞ。そいつらが心変わりして恐ひ混んだら、扉の鍵なんて簡単に開けられる。」

そう言われて、背中に恐怖が這い上がる。ヨシコア様の言っのもりだ。

手首を握る力が、ぐ、と増した。

痛い！。だけど、動がそれとして、もどくとも動かせない。

「わたしでさえこんなことをして理性を保つのに難しいんだ。最初から襲おうと思っている相手に、あなたがなにができる。」

ヨシコア様はそう言っつと、ふと、力を緩めた。
緩められた手首に思わず緊張が解けて、ふいに涙が出た。

「大人しく、わたしの言っつことを聞くんだ。」

黙って、頷いた。

情けなくて涙が出る。

男の人の力に自分はこんなにも非力だ。

襲われたら受け入れるしかないだろう。

手首の拘束が解かれた。

思わず、自分の手で手首をぞする。だが、恐怖は解けない。暗闇もそのまま。

また、ヨシコア様が抱きしめた。

今度は、優しく、大事そうに。

解かれた髪に指を差し入れ、ぐ、とわたしの頭を自分の胸に当てた。

「後悔している。あなたにこんな仕打ちをしたことを。」

やめて。

それ以上、言わないで。

わたしは、ヨシエ様の胸を押した。

だが、離れられない。

「だが手離せない。あなたを失ったら、わたしは、生きていけない。

」

絞り出すような小さい声なのに、叫んでいるような。

嫌だ。

こんなにもはつきりと。

こんな時に。

酷いわ、ヨシエ様。

ヨシエ様は、自分の上着を脱いでわたしに被せた。

そして、フンタフを持つと、離れを出た。

ヨシエ様の甘い匂いがわたしを包み、頭のぼが、くら、とする。

肩を引き寄せられ足元も覚束無し暗い庭を無言で歩いた。

疲れを感じ、わたしは少しでもヨシエ様の胸にもたれた。

大事にされている。

自分が思つ以上に。

だけど。

無言のまま部屋に着き、目シエア様がそつと頬を手で撫でた。そして、何も言わず、去つていった。

49 不名誉な噂

巫女姫巡業の出発日が過ぎ、やっと中央神殿から詳しい旅程が来た。

遅すぎる。

ヨシコア様に呼び出され、わたしは書類を食いつけるのちに見る。
手元にあるのは、巡業の参加名簿。

巫女姫様。

歌姫 37人。

神官 5人。

下女 10人。

護衛騎士 20人。

歌姫、37人?!

何回か人数を数え直して、ため息が出た。

バカなの?!

なんでそんなに連れてくる必要があるの？

それに対して護衛の数が少な過ぎる。

人数のバランスは歌姫に対して倍の数が、基本。

高貴な身分が混じればさらに増える。

王族に連なるセシリアが巡業に参加した時は、自分の騎士を連れてきた。

人が増えるとそれだけ手間が増えるので、あまり巡業には参加しなかった。

それに下女の数も少な過ぎる。

「歌姫や神官のもっと詳しい経歴が載っている名簿はありませんか？それと、班分けの表も。」

黙ってわたしを見ていたヨシエア様に言いつつ、文官から取り出された。

名前と年齢、役職や、馬車と宿の班分けの配置をした書類が何枚か渡された。

見慣れた書式、これを使っているところについては。

「先触れをする隊の名簿と、馬車列の順番の予定があるはずです。それも。」

ヨシエア様がニヤと笑いながら、無言で書類を渡す。

ちよつとイラッとした。

全部くたさう。

いちいち、めんどくさう。

「詳しいな。まるで作ったことがあるみたいだ。」

「ええ。作っていました。」

というか、この書式を整えた時に私は参加していました。だから、どんな動きで巡業を動かしているか詳しいのです。

やっぱり。とヨシエア様が呟いた。

「優秀すぎる。」

「光荣でござります。」

名簿をめくり目を通していく。

「歌姫はそんなことまでするのか。」

いや、私は社交しなくていい分、暇だったからです。

あと、無駄に歌姫歴が長いから。

巡業で仕事は分担するが、旅程全体を把握するのは巫女姫様の仕事。
私は旅程の管理を補佐することが多かった。

もしかして、これってもつと歳上の神官の仕事なんじゃないの？
って疑ったこともあったけど、なんか毎回お世られてだし、過去のこ
とはよくわからない。

疑ったところで仕事が減るわけじゃないし。頑張ったら巡業先での
居心地は良くなる。

「自分のことは自分でやるのが歌姫の基本ですから。巡業中はみん
なで仕事を分担するのです。わたしは全体を進める仕事を。」

それがこころにきて役に立つなんて幸運だった。

王都から離れるに連れて、巡業の迎え入れに慣れてない土地が多く
なる。

食事や衣服、衛生、体調管理。

ただでさえ大人数での移動はトラブルがつきまとい上に、若い女性
のための特別な配慮が何重にもいる。

そのために、王宮から近衛騎士と王宮の警護兵をお借りするのだ。

名簿に「ガンドルフ・ニドゥオニキックナ」様のお名前があった。
ロメリア様を断罪した元婚約者だ。

「キックナ一卿？」

彼は宰相の子息だが、神殿での役職はない。騎士でもなはず。
見れば、神官として名前があった。

何故？

神官枠は神官の職に正式についていなくても入れる。たとえば楽器
修理の専門家や、体調管理のための医師など。
だが、ガンドルフ様が神殿に関わっている印象はなかった。

そして、もう一つ、気になる名前。

「・・・キリアム様。」

神官の筆頭でこそないが、巫女姫付き、となっている。

やっぱり来たか、とため息が出た。
波乱は一つではならしい。

もう一つ、神殿から申し出が来ていた。
歓迎晩餐会で周囲の国を招いてほしいと。

「キックナ一卿からの個人的な願いで、ガイネ港からはペヤン夫人
を呼んでほしいと。アリエッティ、あなたの友人として。」

何ですって？！

「なぜ？」

「まあな。」

ロメリア様が興味なさそうに答えた。

まあね、興味ないでしょっも。

人の恋路のことなんか。

この方、意外と薄情で、自分の興味ないことは足で踏みつけるもの
なところあるから。

だけどね、だけどー。ちよつとは関わってるのもー。

巫女姫アリシア様とすっく関わることがー。

「ロメリア様は、キックナ一卿の元婚約者。キックナ一卿から婚約
を破棄された方のお立場です。」

「ああ、知っている。」

知ってたんかーいー。

じゃあ、もつちよつと興味持っても。

あなたが開く夜会で何かやらかそつとしてるのも。

「先代巫女姫は、現巫女姫アリシアに嫌がらせをして貶めようとし
た。有名な話だ。」

ぐ、と胸が痛くなった。

「それが、キックナ一卿の耳に入り婚約を解消された。その後、国
外に逃げた。わたしが知っている噂はそついつつとだが。」

ヨシユア様が冷たく言い切った。

不名誉な噂。不名誉な巫女姫。

ロメリア様は二度とこの国に堂々と帰ることはできないうつ。

悔しい。

だけど、この方たちはその噂を信じて、アリシア様の味方に着いたのだ。

「あなたはどうか思う？」

聞かれて、顔を上げた。

ヨシユア様が考えの読み取れなり目で見ている。

こんな時の彼は若さの悔りを寄せ付けず、統治者の顔をしている。

302

この人の信頼を勝ち取りたい、そう思わせる雰囲気がある。

「ロメリア様は、自分にも私たちにも厳しい方でした。歌姫であることに誇りを持っていらつしやいました。隠れて嫌がらせをするような方ではありません。」

ヨシユア様の表情は、わたしが尊敬している人たちと同じ。その一人がロメリア様だった。

ヨシユア様がロメリア様を蔑んでいても、わたしはロメリア様を信じる。

彼女の行いが巫女姫の威信に傷をつけ、それを咎められて国外に逃げたと言われても、わたしは嫌がらせを見ていない。

アリシア様が傷つけられたところも。
わたしはわたしの見た、ロメリア様しか信じられない。

「では、わたしはあなたを信じよう。」
ヨシユア様が美しく微笑んだ。

「わたしはペヤン夫人を知らない。だけど、あなたは尊敬してるの
だろう？ 彼女のことを。」
「はい。」

彼女に傳いた5年間。
わたしは彼女の背中をずっと見ていた。

国王に匹敵する敬愛に答えるよつとする姿。
100人の歌姫の代表として、毎年大変な巡業を行い、民に祝福を
与える姿。

わたしは彼女が目標だったのだ。

「あなたは信頼に足る人だ。だからわたしはあなたを信じる。あな
たの信じる、ペヤン夫人を。」

ありがとつづいじます。とわたしは頭を下げた。

「ガイネ港へは招待状を出すといい。」

え？
今の話は、何だったの？

ふ、とヨシユア様が笑った。

「変な顔。」

はあ？

なに？なに？その悪ガキみたいな顔ー。

「瞬、頼れるわーと思っただのにー。

「どうせ、断られるぢ。だが、由ちならわけにもうかなら。キック
十一のほつくの説明がいるからな。あなたの友人として招待するの
だから、あなたの思っことを書いて出したらいい。」

そして、断れたらしいんだ。とヨシコア様は酷薄そうに笑う。

「お断りにならなうのですか？外国の方を招くこと。」

みんな厚がましいお願いを聞いてやる必要はない。

「断らない。人の城で何をしようとしているのか、見届ける必要が
ある。」

あー。

カッ□□。

スキコハ。て、まだ。今の表情。

どうして若うのに、みんな悪そうな顔をできるのー？
いろんな邪な気持ちかなければ楽しめるのに。

急にヨシコア様がわたしの頬をつねった。

痛いー。

「もっとわたしを信用しろ。あなたの愛するものを、わたしは傷つけない。」

ああ。

何でそんなこと、かつにもく言うの？

わたしたって、信じたい。

あなたを信じたい。

だけど。

わたしを一番傷つけたのは、あなたなのよ。

領主夫人としての辺境行きを断られた時も、そして今も。

それから怒濤のよつに日が過ぎた。

巡業予定地に散らばらせておいたカービングの使から次々と、知らせが入ってくる。

巡業が始まって3日目、雨が降ったらしい。

これはわたしが歌姫になって以来の珍事だ。

巫女姫巡業中、一行のいく先では雨が降らない。

しかも、祭礼の最中。

これを珍事とわかる人は神殿の教義と内部が分かった人。

アリシア様は、巫女姫の資格を失っている。

わたしが確信できる出来事だ。

このことに恐れを抱いて、彼女がここに来るまでの間に態度が改められるというけど。

50 わーん!わたしのばかー!

巫女姫一行が到着するまで、1週間となった。
情報は的確に入ってくる。

はつきり言って異例だ。この巡業は。
良く引き返さずここまでのだ。
参加の歌姫のことを考えると胸が痛む。

大幅に予定を変えて、祝福を行うはずだった神殿祭祀は3回が取りやめになっている。
現在はオルセイノ領に滞在しているが、ここでも祭祀はない。
だが、夜会が中止になっているとは聞かない。

歌姫全員で夜会に参加することはせず、半分は祝福を行うことで、
なんとか体面を保っている。

そして、巡業の脱落者。
すでに3人が体調を崩し、オルセイノ領まで辿り付いていない。
巡業を始めて10日を越したところで一行から離れ、王都に帰った
ものがあると報告があった。

その後も少しずつ増えた。気になるのは彼らが歌姫であるのかわからないこと。
歌姫であったとしたら、護衛がついていないこと。
はつきりと誰が欠けたのかわからないのだ。

巡業予定の全ての場所に、全ての旅程が知らされるわけではない。

その場所に必要な分しか知らされない。

わたしが担当官であつたら、その地域を統括する領に警護の応援をお願いし、警護に必要な情報を渡したりしたが、書類の作成に労力があるので、今回は省かれたのかもしれない。

そもそもが、統括領に警護も依頼されてない、とヨシア様は言つたのだ。

おそらく、地方地方の領境いっしょに、一応の検問を受けることになるのも、遅延の原因の一つだろう。

気の利いた領主なら、足を止めさせることなく、一行を通すが、領都から出せば終わりと思つてゐるような無能な領は領境まで見送ることなく、検問官に口添えをしていなかたりする。

そうになると、半日は留め置かれるのだ。領の認めた書式と王都の書式が違つと言われたり、言葉が微妙に違つて、話が通じなかたりする。

そのため、統括する近境伯領の騎士をつけると、すんなり通してもらえるのだ。

はじめの2週間で大幅に遅れが出たのを知つて、そう言つたところ、ヨシア様はすぐに、騎士を出した。

それでも予定は遅れ続け、祭祀が取りやめになり、宿の変更や、休憩を減らしたりして調整されているよう。

そして、異例な天候不良。

このために予定が遅れたとはつきり報告はされてないが、それはそ

れで旅は悲惨なものになる。参加者の体調はここに大きく影響されるのだ。

ここまでに雨に降られたのは5日。

この時期、南東地域は雨が降るのは普通だが、わたしの知ってる限り巫女姫巡業がいる間は雨が降らない。

雨が降ると、動きが遅くなる。

そして、一番の問題は。

「本音を言いますと、巡業の間の一番の問題は洗濯なのです。」

定例にしている会議。

巡業の道中を治める各地の頭目と、城の領宰、執事、騎士団長などが、集まっている。

「洗濯？」

「はい。雨に降られると洗濯ものが乾かないので、予定が大幅に狂います。」

曇りが続いてもしんないのだ。雨だともっとひどいはず。

「歌姫は若い女性。しかも長い旅です。洗濯物が乾かなくては困るのです。」

会議の参加者に柔らかい笑いが起きた。

やっぱり何もわかってない。小綺麗にしたりとか、そんな単純な話じゃないのだ。

「女性には月ものがあります。洗濯が滞ると困るのです。人数が多いと常時、複数人はいますから。当て布が足りなくなるというのは女性にとっては死活問題なのです。」

みんなが、一瞬、ぎょっとして口をつぐんだ。

ほら、思いつかなかったんでしょっ？。巡業というのは、思っているより過酷なものなのです。

長い間馬車に座るのも苦痛だが、食事が合わなかったり、馬車酔いをしてしまったり、馬車の中で眠り過ぎて、夜眠れなくなったり、通じが不順になったり、月ものがきたり。

物見遊山ではないので、個人的に買物はいけないうし、楽しみもあまりなかったりする。

「わかった。今からでも下女の数を増やそう。湯殿も増やし、一人で入れる浴室も用意しよう。いっまで辿り着くのに歌姫たちはぎざぎざ疲れているだろう。出来るだけ休養できるように、みな、最大限の配慮をしてくれ。」

ロシエア様の厚意が有難いです。

カービングの温泉はみんな喜ぶと思います。

は、と、みんなが短く返事をして解散した。

会議が終わって、みんなが退出してもわたしは部屋に残る。

ロシエア様の執務室につながっている会議のための部屋が、わたしの執務のための部屋のようになっていく。

そのまま書類を眺めていたわたしの横に、ヨシコア様が座った。

何も言わず、机に突っ伏す。

珍しくお疲れのよう。

「アリエッテヤ。」

あら、本当に疲れてるの？珍しく弱ったような声。

「あなたも月なのに、悩まされたのか？」

は？

はああああ？！

「女性は子供の出来る穴から、血が出るのだから？毎月、体が痛くなることもあるとか。あなたもそんなのか？」

あなたって人は、なんてことを淑女に聞くのです？！

あまりのことに、言葉も出せなうでいると、ヨシコア様が顔だけ傾けて下からわたしを見上げた。

「・・・そういうことを、あなたのような女性の口から聞くと言っ
のはな。」

甘えたような姿勢で見上げなうでくださいー。くんな雰囲気を感じ
ちやうでしょー。

「あなたが子を産める、月のある女性だとうつことを想像さ
せるんだ。男というのはそういうものだ。」

・・・いやー!! みんな、そんな目でみてたの?!! 厭らしい!!
もう、あの人たちとは、顔を合わせられない。
うわぁん。

「だから、慎みを持ってと言っただろう。」

ヨシユア様がため息をついた。

だって、だって、話の流れで、

恥ずかしくて顔があげられない。

「娘が生まれたら、歌姫にはなせられないな。」

うつ、返す言葉がない。淑女教育の最高峰と言われているのに。

わたしのせいで、わたしのせいで、
何が悪かったのー??..

「あなたがどうして、そんな慎みがないのがわかった気がする。」

今度はそ、反省して聞きます。
教えてください。

「女の域とはよくいうが、男の目を認識しなすぎる。男は常に、子
を作る相手と思って女を見てるんだ。・・・たとえ、あなたがその
気がなかったとしても、勝手にそう思っもんなんだ。」

そ、そうですね。わたしたって、時々、あなたにはそう思います

もの。

そうよね、そうよね！

わーん！わたしのばかー！...

「・・・反省、したか？」

顔を覆った手を放すことが出来ず、コクコクと頷いた。

「必要だと思っても、ああいうことは、わたしにだけ話せばいいんだ。」

あなたにだって、話せないわよ。

ああ、でも、そんなことあんなに大勢の前で口にしちゃったのよね。
死にたい。

ポン、とわたしの頭に、ヨシコア様の大きな手が乗った。

「全く。女にしておくにはもったいない才能だといつのに。これだから、目が離せないんだ。」

そう言いつて、ポン、とおでこを弾かれた。

おでこをちすりながら、目をあげると、ヨシコア様がちょっと嬉しそうに、ニヤニヤ笑っていた。

51 お願ひ

ヨシコア様が下からせていた侍女たちを呼んで、お茶を入れさせた。

いつもつけてくれる、甘いお菓子。

今日は雪のように細から砂糖をまぶした、丸い焼き菓子。

わたしが王都にいるときに流行っていたものだけど、ヨシコア様が歌姫の侍女を育てるために王都で侍女教育を施して、作り方を覚えて帰ってきた子がこれを広めた。

大好きなのに、さすがに手が出ない。
落ち込みすぎて泣きたい気分。

それなのに、澄ました顔で一緒にお茶を飲まなうでくださう。ヨシコア様。

今は一人になりたう気分なんです。

ヨシコア様の侍従が入ってきて何事が囁いた。わたしを見て、にり、と笑う。

おつやだ。

今日は、疲れた。

「出かける。付き合つてくれ、アリヒツトヤ。」

もう。ほんと強引なんだから。

ヨシユア様がわたしを連れて外出するのはいつものこと。

わたしはあなたの秘書官ではありません。

だけど、今日は抵抗する気力もなくもとなしくつらつらした。

馬車に揺られて30分ほど。

カービングの鄙ひた風景が森に変わると、馬車を下された。

ヨシユア様に手を引かれ少し歩くと、河原に出た。

「わあ。」

そろそろ宵闇が迫ろうとする、夕方。

そこにあったのは光の群舞。

羽虫が光輝きながら空を舞って、目の前の広い河原を埋め尽くす、
小さな星のような光。とても幻想的な光景だった。

「去年、少し見たらっ。もう一度見たいと思ってた。・・・あなた。」

クス、と思わず笑って、ヨシユア様を見た。

賛美歌を教えるために領内を回っていた昨年のこの時期。時々、同行してくれるヨシユア様と、偶然この光景を見つけた。

この地方には、秋の満月に自分の命と引き換えに結婚をする羽虫がいるのだとか。

その虫の羽根は灯りもなりのに、自ら光る。

この宵闇が迫る時間、夏が終わり、秋が深まるこの数日だけ、綺麗な水辺に現れる光景。

わたしもヨシコア様もそんな話は知らなかった。2人とも王都で育ったから。

とても、近い場所にして、王宮にも時々出入りできるくらいの2人。

どこかですれ違ったこともあっただろうに、どうして出会わなかったんだろうな。とヨシコア様が呟いた言葉に、ドキリ、とした。

多分、あの時には、もつわたしはこの方に惹かれていた。

生まれて初めて自分のことを大切に扱ってくれる殿方だったから。いつも優しくしてもらったのに、舞い上がらないように、驕り高ぶって、失敗しないように必死に頑張った。

この光景も。

去年、初めて見た自然の美しいあり方に、とても感動して離れ難いわたしを、ヨシコア様は暗くなるまで待っていてくれた。

だからもう一度、連れてきてくれたのだろう。

そんな乙女の夢のようなこと、考えつく人じゃないのに。

見た目と違って、腹黒くて現実的で、女の人を喜ばす甘い態度も、実は自分に引き込むための手段くらいしか思っていないのに。

だけど、今のヨシコア様は本当にこの風景に感動しているのに見える。

「本当に、綺麗。」

暗さが増えていくなか、光はどんどん明るさを増していく。羽虫の羽は雌雄が違う光り方をするのだそう。

「あなたの嫌いな夏を乗り越えたから、この虫は輝くんだ。」

嫌いじゃないのよ。ただ、暑いだけです。

涼しい王都しか知らないわたしには、この暑さは堪えるんです。

泉に落ちてしまった件を、今でも度々注意される。
毎年、暑さで体調を崩していたことも、なぜ相談しなかった、と怒られた。

暑いのは辛いけど、カービングの夏は嫌いじゃない。たくさんあるお祭りや、その度に出てくる変わった踊りも。

ヨシコア様が帰って来られるまで、オルセイ伯爵夫人の趣味で中止されていた地元の踊りも、わたしが面白がるので、ヨシコア様はどんどん復活させている。

わたしにはそれを記録して中央神殿に報告する仕事があるので、出来るだけ参加して、詳細に記録している。

この仕事をはじめの方は疑われて、監視していたのだ、と後でヨシ

コア様に知らされた。

そつよね。

辺境領の地位は国王に隷属するのではなく、補完の関係。独立不羈の気概がある土地。

知っていたのに勝手をしてしめんなさう。と謝ったら、神殿は権力とは別だから、疑いすぎだったと言われた。

若いのに賢い人。

政治的バランスも良く分かってる。ほんとに、惜しい人。

10年たったら、もう身悶えするくらい好みのタイプになるはずなのに。

「嫌いじゃありません。ただ暑いだけなんです。」

「いくら暑くても脱いだらダメだ。夏を楽しむ方法はいくらでもある。王都の女は慎重がなうと思われるぞ。」

「もう。今日はちゃんと反省してます!。」

ははは!。とヨシコア様が楽しそうに笑った。

「アリエツトヤ。」

暗がりを案内するためにつないでいた手が、わたしの肩を抱き寄せた。

大きな手のひら。自ら騎士の訓練に入るので、手のひらは固い。

「巡業の夜会のエスコートは、わたしが。」

顔を上げると、ヨシユア様はあの離れの夜のように、熱を帯びた目でわたしを見ていた。

わたしは出来るだけ柔らかく見えるように、微笑んだ。

「あなたのお相手は巫女姫様です。」

主賓は巫女姫様。だからこれは外せない。それに、彼女はすぐ来る未来の花嫁。

「違う。あなただ。」

「カービングは巫女姫を望んだはずです。だから、わたしは神官なのでしょう?」

一度は望まれたと思った。慣習通りに。

だけど、破棄されたのだ。

カービングはヨシユア様は巫女姫を妻にと望んだから。

巫女姫をこの地に連れてきてこそ達成する悲願。

わたしはその地均しに使われただけに過ぎない。

わたしとあなたの中の関係が変わっても、すでに国中に知られている巫女姫との約束。

「巫女姫を妻にという願ひなら、正式に取り下げた。」

ヨシユア様がわたしを見て言った。

何ですって?!

血の気が首を立てて引いた。

そんなことできるはずがない。だって。

「わたしはあなたしか、いらない。」

「ダメ。ダメです!。」

アリシア様はそれを了承したのだろうか? そんなはずはない。

先日、カービング伯爵の妻にと公言されたばかりだ。

まただ。

また、歌姫をめぐる醜聞が繰り広げられるのだ。

「ダメです! やめてください! あなたは巫女姫を望んだのです!。」

れ以上、巫女姫を、歌姫を汚さないでください!。」

わたしがあなたに应运てしまえば、わたしたちが誇りに思っていた歌姫の権威に、また傷がついてしまう。

「わたしが望んだのは、カービングに祝福をもたらす巫女姫だ。それはあなただ。」

「・・・ちがう。」

違う。わたしは巫女姫じゃない。

わたしは選ばれなかった。

「いいや。カービングの民はあなたがいたからこそ、祝福を思い出した。女神の恩寵を感じたのは、あなたが思い出させたからだ。アリシア嬢ではない。あなたがこの地を愛して、この地の民に祝福を授けたから。」

だけど、だけど、わたしは巫女姫ではない。

たまたま、だ。

たまたま、わたしが来たのだ。

わたしがやったことは歌姫なら誰でもできる。民と土地の安寧を祈る歌姫なら。

祝福を授けたのは、あなた。

この地の光。

あなたが好き。

カービングのこの地が好き。

わたしがこの地に生まれていたら、ここに残れる理由もあったらう。だけど、わたしはこの生まれではない。

いずれは去る存在。

だから、神殿は心置きなくわたしをここに留め越せているのだ。

それをわたしは心得ている。

わたしは色慾に疎い。

色気もない。

まさか、美貌と名高い巫女姫の恋人が心変わりをするような相手とは、ゆめゆめ思わなかったのだらう。

ヨシエア様に應えたら、わたしが誇りに思っていた歌姫が壊れてしまった。

二代に渡って、傷つけられる巫女姫の権威。
戯曲じゃあるまいし、一人の殿方を巡って、国から姫と呼ばれる存在が繰り広げる醜聞。

わたしが目指して、誇りをもって務めた歌姫は、そんなものじゃない。

「アリエッテヤ。」

ヨシユア様がわたしの手に指を絡ませた。振りほどけなり、熱。「」
の人は強い。簡単には諦めてくれない。

「わたしの妻に・・・」

「ダメ!ダメ!!」

思わず、ヨシユア様に抱きついた。

「お願い!言わないでください!今は、今はやめて。」

心が引き裂かれそうになって、わたしはヨシユア様の胸の中で叫んだ。

「ここまで、頑張ってきたの。神官として、頑張ってきた。わたしだっ。わたしだっ・・・。」

あなたが好き。ずっとそばにいたい。あなたの役に立ちたい。

言葉にできない気持ちが伝わって、ヨシユア様が、は、と息を飲んだ。きつく抱きしめられて、強く胸を押して、離れた。

「ダメ!今はダメなんです!」

「なぜだ?!アリエッテヤ!わたしは!」

「最後まで、神宮でうちせてくださいー。わたし、わたし、どつすれ
ばいいの？。アリス様にとつて言えばいいの？。これ以上、巫女姫の権
威を傷つけない！！」

ヨシコア様が悔しそつに目を瞑る。

「わたしの誇りなの。歌姫だったことが。それを支えに、ここまで
頑張ってきた。お願い、今はダメ。わたしを最後まで神宮でうちせ
てください。」

この巡業が終わるまでは、歌姫たちを醜聞に晒すことはしないで。

彼女たちは、純粋に民に祝福を授けるためにくるのだ。いやらしい
恋の顛当てを見せられるためにくるのではない。

愛妾の居座る城に本妻が乗り込んできた。そんな女のいやらしい戦
いを見せられるために、頑張っているわけではないのだ。

お願い。今は言わないで。

そつ言つて、もう一度、ヨシコア様の胸に飛び込んだ。

「卑怯だ。こんなこと。」

抱きしめてになり。ヨシコア様が耐えているのがわかる。
わたしを抱きしめてしまえば、もう彼は抑えられないのだろつ。

だけど、彼の体温を感じたかった。ここにいる一瞬だけは、わた
しの想いが言葉にせずに、伝わると感じる。

あなたが好き。

あなたが好き。

だけど、今は耐えて。

わたしを、わたしが誇りにしてらた敬姫でうたせて。

ヨシコア様の背中に手を回し、ぎゅ、と抱きしめて、身体を放す。

ヨシコア様を見上げると、辛そうに目を眇めてわたしを見ていた。

「巡業が終わるまでだ。必ず、わたしの妻になってくれ。」

すっかり暗闇となった中で、わたしは目を瞑った。

返事はできなう。

とても怖かった。

わたしの一言で、彼に返す仕舞いで、今までの全てが変わってしまった。

この恋心は確かで、求婚に応えることは最上の結果なのに。

アリシア巫女姫の資質は危うい。

それはこの巡業で誰の目にも明らかになった。だからこのタイミングでの求婚なんだろう。

だけど。

応えられない。

巫女姫に成り代わり、ヨシコア様の妻に成り代わる。そんな覚悟は、

わたしにはなり。

だって、わたしは。

巫女姫巡業の先触れとなる第一陣がついたのは、6日後の昼過ぎだった。

予定より少し早い。

夕方に着き、翌日、巫女姫を含む本体が到着する予定だった。

だが、予定変更どころではなかった。

先触れの隊と一緒に巫女姫が到着したのだ。

知らせを聞いて、門まで走ると、すでに警備の騎士たちが、整列していた。

二重に並ぶその隊列の向うに、たしかに巫女姫の馬車があった。
巫女姫は城主の出迎えを待っている。

ギルニガハゼ十城の騎士たちは引き締まった顔で、微動だにせず、当主の命令を待っていた。

その凛々しい姿に安心した。取り乱したりせず、姿勢良く立つ姿が頼もしい。

落ち着かなければ。

「本体はすぐに着くの？」

「いえ、全くそれらしいものは見えません。先触れの隊の話によると、前泊の宿から巫女姫の馬車は追いついたとか。今朝もかなり早く出発したようです。」

「本体は今どこに？」

「昨日の報告では、予定通りに。先触れの隊より、半日遅れる場所に宿を取っています。先程、こちらから様子を見に行かせました。」

わたしの隣に立つシヤンが、報告してくれた。
本来ならヨシユア様の近衛だけど、今はわたしとヨシユア様の専属の連絡係。
侍女のマーガレットと、文官のオーリオは執事長と領宰の専門の連絡官のような仕事をしてきている。

ヨシユア様がつけてくれた、わたしの補助だ。

夏が過ぎてからなんだか急に立場が変わり、今では部屋も城主の私殿に移されてるしシヤンのような側近もつけられている。

城の人たちの雰囲気も・・・。
なんだからー。
外濠が埋められていて、辛い。

「先に着いた騎士は何名だった？」

「10名です。」

半分の騎士が、巫女姫の警備に当たっている。
残りの歌姫と下女を合わせて、女性が40人近くはいるといつのに、10人しかいない。

その時、オルセイ領に出していた偵察隊から報告があった。
体調の不良で2名、オルセイ領のリリスの屋敷に留め置くとのこと。

リリスの屋敷なら、安心だわ。

留め置くというのだから、帰り、合流すればいい。

「ですが、昨日の報告と人数が異なるのです。おそらくもう一人、どこかで離れております。」

馬車列はかなり、バラバラになっているので、はっきりした人数が把握できないとのこと。

血の気が引いた。

あれだけの少女を連れ回しているのに、人数もはっきりわからなくなて。

人の気配がして、振り向くと、ヨシコア様に来ていた。鋭い眼光で巫女姫の馬車を見ている。

「卿、あの。」

「本体とはかなり離れて、到着したらしいな。報告を待つて本体を迎えに行かせる。警護が手薄だ。」

領境いから、カービングの領兵たちもつけているが、それほど多いわけではない。

ありがとついでいます。とわたしは、頭を下げた。

「礼には及ばない。この地で事故を起こしてはならない。」

一旦、言葉を切って、わたしを見た。先程とは違う、優しい目。

「心配するな。あなたの大事な歌姫たちを必ず守ると約束しよう。」泣きそうになりながら、うん、と頷いた。

お願いします。彼女たちを守って。

どれだけ心細いだろう。

長い旅の末にたどり着いた辺境の地で、巫女姫に置いていかれるなんて。

ヨシユア様が顔を上げて、みんなを見回した。

「これより巫女姫を迎える。神殿の御一行はみな、女神の使徒。決して粗相がないうちに。」

張りのある声で命令して、踵を返す。

歩き始めたので、わたしも従おうと動いたところで、足を止めてわたしを見た。

「あなたは、ここにいてくれ。」

ヨシユア様が言った。

コロコロコロ。

雷が鳴った。

ありえない。曇天が続いていたが、こんなこと。

二人で空を見上げた。

「いよいよだな。」

ヨシユア様が呟いた。そしてわたしを見る。

「行ってくる。」

短く言って階段に足をかけると、ヨシユア様に待っていた騎士団長

のゴーストが、ならん、の号令をかける。

ザン...

騎士たちが、持っていた銃剣を一斉に地面に打ち付け、背筋を伸ばした。

かっくっくー...

こんな時に不謹慎なのはわかってるけど、頭のびが痺れる。

勇ましい騎士の間を長身のヨシエ様が、優雅に歩き、巫女姫の馬車に向かった。

こんなにかっく良かったら、アリシア様は絶対に諦めなうと思っ...
むしろ情け無いすがたで振られてしまったら良かったのに...

不謹慎に身悶えしていると、巫女姫の馬車の扉が開いた。

最初に出てきたのは、侍女。

ん？侍女？

「メグ。名簿に侍女の役はあったかしら？」

「はいえ。いいえありません。」

「あれは侍女だわ。下女ではならず。巫女姫様のお部屋の侍女部屋を、すぐに使えるように確認してくれる？」

かじりまりました。と、マーガレットは部屋を叩きつけるぐぐぐでかいていった。

先代の巫女姫ロメリア様は子爵家の出身だったが、巡業に侍女は連れてない。

巡業中は身の回りのことを自分でするのが、基本。

侍女が名簿にはなかったのなら、参加人数そのものの数が変わってしまう。

アリシア様は巡業そのものを何か勘違いしているのではないかしら。

侍女に続いて降りてきたのは、キックナー卿。そしてキリアム様。

巫女姫の馬車に男性が二人も乗るなんて。しかも、隊を率いるはずの立場の二人。

あとの本体は一体誰が率いているんだろう。

最後に巫女姫アリシア様が降りてきた。

ヨシユア様に手を取られて馬車から降りて、出迎える隊列ににっこり笑った。

花のよう。

見事な金髪と白のドレスに身を包んだ華奢な身体。背は低くならから、長身のヨシユア様と並んでも釣り合いがとれ、一幅の絵画を見ているよう。

ヨシユア様をつつとりと見上げ、両手で彼の手を包み、何かを話しかけている。

恋人たちの再会。

城のみんなに初っ端からそう印象付けているのだらう。
胸がじくじくと痛んだ。

ゆっくりと城の玄関で待つ私たちの方く向かってくる。

真ん中あたりまで来たとき、急に雨が降り始めた。なんの前触れもなく大粒の雨。

きやあ、とアリス様可愛い悲鳴が響き、ヨシユア様がアリス様を庇つようにして飛び込んできた。

わたしは頭を下げる。

キャハハ！と、アリス様の明るい笑い声が玄関ホールの石畳に響いた。

「やだ、濡れちゃった。」

「大丈夫か、アリス。」

わたしの前で、ヨシユア様のアリス様を気遣う声が聞こえた。

いつものヨシユア様。

わたしを気遣う声と同じ声。

顔を伏せたまま眉を寄せた。

嫉妬なんて、みこともない。こんな気持ち、絶対に見せたりしないんだから！

「大丈夫。ヨシユアが庇ってくれたから。でも裾が濡れちゃった。」

早くお部屋に案内してね。」

わたしの暗い気持ちと対照的にアリシア様の明るさね。

ああ、アリシア様、だわ。
思ひます、彼女の性格。

伯爵家の令嬢なのに、天真爛漫で令嬢らしい気位があまりない性格だった。

それが災いして祝福を授かりに来た男性に気安く触れられたりして、ロメリア様に叱責されたりしてたっけ。

どちらかというと、彼女の方が憤りがないのだけど、何でわたしは最近こんなに怒られてるのかしら？

コツコツとヒールがわたしの前を通り過ぎるのを聞いた。

神官がいるのに声ひとつかけないつもり？

そう、そううつつもりなのね。いいわ。わたしはわたしの仕事を全うするだけよ。

「巫女姫様。」

ヨシユア様が声をかけた。ヒールの足音がとまる。

「エチユア神殿のスミス神官だ。」

あら、気を使ったのね、ヨシユア様。

今更なのよ。

わたしの興味はもう彼女にはないわ。

ヨシユア様に呼ばれてわたしは顔を伏せたまま、一歩踏み出した。

「エチエア神殿をお預かりいたしております、アリエツトヤニエトニスミスでございます。巫女姫様には、いつ来訪いただきまして誠にありがとうございます。」

そう言つて顔を上げて驚いた。

アリシア様の目の冷たいこと。

「久しぶりですね、アリエツトヤさん。」

アリシア様の口がうひつな形で笑った。

エシエア様。あなた、かなり悪手をつかったわね。

別れ話が拗れてるじゃないの。

冗談じゃないわ。

いくら好きでも、みんなの引き取れない。

コシコシと急いだ足音が聞こえて、ナーガがヨシコア様にそっと近づいた。

報告があるようだ。

ヨシコア様の方が少しだけ聲が高いので、ちょっとだけ頭を下げてナーガの口元に寄せた。

眼福。眼福。

この2人、実はとても仲が良いので、無意識に距離が近い。
ナーガもヨシコア様の冷たい美貌とは、また違った荒削りな男性らしい美男子だから、2人並ぶとお得な感じがするわね。

話を聞き終えたヨシコア様が頭を上げるとアリシア様を見た。

あらーアリシア様。目がキラキラしてる。

眼福ですよー。わかりやすい。

だけど、前面に出すのはちょっとはしたない。私の矜持が許しません。

「他の歌姫たちだが、どうやら馬車列の中で轍にはまってしまって動けなくなった馬車があるようだ。城の馬車に迎えに行かせるが、立ち往生から時間がかかりすぎて、今日中にはたどり着かなうかもしれない。」

どの辺の馬車列が足を取られたのだろう。その後の馬車も通れな
いのなら、かなりの人数が本体と別れることになる。

おもわず唇に手がかったのを感じて、そっと手を下ろした。
考え事をするときに唇を触るのはわたしのくせ。
以前ヨシア様に指摘されて気づいた。

ふっん、とアリシア様は興味無さそうに言った。

「城の中は安全です。今付いている近衛の騎士を、半分お借りして
迎えに行かせてよろしいですか？巫女姫様。もちろん、城からはで
きる限りの騎士と馬車を出します。私用の馬車も。ですが何分、人
数が多く、騎士が1人でも多い方が良く。途中で泊まらせるよりも、
城に連れ帰った方が安全ですから。」

よかった。迎えを出してくれたのね。

お城まであと少し。頑張ってここまで迎いつけば移動はなく、お世
話をする体制も整っている。

馬車を乗り換えて騎士の馬に1人ずつでも乗せてもらえば、せめて
歌姫だけでも全員城に連れてきてもらえば

「緒についてきている下女には申し訳ないけど、お城にいる間は、
こちらが全面的にお世話するつもりでいるから、ゆっくりしてもらえ
ればいい。
歌姫にはこちらでのお仕事があるのだ。
ゆっくり休養を取るのが先決だ。」

ええ、いわよ、とアリシア様は明るく答えた。キリアム様もキックナー卿も何もおっしやらない。

歌姫のことに興味がないのは、アリシア様だけじゃないのね。

「ねえ、そちらの騎士はヨシエアの近衛？」

アリシア様がニコニコして、ナーガを見ている。

ヨシエア様がナーガを紹介した。

ナーガは騎士だが、実務は領宰の見習いのようなもの。

複数人いる領宰の候補の1人。

最近は良くヨシエア様について回ってるので、美人なお二人は領都でも有名でとても人気が高い。

さすが、アリシア様。抜け目がないわね。

沢山の貴公子を、夜会で侍らせる手筈。いっしょでも健在のようです。ちょっと勉強させてもらってもいいかしら。後学のために。

「巫女姫のアリシアよ。ヨシエアのお城の騎士は本当に惚れ惚れするわね。近衛の騎士を勝るかも。よろしくおねがいます。」

あらら、そんなこと言っちゃっ。

後ろの王宮騎士の方が、ちまちまそつに目を逸らした。

この方、本当に気をつけないと、神殿の目的を見失うわ。アリシア様が見失うのは構わないけど、わたしたちが巻き込まれるのは勘弁。

アリシア様はナーガに向かって手を出した。

はあ。ほんと、何様のつもり？

いんなーと言いたくなくはないけど、ただただ伯爵家の娘のくせに王族と同じ礼を受けようなんて、本当厚かましいのよー。

夜会に出てた歌姫たちが、呆れるのもわかったわ。

いくら国王と同じ敬愛を受ける、って言っても、巫女姫の間だけのこと。

それも警護を厚くするためにされている措置なのに、まるで生まれながらの姫みたいな態度。

高貴な女性から手を差し出すのは、跪き忠誠を誓わねさせるため。

それをカービンクの私兵であるナーガにするなんて。

やってるのは、二つの奥方ぐらう。

王妃様でもヨシコア様の許可がなしとでせう。

それでもナーガは微笑んで、アリシア様の手を取って軽く持ち上げた。跪きはしなかった。

跪いたら、完全に忠誠の誓いになっちゃうから、その場で裏切りを疑われても仕方ないから。

そっつうの分かってやってるのかしら？アリシア様は。

自分が、ヨシコア様の奥方だっけ見せつけたらのね。

二つの城の方々は主人に似て氣位が高うから簡単には受け入れてく

れなうと思ひますよ。わたし、経験済みです。

「アリー。」

えええ？アリー？わたしのこと？

キリアム様が呼ぶんだから、多分わたしよね。

「キリアム様。お久しぶりでございます。」

淑女の礼をとりながら、キリアム様に礼をした。

「もうお兄様と呼んでもらえる年でもなくなつたのかな。なんだか、雰囲気が変わつた。大人になつたのだな。」

はあ、もう23なので。

それにわたしはもう神官ですよ。

歌姫とともに音楽の指導を受ける神官の見習いをお兄様、と呼ぶのは、年若の歌姫の習慣。

といつか、わたしは今まで、一度もあなたのことをお兄様など呼んだことはありません。そんな親しくありません。

ですので、勝手にアリーなんて呼ばなうでください。

「時間が空いたらでいい。君に個人的に話したいことがあるんだ」

あちゃー。あの噂は本当らしい。逃げたう。

「かじじまりました。」

時間が空いたら、ね。

残念ながら、巡業の間はそんな時間はありません。

詰め甘いこと。

巫女姫様たちが城の中にはいったのを見届けた。するとナーガと私たちのところにまた騎士が近づいてきた。

現在こちらに向かっている一行の正確な数。やはり、領界を超えてから二人足りない。

「どうやら、馬車を下され、返されたようです。」

返された？ どうして？

「離脱したのはおそらく、領界を超えてすぐ。馬車酔いがひどく、休憩を求めたところ、神官に帰るよつに言われていた。と下女が証言しています。」

すでに一日以上、たっている。

離脱したのは下女と歌姫の二人。

体調を壊した女性を置き去りにしていったなんて。

しかも領界を超え、オルセイへ領に戻っているかもしれない。

「ナーガ。」

わたしはナーガに向かった。いんなことはしたくなく、仕方がない。

「お願いします。彼女たちを助けて。迎えに行つてあげてください。」

彼なら騎士団に命令を下せる。

だけど、ナーガを動かせるのは本来なら、主人であるヨシユア様だけ。

「領界を超えたかもしれません。オルセイへ領に入っても見つけてほしいのです。出来るだけ、急いで。ヨシユア様には私からお話します。お叱りなら、わたしが受けます。」

領の騎士団はカービング辺境伯の私兵。

領主の命令なく、一人も動かす事は出来ない。

況してや騎士に領界を超えさせるなど、相手の許可なくしては争いの種になる。

ナーガ一人で判断できる範囲を超えている。

だけど、一刻でも早く動かして欲しかった。

ナーガは強い瞳でわたしを見て、に、と笑った。

「お叱りなど、受けるはずありません。」

そして、控えていた騎士に命令を下した。

思わずため息が大きく出た。彼女たちが見つからなければ生きた心地がしない。

一行の中には伯爵家の令嬢も混ざっているのだ。

一見、下位の爵位に見えても、実は高位の爵位の一族、というのも普通にある話。

それでもなくとも、女性が領内で乱暴されたなどあっては、カーゴハグの品位を貶めてしまう。

「神官様。」

ナーガがわたしの前に跪いて手を取った。

そして、一瞬、額をつけて離した。

周囲の城の者たちがそれに倣って、跪いた。

跪すき、手に額をつけるのは最大限の敬意の表れ。

「何なりと」命令ください。あなた様からの命令は、」当主と同じと思つて城のものは心得ております。遠慮なくおつしゃってください。」

ありがと。震える声でそう言うと、ナーガは立ち上がった。

そして、ニヤ、と笑いながら言った。

「あなたを悲しませたら、俺たちの命が危ない。それぐらい俺たちだつて分かつてますって。」

うー！公開処刑！禁止！

お願いだから、ヨシユア様、自重してください。せめて巫女姫一行の前だけは！

わたしは刺されたくありません！

54 聞きだかった言葉

巫女姫の到着から間も無くして、次の馬車が到着した。

馬車は一台。知り合いの神官が乗っていた。

「レイモンド様。他の馬車は？」

「良かった。ここにいたか。アリエッティ。助けを求めようと先に私たちだけ急いだんだ。カービンダ伯爵が騎士を派遣してくれてありがたかった。歌姫たちは、城の馬車と騎士が送り届けてくれる。ただもう一台、馬車をお借りしたい。列から離れたものがあるよなんだ。」

「それは、領界過ぎてすぐに離れた姫でしょうか？それならば先ほど、騎士たちが迎えに行きました。」安心を。領を超えても保護してもらいたいと願っています。」

そうか。とレイモンド様はやっと安心して息を吐いた。

「巡業の指揮はレイモンド様ではないのですか？誰が歌姫を返したのでしょうか？」

一行の名簿で一番頼りになりそうな方だった。
他の方はお年を取り過ぎていたり、逆に若過ぎたり。
一番経験があつて全体がわかるのがこの方だった。

筆頭の名前にはもちろんアリス様になるが、実務は主に神官が担

当する。

キリアム様は何回か巡業に参加はしていたけど、実務を引っ張っていた記憶はない。

「キックナーだ。その子は先頭列にいたんだ。巫女姫の次あたりの。馬車酔いをしているのを下ろしたらしく。先を急ぐと言ってな。」

キックナー卿？！

神官でもならくせになんで歌姫に命令してるの？！

しかも馬車酔いしてるのに置いていくなんて、人としてありえないー。

「もっちゃんちゃんだ。こんな巡業ありえない。わたしは神官をやめたくなってきた。」

レイモント様、本音が。本音がー。
もっほと頭におてるのね。わかりますー。

「わたしもです。」

苦笑して言っと、2人で笑いあった。

でもこの方が付いていたから、なんとかここまでたどり着いたのだろっ。

オルセイ領までに離脱した歌姫は、レイモント様が各領主にも願うして護衛を出してもらい旅費を持たせて送り返したとのこと。検問を通すために寄越したカービングの私兵たちがヨシア様の意向も口添えしてくれて、かなり役に立ったらしい。

ちゃんちゃりチャーン神官長様に手紙を出して、巡業をやめてらうか
聞いているのだが、カービンぐまでは行け、と返ってきたぞ。だ
から他の予定はなるべく廃止して、なんとかここまでにしたい。
そんなことして、大丈夫なの？

道中の神殿だってそれなりに準備してだでしょつに。祝福もろくに
しない巡業なんて。

そう言うのが神官長様も巫女姫様も納得済みとのこと。神官長様がそ
う言われるなら、神官も表立って反対できない。

いや、ちっと反発はあるのだ。

言わなだけで。レイモンド様みたらに、神殿から離れてしまおう
と思ってるだけ。

それにしても、随分アリシア様を甘やかすものだ。

「思ったより元気そうでもかったよ。てっきり神殿にいるものと。
前の歌姫たちがそう言っていたから」

ひとしきり笑って、レイモンド様が言った。笑つと元気が出る。昔
馴染みのレイモンド様が笑ってくれて、本当に嬉しい。

ああ、ロメリア様の結婚式での話、今頃、王都に伝わってるのね。
「以前より待遇はずっと良くなりました。」心配をおかけして申し
訳ありません。」

「そのようだ。あの巫女姫の婚約者と噂の方だから、とれだけ薄情
なのが恐れていたが、なかなか気の利く御仁らしい。お前の助言を
受け入れているあたり、賢くはあるな。」

まあ、ヨシユア様への評価も厳しいこと。

ということは、まだ、ヨシユア様から婚約の解消を申し入れたこと
は、社交界では広まってないのね。しかも、アリシア様のあの様子。
もう完全に三文小説の世界だわ。

やだやだ。関わりたくない。

そうするのは、無事、歌姫たちを王都に返してからにしてほしい。

わたしは憤り深いから年若い女の子たちの前でそんな戦い、したくありません。しかも素材的に圧倒的に不利じゃない。

ロシエア様のことを信じたいけど、心の奥底では信じられないの。彼が自分の気持ちをはっきり告げてくれたのは、ほんの数日前。それまではわたしのことなんて、都合のいい愛妾ぐらいしか思っていなかったんじゃないかしら？ わたしがなかなか靡かないから痺れを切らしたんでしょう。

逃げる獲物は追いかけたくなる。

レッティモさんの戯曲で、こんなセリフがあったわね。だからってこのタイミングで、口説き落とそうなんてどういってもの？ わたしは醜聞の的にはなりたくありません。もちろん、今みたいな公開処刑も、お断りです！

「わたしも鞍をお借りしていいか？ 歌姫たちを迎えに行く。」
雨はまだ、小ぶりだが、降り続いていた。
「レイモンド様はお城にお残りください。こちらの迎え入れに、助言がいただきたいです。」
今から順に歌姫が到着する。どんな状態で迎り着くかわからない。それに、この先の祭祀や祝福の儀式的打ち合わせもしたい。
迎え入れる方はこちらにも初めてのことで、読めないうちが多いのだ。
「そうか。では、そうしよう。」
「湯殿もお食事もうつでもお取り出来るようにしてあります。次の馬車が到着するまでお休みください。」

ナガから親愛の礼を受けた後、すぐにメイドと料理に関わる使用人に集まってもらった。

歌姫たちが、今から順に到着すること。1日早い到着になるが悪く

思わないうでほしい。彼女たちはとても疲れているのだ。

料理長に向かってわたしは言った。

「あなたの娘さんのような若いお嬢さんばかりです。二二まで一ヶ月以上、慣れない旅をしてやつの思いで、この城に来られます。」彼の娘は15歳だったはず。今回は初めて侍女の役につけていたはず。

「旅の間、毎回違う宿に泊まり、長い馬車の揺れに耐えています。二二も家ではないので、緊張して過二二しているでしょうが、それでも少しでもくつろいでほしいのです。彼女たちは女神の使徒。喜びの歌が、この地に祝福をもたらします。」

そう言つと、二二の目が何か気づいたように変わった。そうなんです。だから、歌姫は丁寧に扱われる。でも勘違いしないで。その祝福はあなたたちを励ます、という祝福なのです。

「今日はまとめて到着するわけではないので、晚餐の席はありません。そのかわり、お部屋でお食事ができるよう、軽食を用意してあげてください。簡単なもので構いません。疲れる旅の後は早く横になりたいものです。お腹が満たされるものを、少しずつ取れるような形で。それぞれが好きな時間で取れるように。手間をかけさせて申し訳ありません。」

そして、侍女長には、常に湯殿が使えるようにしてあげたい、とお願ひした。

恐らく月のものがある姫も何人がいるだろうから、個室をすぐに使えらるように。

入浴は出来るだけ、メイドが手助けしてあげる二二。

静かで清潔な環境を保つよう、気をつけてあげる二二。

必要以上の世話はいらない。その代わり、煩わせる二二がなりもの、必要なものは歌姫が欲しい分だけ与える二二。

具体的には、タオルやりネン。部屋で飲めるようなお茶やお湯。櫛

や石鹸などの化粧品は、階段の踊り場や廊下など、目につくところに置いておけば充分なのだ。

いちいち侍女やメイドを呼ぶのは、遠慮してしまう。

「名前こそ、男爵、子爵の名前ですが、実は継嗣の爵位というものがよくあります。10年たったら公爵夫人というとも、歌姫ならばよくある話です。今の王太子妃様も、もと歌姫。決して、巫女姫よりも格下の扱いを見せなうでください。」

これもよくあること。

現巫女姫であるアリシア様だが、歌姫を引退した後は彼女よりもっと高位の婦人になることもあるのだ。

セシリアが一例。

アリシア様とセシリアの今の関係はわからないが、あの振る舞いのまま夜会でぶつかっていたら、巫女姫を引退した後、アリシア様はたそや悔しう思をすることになるだろう。

社交界の世界はとても、繊細で苛烈なものなのだ。
執事長と、侍女長には折を見てこの話をしてある。

× × × × ×

「ありがとう。アリエッティ。お前がいてくれて、本当に良かった。」

ギル＝ガヘゼナ城が歌姫のために準備していることを話すと、トーマント様は心底安心したように息を吐いた。

その言葉が、欲しかったの。

レイモンド様の言葉が嬉しくて、心が震えた。

誰かの役に立ちたかった。

それしかわたしが、ここにいらる意味があるように思えなかったから。

いろんなことに2番手だったけど、誰かに必要とされることは、順位がつけられない。

それが、かつてのわたしを支えた歌姫のためになるのなら、これ以上嬉しいことはなかった。

椅子に腰を下ろして、足が重くて仕方ないことに気づいた。

「・・・おなか、すいた。」

すぐに、温かいお茶が差し出された。

「すぐにお持ちいたしますね。何度もお話をかけましたので
すが。申し訳ありません。」

ベルセラムが優しく言ってくれた。

あー。ベルセラム。癒されるわ。

ケビソって、本当に目が高いと思っの。存在そのものが柔らかそつ
で、ふわふわしてして、すっく和む。

今まで彼女の存在にこれだけ救われたか。

ベルセラムがすぐに軽食のバスケットを持ってきてくれた。

歌姫に用意してくれたのと、同じもの。

少し温めたバジルのパン。チーズとハム。にんじんのマリネ。

時間が空いても美味しく食べられるように、わちと挟まず用意して
ある。

後は砂糖をまぶした甘いパンと切った果物。野菜のドレッシングを使っ
たグラスに入ったブティック。

旅の間は塩辛い食べ物が多く、新鮮な野菜が取りにくいので、野菜
が入った料理は喜ばれる。

「おいしそうー。」

一日働いたわたくしでさえ、こんなに嬉しいのだ。歌姫たちはとても喜んでくれたとのこと。

おかわりはいくらかでも。と他に何種類かのパンと小鉢に入った小料理を用意して、様子を見がてら侍女に持って行かせている。やはり疲れが酷いらしく、みんなあまり手を出さず、すぐに横になりたかったようだ。気の張る晚餐や挨拶は省いて正解だった。

出来る限り出迎えに出だが、みんなひどくありちまたった。だが騎士の迎えには感動していて、馬で連れてこられた姫だけではなく、馬車から降りた姫も全員騎士にエスコートさせた。

石畳が濡れてたから滑ると危ないからね。

でも、カービングの騎士の鮮やかなエスコートに、女の子たちは頬が染まっていた。

こんなにボロボロでも、それだけで可愛らしい。若ちっぴいね。

普段は巫女姫ぐらうしがエスコートされなから初めての予も多く、ぎっちなく手を取って顔が真っ赤になっして可愛らしかったわ。

わたしには気安くて冗談しか言わな騎士たちもまんぢうではないのが、ちょっとおかしかった。あとでからかってやること。

もともと若い人たちがカービングを出てしまっして少なくとも城も取られていたから、若い人たちが集まる夜会や茶会はカービングでは機会がなかった。

今回、巡業の夜会のエスコートのためにヨシユア様が騎士も侍女も

夜会の前準備をさせたお陰で、騎士たちはきょろきょろしながらもちゃんとした気遣いができる紳士だ。

カービング騎士たちの優雅なエスコートはヨシコア様の見本のおかげですからねー。
みんなの美力じゃならんだからー。

チーズとハムとマリネを挟んで、パクと一口食べて、モネードで流し込む。

美味しー。涙出そう。

結局、巫女姫様のお迎えに出てから、今、やっと座れた。

次から次へとくる報告に判断を仰がれる。
そんなことまでわたしが判断できないうつろのまできんとくるので、いつの間にか領宰と執事が横についていた。

ヨシコア様は、何してるのよー。
って、巫女姫様が離してくれないうつろ。

それで？

ずっと付き合ってるうつろの？

城のことは何もせず。

歌姫の中には体調を崩しているものもあって、全員は迎えつけなかった。

にちらから侍女を派遣して、宿で面倒を見てもらっている。
それだというのは、巫女姫様は出ていなりしキリアム様も、キック
十一様も出ていなり。

全く、何しに来たのよ。

明日のことを思いながら、一口皿にかじりつらした時、ヨシコト様の
執務室につながる扉が開いた。

その部屋からノックもせずに入っているのは一人しかいなり。

もつゝ。せっかく食べてたのに。
しかも、ノックぐらうしてくださうー。

「なんだ、今頃、食べているのか。」

あら。お相手してただけなのに、随分お疲れだこと。声にいつもの
覇気がないわ。

ベルセラムが、お忙しそうでも話がかけられなくて、とわたしの代
わりに言い訳をしてくれた。

もぐもぐと咀嚼して、まだ流し込む。
なんだか、食べる気が無くなっちゃったわ。

食べるのが億劫。

「無理するな。アリヒットヤ。」

気遣わしげに言ってくれるけど、誰のせいですかー。

あなたがアリシア様のお部屋に籠りもりで、ヤチャヤチャしてるか

らでしよ。」

・・・イチヤイチヤ、してたのかしら。

はあ。

思わず出たため息に、ヨシコア様がそつと手を伸ばしてきた。
無意識にその指先を避けた。

ほかの女を、触った手で。

なんて、分不相応な怪気だけとつい止められなくて。
疲れてるからよ。でも顔には出てないはず。

知られたくないもの。こんなみづともない心。

ヨシコア様も、小さく息をついた。

「・・・あなたが采配してくれて助かったと領卒たちが言っていた。
本当にありがとつ。歌姫たちは城に満足してくれているだろうか?。」

「はい。騎士たちの迎えに感動しておりました。温かい湯殿や、お料理にも。ひとくち疲れのようですので、早く休んでもらってしま
す。明日の祈りの時間には出てもらわないといけません。」

本来なら午前中に祈りの儀式をするが、全員が疲れが酷いので、昼
過ぎから行つようしよへト様と調整した。

祈りの儀式は一日一回行われる、神殿の祭礼。これは一年中、巡業
中も欠かされることのなり、巫女姫の儀式。

「ああ、わたしも参加しよつ。」

忙しいのに。アリシア様にも願われたのかしら。

明後日の晩餐会のために、明日は外国からの招待客の面会がたくさん入っているはず。

まだ、歌姫も全員、到着してないし、歌姫たちは練習もしたんだろう。

練習のための部屋を、体調不良者のための看護の部屋にしたり、個室の湯殿にしたりしたので、明日は練習室のことを考えなければいけない。

今日はまだ集めていない、大量の洗濯物のことも。

曇天が続いているので、どうやって乾かそう。

そんなことをいくつか、ヨシコ様に相談していると、いつのまにか領宰や執事長までが入ってきて、報告会が始まった。

列から離れて行方不明になっていた歌姫と下女は、領界で留められていて、騎士がちゃんと保護できたりし。

良かった。

そのまま、宿で待機してもらったことにして、明日、こちらから侍女を向けることになった。

「食べながら話すという。」

わたしの食事が止まっていることに気づいて、ヨシコ様が出た。

もういらない。食欲がわかない。

下げてもらったものにベルセラムに言うのを、ヨシコ様が止めた。

「ダメだ。食べなさい。」

カチーハな、上から目線。
いつものことですが、わたくし年上なんです。
爵位は確かに下ですが。

「あまり、食べたくないのです。」

「手ずから食べさせられたらいいか?」

小さな声で言いつつ、そんなふうに言われた。

公開処刑、禁止―。

ヨシユア様が、一杯だけだからな、と言ってワインを持って来させた。

ああ、飲みたい。だけど、今飲んだら寝ちゃいそう。
この後、歌姫の一人とお話しする約束をしているのに。

巫女姫候補の中で、一番年長の歌姫。
わたしとも面識があつて、馬車から降りてわたしを見て泣き出した。

巫女姫候補といつこともあつて、歌姫を束ねる立場。よほど辛かったのだろう。

明日からのためにちゃんと話を聞いてあげなければ、気分が安定しないままでは、また帰りの道中がきついただろう。

ワインを餌に、ヨシコア様に見守られながら、なんとかサヘドイッ
チを飲み込んだ。

全部食べなさいとくれないうて言っし。一緒に食べるから美味しいの
に。

ほかのものは食べられないう。もう、ワインすらないう。とっつと、や
っと、飲ませてもらえた。

とっつとの、嫌いなんですけど。

わたしたって、お酒は楽しく飲みたいです。

「ベルセラム。自分の主人にちゃんと休憩を取らせるんだ。もし言
うことを聞かないようであれば、わたしを呼びなさい。」

いろいろ突っ込みどころがあるせりつを言い渡されて、執務室から
追い出された。

早く寝なさいうて言われても、約束があるので眠れません。

もう言わなかつたけどね。

言ったら、何としても邪魔してくるんでしょ。

子ども扱いしなさいでござい。わたしは、仕事をしてるんです。

翌日、朝から動き回るべく身支度をして部屋を出ると、キツクナ一卿に会った。

ええ？.こんなところ？！

ここは主寝室もある城主の私殿となるエリア。

もともと、わたしは来賓客室にあてがわれていたが、巫女姫様が入られるので移動している。

離れでもいいんですけど、なんて口が裂けても言えないう雰囲気になっちゃったから仕方ない。

もちろん、ヨシユア様の寝室につながる奥方用の部屋じゃないですよ。

同じ階にはなるけど。

うう家族用になるのかしら？.

階下は泊まり込みの騎士や執事たちの部屋になっていて、同じ階にはおせられないから仕方なくてーとで。

ギルニガンゼナ城は広いけど、30人の歌姫と神官、それに高位貴族になる王宮近衛騎士を泊めたら、もういっぱい。

爵位の低い神官の何人かは城の外の宿で泊まってもらっている。

それでも、ずっと詰めているこちらの使用人の部屋に、今だけ雇いの使用人を泊めさせたりしていっぱいいっぱいなのだ。

高位の貴族とはいえ、いんななどいっしょに入ったら城主に怒られるわよ。

扉を出て階下に向かおうと階段を降りたところにキックナ一卿がいた。

さすがに二二以上の、立ち入りは衛兵に止められているもの。

「ス///ス拝宣！」

何度も面会をさせろと申し込んだが断れたそう。

知りません。わたしは聞いてません。

仕方なく二二まで来てやったのだ、と言われても。それよりあなた、この棟に許可なくいることだけで、城主に大変な不敬だといふことがわからなうですか？

「ロメリアが来ないとは、いついつのことだ?！」

朝からぐっすり寝てですね。

よほど悔しくて眠れなかったのか、隈ができてますよ。

「お手紙でも知らせしたのですが、入れ違いになったようです。ペヤノ夫人は、懐妊なされているので、移動は無理なのです。」

「はあ?！なんだと?。子ができた?！」

何で朝っぱらからそんなこと大声で言うのかしら。いんな公の場所です。

ほら、騒ぎを聞いて、オールドが出てきちゃったじゃない。

彼は昨日、不夜番のはずよ。

「そんな、そんなはずはない。」

力なくキックナ一卿が呟いて、き、とわたしを睨みつけた。

「何故だ?! どうして子など出来るんだ! ス!!! ス神宣!。」

え? それをわたしの口から説明しろと?

とれだけ恥知らずなんですか、この方。

朝ですよ? しかもわたし未婚の女ですよ?

医者でも何でもなり、ただの嫁ぎ連れです。

「説明しろ!。」

「説明、と言われまして。ペヤン夫人は結婚なされたので。」

「ロメリアは俺に惚れてたんだ! あいつめ! 何故ロメリアを抱いた?! ロメリアも何故、あんな奴に抱かれたんだ!。」

ええー?!

紹介したの、あなただって聞きましたけどー?

しかも、だ、抱いたって、あなた。

ちょっとー。この人、止めてー!

なんて説明したらいいの? だれか教えてー!

「あの、キックナ一卿、ここは城主の居住区になりますので、ここでは」

「うるちう! アリシアの言つものに女主人のよつな顔でしやがって! お前がロメリアと親しいというから、わざわざお前を選んだんだ! ちつちとロメリアを呼んで来い!...」

キックナ一卿がわたしに詰め寄ったところで、レオホルドがわたし

の前に立った。

大きな身体に威圧されて、キックナ一卿が怯む。

「オポルトは大男だけど動きが俊敏。

くつくつ笑っているように、ちゃんと力で制圧する術を心得ている。

気安くて優しいくまちゃんみただから普段は気を抜いちゃつけど、こんな風に威圧するときにはものすごく怖い。山が動いたみたい、と感じたことがあった。

「お部屋にお帰りを。キックナ一卿。神官様がおっしゃる通り、ここは我が主人の居住区。立ち入ることは許されません。」
静かだけど、はっきりとしたオポルトが言った。

「おれはただ、スミス神官と話を。」

「我が主人を通してご面会ください。神官様の居室に入ることは何人たりとも許されていません。たとえ神殿に連なる方でも。」

「では、来い。スミス神官。」

「神官様に命令出来る方はこの城にはおられなはず。神官様は神官長様からの厚意で、カービングがお預かりしている令嬢です。先程のお話ならば我が主人も心得ている話。我が主人にお問い合わせください。」

キックナ一卿は悔しそつにわたしとオポルトを睨みつけて、背を向けた。歩き出した後ろ姿にオポルトが呼んだ

「キックナ一卿。」

キックナ一卿の足が止まった。

「カービングでは女性に対する不敬や狼藉は最も重い罪に値します。宝を生む宝石ですから。明らかにこの城でそのようなことがあった場合は、主人自ら切り捨てることを厭いません。私たち騎士もそのようなことがあった場合、斬って制圧しても咎に問われません。」

あらーそんなに、カービングは厳しかったの？。じゃあ昨日の歌姫の仕打ちなんか、カービングの法で裁かれたら、間違ひなく罪になるのね。

「いっ承知おきを。」

レオホルドが今まで聞いたことならくなら、低く首で言った。

怖いー。

祈りの時間。

今までになくくらい神殿に人が溢れていた。

女神の神殿は飾り気がない。

天への吹き抜けと対になるむぎ出しの地面部分。あとは、火と水。

それだけの単純な場所。

屋根付きの部分は人を収容するためにそれなりに広いが、祭祀を行う場所はたったそれだけのことなのだ。

今は平素の祈りの時間なので、特別な祭祀服ではなく、歌姫は歌姫用の制服、神官は神官服で集まっている。

天への吹き抜けを挟むわたしの向かい側には、巫女姫アリシア様。彼女を筆頭に、吹き抜けを囲むように、ぐるりと歌姫たちが並んだ。その後ろに楽隊が何人が並ぶ。

わたしの横に、影が立った。

ヨシエア様だ。

間に合ったな、と息をついた。

巫女姫様のために、急いで駆けつけたのだらう。

「ゲドウオーク神官。」

ヨシコア様がわたしの耳に口を寄せて、呟った。

キリアム様？何か？

意味が分からず、ちらりとヨシコア様を見ると、採るものにわたしを横目で見返された。

？

「親しうのか？名前と呼び合っている。」

ああ。なんだ。

「神殿では名前と呼び合っているのが、普通です。家柄を伏せるために。」

ヨシコア様の耳元に寄せて答える。

密集して人がいるので、大きな声では話せない。

女神の前では身分の別は問われなく。

むしろ公平を期すために、名前と呼び合う習慣。

ふん、とヨシコア様が鼻を鳴らした。

「アリアーなど、随分親しんだな。」

あら、やぎもち？

自分だって、アリア様を呼び捨てにしているけれど。

けど、キリアム様の様子はちょっと異常だわ。

「初めて呼ばれました。」

そっつくと、ヨシコア様が眉を顰めた。

「なぜ？」

そんなこと、わたしにはわかりません。

いや、なんとなくわかりますけど、そんなこと今言ったらややこしくなるでしょ？

だから、首を傾げるだけにしておいた。

願いますから、キリアム様。大人しくしておいて。

祈りの歌が始まった。

アリシア様の声の透明感が薄れている。

残念だわ。

でも、あの透明感を維持するのは難しそのよね。年齢とともに変化する子どもの声のもつたもの。

ほかの歌姫の遠慮がちなこと。

気持ちよく歌っているのは、アリシア様だけね。

長旅で練習時間がないから、喉が閉まってしまうてる。

そつだ、神殿を練習場所にすればいいんだわ。いいだったら思い切り声が出せる。

あとで、レイモンド様に相談してみよう。

祈りの歌はすぐに終わる。

たったこれだけの儀式だけど、とても大事。

だけど、その大事なことを失くしているような儀式だった。

他の神官様たちがこんなことを咎めなうことがすつく不思議。

レイモンド様と調整して、希望の歌姫は神殿で練習してもらったことになった。

ここは広いし、お城は来客が多いから、ちょうどいい。

予想通り、アリシア様は帰っちゃったけど。
あまりの責任感のなさに鼻で笑った。だけど、わたしは歌姫と歌えて嬉しい。

音楽を聞いて、祝福を受けに来る人たちが現れた。
神官たちが対応していたが、歌姫がやらせてくださいと言い出した。
有難い。

結局、日が暮れるまで人波が途切れることはなかった。
暗くなってきたので、護衛の騎士が参拝者を制限してくれた。
だけど、最後の人はもう日が暮れかかっていた。

帰り道が危ないので、祭祀用に用意してあった、手燭に火をつけて渡す。
坂道を下っていく揺らめく火、その向こうにあるお城の灯。
神殿から眺めた。

懐かしい。

あれからもう3年たつのだな、と改めて思う。

初めてカービングに来て、置いていかれた神殿の夜。ここやってお城の灯りを見た。

情けなくて、惨めで、怒りも湧かなかったあの日。

火を熾すこともできず、水を汲んでも、淀んだ井戸水。
冬の空気だったから、ありったけの衣服を着込み、床に転がって疲れ果てて眠った。水を飲むことも諦めて、翌朝、坂道の下の家まで歩いた。

昨日のことのように思い出し、ふと、唇が緩む。

今、そんなことをすればこの地では罪になってしまった。ミシゴア様
が変えたのだらう。

だけど、遅いのだ。
わたしは、すでにその仕打ちを受けた。
受けた辛ちはもう、覆せない。
知らなかったでは済まない罪。

今では、全てが変わってしまった。
わたしは何も変わってないはずなのに。

歌うことで、地の理を治める気持ちも、そのことを民に広める女神
の使徒である矜持も。

それだけのためにここに来たから、あんな流刑の罪人にするような
仕打ちに怒りも湧かなかった。
ここは、女神の祝福を忘れた土地なのだな、と改めて思っただけで。
哀れだ、と思った。

歌も好きに歌えない人生なんて。

歌姫たちを城に戻す最後の馬車が出た。

「アリエッテゝ様。」

暗闇に動かないわたしを心配して、ベルセラムが声をかけた。

「もう少しだけ。待って。」

お城の喧騒が、今のわたしには辛い。

明日は歓迎の晩餐会が開かれる。

ヨシユア様とアリシア様が寄り添った姿を見なければいけない。

逃げたい気持ちが渦巻いて、思わずため息が出た。とても勝てるとは思えない。アリシア様のあの様子では、まだヨシユア様は自分のものだと思っている。

そんな彼女に、わたしはどんな態度をとればいいのか分からず、なるべく鉢合わせしないように動いていてしまう。

「明日は離れで寝ようかしら。」

うるさい噂から離れて、のんびり暮らしていたあの頃が懐かしかった。

「また、叱られてしまいます。」

苦笑まじりにベルセラムが言った。

「そうね。最近、叱られてばかりだわ。黙らなくていいのに。」

思わずため息が出た。

この場所は原点。

カービングでの始まりの場所。

あの時、わたしは受け入れたのだ。

ここでの立ち位置。自分の運命。

そしてここでその運命を覆すことを諦めた。

ここはわたしの仮の居場所。

わたしを2番手から抜けて出させる場所は、ここじゃなくどこかにある。

その決意して使命だけを果たそうと決めた。

その決意は今でも変わらない。

カービングに祝福を授ける巡業。

やっとここまで来た。

歌姫の幸せの歌が、この地を、この民を幸せに導く。

今はその使命に集中しなければ。

だから、変えなう。変えられなう。

ヨシエア様の想うに答えようとする、わたしの根本から変わってしまおう。

わたしは最後まで、歌姫を守る存在でいたい。

あっという間に、晩餐会の時間はやってきた。

お城の中は、たくさんのお客様と、華やかな雰囲気に見え立っている。

懐かしいわね、とベルセラムに言った。

「また侍女になって、恐い込むのかしら？」
ふふふ、とベルセラムは笑った。

「今では見つかりてしましますよ。アリヒット様のお顔を知らな
うものなともありませんから。」

とっただか。
意外というけるかも。

広間と厨房の間だけなら、いつもの侍女や騎士も来ないし。必死に
皿を運ぶだけなもの。

「まだ」冗談ばかり。そんなにも嫌ですか？ 舞踏会は。」

嫌なことを目の前にして、冗談で誤魔化そうとしているのが、ベル
セラムにはとっくにバレている。

城に移ってすぐの頃、呼ばれてもしない舞踏会に恐い込んだ。戯曲
の雰囲気を知らるために。ベルセラムの侍女服を借りて、クタクタに

なるまで皿運びをした。

あの頃はヨシユア様がわたしに謝ってばかりだったのに、いつの間
に逆になったのかしら？

「本当に、祭祀の服で出られるのですか？」

ベルセラムはドレスを手に持ったまま、困った顔をしている。

断ったのに。

ヨシユア様の使いが部屋に持ってきたドレス。流麗な字で、今夜の
夜会でダンスを、と。

あんなに断ったのに。しならつたら、しならー。
苦手なの、知ってるでしょー。

怒られるのは分かっているけど、今日は神官として出ますー。

「あー、これが噂の……。ぷ。」

なによう。

だから、エスコートなんていらならつて言ったのに。

結局、わたしについたエスコートはリヤモント様。

お互い、祭祀服だから夜会に違和感はあるが、今夜は巫女姫一行の
歓迎会なので、浮いたりはいしなり。ニヤニヤとわたしを見ている。

「全く。じゃじゃ馬め」

ヨシユア様が苦味ばじった顔で呟いた。

ヤダ、その顔、かつい。。
初めて好みだと思っちゃった。

晚餐の前の控え室。
祭祀服で入った時のヨシコア様の顔。本気で睨まれた。

ふーんだ。あなたの睨んだ顔には耐性があるんです。怖くありません。目を合わせなければ。

ナーガとシオポルトは肩を震わせて笑ってるし、キリアム様や他の歌姫たちは、ホカへとした顔で見ている。

「よろしいでしょう？わたしは神官なのですもの。」
すました顔でレイモンド様に言うと、呆れ返された。
「単なる誘い避けだろ。お前はタンスが苦手だから。」

う、バシてる。

「い存知なのですか？彼女がタンスが苦手なこと。」

ヨシコア様がちらり、と入ってきた。

また、変なことを聞き出そうとしている雰囲気。懲りない人ね。また、返り討ちにありたいの？

「あれだけ足を踏まれたらな。何回練習しても、全然上手くならなう。気をつけてください。カーンダグ卿。この様子なら、タンスに出ることもなうでしょうけど」

「大丈夫です。すでに踏まれましたから」

あれは、わたしのせいじゃないし。

「くえ、珍しい。お前が踊ったのか。夜会を逃げまわっていたのに」

そんなに驚かないでください。一応、習ったんだから、踊れます。

「そうらしいですね。初めて夜会に出る、と言われて驚きました。歌姫は何人も夜会でも見かけしますから。」

「卿がエスコートを？それは」迷惑を」

「どっという意味ですか?」

とつとつ、口を挟んでしまった。黙ってもつと黙っていたのに、

「驚いたでしょ?頑固で手綱が難しくて」

「ひとつ・・・お兄様?」

お兄様?。とヨシユア様が 不機嫌に眉を寄せた。

微妙な不機嫌。わかる人にはわかる。

ナーガが、面白がつてそんな、ちょつと心配そんな気配。

「ああ、神殿の習わしなのですよ。年若のものは兄、妹と、呼び合うのです。わたしはアリエツティとは付き合ひが長いので。」

くえ、とヨシユア様は上から睥睨するものにわたしを見て、に、と笑い直した。

あー。

ターゲットを見つけた、鷹の目。

やだわ、また、公開処刑にする気なのね。

「迷惑なとんでもない。彼女といると、楽しい。」

「そう言っていただけならなら安心です。とらいつとは。」

レイモンド様が残念な子を見るものにわたしを見た。

「お転婆アリーは健在ってことだな。」

誰がお転婆ですかー。わたしは淑女ですー。

「やっぱり、お転婆だったんですか？神官様は。」

ナーガー。食いつかないー。

「お転婆はしていませんー。わたしは困らせたことなんかならはずで
す。変な噂を流さなうでくださー。レイモンド様ー。」

夜会に出て夜遅くまで寮に戻らなかったり、街に出て変な男に絡ま
れたりして、神官様たちの手を煩わせたことはならわよー。

「たしかにそういうことを困らせたことはないが。お前はやること
が目立つんだ。アスリースの実を皮ごと食べたのは伝説だぞ」

「だ、だってあれは、みんなが食べられるって言うから」

アスリースの実はそのままでは食べられない。

皮はとても苦いので、櫛形にして皮を剥いて食べるのが普通。だけ

と12歳の子はそんなこと、知らなかったのもー。

アスリースの実はけっこう、高価で人気の果物。
神殿に生っていて、初めて切ってならものを見て、食べてもらうか？とちゃんと聞いたのだ。
みんなが快くううって言うから、自分でとってがじりつた。
泣くほど苦かった。

意外だなあとナーガが笑った。歌姫をエスコートするはずの城の騎士たちも。

やめて。
この騎士たちはわたしに気取すぎるのもー。
注意してー。オポルトー。

「そんな、12歳の女の子の失敗を言うくらいなんて」
「オルセイへ領でお会いした元歌姫の方は淑女の鏡のようだったとおっしゃってましたも」
ヨシユア様がぢりげなく庇ってくれた。

そのも。可愛い妹たちの前で、変なこと言わないで下ちー。

「歌姫たちからの信頼は厚いですからね、酒が絡まなければ」

ナーガが肩を震わせて笑いだした。
ナーガ、あなたの愛しい奥様がトへ引きしてるわもー。ヨシユア様も苦笑している。

許さなーしー。

「もう..やめてください..。㇏㇏様..悪評を流すならでください。
。シシ姉様に言うつけてやる..。」

「残念ながら、シゴゼリナはお前が飲み過ぎててなら心配してた。
。それでもなちそれで、安心した。」

「驚くほど酒に強いんですね、彼女」
「止めてください。カービンぐ嬢。いっつは一日酔いもした..とな
。うからって、高をくくってるんです。」

「一日酔いなら、経験しました。ねえ、アリエッテ」
。ヨシコア様がこれ以上なく、美しく笑ってわたしを見た。

くやし。

飲み過ぎてな..。
。王都にいた時より、飲む機会も減ってるんだから。

「わたしは怒りました。㇏㇏様。シエへに連絡します。飲みに誘
。わせませんから。」

ウケ、と㇏㇏モヘトが呟いた。

にや、と笑った。
。ふーんだ。㇏㇏モヘト様とは付き合いが長いから、苦手なものもよ
く知ってるんです。
。奥方のシゴゼリナは元敬姫だしね。

「やめろ、あいつの触り方、最近えぐいんだぞ。」
「知りません。淑女に恥をかかせた罰です。襲われてしまっなちう。

」

「ミシゴア様がシハへとはへ」と聞いてきた。

「卿はお会いしたことがあります。王都の楽器店の。」

あー。とミシゴア様とわたしの護衛のシヤハが、気の毒そうにトモヘト様を見た。

明日、早速手紙を書こう。

晩餐の準備ができて、晩餐会場の扉が開いた。

「 舞踏会に残る歌姫が随分といるのですね 」

晩餐の後、ホールへのエスコートを受けながら、レイモンド様に囁いた。

歓迎の晩餐なので、晩餐は全員出席するが、その後の舞踏会は希望するものだけ。

わたしはいつも早々に引き上げていたが、舞踏会に残る姫も少なくなかった。

だが、今回はほぼ全員が残っている。

何人かお揃いのドレスを着ていることに気づいた。

「 キリアムが全員出るように言ったらしい 」

まただ。また、キリアム様。

「 リリスから良くないつわさを聞きました 」

レイモンド様に囁いて、壁際に設置してある長椅子に誘った。

「 今いる歌姫は外国に嫁ぐよう、神殿から勧められているとか 」

はあ、とレイモンド様が難しい顔をして腕を組んだ。

「 俺たちは何も知らされてない。キリアムあたりが、一人一人呼んで話しているらしいな 」

「 神殿が勧めているわけではないのですね 」

「 そんなことを神殿がする必要がない。外国が歌姫をほしがるなら

ちちゃんと口説き落とせばいい。」「この国の貴族と同じように」「
うん、とわたしは頷いた。

「外国に嫁ぐことを了承した歌姫だけが巫女姫の候補に残っている
と」

「見方によってはそうかもな。歌姫たちの詳しい事情はわたしには
分からない。ただ、今回は高位の令嬢たちは巡業への参加をのきな
み辞退した。アリシア巫女姫への反発は強い。候補として侍るのを
良しとしていないのだろう」

「なぜアリシア様の振る舞いを誰も抑えられないのですか？神殿の
信頼を損ねます」

レイモンド様は頭をしゃくった。その先には、外国の賓客と話し込
む、キックナー卿。

「宰相子爵がアリシア巫女姫についていることは隠れてない。今
回の巡業についてくるなら、堂々としたものだ。現役の宰相の子爵
だからな、正面から抗議もしつらう。それにキリアムは代々神官を
出す伯爵家。今の神官の中で、爵位をもつものは少ない」

キックナー卿がつらっているからアリシア様はあんなにも奔放な振る
舞いを許されているのだろうか

「リチャード様は何も仰られなうのですね」

「あの方のことだ。時が来るまで何も言いつかりはなうだろう。」「
」に送り出されたということは、わたしも試されているんだろう」

「・・・・・・・・レイモンド様は何が気づいているのじゃるんですか
？」

リチャード様だ。この不穏な空気を知らなはずがなし。それなのに巡業を決行させた。

「キリアムたちは歌姫を外国に出そうとしている。わたしが分かるのはそれくらいだ。一体なんのためか、わたしには分からない。」

「・・・外国からの寄付はとつなつてますか？」

「増えてはいるが急激にとつたことにはなし。」

レイモンド様はわたしを見た。

「寄付で神殿の動きは変わらなし。巡業にしても歌姫との縁にしても。カービンダは寄付を積んだから巡業が呼べたと思っているのか？」

わたしは首を傾げるだけにしておいた。

オルセイ伯爵との会話でロシエア様から巡業の願ひ出を出してないような雰囲気だった。どんな手続きをしたのか、深く聞かずにいた。

こんなことになるのなら、きちんと聞いておけばよかった。

それに巡業が決定する過程もわたしは知らない。

歌姫は祈りのための音楽を研鑽することが仕事で、神殿の運営には巫女姫以外関わらなし。

「お前にはアリシア巫女姫たちから何か働きかけがあつたのか？心配していたんだ、本当に。ロメリアたちがあんなことになって、アリーもこんな辺境に送られた。リチャード様はお前も外国に出そうと思つてらっしゃるのかと勘ぐつていた。ロメリアやローズはそれなりに幸せになっているよつだが・・・」

「レイモンド様はロメリア様たちの様子を知存知なのですか？」

「シゴゼリナに繋がっている元の歌姫たちからの噂は聞いている。だが今は、ロメリアとは誰も繋がつていなしと思つ。ローズは・・・

」

「ローズ?..ローズはどうしているか、^二存知なのですか?..」

わたしは噂しか知らない。

歌姫を辞めて、結婚の話がなくなって、混乱していたわたしは、夜の断罪劇で社交界から追放された彼女たちの跡を追えなかった。ロメリア様もローズも、西辺境伯の家系に繋がる家柄で、名ばかりのわたしと違ってきちんとした貴族令嬢だった。

神殿から出てしまえば社交界ぐらいでしか、再び会える機会はなかった。

レイモンド様が会場を見回して、再びわたしに目を向けた。

「よく^二存知の方が^二にいる。あとで紹介しよう。わたしも先程声をかけられて驚いたんだ。」

「アリー」

レイモンド様がわたしを呼んだ。

「この巡業が終わったら王都に戻ろう。お前はよくやったよ。もう十分だとりチャート様も仰ってる。これ以上、^二に尽くす必要は無い、と」

ツキン、と胸が傷んだ。

加護のない土地と言われたカービング。巫女姫を^二の地に迎えて、祝福を授けてもらうことがわたしの使命。

「・・・アリシア様は、この巡業で祭礼を飛ばされたとか。^二は大丈夫でしょうか」

「カービングに来たかったんだ、それぐらひはやるだろう。それだ

けで辺境伯が許すかは分からなうがな」

とつらつ意味？

「南東地域が巡業に選ばれたのはアリシアの為だ。そんなの誰の目にも明らかだ。いずれ領主夫人として出向くために巫女姫として見せつけたかった。それなのに、祝福と云うか祭礼さえ行わぬ。まあもな領主ならそんな歌姫はいらぬと言って破談にするだろう。・
・カービング卿は既にアリシアを見捨ててるように思える、わたしが見る限り。ここに来てからお前をぐた褒めだったぞ、巫女姫の前で」

何やってるのよー。人がらなり時にー。

それにしても。ここまで資質のなり巫女姫がとつとして選ばれたのだらう。

「・・・・・・・・お前は若いしな。結局、どれだけ頑張っても神殿から権力を奪取けるのは難しいことなんだらう」

えー、とつらつと。やめてよ、わたしは純粹に巫女姫をめざしたのに。たとえそこであつてもわたしは祭礼を失くすことを許さぬわよ。

その地位を望んだのなら、張りぼてであつても役割を果たすべきだ。

「ロメリアはカイネ港にいるらしいな」

「ギックナ一卿は、ロメリア様は自分のところに帰つてくると聞いていたようです」

「笑わせる。あの顔で」

それは存在否定ですよー！.気をつけてください。レイモント様。
たしかに、美男子とは言いがたいですが。

「もちろん、ロメリアとは釣り合わないと思っただんだ。ロメリアも巫女姫の時はだいぶ、鬱屈していたし、自信を無くしてたんだろっな。あんな奴に嫁ごうなんて」

「驚きました、ロメリア様があんな性格だったなんて」

「ああ、元気になったんだな。良かった。昔はつまらないだけだったからな。氷の巫女姫だって。腹を抱えて笑ったらと一瞬で本気で足を踏まれたんだぞ」

「お兄様が余計なことを言うからです」

「・・・歌姫はだいたい淑女じゃない。ホントのことなのになんで怒られるんだ」

納得いかない、レイモント様が立ち上がった。

60 懐かなら猫と優しい旦那様

レイモンド様が連れてこられたのは、バスター王国の正装をされた方。

「ザトギエル領のバスター公館を預かりますエフシットです。美しい神官様」

わたしも淑女の礼で返す。バスター王国を連れてきたところからは、彼女は今、彼の地にいるのだらう。

「我が国の行軍演技を取り入れてくださったとか。大変、光栄です」
おっと、そうでした。おれおれ。

「貴国にくらぐたら子供の遊びのようですが。以前、見せていただいて、大変感動したのです。いつかはあのように、凛々しい演奏を我が国でも見てみたいと、ずっと思っていました。明日、祭礼の前に演技させていただけますので、どつぞい覧ください。できれば、」
助言もいただきたらのですが」

「それは是非とも。それにしても」

エフシット様はちょっと唇をついて、おじおじと、わたしを見た。

「妻には聞いていましたが、本当にあなたのようなか弱く淑女が、行軍演技などよく指導されましたね。この会場にいる騎士も演者がいるのでしょつ。彼らのようなくまじい騎士をよく、あなたが」

大丈夫。わたし、殴ったりしてないわよ。

「あの、奥方様は私のことをご存知で？」

ああ、とエラッド様がおつとりと笑った。なん다가、雰囲気の良い人。バストマ皇国は軍人の国。公館を預かるくらいなのだから、彼もまたそれなりの地位の軍人なのだろうけど、猛々しちの全くなり、優しそうな方だ。

「申し遅れました。わたしはローズの夫です」

一瞬、ホカへとなった。

その顔にますます、エラッド様は優しく笑う。

「実は、こちらの招待にとついても行きたいと言つてたのですが、もうすぐ子供が生まれますので、なんとか説き伏せて、わたしだけ。妻から預かったものです。こちらを受け取っていただけますか？」

取り出されたのは、青い封筒。裏は見覚えのある筆跡で、ローズ、とだけある。

言葉が出ず涙が溢れた。

それを必死に押しとどめる。

さっ、とわたしの前にジャンが立ちはだかった。

違つたよ、やめて。となんとか言つと、エラッド様から椅子を勧められた。

「彼女は、今、どこに？」

「ザドキエル領に。実家から母上に来ていただいております。そろそろいつ産まれてもおかしくないのです」

良かった。と呟いた。

「・・・幸せ、なのですね」

エラツト様の顔を見るとなんとなく分かる。

絶対音感と、ピアノに対する天賦の才を持つローズ。

天才肌で、少し気難しくて、だけど情に厚い。アリシア様とその友人たちとよくぶつかって、その調整役によくわたしが立たされた。それを引き受けて、いつも謝ってくれるのはローズだけだったけど。

「わたしにとっては目に入れても痛くならほど、可愛い妻です」

ああ、なんか、分かる。エラツト様とはお似合いだわ。

気難しいけど、音楽のセンスは間違いない。天才的な分、とても一途で情熱的なものよね。ちょっとわかりにくいけど。

でもエラツト様なら、そんな彼女をちゃんと理解できる気がする。そして、上手に影から助けてあげている。

「良かった。とても心配してたんです。わたしには伝手がなくて」

「あまり大っぴらにはできませんでした。取り返されるのが心配で。でも、ザドキエル領では、のびのびと過ごさせていただいています」

「バストア王国ではなく、ザドキエル領に留まっているのですか？」

それでは、わざわざ、我が国から歌姫を迎える意味がないのではな
いか。

「我が主人、皇帝陛下の御配慮なのです。じばらくは、公館付きとすると。いずれ、近いうちに皇国へは戻りますが、いかなり母国から離れるのは寂しかろうと。女神の使徒である歌姫を誘いませる」

とは、本意ではありませんから」

優しい――。

「アリエツテイ様」

エラッド様が、少し膝を寄せて話しかけてきた。先程より真剣な顔だ。

「妻は、あなたを一番心配しています。この先、巫女姫様が代替わりになった時、あなたが悲しまれることがあるのではなか、と。私たちは密かに噂を集めているのです」

ああ、と思わずため息をついた。

みんな知ってるんだわ。わたしが置かれている立場の危うさ。もしかしてヨシユア様の心変わりも。

「もしこの地を去るのなら、ぜひザトキエル領のわたくしごものところへ。ここからなら王都よりも近い。そして国内です。動きやすいでしょう」

なんて心動かされるお誘い。だけどザトキエル領はヨシユア様の懇意の場所。気が抜けないわ。

「もちろんその後、我が国でそれなりの身分でお迎えします。我が妻とあなた様であれば、加護のない長よりも勝る」

おおっと、大胆な。レイモンド様の言うように、アリシア巫女姫の振る舞いは誰の目にも明らかなのね。

「どうぞお気持ちのどこかに。わたしたちは、あなたの才能を尊敬

してします。妻も近くに来ていただければ心強いと」

そんな、外国に一人で嫁ぐのは不安だね。いくら気丈なローズであっても。

「ローズは気が強いけど、可愛らしいですよ。あなた様にそこまでのことを伝えるなんて、とても信頼されているのですね。よくわかりました」

そうすると、エラット様は相好をくずした。あらあ、もつぽと惚れてらっしゃるのね。

分かるわー。ローズって懐かないう猫なのよ。しかも、すごい才能があるね。懐かれると嬉しいから、つい構いたくなっちゃう。

「流石に良くお分かりですね。ですが、あなたは妻から聞いていた印象と少し違う。彼女から聞いていたのは、もっと大きくて覇気の強い方だと思っていました。こんなに華奢で弱い女性とは思ってなくて。彼女は、あなたとゴティア公女殿下にはよく頭を抱えさせられたというものですから」

ええー？。頭を抱えてたのは、わたしと「バ」のほつち。

しょっちゅう、アリア様たちとぶつかってるんだもの。

「なんてこと！彼女の気難しさに手を焼いていたのは、こちらの方ですのに」

「ふふふ。ですが、わたしにはその気難しさも魅力的なのですよ。紹介いただいたキックナ一卿には、嫌味を言われましたがね。もう少し積みば巫女姫が手に入るのにと」

す、と血が下がった。決定的な証言。

やはりそんなのか、と地面がぐらついた。

「おかげで彼女には初めさんざん、なじられました。金で買ったのだらうと。もちろんそんなつもりはありません。私たちは正規の手続きだと思って話を通じたのですから」

もう一度、エラッド様の笑顔が冷たいものになった。

「だからこそ心配しているのです。あなたを。神殿に残っているのはあなたしかいなり。しかもこの短期間で今までにならぬ功績を挙げた。そして後ろ盾もない」

わたし？わたしまでも？

そうか、わたしが一番危ういのかももしれない。

なにせ後ろ盾になる家がないに等しい。

そのためにキリアム様はわたしに接触しようとしているの？..

「今からキックナー卿に挨拶にいこうと思つたのです。改めて妻に出会わせていただいた感謝を申し上げますね」

楽しいお話をありがと。その言いつゝ、エラッド様は立ち上がり優雅に礼をした。

わたしも立ち上がる。

「わたくしも一緒に一緒させていただいてよろしいですか？」

エラッド様が、目を見張った。

「大丈夫なのですか？」

「い挨拶をせねばならならと思つてゐました。あなた様といゝ緒ならば、安心なので」

確かめたい。これが本当のことなのか。

お願いします。と言つて、エドワード様は少し難しう顔をして首肯した。

61 イケボ！しかもこんなにイケメン？..

バストア王国のヒロツト様と、2人で話し込んでいたキックナ一卿とキリアム様との距離が近づく。

キリアム様は面白くなさそうに、目を眇めてわたしを見た。

「どうしてヒロツトでいいなんだ。せっかく、タヘスに誘ってやるつもりで来たのに」

キリアム様とキックナ一卿は神官だが、夜会服。

誘われたくない。なんで、上からなの？

「私にタヘスは必要じゃない。改めて、巫女姫に来訪、ありがとうございます。カービヘグの民は巫女姫の祝福を待ち望んでおりました。無事連れてきていただき、ありがとうございます」

2人とも、鷹揚に頷いた。

「キックナ一卿」

ヒロツト様が切り出した。

「覚えていらっしゃると思いますでしょうか。バストア王国のヒロツトです。今夜は改めて、妻を紹介させていただいたお礼に。何度かお手紙をいただき、御心配くださっていたようですが、ロースも落ち着いて、わたしに心を開いてくれるようになりました。今回も、夜会に来たがっていたのですが、そろそろ産み月になりますので、ご遠慮をいただいております」

は？とキック十一卿の眉が寄った。

ち、と舌打ちをして、大きくはないが聞こえる声で悪態をついた。

「ロメリアという、なぜ歌姫のくせに簡単に抱かれるんだ！」

キック十一卿が憎々しげに言い放った言葉に目を見張った。
わたしの後ろに控えている騎士の気配が変わったのが分かった

「おや、それは、ローズにわたしは役不足だったというのでしょうか？
聞き捨てならないですね」

エラット様が温厚な笑顔のまま、冷たい声で言った。
そういつわけでは、って今頃じとるもじとるになって、馬鹿過ぎる。
なんでこんな頭が悪い人が宰相の子供なのかしら。

「ああ、やとお話ができるようだ。わたくしも仲間に入れていただいていいですか？」

深みのあるバリト。

こんないい声の人、はじめて――と見ると、キリアム様とわたしの横に背の高い美形の男性が立っていた。

この人、どこかで。

「お久しぶりですね。スミス様。覚えていらっしゃるじゃありませんか？
ペヤン会頭の結婚式でお会いしました」

あ――。あの時の、歌手――

こんな美形だった？！ ちゃ――

ロメリア様とトコエットの劇中歌を披露してくれた。ものすごい美声。男性のみの合唱団もこの人が率いているって聞いた。

「もちろんです。とても印象的でしたので」
こんな美声、滅多になら。話してるだけで腰にくる。ああ、どうしよう。顔が赤くなってる。

「良かった。今夜はガイネ港ではなく、マドバセナの代表としてきたのです。わたくしとも、歌姫を望んでおりますので」
とキリアム様を見た。

「神官のゲドウオーク様ですね。お手紙、ありがとうございます。マドバセナのローレンです。お手紙には歌姫様、とありましたが、神官様もご紹介いただけるのでしょうか？もしこちらが選べるのであれば、こちらの神官様をご紹介させていただきたいのですが」

あー、やっぱりか。
この夜会は顔見せだったのか。
思わず顔がひきつるのをなんとか留めた。

「ご紹介も何も。私たちはすでにお知り合いではありませんか」
苦笑して、口を挟んだ。
キリアム様たちに簡単に主導権を取られるものかー。
これでこの会の趣旨を覆してやるー。

「そう言っただけだと、幸いです。素敵な女性とお近づきになるのに、不粋なことをするのは、私たちの気性に合いませんから。それに、ゲドウオーク様からご紹介いただいた歌姫は、随分年若の様子。とても緊張していらして、お話は弾みませんでした。できればあなたのように機知に富む大人の女性とお知り合いになりたかったのです」

と、優雅にわたしの手を取って恭しく頭を下げた。

「ダンスにも誘いできないのが残念です。ミス神官様。ペヤハ会頭の式ではとても可愛らしかった。今のあなたはもっと大人の雰囲気素敵です。ぜひ、お似合いのドレスをお贈りしたい」

なんとまあ、隣国の男性の積極的なこと。ロメリア様も、ここやって口説き落とされたのね。キックナー卿なんか振り向かれないわ。

62 刺してやる！

会場の雰囲気が変わった。

ワルツが終わり、踊りに出ていた人たちが、一旦、休憩に入る。
給仕のものたちが、グラスを盆に乗せ、会場をまわり始めた。

巫女姫アリシア様とヨシユア様が、こちらに向かってきたのがわかった。

紅潮した頬で、美しく微笑むアリシア様はヨシユア様の腕にしがみつくようにエスコートされている。

・・・・・・・・面白くない。

だけど、絶対に眉一つ動かすものがー。

「皆さま、お揃いで楽しそつだ。ダンスはどれなかつたのですか？」

ヨシユア様が見回しながら言い、ちりげなくアリシア様から離れた。
給仕に盆を持って来させる。喉の渇きを癒すために、飲み物が運ばれた。

あら、こんな可愛いカクテルを作ったのね。歌姫たちが喜びそつ。

オレヘシの華やかなカクテルに、この時期が盛りの白い花が添えてある。

もう一種類は青のカクテル。縁取りに塩がまぶしてあり、小さな果物が添えられている。

ローン様が、すかさずオレハジのカクテルを取ってわたしに渡した。

乾杯、とヨシユア様が言って、それぞれの杯に口をつける。

うん、甘い。だけど、結構お酒が濃いわよ。口当たりがらうから、慣れない歌姫は飲み過ぎないか心配だわ。

だけど、オレハジの爽やかさが会場の蒸し暑さを払って、気分がらうい。

「皆さま、お揃いで何のお話でしたの？随分、楽しそつでしたわ。」

アリシア様が出た。

あー、ローン様とのやりとりを見ていたのね。

めんどくさいことになりそつ。

直にちよつとしたミスが入ってる。

これだから女王様は。

「神官様をタハスのお相手にお誘いしてはいたのです。今回は諦めませんが、次回は是非にと。私から素敵なお相手をお贈りしたらと願ひまして」

ローン様が悪びれず言う。

何とてうか。ほんとに臆面もなく口説くのね、この地方の方々は。

ロメリア様の式の時も随分と誘われて、お姉様たちの陰に隠れて逃げ回ったけど、これが普通なのね。

こちらの国の男性たちがたじたじたわ。

「あ、アリー、わたしは話があると」

「おや、ゲドウオーク様とはそのものな」関係だったのですか。だからスミス神官様は」紹介されなかったのですか？」

「いえ、まさか。ほほほ、と笑ってみせた。キリアム様にものすい顔で睨まれた。にわー。ちょっとローン様に寄って」。

「わたしの妻からもそんな話を聞いたことはないですね。アリヒッテイ様は浮いた話のなり、難攻不落な歌姫だと。ですが、神殿の」紹介なくお付き合ひできるのであれば、わたしともからも是非、推したいものがありますよ」

ヒラット様がおつとりと話した。

ローズ。何気にモトならつていってバツしたわね。もつと。

「歌姫と出会うのに神殿からの紹介が絶対に必要だなど、初めて聞いたな」

ヨシユア様がいつの間にか後に立っていた。

ああ、なるほど。

知っていたのね。そのためにこの会を開いた。

背中がゾワゾワとした。

「おや、そののですか？わたしはてっきりそつたと睨ってしまってた。なにせ妻にはギリギリまで会つていって叶えませんでしたから」

「私も。ゲドウオーク様からの手紙はそのものに取れ取れまじただけだね。あとは寄付の額によると」

ああ。カービング辺境伯の前で決定的な証言。

あ、いつのまにジャンがキックナ一卿の後ろに。

「私は初めて聞いたな。そんな仕組みだったのか？。アリエッティ」

ええ、お答えいたしますよ、ヨシコア様。すっかりご存知なのでしょう？。だって統括地域の主としてずっと巡業の様子を見守っていたんだもの。

キックナ一卿がわたしを通じてロメリア様をここに呼びつけようとした時から、おそらく知ってたんだわ。だから断られたらいいと言っていたのね。

だけど、どうして黙っていたの？。

教えてくれたらこんな巡業、わたしは許したりしなかったのに。

「寄付で歌姫が縁づくのであれば、私のような嫁ぎ遅れが出るはずもございません。私が良い証拠でございましょう？。神殿に歌姫との縁を願ひ出でるのは、若しお嬢様をお預かりしている親代わりだからです。通常の求婚でも、ご家族にご挨拶をしてお付き合ひをするのは当然の礼儀。同様のことでございます。歌姫は女神の使徒という役割を持っておりますから、望んでくださるところは数多くありますが、お互いの気持ちがお認め合つていないと幸せは成りません。今まで縁づいた、歌姫たちはみな、夜会などの社交場で殿方と出会ったり、それなりの方のご紹介を経てお互い惹かれあつての結果でございしますよ」

「ならば、寄付は何のために？」

「私が知る限り、歌姫の紹介と引き換えに、神殿から寄付を募る」とはなかったと思いますが。そもそもが神殿は自ら首を上げて寄付を募ることは、あまりございません。領主の後ろ盾を得ております

ので。神宮である私の方にも、今現在、寄付を募るものじいの指示はいただいております。中央の方では何か事情がございましてしものか？」

あら、キリアム様とキックナ一卿の顔色の悪いこと。ちょっと刺すぞたかしら？

「まあ、夜会でこんな不粋な話は似つかわしくなり。詳しくは席を設けて、私が伺いましょう」
ロシニア様が明るく言った。

お願いいたします、ロシニア様。

歌姫は幸せの歌を奏でる者。嘆く言は聞きたくなさ。

「おすぎです。アリエツト様。神官長様の覚えめでたい」

エラツト様が、耳元に口を寄せて囁いた。そして、胸に手を当てて大仰に頭を下げる。

わざわざ。エラツト様。やめてください。恥づかしい。

「このよつな姫が未だ、縁ついでならとは。まさに僥倖。やはりバスタ王国にお越しください」

「そこまですも。エラツト様。スミス神官様にはザトキエル領が先に申し込みをしています」

おや、また新人？

今度は随分な美少年ね。

「コラツト。お前は、招いていならはずだ」

ヨシユア様とわたしの間に滑り込むように入ってきた美少年に、ヨシユア様が不機嫌に言った。

あら、アリシア様。いついつ方も好みなのね。なんてわかりやすい。確かに、3年前のヨシユア様もまだ美少年の面影がありました。今では、すっかり大人の男性ですけど。

アリシア様はキックナー卿とキリアム様のこの企みを知っていたのかしら。分からならわね、知っていたらただじゃ済まならわ。だっていずれ自分が嫁ぐつもりなのとこそで、人の売買を許すのよ。奴隷もいるこの国で人の売買は重罪。

巫女姫がそれに加担するなんて醜聞とこそじゃなうわ。

「祖父の名代ですよ。兄二人に勝ち抜いてきたのです。わたしにもお声をかける権利はあるはずです」

あれ？ヨシユア様の知り合い？随分、親しげね。
まあ、並んでたつとナカとはまた違う眼福だわ。

「リント領の領宰、コヘラツトニストウオニリントです。お見知りおきを。スミヌ神官様」

についり、笑つと発光する。ヨシユア様みだい。まあ、――。
世の中つてこんなに美形がたくさんいるのね。なんだか、自分がコ
ミみだりに思えてきたわ。
もう、疲れちゃった。帰つてもいいかしら。

ちら、とヨシユア様を見ると、氷みだいな目でコヘラツト様を見て
いた。この眼光に顔色変えなうなんて、この方も若うのに相当、腹
黒いんだわ。

「実は私は、王都でお会いしたことがあるのです。新年にザトキエ
ル領のタウンハウスで」

ああ、あれ？いたっけ？リント領の方なんが紹介されてないはず。

「私はザトキエル辺境伯の孫に当たりまして。本日は祖父の代わり
に参りました。どうしてもあなたにお会いしたくて。」

リント領はザトキエル辺境伯が統括する地域の中の一つ。今はザト
キエル伯のお孫さんで、コヘラツト様のお兄様が治められていると

のうと。

「祖父はあなたを射止めたものにこそ、次の辺境伯に相應しいと申しています。それに限らずとしてまあ一度も会わなかったのです。あの時、見事に行進曲をピアノで弾かれた様子が忘れられなくて。エチエア神殿の任期の後は、ぜひ私のところへ来ていただきたい」

うーん。

わたしの好みを言わせてもらえば、男臭さが足りなりのよね。王都にいた時は彼のよつな美少年が好きだったけど、ここに留まってるうちになんとか騎士たちがかつよく見えて。もつ線の細い女性的な感じじゃ、物足りなうっていつか。

きつと年取ってきたのね。

いのいたたまれない、雰囲気。

はあ、疲れちゃった。どうしよう。

「みなさん、何が誤解なされてるよつですが」

ヨシエア様が張りのある声でみんなに言い始めた。

人の耳目を集める話し方。声の出しかた。よく訓練されているのよね。自分の美貌も、見せる表情でどう思われるかも。

ザドキエル辺境伯は、ヨシエア様と懇意で教育されていたつていつから、コハラッド様も見た目に騙されちゃダメね。

「彼女は我がカービング領エチエア神殿の神官ですよ。せつかぐこの地にいただいた祝福です。カービングの民の信任も篤く彼女を、手放す気などいつちりません」

「おや、それはずるい」

エフシム様が言い募った。

「カービンぐくは巫女姫様が降嫁されるとのこと。1つの地に2人も歌姫は贅沢すぎる。そうですよね。アリシア巫女姫」

そういって、みんなの目がアリシア様の方に向いた。

そっとエシユア様を盗み見ると、何の表情も伺えなり目でアリシア様を見ていた。その視線から逃れるように、アリシア様はちよつとつつむき加減に言った。

「その、先のごとは、わかりません」

ええ？

エシユア様がわたしと目を合わせて、目元だけで笑った。

言われた！.言わせましたね、あなた！.

「おや、それは、私たちも巫女姫を手に入れるチャンスがあるということ」

ローレン様がいつのまにか、アリシア様の横に立ち、恭しく礼をした。

「巫女姫アリシア様。ぜひ、私と踊っていただけますか？」

稀に見る美言。アリシア様も頬が赤くなってる。

ほんとはあなた、誰でもいいの？

なんか、ちよろい女。

ローン様がアリシア様とタハスの輪に入っていると、また、飲み物が回ってきた。

今度はいスキの水割りと、似た色合いのカクテル。おそらく同じものを使っているのだらう。

コハラッド様がカクテルを取ってわたしに渡そうとしたのを、ヨシア様が止めた。そして、水割りのグラスを渡す。

「甘いものよりは、こちらだらう？」

あらうとも。その通りです。

これ、独特の香りね。華やかだけど、飲みやすいわ。どこの品かしら？

「こちらは、ローンの特産になるのです」

盆を運んだ給仕の横に、新たな招待客。

「くんはんは。みなさま。私は隣国、コール公館を預かります、ハイグでいぢります。エハラッド様はお欠しづりでいぢります」

2人が握手を交わす。とても懇意な様子。

コールの公館はカーンヘグの中にある。

「私どもの屋敷には、春の日の祭りなどはガイネ港のペヤン様に夫妻もお泊りになっていたのですよ」

あー。そううつこと。道理で好きにカーンヘグに入っていれると思っただ。

ガイネ港やアトベセナは半島に並んだ海上交易都市。

同盟を結んで一つの国のものなまともりを見せているけど、実際には一つの国じゃない。

盟主が不在で、今はまだ各都市ごとの力が強い。一つの国と一つの都市も正式な国交を結んでいらないので、入国するときにはだくちんの身元を証明する書類が必要になる。

だけどコールなら小ぢいながらも、王国。そこから裏書きをとれば、簡単に入っていられる。

コールはカービングと国境を接しているんで、公館はギルニガハゼナにある。そして公館がある国との交渉権は、公館をもつ辺境領が持つのだ。カービングはコール、そしてその向こうに広がるガイネを含む海上交易都市群との交渉権を他の領より優位に持っている。荒廃している今はそれを活かせるとは言いがたいけど、ギルニガハゼナはその昔、交易地として賑わっていた。

406

「ロースはコールの街でロメリア様ともお会いしているのです」

「まあ、良かった。ちゃんと連絡取れていたのですね」

「ペヤハ夫妻は我が国に別荘をお持ちですので、あまり必要のないお手紙はそこに保管されたりするのですよ。例えば、神殿からなど」

ライズ様がキックナ一卿を見ながら言った。

キックナ一卿の顔のひどいこと。

まるで食ら殺しそつたわ。だけど、恐ろしいのはロシエ様の方が上ね。

わたしまだ、凝視できるもの。

「今回は、ペヤハ夫人の引継承を経て、しっかりと持ち帰ります。

すでに領宰殿にはお渡ししました」

ふーん。随分、カービングに隷従するのね。まるでヨシコア様が主のようだわ。

「・・・アリー、君は神殿の味方のはずだ。こんなことは言いたくないが、わたしは次代の神官長だぞ。これから先の歌姫の動向はわたしが采配するんだ」

キリアム様が真つ青になりながら、わたしに言った。

リチャード神官長様は、キリアム様の動きもアリシア様の奔放さも容認している。なぜそれが許されるのか全く分からないうが、キリアム様がここまで自信をもっているのだ。おっと彼は次代の神官長なのだろう。

だがこんなことが表沙汰になっても神官長になれるという自信は、どこから来るんだろう。

自分が罪を犯しているという自覚はなうのだろうか。

それとも、リチャード様が黙認しているから大丈夫だという自信なのだろうか。

「カービング卿、君はアリシアと婚約をしているはずだ。いくら女手がなからと言って、この娘を女主人のようには振る舞わせるとは。まあか、色仕掛けでもしかけたか」

はあ、とヨシコア様がため息をついた。

「全く、頭が痛くなるくらいの下衆だな」

わー、急に引き寄せられてきたわー。グニスが増えるー。

「この難攻不落な姫を口説き落とすために私がどれだけ苦労してる
かなんて、君たちには想像もつかないんだろうな」

「あー...」

「そろそろの、やめてって言ってるのに」

「言ってるけど。ちゃんとは言ってるけど...」

「そろそろと、巫女姫一行の前でしそつだから、ヨシヨシ様の近く
に居るの、避けてたのに」

「空気、読まなうの?」

「まあか、本当にアリヒットヤのことを好んでると思わ言っのか
?。君はアリスアの婚約者じゃないか」

「正式な婚約はかわしてませんよ。神殿くの願ひ出も取り下げてい
ます。グドゥオーク卿」

「だが、アリスアは納得してない。一度は交わした婚約を破棄す
るとは、なんと失礼な」

「正式な婚約ではないと言ってるでしょ。お互いの気持ちのある
ところで交わされる約束を他人にとやかく言われたくないですね」

「なんと不誠実な」

「えー?。あなたたちがそれ、言っの?」

「ほかの人はともかく、キックナ一卿には言われたくないわ。」

「巫女姫は国王と並び立つ存在だぞ。そんな不敬が許されるはずな
い。約束は実行してもらおう」

キリアム様が不遜な態度で言った。

キリアム様。あなたが対峙してるのは、辺境伯ですよ？

キックナ一卿というキリアム様という、どうしてそんなに尊大な態度でいられるの？。ここはギルニガハゼ十城。ヨシユア様の機嫌を損ねて斬られても、誰も文句は言えないのですよ。

「私が望んだのはこの地に祝福を授ける巫女姫。神殿に願ひ出たのは、歌姫の中の歌姫、本物の巫女姫です。アリエツタイはこの地に改めて祝福を授けてくれた。私たちの巫女姫」

それは違ふと思ふ。

巫女姫は巫女姫よ。わたしではなかった。

いくら、ヨシユア様がそう言っても変えられないのよ。
苦い気持ちを飲み込むように、グラスに口をつけた。

「また。水のように飲んではいけなう」

ヨシユア様に、グラスを取り上げられてしまった。

まだ残ってたのに！

残念な子を見るような目はやめてください。かついりいりと言つてたくせに。

「不敬な！。アリシアがまるで本物ではないような言い方ではないか！。」

「わたしは 辺境伯ですよ、キックナ一卿。そして王都で育ったんです。王族と同じ教育を受けてね」

「・・・だから、なんだ！。」

「明日の祭礼がうまく終わることを心から願っているってことですよ」

どつどつどつ。

やっぱりアリス様は巫女姫として歌ってはいけないの？でも。でも彼女は巫女姫だ。この世界で巫女姫を名乗れるのは彼女だけ。そしてカービングは彼女を待ち望んでいる。

「ところで、カービング卿にお返事をされたのですか？スミス神官様」

コングリット様がわたしを覗き込むように聞いてきた。

急に背中を下の方に、引っ張られた。

膝が、がく、と落ちる。

何するの？ヨシア様でしょー。

「おや、アリエッテイが酔ってしまったようだ。寝もたけなわだが、そろそろ部屋に帰ったほうがいいね。他の歌姫もお聞きにしましょー」

え？酔ってないわ？

まあ、いいわ。疲れちゃったし。

アリス様が巫女姫の資格を失っていても、犯罪に加担していても、明日の祭礼は成功してもらわなければ。そつでないとわたしの道化も浮かばれない。

64 運命の日

翌朝、起きるなり、ベルセラムからも手紙が「つ」ちらちち、とどけられた。

朝から手紙？

しかも、こんなにくちん？

昨夜の夜会で、挨拶を交わした貴公子から。昨夜とても楽しかった、またお会いしたい。次の約束を取り付けるためのもの。

くえ、夜会の出会って「つ」つやって、続けるのね。

支度を整えながら、どっしよつが考えてると、ヨシエア様から朝食の誘い。

迷った。

もし、アリシア様がキリウム様たちの企みを知っていたら。きっとヨシエア様たちはその事も視野に入れて調べているだろう。

彼女が「つ」に来たかったのは、キリウム様たちのためではないはずだ。カービングに巫女姫の存在を知らしめるために来た。カービングがそれを望んでいたから。

もし、彼女がキリウム様たちの件を知っていたとしても、彼女の巫女姫としての務めは「つ」で果たして貰わなければいけない。

カービングでの祭礼を中止にはさせない。

ヨシユア様のお誘いをお断りして手早く朝食を済ませ、祭礼の準備を確認。やっぱり飲み過ぎて二日酔いの歌姫もいるそう。
薬湯を準備させ、歌唱の練習ができる歌姫の様子を見る。

今日の祭礼は、街の広場で行う。
城から坂道を降りると城下の街が続く。
その中に街の広場はある。

朝からたくさんの人たちが行き交っているよう。

行軍演技も披露するので、その準備。
歌姫たちの舞台に、休憩の天幕。
来賓のための席もあるので、そこに入り込まないように注意してもらわないと。

祭礼の後にはすぐに祝福の儀式が始まる。
人波が途絶えるまで、暗くなるまで、歌姫たちは祝福を授ける。
交代でしてもらったために、休憩が取れるよう、飲み物や軽食。飴や甘いものを用意させている。

そういう細かなものを確認していると、ぐい、と腕を掴まれた。

ヨシユア様ー。
何をするのですー。人を猫の子のようにならなくていいー。

「ちょいまかと動き回って捕まえられなく。猫の子と同じだ」

だって忙しいのです。ああ、もうこんな時間?!そろそろお城を出なければ。

「昨日の者たちから、誘いの手紙が来ていたから。すぐに返事を出してはいけない」

えっ。そんなの？

「おちか、もう書いたのか?」

ううえ。忙しいから、今日の夜にでも考えようと思っただけ。

「やっぱり、知らなかったか。だから朝一で呼び出したから。すぐに返事を出すのはすぐにでも会いたいということだ。2、3日置いてからでいいんだ」

ふーん。そんなふうになってるのね。

「アリエツティ」

ヨシコア様が呼んだ。

「カービングの巫女姫はあなただ。アリシアを祭礼に立たせる必要は無い」

「ううえー」

思わず挑むようにヨシコア様を見ると、ヨシコア様が動揺したように息を飲んだ。

「巫女姫は彼女です。神殿に選ばれた聖なる乙女。わたしではない。彼女の歌声がこの地に祝福を授ける」

「……………アリエツティ」

「わたし達が、カービングの民がこれほど待ち望んで、準備したのです。……で彼女に立って貰わなければなんの意味もなくなる」わたしの声が震えていた。

ヨシユア様が小さく息を吐いて、唇を噛んだ。

「・・・分かった」

苦々しく聞こえたその声を、わたしは耳に残らないうちにした。

侍従が近づいて、巫女姫が馬車でお待ちです、この当主と一緒になければ行かないと仰って、と困り顔で告げた。

「はあ。しよつがなり巫女姫だ」

ヨシユア様がそつ呟いた言葉が酷く優しく聞こえて。

「一緒に行くか？アリエッタイ」

そつ言われて思わず俯いてしまった。

どこかで、彼女とは対峙しなければならぬ。だけど今、顔を合わせて冷静に話せる自信がない。

ヨシユア様がそつと頭を撫でた。

「できるだけのことをしよつ。何があってもあなたのせうではならんだ」

いいえ。できるだけ、なんて曖昧な言葉はならぬ。何がなんでも成功させてみせる。

彼女がああ企みを知っていても、今世界で巫女姫を名乗れるのは彼女だけ。それは変えられない事実だ。

彼女はその地位を望み、それを手に入れた。

責任は全つしてもらわなければ。

この巡業はカービングの悲願だ。

裏で何が行われていようとも、そんなことは民には関係ない。巫女姫がこの地を訪れ、祝福を授けた。その事が大事なのだ。

広場に着いたころには行軍演技の列は揃っていた。もうわたしが立たなくても十分、演技ができる。
だから来賓の末席で見ている。

あいにくの曇天。
一行が来てからずっとこの天気だ。

少し薄暗く感じていたら急に風が吹いた。ガタガタと広場に飾られたカービングの旗が支えごと揺れる。

カービングの騎士たちは動揺も見せず、乱れぬ演技で曲を終えた。

「カービングに栄光あれ！」

短い斉唱の瞬間、分厚い雲が切れて光が射した。
ああ、奇跡のよう。
カービングの騎士たちの力強い言祝ぎに、天が呼応したよう。

心が震えた。

歌姫たちの賛美歌が始まった。

この歌はまだ領土全域には広められなかった。だけど、知っている領民から遠慮がちに歌声が上がる。
わたしが一緒に歌っているのを見て、少しずつ声が大きくなっていった。

次に器楽の入った賛美歌。

アリシア様のために捧げられた曲だから、この歌は初めて聞いた。

うーん。誰かが作りそんな感じなのだけど。そーと、セシリア?!
まちかねー。

彼女にしてはひなりが足りないわ。もっと器楽にしても、歌唱部分にしても、ハッとさせるような変化を入れてくるはず。

それに、もっと歌姫でもないし。

アリシア様の歌声が朗々と響き渡る。

綺麗な声だわ、やっぱり。

天から光が降り注ぐような、細かな雨が落ちてくるような、繊細で美しい声。

その声に似つかわしい、線の細い、嫺やかな姿。

長い烟るような金髪。大きな青い瞳。薔薇色に染まる頬と白い肌。

これぞ理想の巫女姫。

いつも、柔らかい微笑をしていて、唇を引きもすんでいたロメリア様とは対照的。

氷の巫女姫、と呼ばれていたロメリア様。その美貌と歌声は、一言で言つと強い。

それに対してアリシア様は、甘い。

それぞれの個性の違いだが、見た目だけの男の人の目から見たら、圧倒的にアリシア様が有利だと思う。

わあ、と賛美歌に対する拍手が起きた。

良かった。

ちょっとだけ、胸をなでるす。

カービングの民が喜んでくれて良かった。

女神とともに歌える喜び。

それを体現した、巫女姫巡業。

裏で行われている貴族たちの様々な陰謀とは、全く無縁の純粋な喜び。

これで少しはわたしの肩の荷が降りる。

舞台転換のために巫女姫が一度舞台から降りる。ヨシア様がエスコートのために舞台に登り、巫女姫の手を取った。

わあ、と感嘆のような歓声が起きた。

やっぱり、カービングの民は巫女姫を望んでいるのだわ。

改めて現実を突きつけられて、心が痛くなる。

輝く民の顔。

巫女姫さえこの地に住いてくれたら、彼らは幸せなのだ。巫女姫でさえあれば。

ぽつ、と頬に冷たいものが当たって、暗く思考から呼び戻された。

雨？

ありえなし。やめて。

カービングの祭礼で雨だなんて。

天を仰ぐとパラパラと軽く降ってきて、集まった人の雰囲気がいざわ
ざわと揺らめく。

祭礼は雨の準備をしていない。

わたしが経験した限り、巡業中、雨に濡れることはほとんどなかつ
た。

ましてや祭礼の最中に雨が降ることはなかった。

ヨシコア様から雨の準備をしなくていいのが打診されていたが、わ
たしは賭けた。巫女姫は歌姫の頂点、彼女の歌声がこの地に祝福を
与える。そう信じて。

歌姫たちも不安そうな顔をしてしたが、レイモンド様はそのまま祭
礼を続けるつもりで、歌姫たちを並ばせた。

やがて、雨が止んだ。

歌姫たちの髪が濡れていることに気づいて、タオルを用意するもの
に、控えているマーガレットに囁いた。
城まで取り帰らなうといけなうださう。

マーガレットがすぐに戻ってきた。

青い顔をしている。

巫女姫様が城にお戻りになったようです。と告げられた。

え？

まだ祭礼は終わってないのに。

まだ、祝福も授けてないのに？！

「本当なの？！馬車だけ帰ったんじゃないの？」

だってまだ、歌姫は残っている。

「おそらく本当かと。神官のグッドウィーク卿とギックナーク卿もお帰りだと、護衛のものが申しております。護衛官からアリエツト様
に伝えるようにと、途中で呼び止められました」

そんなことって。

歌姫が新しい歌を唄い出した。巫女姫不在でも続けられる祭礼。

こんなことありえない。

「城に行きます」

もう一度、戻っていただかなければ。

歌が終わるまでに間に合わないかもしれないが、祝福の儀式には出ていただかなければ。

歌については民はわからない。

だけど、祝福はわかる。

ただの神官のわたしでさえ、祝福を受けたくて人は並ぶのだ。巫女
姫が不在と知ればとれだけがつかりするだろう。

賛美歌を背に急いで馬車に向かった。

65 わたしなら、強様！

城に入りアリス様の居室である来賓客室のある棟に走った。

ヨシコア様も急ぎ帰って来たようで、アリス様の居間に揃っていた。

疲れたので帰る、と言ってアリス様はギックナ一卿を伴って帰ってきたそう。

ヨシコア様はキリアム様を連れて帰り、説得に当たるように言っていたようだった。

「アリス様、臣が待っています。いつかお戻りください」

ここは下手にでもう。腹が立つけど、仕方ない。
それだというのは。

「いやよ。あなたの言うことを聞くなんて、もうとや。髪まで濡れちゃったのよ」

そんなくだらない理由で。わたしの中の何かが、カチリと音を立てた。

「私が説得に当たらなければいけないほどのことをしてる、という自覚でもませんか。何をしに辺境まで来られたのです。今までたくさん犠牲を強いてここまできた。それはなんのためか、強が知らないと怒ってるのですか？」

もう、手加減しなう。わたしに理で勝つと思ってるの？
今までの領主は甘かったかもしれないけど、この神殿を預かっているのは、このわたしよ？

あまり接点はなかったとはいえ、ロメリア様の随伴として数々の巡業中の無理難題を黒から白に返してきたのは、見てきたはず。殿方がおだてても動かないなら、あなたの立場を思い知らせてあげる。

「お戻りください。せめて、祝福をお与えになっても帰りください。祝福も授けられぬ巫女姫など、神殿のやることではありません」

「歌姫がいるじゃないのー」

「あなたは、その辺の歌姫ではありません。巫女姫がいるからこそ巡業と名を打ち、民が集まるのです。女神の化身と思つから」

「だって、だって疲れてるし」

「それがなんなのです。疲れなら一晩眠れば取れる。今日のこの時間は二度と帰つてこない。この時間だけのためにとれだけの人間が動いて、ここまできたと思つのですか？ それに比べてこの巫女姫。女神の使徒。この時間に合わせたくらいと言つのなら、巡業など行わなければいいのです」

ちっと、キリアム様に向き直る。

「随分甘やかしたものですな、キリアム様。神殿の意義も理解しないのに、巫女姫を名乗らせるとは。かつては廃位された巫女姫もいるですよ？ 歴史をご存知ないのですか？」

「・・・不敬な!。」

「不敬?それは誰に対して?民の安寧を守るから!その統治者。その同じ敬愛を受ける巫女姫の地位。あなた方の振る舞いが安寧をもたらすのですか?祝福を授けることもできないのに?。」

言い返すこともできず、わたしのことをギリギリと睨みつけた。

「お前は、神殿から追放してやる!。」

「今のあなたは!神官。わたしを動かす権限はありません。爵位を慮り、口をつぐむ神官ばかりいるようですが、お忘れですか?私は伯爵家。神殿にはいつてからは、あなたより年数の長い歌姫です!」

神殿内部のこと、教義の解釈については古参の神官と対論するくらいは精通しているのだ。

「正直言つて、こんなバカバカしい茶番を許す神殿になど、未練はありません。!神官のあなたに追放と言われる前に辞するつもりです。ですが、今はその時間ではない。アリシア様!」

もう一度、アリシア様を向き直った。びく、と小さくなり、ギリアム様の陰に隠れた。

「怖いわ!」

ふん、と思わず鼻が鳴った。

舐めるなよ。

甘えることしか脳がなり貴女ことおが頼る男たちが、このわたしを止められると思ってる。

ちあ、正面切って迫り詰めてあげましょっ。

「随分度胸のないうこと。あなたは一度も教義の討論でも、楽曲の解釈でも、自分の意見は言われませんでしたものね。どうして巫女姫になれたか、不思議です。ですが、あなたはその地位を望み、その地位に就いた。知らなうでは済ませられなう。ちあ、お立ちください」

この程度の口攻撃で怖いなう。

もっと地獄の底に突き落としてあげるわ。今日が終われば。

アリシア様が助けを求めるように、ヨシコア様を見た。

424

「巫女姫。私はカービング辺境伯として巫女姫巡業を願ひ出はしてらなうのですよ。あなた方の祝福はこのカービング辺境伯が跪いて乞うたものではない。それなのにあなたたちはこの地に来た。そのために私たちは出来る限りの準備をしたのだ。祝福はあなたの義務。どうぞお立ちください」

ヨシコア様が優しい声で口説くものに言った。

はあ。

カービングからの申し出もなうのに、よく、巡業なんかできたわねー。

神殿は常に受け身のはず。

ほんっとうに、わたしはあなたたちに良い様に使われたのね。

「そんな、そんな言い方ってないわ。わたしはあなたのために・・・
・・・」

とつとつアリシア様がちめちめと泣き始めた。

だから、なんだって言っの？

泣いたところで許されるなんて、子供でもないわ。

「今は泣く時間ではない。あなたは誰を待たせてるのか、わかって
ないんですか？あなたのために、とその口で言ったカービング卿が
庇護する民なのですよ。立ち上がってください。あなたは女神の加
護を体現するためにここに来たんでしょ？。責務を全うしなさい」

自分でも怖い、と感じるくらい、どろどろとした声が出た。

じゅわ、と冷たい風が半分開いていた窓から勢いよく入ってきた。

アリシア様は、先ほどとは違う泣き顔で、わたしを見つめていた。

「立てないのであれば、立たせてあげましょつか？」

わたしが一歩前に出ると、アリシア様は、ひい、と椅子から転げ落ちた。

はあ、とロシユア様が、ため息をついてわたしに向き合った。

「もういい、アリエッティ」

耳を疑った。

「これ以上は無駄だ。こんな巫女姫など加護は得られなく」

「いえー。巫女姫は巫女姫ですー。」

ここに来るまで、ここに至るまで、どれだけの人間の思いが犠牲になってきた？このわがままで無知な女のために。

わたしは許さない。

歌姫の栄光を傷つけることも、巫女姫の権威を地に落とすことも。ここで祝福の儀式を無視してしまえば、形ばかりでも保てない。

「わたしがカービングの民のために望んだのは、この地に祝福をもたらす巫女姫だ。それ以外は害にしかならない。この女は今、我が民を慮る気持ちなんかかけらもないだろう。そんな気持ちのまま、民の前にたつても、加護などあり得ない」

違うー。そうじゃないー。

巫女姫は、その場で立つだけで加護をもたらすのだ。だからこそ守られる。あの場に巫女姫が立つことに、意味がある。姿を見せることで人心が安心し、希望を見出せる。

だけど。

強く瞼を閉じた。

カービングは女神の祝福を忘れた土地。

だからこそ、本物の祝福をあげたかった。巫女姫になり得なかったわたしなんかより、ずっと美しくて、見るだけで幸せになれる巫女姫を見せてあげたかった。

美しい歌声を聴いてもらい、共に歌える喜びを一生の励みとして
ほしかった。

だけど、領主自らそれを、望まないなら。

「では、わたしの仕事はここにはありません」

何のための戦い？

わたし一人で叫んでも、誰もそれを望んでいらないのなら、やらな
方がまし。

「お望みとおり、私が引きましょつ。女神の意思を尊重しなう国に
なといたくなう。ちよつなら、随様。お好きになちるしら」

ちよつと踵を返し、部屋を出て行った。

アリエツティーとヨシユア様が呼んで、わたしに手を伸ばしたのが、
視界の端に見えたけど、全速力で、階段を駆け下りる。

降り切ったところで、ヨシユア様に捕まった。

「どこに行くんだ！」

「あなたには関係のないことです」

「あなたは、この神官だぞ。あなたまで民を見捨てるのか?」

「別の歌姫をお呼びなさいませ。わたしは神官をやめます！」

そう言つて、着ていた祭礼用の服を脱ぎ捨てた。

こんなもの。こんな不快なもの、着ているだけで汚らわしい。わた
しの歌姫を汚した神殿に連なるなど。

結わなう―絶対に結わなう―...

叩叩叩叩叩叩叩

外で雷鳴が聞こえて、急に城の井が干上がった。

66 わたしは失敗したんだ

あまりのことに、絶句しているヨシコア様の後ろから、バタバタと足音が聞こえた。

「ヨシコア、ヨシコア！ 待って！ あなたが言うのならわたし、行くわ！」

アリシア様が泣きながら、ヨシコア様を追いかけてきた。

ヨシコア様がわたしを胸に抱きすくめた。

痛い！

抵抗するが、腕一本で全く身動きが取れない。
ヨシコア様の弱った声が聞こえた。

「なんで、あなたは……」

懐みがないんだ。そう言いたいんでしょうか？
結構よ！

わたしはもう、神官でもこの国の貴族でもないわ！

ちやあ！ というアリシア様の可愛い悲鳴が聞こえた。

一瞬、離れたヨシコア様からふわりと上着がかけられて、もう一度、しっかりと抱きしめられた。

祭礼服の下は、薄い下着のみ。まだ秋の真ん中あたりのカービィ

は厚手の祭祀服で十分だったから。

「な、何してるの？ひといーひといわー」の泥棒猫ー。」

ばっかじゃない？

そんな使い古された悪態、今時、喜劇ぐらうしが聞けないわよ。

「な、何をしているー。カーレング卿ー。婚約者の前だぞー。」

「何回も同じこと説明をさせるな、キックナー」

地を這うようなヨシコア様の声。

あ。もう辞めたのね。猫被るの。

「失礼なー。私は、宰相の息子だぞー。」

「ただが王都の伯爵家が、いい加減不愉快だ。神殿に敬意を払っていたがもういいだろう」

腕の中から見ると、キックナー卿の周りには騎士たちが、何重にも取り囲んでいた。ヨシコア様の一言で、すぐにでも取り押さえられる。

「わたし、わたし、あなたを愛してるのー。ヨシコアー。」

「巫女姫も、最低限の礼儀は守っていただこう。この城の城主は私。巫女姫が国王に並び立つというのは王都での話」

ポカ、とした顔でアリシア様が見ている。

ほんと、頭痛いわ。このバカ。

こんなことも知らなうなんて、この国の貴族の端くれでもなし。

この国は王を戴くといっても、6つに分割されている。五人の辺境

伯がそれぞれ影響力を持って取りまとめる地域、すなわち統括地域と王が治める直轄地に分かれ、女神信仰の紐帯で結ばれた関係。

辺境伯、と名がついていても、普通の貴族ではない。それぞれの統括地域の実質の王だ。
基本でしょ。基本。

だから、国王の直轄地を一步出たら、辺境伯に最大の敬意を払わなければいけなくなるのだ。

昔ほどの軍事力を維持していないので、どの辺境伯も力を誇示することはないが、他の貴族との立ち位置の違いははっきりしている。

巫女姫を戴く中央神殿の世話人として、国王は権威を保っている。

「婚約の話は、すでに終わった。ここに来てからも何度も告げたはず。お前が理解しよつとしまいと、妻に迎えるつもりはない」

「じゃあ、じゃあ、本当にその女……？みんなが言ってたの、本当なの？」

アリシア様が、キリアム様とキックナー卿を見た。キリアム様が頷いた。

「嘘！嘘よ！セシリア様ならわかるわ！嫌よ、そんな女に負けるなんて！」

はあ？飛び蹴りしてやる！このバカ女！

怒りでブルブルと震えて、ヨシエ様の腕から逃れよつと身じろぎしたが、ぎゅ、と肩を抱かれた。

「アリエッティと貴様なと比べるべくもなし。飾り立てられて梯子を登らされているのも分からなり馬鹿な女なと、この方の目に入れるのも不快だ。本物の歌姫の前で自分の実力を悟れないなと、恥ずかしくないのか？」

ヨシユア様が低い、唸るような声で言った。

「いや。やめてー..」

アリシア様が、発狂したように叫んだ。

「やめろ..アリシア...」

キリアム様が叫んだのがわかった。

一瞬、見えたのはアリシア様の手にあった、光る剣先。

巫女姫の飾り懐刀。

ヨシユア様は動く様子もなく、寸手のところでちょっとだけわたしを庇った。

ふ、と鼻で嗤うのが聞こえた。

「城主に手を挙げるとは」

捉えろ..とヨシユア様が言う前に、アリシア様は騎士に床に抑えつけられていた。

「何をする..巫女姫は国王と同じ立場だぞ..」

「黙れ、キックナー。それ以上、言う気なら、ザドキエル辺境伯からも叛旗を出すぞ」

ロハラッド様がいつのまにか、騎士に混じっていた。

「で？お前たちは国王の代わりに私たちと渡り合っているのか？
王軍を率いて？いいだろう。承諾の印として、お前の盾を送り返し
てやろう」

キックナ一卿の盾には、コハフリット様の剣先。
キリアム様がなくなくと座り込んだ。

「くだらない。だが、今度の議会のいい土産話ができた。礼を言う。
コハフリット」

ヨシユア様がわたしを抱き上げながら言った。

あいつらを部屋に連れていけ、それなりに丁寧にな。と、冷たい声
で騎士に言って、わたしは横抱きにされたまま連れていかれた。

ヨシユア様に抱き抱えられて連れていかれたのは、奥方用の寢室。
落ち着くまで二二で、と短く言って、ヨシユア様はすぐに出て行っ
た。

窓の外に領都ギルニガンゼナの街が広がるのが見えて、駆け寄った。
窓からは祭礼が行われていた広場が見えた。

雨が降ってる。

広場の人々は、祝福に並んでいるように見えなかった。それぞれに
帰る方向に、人波が動いている。

熱いものが喉の奥からせり上がってきた。

「つつ」

嗚咽が漏れた。

帰ってしまっ。

領土中から集まった人々が、巫女姫の祝福を受けることなく戻って
行ってしまう。

どんなにかっかりしただろう。

たった一度しか、歌声も聞かせられなかった。

歌も覚えたのに、一度も共に歌うこともなく。

わたしが悪かったの？

どうすれば良かったの？

あの時、わたしがぐりぐだっておけば。

もっと上手に、アリシア様をおだてて、ヨシコア様に説得して貰え
ば戻ってくれてたの？

涙が止まらない。

わたしは、失敗したのだ。

カービングの民が切望していた巫女姫の巡業。

ここまでたどり着いたのに、巫女姫の祝福を授けることができなかった。

咽び泣く背中が、大きな胸に抱かれた。

「巻き込んですまない。泣かないでくれ、アリエツト」

「いぬんなさー」

大声で泣きながら謝った。

いじめんなわらう。

みんなに、祝福を授けられなくて。

わたしが、短気だったから。

ちっと巫女姫を怒らせたから、雨が降ってしまったのだ。

「あなたの、せいじやなら。あなたのせいじやならんだ」
ヨシユア様が苦しそうに言った。

「泣かないで、アリエッティ」

ヨシユア様がきつく抱きしめた。声が震えていた。

ヨシユア様の胸で、子どものように泣いた。

ヨシユア様はずっと抱きしめてくれていた。

わたしが泣き疲れて、眠るまで。

67 2番手の女だから

で、わたしは、いつ、落ちてくのでしょうか？
ヨシエア様。これは軟禁と言います……

あれから奥方様用の部屋から出してもらえず、ちなみに一晩、過りました。

部屋から一歩も出してもらえず、会えるのはぐルセラムとヨシエア様だけ。

いつも周りにいたマーガレットにもシヤへにも会えなから、城の中で何が起っているか、わからない。

奥方様用の部屋で一晩過した後、今から王都に向かつと馬車に乗せられた。

巫女姫一行はまだ城にいるのに？城主が見送らなくていいんですか？と抗議すると、巡業はここで終了、歌姫たちと一緒に急ぎ王都に送る。体面を保つために、歌姫たちと移動させるが、あれらは罪人だ、と言われた。

だけど、罪人なら余計、ヨシエア様が連れて帰らなければいけないのではなくて？。一応、巫女姫ですし。

途中で逃げ出されたら、余計大変なのは？。

というところ、船から出さないと。

船え？

なんと、急峻なカービングの山の麓から船で王都まで行けるものに、
河川を整備していたことで。

巫女姫一行が乗れるくらい、大きな客船も作ってあって、本格的な
運用は来春としていたのだけど、いい機会だから、もつらせていっ
てしまおうと。

カービング領から王都まで、カービング辺境伯が統括する地域全域
を貫く運河。

一定の距離に港を作り、客船や荷船の運送はカービング領。港と河
川の管理はその地の領主。船ごとに港の使用料を払うことで、話が
済んでいると。

カービング領は鉱山のある領。

もともと河川を使って運んでいるのを、もっと効率よく、安全に運
ばせるために整備していたとのこと。

そのうち、粗雑な運営をしている港はカービングに権限を譲渡させ、
逆に船が停泊するためには領からも金を取る、どう思っ？って聞か
れても、そんな難しい領地経営がわたしにわかるものですかー。

巫女姫一行より一日早く、私たちが乗り込んだのは、カービング領
主専用の船。

小ぶりながらも豪華な内装。

馬車の旅の半分で王都の近くまで行けるとのこと。

今はまだ、王都の管轄領まで話が済んでいなかったが、カービヘダ辺境伯の船だけは王都の中まで特別に入れるから、と。

随分、楽に王都に行ける。

馬車は座りっぱなしだけど、船なら歩き回れるし、横にもなれる。

だけどそこでもわたしは軟禁状態。

領主専用の寢室の隣に作られた、夫人専用の寢室に閉じ込められた。部屋から出るときは、絶対、ヨシユア様も一緒。どうして、出ちゃダメなの?!

もつじつとしてるの、飽きたわー。外の風景が見たいー。って言ったら、結局、ずっとヨシユア様がわたしの横にいて、片時も離れようとしなかった。

はあ。息がつかまる。

一人でぼーっとしたかっただけなのに。

にっこりして漸く、カービヘダで起ったことを話してくれた。

キリアム様達が目論んでいた歌姫を寄付金という賞金と引き換えに外国に出す企み。ヨシユア様がそのことにはつきり気づいたのは巡業の人数がはつきりしてから。王都でも評判の悪かったキックナール卿が加わったことで、この巡業の歪ちに気づいた。

ただその前から、国王陛下や他の辺境伯はカービヘダに何かをやらせる雰囲気があったのだが、それをヨシユア様にはつきり告げなかった。

なんて意地悪な。

カービングで巨懸を討ち取らせようとしているのに、それを当事者に知らせないなんて。

と呆れたら、あいつらはそういう奴らだ、とヨシエア様が苦々しく言った。

あー、思ったより苦労したんですね。わたしもそれらしいことをわれているので、なんとなく分かります。

「あなたは何も罪に思っていることはないんだ」

そして、わたしの手を取って、額に当てた。

「巻き込んで、すまない。あなたが歌姫を思っている気持ちをいんなに利用する形になるなんて」

とても苦い、悔しそうな言葉だった。

「だけど、カービングの巫女姫はあなただ。神殿が、他のものたちがなんと言おうと、あなたしかいない」

そう言われて、わたしは俯くしか出来なかった。

馬車で移動するより随分早くて、体も楽だけど、やっぱり揺れにはすぐには慣れなかった。

「うっ、気持ち悪い」

ベルセラムの柔らかな腕にすがって、吐き気を抑えた。

大丈夫ですか？と優しい声をかけてくれながら、背中をさすってくれた。

すでに胃の中は空っぽなので、吐き飯だけがこみ上げる。

「具合はどうだ？。アリヒットィ。ダメそっだな」

ヨシコア様が薬湯を持ってきた。

飲みたくない。

飲んだら吐く。

あ、生姜の香り。これなら飲めそう。ちゅつとホッとする。

「だから止めただろう？。昨日、飲むからだ」

おかしいわ。一日酔いじゃなければなのに。

船は夜には停泊する。

夜は港近くの宿に泊まった。寝る間だけとはいえ、地面が揺れないのはありがたかった。

夕食に出された名産のフイブがことのほか美味しく、気づいたらけいけいなくースで飲んでしまった。

でも、一日酔いじゃなかったのに。

気分が憂鬱だから体調が整わないのかしら。

カップ半分くらいの薬湯を飲み干すとかなり楽になった。体も温まってほぐれた感じがする。

おつ、おつおつと、と、ヨシコア様が席を立った。

侍従か召使いを使えばいいのに、相変わらず、この部屋に入れるのはヨシコア様とベルセラムだけ。

「いぬんなさね。ベル。あなたには迷惑ばかりかけて」

楽になったけど、ベルセラムの柔らかなから離れがたくて、やっぱり抱かれながら謝った。

ほんと、この子には出金してから迷惑しかかけてなら。この子の前で何回、嘔吐したことがある。いぬんね。

だけど、ベルセラムはちゅーとわたしを抱きしめてきた。

「・・・そんなこと、おつしやならんでください。」

ベルセラムの舌が震えていた。

驚いて顔を見るとホロホロと泣いている。

「アリエツト様」

泣きながら、いつになく真剣な口調で話し始めた。

「もし、もし。そんなことはこの当主様がお許しにならならぬ信じますけど。もし、あなた様がエチコアの神官でなくなる時は、私たちも連れて行ってください」

突然の申し出に、座り直した。

「そんな、あなたにはケドツがうるじやない。お父様も」

「主人とはずっと話してらたのです。わたしは、わたしたちはずっ

とあなた様を見ていました。あなた様がどれだけカービングの民のことを思っただけしてくれたか。どれだけ苦労して。わたしがどれだけ齒がゆかったか」

ああ、この子はいつも一緒だったわ。

髪を切ってお金を工面した日も。
毎年、カービングの夏に耐えきれずに倒れた日も。
ウィルケルムに馬車から突き落とされた時も。

「あなた様を一人で、行かせることなどわたしにはできません。お願いします。おそばにいらしてください」

ポロポロと泣くベルセラムを抱きしめた。

「ありがとう。ベル」

約束はできない。

この先、王都でなにが起こるのか、わたしには想像もできない。

わたしの咎にはならないとヨシエア様は仰るが、神殿と国が認めた巫女姫に刃傷沙汰を起こさせた。わたしが短気を起こさなければ、事はもっと穏やかにわたしが、一番大事に思っていた巫女姫の権威に自分で傷を付けた。

だけど、彼女の気持ちの方が嬉しい。
ケビンもずっと守ってくれていた。なんにも言わないうけど、城にも色々わたしを守るように進言していたのだと後からわかった。

「大好きよ。ずっと。あなたがいてくれて、本当に嬉しい」

そう言つて額にキスをした。

かちゃ、とドアが開いて、ヨシコア様が無言で立ち止まった。
ノックもせずじいきなり開けるから、ベルセラムも驚いている。

ヨシコア様は無表情で盆を近くの棚に置くと、つかつかと暗くなって、ぐい、私たちを引き離した。

あん。何をするのですか。乱暴な。

「アリエツト」

わたしの肩を引き寄せて、感情を押し殺したような無機質な声で言い出した。

「ベルセラムには、ケドヘがいる。私は、あなたが振り向いてくれるまでいつまでも待つつもりでいるけど、パートナーがいる相手にそんなことはやっては行けぬ。同性であっても、それは浮気だ」

は？

「いくらあなたとベルセラムが、主従の信頼が厚いからと言って、私は自分の部下にそんなことを黙認させることはできぬ」

「な、何を言ってるんですかー。あなたはー。」

本気で言ってる？

やだ、やだー。

「まさか、私たちのことを、ずっとそんなふうに思ってたんですか?!」

「ずっとじゃない。今、そんな感じだったから。」

「やだ・・・いやらしい。そんなこと」

「あなたが、セシリア姫とそんな関係だというから。」

「そんなことは言ってません。本気にしてたんですか? あの冗談を?!」

「じょ、冗談だったのか?!」

「当たり前でしょ?! なぜ、すぐに結びつくんですか? いやらしい!」

「そいつのことを、匂わせたのはあなただ。」

やめて! わたしの可愛うベルセラムが真っ赤になって!

信じられない。男の人って、すぐそいつのことは本気にするのね!

ヨシユア様が頭を抱えて、深くため息をついた。

「男になびかないのは、それでかと思ったら・・・」

「もう! そんなわけないでしょ! そいまで本気にしてたなんて! えええ!?!」

「アリエツタイ!」

ヨシユア様まで赤くなってる。

なんだか可愛く思えて、思わず吹き出してしまった。

一度、笑い出すと止まらなくて涙が出るほど笑った。ベルセラムも笑ってる。

不機嫌だったヨシユア様も、釣られて笑ってしまった。

ひとしきり笑うと、目シユア様に抱きしめられた。
「・・・やっつゝ、笑った」

ああ、心配させていたのね。

あの時から、もう十日近く。
そういえば、笑ってなかった。

ずっと、祝福をいただけなかったことを悔やんでいた。
もっとうまくやれば。わたしがいなければ。と。

だから、一人にさせてもらえなかったのね。

それにわたしが一番信頼してるベルセラム以外、近寄らせなかった。

445

「あなたの、悲しい顔は、堪える」

絞り出すように、目シユア様^{さま}が言った。

強く抱きしめられる。
いつやっつゝ抱きしめられるのも、あの時以来。

目シユア様はずっと、気持ちを抑えてくれている。多分、わたしが
思つより、ずっと強く。

不器用だけど優しい人。

みんな人に大事にされているなんて、まるで夢だ。
ちつといつかは、覚めてしまつゝ、夢。

夢は夢なの。

わたしが一番になりたかったのも、夢。

カービングで巫女姫巡業を成功させたかったのも、夢。

いつも、後少しで手が届かない。

わたしが、2番手の女だから

王都について、カービングのタウハウスに連れていかれた。

すぐに神官長のリチャード様と面会できるかと聞いていただけ、3日たっても、神殿からは連絡がない。

ヨシエア様は忙しくされているもので、お食事も屋敷でかれならまあ、朝に少しだけわたしの様子を見に来るだけ。

タウハウスに入って、ヨシエア様に連れていかれたのは、今まで泊まったことのある棟とは全く違う場所。

クラシックで瀟洒な雰囲気ですっきりとしたこの部屋は。

専用の居室、衣装部屋に優美な浴槽が置かれた化粧室、ベランダに向かった広い出窓のある食事室、そして寝室。侍女の控え室まである。

ギルニガハゼ十城に軟禁されていた時の部屋とほとんど同じ通り。並びに当主であるヨシエア様のお部屋もあると聞いた。そして寝室にある二つの扉。

一つは専用居室に繋がっている。
もう一つは。

王宮にある王弟オスカー殿下の宮殿に何回か招待された時に、妃殿下ティアベル様の居室に入れてもらったことがある。専用の寝

室と庫で繋がった部屋に夫婦専用の部屋があるのだ、と聞いた。

ヨシコア様、やっぱり無理だと思います。

貴族は爵位の名譽の正統性を守るために典礼局の審査がある。
私は持参金も食いつぶした名ばかりの伯爵令嬢。

こんな存在を国の統治者の一人である辺境伯の妻になんか、王宮が認めるはずがない。

それに。

わたしは、あなたを許してない。

わたしはわたしのために、あなたを許してはいけないの。

× × × × × × × × × × ×

神官長との面談があると告げてきたのはヨシコア様だった。

リチャード様はわたしが一番尊敬している方。そんな方に引導を渡されるのかと思うと、怖くてたまらない。
だけと。

次にこの場に立つときは、全て終わっている。

そして新しい時間が始まる時だ。

わたしが作り上げたものを一旦全部捨てて、またわたしの居場所を作ればいい。今度はそ、2番手じゃなくて、わたしだけの居場所を。

そう思つて見慣れた白亜の宮殿を見上げた。

リチャード様はとても「機嫌」で出迎えてくれた。

「おかえり。アリエッティ」

その優しい笑顔と懐かしい声に、思わず涙が出そうになった。

それをぐっと耐えて、精一杯綺麗に見えるように淑女の礼をした。

「巡業は失敗に終わりました」

ヨシエ様が短い挨拶の後に話し始めた。

「巫女姫はカービンダでの祝福の儀式を放棄しました。そして、謙めにきたスミス神官に巫女姫の飾り短刀を向けた。私が彼女を庇っているのにもかかわらず、その刃を私たちに下ろしました」

リチャード神官長様は伏し目がちに、話を聞いていた。

「国王陛下から「連絡」が来ていると思います。今回の巡業でなされた企み。宰相子息とゲドウオーク神官が企てた、歌姫を褒賞として寄付を賞金のように釣り上げた企みは、私たちカービンダによつて、暴露されました。アリシア巫女姫がその企みを知りつつ、歌姫たちを唆し、巡業に加えたこと。また、その寄付金を着服し、浪費していたことも自白されました」

やっぱり。リチャード様の表情を見て確信を得た。

「カービンダにおいて法典と突き合わせ、罪を認めさせています。巫女姫とその一行は数日後王都につきます。今回の企みに加担したものは、王都につぎ次第、歌姫と引き離し、罪人として処罰される

でしよつ。」

リチャード神官長は、静かに頷いて、頭を下げた。

「まずはお詫ひ申し上げる。カービン卿。神殿の者たちが大変な失礼を。そして、想像以上の成果をもたらしてくださったことに感謝を」

「・・・リチャード様」

この方は。

「どうして何も知らせてくれなうのですか？！またそつやつて勝手に仕掛けてー。」

やっぱりー。やっぱりー。

おかしいと思つたー。あのリチャード様が、こんな杜撰な巡業を許可するなんて。

辺境のわたしの耳まで届くくらいにの神殿の腐敗を放置するなんて。何か企んでると思つていたー。

「だって、アリエツトに話すとすぐに動くだろつ？」

う。そうだけとー。その通りだけとー。

「いつも言つていただろつ？。そのうち、分かんると。君は臆する。知つてしまつたら、カービン卿に泣きついてでも巡業を止めていただろつ。」

「そ、そんなことは。だって、歌姫たちが、あんなに疲れて・・・」

「今回の巡業に参加したものは、グドウォークの口車に乗つたものだ。それ相応の報いとも言える」

ピシヤリと撥ね付けられた。

そうだった。

だってリチャード様だもの。

この嫺やかで優美な雰囲気呑まれがちだけど、この方は亡き前国王陛下に直々に指名されて神官長の座に就いた手練れの方。

嫺やかな雰囲気とは裏腹に、リチャード様のやり方は静かな毒と評されるくらい、それとわからないうちに足をすくわれている、恐ろしいもの。

キリアム様の罪は、女衞のように歌姫を売ったことだ。

人の売買を禁止しているこの国で、最も清らかな乙女を外国に売った。

ただの紹介ではない。巡業に連れていかれ、夜会で出会わせ、相手が気に入れば、もしかしてその場で帰ってくることもなかったかもしれない。

だけど、リチャード様、厳しいわ。

だって神殿の紹介って言われたら、信用してしまうもの。

そこは、本人がキリアム様やキックナー卿の人となりを見抜いてなんとかしなさいってことなの？

まあ、声をかけられた歌姫たちが、実家に相談しないわけがないし、それぞれの貴族家がこの企みを見抜けないのが悪いってことなのかしら。

そうやって各貴族家の国への忠誠心と、神殿への帰依を測ったのね。本来なら貴族はそれぞれの領民を守る立場。

自分の娘を軽々に他国に売り渡すような家が、その領民を慈しむはずがない。歌姫という権威を利用して政略婚に使う家も後を絶たないし。

それにしてもここまで大掛かりなことをする必要があったの？

カービング卿、とりチャート様が向き直った。

「アリエッティをここまで無事に連れて帰ってきてくださったことに、心から感謝する。この子はわたしの大事な歌姫。いずれ、跡を継がせようと思っていた」

え？

跡を継ぐ？なんのことう？

「大変な苦勞をさせたね。アリー。いつでも帰ってきてほしいと言っていたのに」

「アリアが巫女姫になって直ぐにカービングの巡業を、と言い出した時、君は決してそんな企みを許さなうだろうと思った。ここでも神官として残したら、すぐに企みに気づいてアリアを庇護なきまでに叩きのめすのが、目に見えるようだった。この企みが摘みあげられるようになるまで、ここから離れてもらう必要があったんだ。だから、巡業が本格的になってから帰っておいでと何回も言ったんだろう？」

「そ、それは。あれって？！そういう意味だったんですか？！」

「そういう意味も何も。それはつきり手紙に書いたじゃないか」

「だって、巡業があるのに……。同情されていたのかと思

ってました」

「同情したよ。神殿の権威が通じない、加護のない土地だと聞いていたが、あそこまで冷遇されると思ってなかったから、私も肝が冷えた。本当に帰って来てくれて良かったよ。いつ外国に逃げられるか、ヒヤヒヤしていたんだ」

どこまで知ってたんですか？リチャード様。
隣に座るロシア様の雰囲気は固く、冷たく変わった。

痛いところよね。

馬車で半月もかかる辺境の様子を、王都の神官長様が一切存知なんて思わなかったでしょう。

わたしは詳しくは報告してない。
でも、リチャード様なら独自の情報網をもって観察していらしたに違いない。

ちつりと目をあげると、リチャード様が優しく微笑んでくれた。

「お帰り。アリエツァ。しばらくゆつくりするさうい」

うつ、なんて優しい。でも懐柔されてる感じがすうい。

「でも、わたしは神官を辞めようさ……」

「それはダメだよ。君の力は……で……輝く。神官を辞めてどこに行くと……の国にいる限り、君は神殿と離れられないよ」

「……外国に。ロメリア様のところへ」

ヨシユア様が息を飲んでこちらを見たのが分かった。

いめんなぢう。

これがわたしの答え。

これほどの愛憎に応えることができなう。まるで裏切ったような後ろめたさに、体が震える。

だけど。

69 ああ、悔しい

わたしは、わたしのために、あなたを許すわけにはいかないの。

「外国に行くことはいいだろう。見聞を広めたいのだろう？ 君らしい。だけど、神官は辞めさせられない。いずれ戻ってきてもらおう」リチャード様が、穏やかな声で言った。

「ダメだ！ アリエッティ！」

ヨシユア様がわたしの手を強く握った。

「アギネルズ卿。勝手をおつしやらないでください。外国など。それに神官長のお話も。私は彼女を妻にと望んでいるのです！」
「やれやれ。やっとか。まさか、今、初めて言ったんじゃないだろうな？」

ええ？ まさかりチャード様、そのことまで存知？ ！

「違います！ 巫女姫巡業が終わるまで、返事を待っていたのです！」

「なんだ、随分遅いな。そして、その返事が。振られてるじゃないか」

あああ、リチャード様、辺境伯になんてことを。こちらの方が心臓がもたないわ。

ヨシユア様なんか、もつ顔も向けられなくらい怒り狂ってるのがわかる。

絶対に逃げられないうちに、もつく握られた手。

ヨシエア様は本気でわたしを妻にする気なんだ。
現実的な考え方をするあなたらしくない。それほどまでに想ってく
だちっている。そう感じるとわたしの決心がぐらぐらとふらつく。

「なんでそんなに遅いんだ。だから、余計拗らせただ。アリエッ
テイのことだから」

「あなた方が、悟られるなど釘を刺したんだろうが、この企みが摘
みあげられるまで動くなと、彼女を巻き込まなければ、こんなに
苦しめることもなかったんだ！」

「最初に巻き込んだのはカービンダ。信頼を勝ち取れなかったこ
とを八つ当たりするなど、笑止だ。小童め」

ひい、リチャード様が怖い。
動くな？、もう何がなんだか。頭がついていけない。

「あの、あの、どういつことなんですか？、どうしてこんな企みを放
置する必要があったのですか？」
勇気を出して振り絞った声が震えていた。

「から説明してあげよう。リチャード様がわたしに言った。

「君は知らないだろう。王都の多くの王宮文官貴族は辺境伯の統括
地域を軽視している。それは今に始まったことではない。この統治
の形の歪みとして出て来たもの」

軽視？

今でこそ辺境伯の軍事力は王軍と同じくらいだけど、それはこの国
が安定しているから。外国からこの国を守ってきたのは辺境伯の力

が大きい。それに国力になる生産物は、圧倒的に各統括地域の方が多い。王都は人と物の流通の要であることが富の源泉だ。

国全体のバランスを見れば軽視などできない。統括地域はもともと辺境伯の影響下の国のようなもの。辺境伯が怒って独立など言い出したら、内紛になりかねない。

「歌姫を中央に集め、巫女姫を選出する。その巫女姫が地方に巡業に行くことによって、地の理を治める。巫女姫が他地域から選出されても、結局はこの王都から巡業は出発する。次第に王都は権威が高まる。これが権威と権力が高まった原因の一つではある」

「中央神殿の庇護者が国王陛下だから、他地域よりも権威があるの？」

「その通りだ。」

ああ、もしかして。

そんな感じの歪みは、歌姫時代から幾度となく感じた。アリシアたちが辺境伯ヨシア様と出会った時、辺境など田舎すぎて嫁ぎたくないとかバカにしていたが、ああいった風潮は根深くあった。

歌姫同士の中でも、王都周辺の歌姫と統括地域出身の歌姫の間では修行に対する姿勢が違つと感じることもあった。

「国王陛下はこの風潮を危惧しておられた。いつか、辺境伯に対して取り返しのつかない非礼を犯すものが出るのではないか。軍事か、統治機構の改革か。どこのにも芽はあった。だが、王宮文官の筆頭であるキックナーが目をつけたのは、この神殿だった。中央神殿の神官はそのほとんどが王都周辺の出身だ。与しやすかったのだらう。」

そして、ゲドウオークと結び付いた」

軍事であれば私軍を持つ辺境伯と対立し文字通りの内紛、統治機構に手をつけて失敗すれば、辺境伯に交易路を絶たれ、民の生活が真っ先に混乱したはず。

王直轄地から外に権力を拡げようとする時に、権力から一番遠いように見える神殿に利用しやすい隙を見つけたということだろうか。

「辺境伯統括地域でも、王都の権威を持ち上げる風潮は広まりつつあった。それが領主を失くして統治の崩れかかったカービング。そして、カービングが統括権をもつ南東地域だった。だが、そうでない地域では、寄付を募りにくい。ゲドウオークたちは外国に目をつけた」

「ですが、外国は境界を接する辺境が交渉の権利を持ちます。辺境伯の頭越しに交渉しても、直ぐに分かつて怒りを買ってしまったでしょう」

少しでも自分達で稼ごうと思えば、縄張り争いには気を配るもの。音楽の世界でもそんなもの。

アリシア様の味方だと思っていたカービングなら、うまくいくと思っただろうか。

辺境伯を甘くみていた。そうとは思えない。

うや、きつとうまくいったところもあったのだ。

ロメリア様とローヌは西辺境///ヨルナの統括地域出身。///ヨルナ辺境伯は彼女たちを守らず、国外に出たのか。辺境伯と言えども一枚岩ではない。

「みんなが君のように賢かったらいいのにね」
リチャード様が苦笑した。

「現実はそのじゃない。欲に駆られた人間は基本的な事実を見落し
がちだ。巫女姫の権威を履き違えた今回の企みのよつに。宰相が
自分の子息を使って、辺境伯を飛び越え直接外国と交渉を始めた。
今まで茫洋としていた不遜な風潮がやつと形となってきた」

「この機会を逃すと更に根深い問題となつて後世に残す。ここぞ王
宮文官貴族たちの意識を引締められる」

「ゲドウオークたちが自分たちの御し易い御旗として掲げたのがア
リシアだ。歌姫として入った時から、社交界で人気の美姫。統治の
苦勞を知らず、浮ついた王宮文官たちの理想を体現した巫女姫。
もつわかるだろう、アリエツティ。ふるいにかけるにはちよつとい
い偶像が現れたんだ」

・・・そんなこと、楽しげに言わなうでござい。背中が薄ら寒い
です。

この方、本当に神官長なのかしら。巫女姫の権威を利用してまで、
統治者の資質を篩にかけるつて、まるで悪魔。

けど、この悪魔に心酔して忠誠を捧げるわたしも相当アツいね・・・
。

「君は賢すぎる。中央神殿で神官をぢせれば、すぐにゲドウオーク
たちの動きに気づく。伴侶もいず、君は後盾もなり。キリアムな
どに目をつけられて、あちらの陣営に取り込まれても困るし、あち
らの動きを阻止されても困る。動いてもらつては困るんだ。もつ何

年も、どうやってこの王宮文官の意識を変えようか、国王陛下も苦慮しておられた。

ここで断罪の形を取るには誰の目にも明らかな罪の形を作る必要があった。放っておけばその形は勝手にできてくる」

国王陛下やそれに並ぶ辺境伯たちはそれを待っていたのか。権威を盾にプライドだけが高い驕った王宮文官たちを肅清する瞬間を。だからこそあの杜撰な巡業をさせたのか。カービンで人買いの場を設けさせ、証拠を積み上げさせた。

「でも、でもどうしてそんなことをお認めになったんですか？ わたしたちは一生懸命、巫女姫を目指したのに。こんなの、馬鹿にしてる。歌姫たちに対する裏切りです」

涙ながらに訴えた。

「うん、いめんね、アリエッタイ」

謝罪が軽っ！ もっ！ なんなのよ！
人を傷つけといて！

「だけど、こんなことで本物の歌姫の力は失われない。巫女姫という権威の頂点に立って、チヤホヤされたかったわけじゃないだろう？ 君たちの祈りの本質はそこじゃない。わたしが育てた歌姫たちの使命はそこじゃない」

唇を噛んだ。ああ、悔しい。

そうだ、巫女姫を目指すことは実力を磨くためのコース。歌姫の力は自己研鑽だけに使われるものじゃない。

わたしたちの力は、土地と民の安寧を導くためにある。

本質を違えるな、未熟者。そう言われた気がした。

わたしはいつの間に、歌姫の使命を巫女姫の権威を守ることに書き換えていたのだろう。

分かっていたはずなのに。アリシアには歌姫としての資質がないって。彼女が歌っても加護など得られないって。頭のどこかで分かっていたのに、巫女姫に固執してしまった。

わたしは間違えた。いつの間にか、自分の使命を履き違えていた。

「アリシアがカービングに君を神官として寄越してほしいと言ったとき、随分迷った。なにせ、一度は君を勧め、断られたところだ」

わたしとヨシコア様が身動きした。

何ですって？！わたしを向かわせたのは、あの女だったの？！

あの女！完全に舐めてたわね、わたしのこと。

わたしたったらヨシコア様が心を向けるはずない、そう思ったのね。

しかも巫女姫巡業を誰よりも熟知している。

そして、そうか。キックナーが言っていた。

わたしをロメリア様のつなぎに使えろと思ったのね。

全く、小狡さだけはあるのね。

そして、そのほとんどが当てが外れた。

しかも、あの女が一番欲しかったヨシコア様を味方につけた。女として、格下だと思い込んでいたわたしへの寵愛を見せつけられて、醜く顔を歪ませたアリシアを思い出した。

ぢぢぢみる。

その瞬間と同時に、心の中の楔が音を立てて軋んだ。

この楔はあの日の戒め。顔を見ることなく、縁談を断られた日の、惨めな思い。

幸せを夢見て頑張ってきた自分を、見る価値もないと切り捨てられた。

あの可哀想な自分は、わたしだけが慰めてあげられる。

だからお願い。この楔は抜けないで。

それなのに、ヨシユア様はそっと握りしめた手をこすった。
離さない。その決意と後悔が大きな手から流れ込んでくる気がした。

苦しい。

心が揺れる。

「君を王都には居させられぬ。そして君なら必ず巡業を成功させる。巡業までいなくても、女神の加護のなれ土地と言われたカービングに祝福を授けて帰ってくるだろう。そこまででいいと思っていた。巡業も一年以内にしたいという希望だったし、一年くらいなら我慢強い君は待てるだろう。あとは、民が判断する。本物の祝福を授ける歌姫か、貴族の権威を保つための巫女姫か。それを守る領主がどんな人なのか。アリシアを送り込めばそんなものは一目瞭然だ」

「・・・それ、全然、私を守ってないです！人を踊らすだけ踊らせ

ておいて。あなたによつに念だけで物事は動いていかならんです。私がどんな思ひで巡業を待っていたか」

リチャード様はクスクス笑つて、^じめん、と謝った。

「私だつて誤算はあるぢ。それが今回はあなただ。カービン卿。まさか、本当にアリエッティを選んでくるとは。あのアリエッティを選んだあなただ。見た目だけで選ぶ男が、アリエッティの才能を認められるわけない。すぐに送り返してくるだろうと踏んでいた。アリエッティがあんな仕打ちをされてすぐに許すはずもないしな。ところが、あの天覧演技の誇らしげな顔ときたら」

そう、あの頃から関係が変わった。態度だけはわたしに近づいて、でも何も言ってくれなかった。

止められてたの？わたしにあの企みを悟られないように？

「そのあと、すぐに巫女姫降嫁の願ひ出を正式に取り下げてきたから、すぐに動くのかと思えば。随分のんびりしたものだ。まあ、当代一の色男も、本気の時はずっと普通の男だつて何か。落ちなかつただろう？この賢い姫は」

リチャード様が楽しげに笑った。

やめて。心が苦しい。

落ちなかつた？いえ、落ちていたわ。完全に。

だからこんなに苦しいの。

70 二の指先を伸ばして

「自分が思うより、君は魅力的なんだ、まだ信じられなうか？.アリ
エッティ」

リチャード様が優しい声で言った。

わたしの大好きな声。
優しくて、深い響きがあつて。

12歳で神殿に入つて、右も左もわからずにオロオロするわたしを
ここまで導いてくださった。

本来なら行事のたびに家や領から捧げられる貢物で、恥ずかしくな
い格好をしなければならなかったのに、その後ろ盾のないわたしを、
実力で見返すんだと励ましてくださった。

464

この声に導かれて、わたしはここまできた。

だけど、大好きなあなたも、わたしを一番に選んだのではなかった。
選ばれるはずはない。そう分かつてたけど、それでも。

セシリアの美貌と身分に隠れて、ローズの才能に隠れて。
みんな大好きで、心から尊敬する人たちだけど、わたしは、わたし
を一番にしてくれる何かが欲しかった。
そのために、次こそは、と自分を奮い立たせて。

家族に顧みられないちっぽけな女の子が、努力したことで幸せにな
りました。

そんな夢物語に、わたしはなりたかった。

リチャード様。

結果はここです。

わたしは巫女姫になれなかったし、望まれて嫁ぐこともできなかった。

歌姫だったわたしを、認めてくれた人は誰もいなかった。

歌姫としてしか居場所がなかったわたしは、歌姫として認めてほしかったのに。

「君の不幸は、天才が揃いすぎたことだ」

俯くわたしにリチャード様が言った。

「たまたま、君の周りは大物過ぎた。セシリア姫にしても、ローズにしても、突出した才能があり過ぎた。周囲の人間がわかりやすく、納得できる歌としての表現力。歌を研鑽し、競っていくならこれほどわかりやすい実力の差はないくらい、彼女たちは才能があった。不幸にも、その才能が同じ年代に重なってしまった。そして、その代でこのような企みが起こった。これも女神の意思なのだろう」

そう、わたしの周りには天才だった。

これこそ歌姫、と思わせる人たち。

美貌と美声のロメリア様。異次元の作曲をするセシリア。絶対音感と表現力のローズ。

抜きん出た力は女神の力を実感させるに十分だと思った。

わたしにもきつとその力がある。

そう信じていたかった。

「努力が報われない天才の前に、深く傷ついていたことは知っているよ。だが、それは歌姫の間だけ。それが過ぎれば、君の才能は花開くだろうと思っていた」

リチャード様の言葉に思わず顔をあげた。

「君の性格、その才能。与えられた環境の中で決して折れず、女神の意思を表現できる不羈の魂。そして、手段を狭めない柔軟さ。これはここにいる歌姫時代にはわかりにくい才能だ。だが、歌姫としての真髄をわたしは認めていたんだよ。」

わたしの才能・・・・・・・・。

わたしは常に2番手だった。音楽でも演奏技術でも、頂点を与えられたことはなかった。だけど、ここにいるわたしの姉妹のために、たくさんの取りまとめをして円滑に進むように気を配っていた。歌姫の一人一人が心から楽しんで歌えるように。それは単なるお節介で、わたしがわたしの環境を良くするためにしていた自己満足のつもりだったけど、それも才能だと認めてくれるの？

「女神の加護を忘れているカービングには、君の教義の深さと柔軟な発想が必要だと思った。だから巫女姫降嫁を望んだカービングに君を勧めたんだ。だが、カービングの欲しがった巫女姫は、祈りの力ではなかったらしい。私の大切な歌姫を傷つけた報いに、本物の歌姫とは何かを見せつけようと思った。さすがは私のアリエッティだ。致命傷をつけてきたんだ」

ハハ！とリチャード様が笑った。

清々しいくらいの笑いに、この方も相当腹を立てていたんだと分かる。

でも、わたしは怒れないわ。

もう怒りも湧かない。ただ苦しくて。

繋がれた手が痛い。

振りほどきたいのに。

離さなければいけないのに。

「この子の実力は十分だ。そう思ったろう、カービング卿」

「……………ええ、アギネルズ神官長。民に喜びの歌を歌わせる歌姫。彼女以上に歌姫を愛し、歌の女神を体現したものはいない。カービングの民は彼女がいなければ、女神の恩寵を思い出せなかった」

ヨシユア様が苦々しく肯定した。そして、ますます強くわたしの手を握った。

「そつた。だが、見る目を疑われたわたしも流石に腹が立った。だからコトパンにやってくるというと思ったんだ」

コトパン……。リチャード様、何かわたしのこと、勘違いしてますよね。

「今はそれ以上に君は傷ついている。誇り高く君を傷つけた相手を、本当は許した。そう思ってるんだらう?」

リチャード様が優しく話しかけてきた。

ああ、やめて。リチャード様。

許したくない。とても苦しいの。

だって、だってこいで許したら、わたしは何のためにあんなに恥をかいたの？

誤解や無知だけで許したくない。

わたしはとても傷ついて、家族にまで見放された。

歌姫という自分の居場所を、あの性悪アリシアにいらぬものに利用されたことを、簡単に許したくない。

全ての元凶はこの人。ヨシコア様。

「アリエツティ」

ヨシコア様がわたしに跪いてきつく手を握りしめた。

聞かせたくなかった。

分かってる。多分、ヨシコア様は何も存知なかった。

王都で大事に育てられて、辺境のあの荒廃を立て直すのに奔走されていたこの方が、歌姫の矜持なんて知るはずがない。

そんな事情もだんだんと分かっていたけど、それでも許したくなかった。

だって、いぬんの一言で許せるほど、わたしは。

「いくらでも話していい。一生、わたしのことを罵ってくれ」

「生？それは嫌も。こんな苦しい気持ちを抱えたまま、一生、生きていくたくない。」

お願い、そんな顔しないで。ヨシコ様。
どっぴり怒っているのに、そんなに泣きそなの？

「側にいてくれ。あなたと離れるなんてできない」

ああ、もう、ほんと、やだ。

許したくない。

幸せを授ける歌姫に、こんな屈辱と失望を与えたあなたを、わたしは許してはあげない。

だけど、こんなに苦しい。

「もっと早く、いつやって跪けていたら、あなたをこんなに悲しませることはなかったのに。でもどんなことを言っても、言い訳に過ぎない。最初にあなたを傷つけたのは、わたしの無知だ」

知らなかったでは済まない罪。

あなたの無知でカービングの民は、不幸せになる。

なってしまったらういじやない。

だって許したくないのだから。あの可哀想なアリヒツトをわたしは襲切りたくない。

「あなたでないと、ダメなんだ。わたしも、カービングも。」

「・・・許さない」

吐き出された言葉が苦くて。

ああ。

こんなことを言うためにわたしの声はあるんじゃない。幸せの祈りを紡ぐためにある歌姫の声。

だけど。

可哀想なあの時のわたしを、こんな簡単に捨てたくない。

ヨシユア様が優しくわたしの手を包んだ。

大きな硬い掌。

許してはいけないという心と裏腹に、その手に縋りたくて振り解けない。

「それでもいい。ほかの誰かのものになるくらいなら、一生わたしを憎んでくれ。わたしはこの手を、離さない」

ヨシユア様の翠の瞳が揺れる。

わたしに懇願して。それでも、その目に燃える慇懃の光は揺らがない。

心を射抜く眼。

わたしの恋心はとつくの昔にいつの方にはお見通しで。

あと、一歩。

この指先をあなたに向かって伸ばせば、わたしの手を掴んでくれる。わたしを一番だと言ってくれる。

わたしの心の声に応えるように、ミシエ様が強く手を握った。

「・・・わたしを、幸せにしないと、許さなうんだから」

花開くように美しく笑ったミシエ様の目から、一筋の涙が溢れた。

71 若い者は手がかかる

若い者は手がかかる、とりチャート様が、笑いながら揶揄った。

「りチャート様にも怒ってるんですからねー。」

ひどいわー。りチャート様ー。

慈愛の微笑みの裏で、足を揃つこの方のやり方を知っていたから、何かあると思つていただけと、わたしまで欺いてー。

こんなやり方しなくてもー。

でもそういうところが、りチャート様なのよね。神殿から権力を遠ざけるために、わざと逆手にするやり方を何回か見てきけど、まちが自分が巻き込まれると思つてなかった。

優しいね、と声をかけられる度に、甘いな、と心の中で言われてる気がしてた。勘違いじゃなかったんだ。
腹立つ。

そう思いながら睨むわたしに、りチャート様は手を広げた。
「許しておくれ、アリエッティ」

うわああん、と何も考えられず、その胸に飛び込んでしまった。

「睨むな、カービンダ卿。わたしは父親のよつなものだ」
ああ、ヨシエア様が睨んでるのね。想像がつくわ。ヨシエア様、と

でも苛烈なところがある。わたしの前ではなるべく見せならぬにしていた。

いくらわたしがカービエグの慣習を無視しても、我を通して意固地に立場を変えようとせず困らせても、許してくれていた。わたしはどこかでヨシコア様の好意に甘えていた。

でも一度踏み躪られたことが許せなくて、ずっと見ならぬりをしていた。

本当は嬉しくて、舞い上がって、そんな自分が恥ずかしくて。

ずっとずっと辛くて、苦しかった。

この苦しみはこの人から離れたら無くなる。そう思ってた見ならぬにしていた。

リチャード様に言われて気づいた。

許せなり自分に苦しんでるんだって。

許せなりって、ヨシコア様を踏み躪り返したら、それでわたしは幸せになるのかって、そんなこと分かりきってる。

幸せになんかなれない。

許せなり自分に固執して、哀れんで、その場で立ち尽くしても誰も幸せにしてくれない。

わたし、子どもだった。

ヨシコア様の好意を知ってるくせに、その好意を裏切るつもりでいた。そうやって復讐したら心が晴れると思っていた。

誰よりもわたしのことを想ってくれて、わたしもあなたに寄り添いたって思ってる人なのに。

許さなり、と初めて言葉に出して、その歪ちに気づいた。目の前にある愛情を踏み躪って、裏切ることの感触に言ひもつのなら性まじちを感じた。

自分の心ちえ裏切って、その醜惡な気持ちを引き受けるほどの覚悟はわたしにはない。

結局、子どもだったんだ。

いろいろ言い訳して、覚悟を自分で決めることができなうでいたんだ。

可哀想な自分を捨てて、ヨシユア様の手を握り返したらたくさん新しい困難を引き受けることになる。

アリシアと正面切って戦うこと、領主夫人という本物の貴族になること、荒廢したカービングをヨシユア様と立て直していかないと、いけなうこと、そして今まであんなに欲しがった愛情を受け止めて、
にちらも返してあげること。

彼を選んだら、その全てが初めてのことで、自分にはできなうと逃げていた。

復讐という自分なりの大義名分を掲げて、劣等感の中に逃げよつとしていた。

目の前で仕立てられていくギルニガハゼ十城の女主人という舞台に臆して、一歩を踏み出すことができなかった。

わたしはカービングが好きだ。雄大な自然も。朴訥な人々も。土地土地を回って少しづつ好きになった。最初は受け入れてくれなかつた人々も、進んで祝福を受けに来るよつになった。

それは間違ひなくわたしの功績だ。巫女姫の權威じゃない。歌姫としてのわたしの足跡。

初めて、その功績を誇ることを許される気がした。
許せないうという内向きの畏れよりも、素直に好きだと思える気持ちの方が、心地よくて、楽に息をすることができる。

わたしを幸せにする舞台は整っている。

ここでヨシユア様の手を握り返して、一歩を踏み出せば新しい舞台の幕が開ける。
ここからは神殿の歌姫という予兆のもの自分ではなく、女神の意思を継いだ本物の歌姫として、カーンバグの土地に励ましを贈る。

リチャード様をぎゅ、と抱きしめて、ヨシユア様を振り返った。
勘えたような目で、焦れた顔でわたしを見ていた。

「今、ここで、婚姻の誓いをさせてください。アギネルズ神官長」

えええ？

突然何言ひ出すの？

「ヨシユア様、それは……………」

「それはいいね。だけどせつかく神殿にいるんだ、少しくらい体裁を整えた方がいいでしょう。特に女性にとっては生涯で最も大事な儀式ですからね」

はい？リチャード様も何をおっしゃってるの？

辺境伯様ならなおさら、ちゃんとした手続きを踏まなくては。

説得しようとするわたしに、ヨシユア様は笑った。

「心配しないうでいい、アリエッティ。わたしは辺境伯だ。手順なんてあって無いようなものだ」

ええ？あなた、そんな暴君でした？！

オロオロするわたしを横に、ヨシエア様とりチャード様がテギパキ指示を出し始めた。

手順なんて、と言ってたけど、一応、届けを出すらしい。
本来なら国王陛下の御璽が押印された許可証を前に女神の祝福を授けられる婚礼の儀式。

許可には、届出人の署名の他に、見届け人になる両親や後見人の書類が必要なはず。

本人の署名は今できるとして、見届け人は用意できません。だってうちの両親にも何も知らせてないんですよ？！と抗議したら、今さら両親の許可が必要かい？とりチャード様に釘を刺された。

うっ、そうですよね。うちの親の無関心はご存知ですものね。

それに成人して、とくに何年も経ってる年増のわたしに保護者面されても。

見届け人ならわたしがなるよ、とりチャード様はいつのまにか用意されていた書類にサウサウとサインして、ヨシエア様が侍従を王宮に走らせた。

ヨシエア様の見届け人は、ロードティア將軍閣下。また大物を引っ張ってきた、と頭を抱えたら、既に署名までさせてるから提出するだけで、と宣って。

ええええ？

外堀を埋められてると思っただけど、ここまで……。しかもそのまま国王陛下に発布をしてもらってから典礼局を廻らないって。

ちよ、ちよ、ちよっと、待って。
どういうこと？。！。ああ。！。そうか。！。辺境伯は国王の麾下じゃないから？。！。

一人であたふたしてるのに、リチャード様は落ち着きなさいって、
なんだか機嫌良く笑って。
いやだ、なんだかその笑顔怖いです。！。
ろくなこと考えてない時のやつでしょ。！。

引き攣るわたしに神殿の衣装係を呼んで、着替えなさいと指示された。
巫女姫の衣装を使いなさい。好きなものを選ぶって。
いいの？。いいの？！
だって巫女姫の衣装よ？！
わたし、歌姫でもないのに、本当にいいの？。

なんだからわけのわからないうまま、衣装部屋に連れていかれて、顔見
知りの衣装係の奥さまたちにじっくり回されて。呆然としていたら、
ノックがされ、ヨシコア様が、ひょいと、顔を出した。

ぎゃあ。！。と衣装部屋に黄色い声が響いた。

うつむ。！。カッパ。！。
いつの間に取り寄せたのが、ヨシコア様は騎士の礼服。左肩から掛けられたサッシェには紺地に銀糸でカービングの紋章が刺繍されている。

腰には装飾のサーベル。

髪もいつのまにか整えられて、先ほどまで降ろかれていた前髪が、きつちりと横に流される形になって、秀麗な目元がはつきりと見える。

何気に盛装？！

もつ引き下されないうららの大行事じゃなりー。ほんとにやるの？！

「何を今更」

ロシニア様は立ったまま睥睨して、わたしを上から下まで見回して、うーん。と腕を組んだ。

「ちょっと大きいんじゃないか？その衣装」

え？。ダメ？。

だってすっぴい懂れてたんだもの、この衣装。

ロメリア様が以前お召しになった、ビスチエタイプの白の衣装
伝説にある奪還された巫女姫の衣装に一番イメージが似てる。
上半身には全体に細かな刺繍がしてあって、腰から下の膨らみのあ
るスカートは何層も薄衣が重ねられている。肩から背中にかけて羽
根のようなマントをかける。
上品で優美。

ロシニア様はじっと見て、一言言った。

「・・・・・・・・まあ、ううか」

はつきり言ちなっちゃう。

と駭いて、そつと自分でロシニア様の視線の先を辿った。

うーん、やっぱり大きいかな、ちよこと胸元が。

！！！

「や、やっぱり着替えますー...」

「いや、いい」

「着替えますー」

「悪いが時間があまりないんだ。アリエッテ」

その言いつと、ヨシコア様はつかつかと寄りついて、ひもと抱き上げた。

「よ、ヨシコア様ー」

「こっちは誓いの儀式だけだ。こっやって持ち上げて動けば、誰にも見えぬ。それに、祭祀の間には誰もうない」

あなたに見えてるじゃないですかー

「おとなしくしてくれ。花嫁を落とすなんてみごとなものにはしたくない」

祭祀の間の扉が開かれると、キヤアーと若い女の子たちの嬉しそうな悲鳴が聞こえた。

祭祀の間に集められていたのは、巡業に参加していなかった歌姫たち。

「見えてるじゃないですかー」

「知らなかったんだ」

ハハハーとヨシコア様が快活に笑った。

横抱きにされたまま、歌姫たちの間を通過して、祭壇の正面部で待っている神官長様の前まで進み、下ろしてもらった。

うー。恥ずかしい。

顔から火を噴くってこんなこと。
恥ずかしすぎて、顔があげられない。

神官長の言祝ぎの後、パイプオルガンの伴奏に合わせて歌姫が歌い始めた。
自然と顔が上がった。

音が天から降ってくる。この瞬間が大好きで、歌姫になった。
1番も2番も関係なく、地に立つ人に満遍なく雨が降り注ぐように。
この瞬間だけは女神の祝福を自分は受けている。わたしはきつと幸せになれる。そう思える時間だった。

480

わたしは授ける側になった。
それを目指して歌姫になった。

カービングは万全な場所じゃない。
ただ歌っただけでみんなが喜んでくれる、そんな単純な場所じゃない。

歌を喜ぶ、という単純な行為は、自分は安心だという余裕がないとできない。
ヨシエア様やカービングの民は、荒廃の中、巫女姫という象徴にそれを願ったのだらう。

歌姫は民に心の安寧を授けるために育てられる。
そしてわたしは今、その立場に立った。愛する人とともに。

ロハ様の手を握り返した。

72 裏切り？ なんだか、なんだか

翌日から世界が一変するかと思っただけで、議会が始まるまでは、比較的ゆつくり過していた。

相変わらずヨシコ様は忙しそうだったけど。

あんなに苦手だったタウ・ハウスの執事には、顔を真っ青にされて謝られた。

そのうち、カービングから誰か呼び寄せて交代させるから、申し訳ないけど、もうしばらく我慢してくれ、とヨシコ様には言われて。

えーと、今、執事を交代されてもわたしも困ってしまう。辺境伯の王都での社交なんて、想像もつかない。

議会が始まるまでは、ヨシコ様も一緒に屋敷の奥向きのことを聞いていたが、議会が始まった途端、ほとんど屋敷に帰って来れなくなってしまった。

全部を一気に考えることはなら、と言われるけど、なんだか落ち着かなくて、つい屋敷の中をウロウロしてしまう。

リチャード様からは神官の務めは、カービングのことに専念するように言われたので、神官長の話は脅しだったのかしら。

そんなことをしてるうちに、新年になって、王宮主催の新年舞踏会。披露宴はしてないけど、正式に妻になったのだから、と連れていかれた。絶対、ダンスはしないから！と約束させて。

アリシアは廃位されたから、新しい巫女姫が改めて選出されているはず。

巡業に連れていかれた歌姫たちは、家ごと処分されているから、神殿に残った歌姫たちの中で誰が選ばれたのか、気になった。

新年の舞踏会の控え室から、巫女姫が見えるかしらと覗きこみ思っていたのに、入った途端、次々と取り囲まれて、結婚のお祝いを言われた。披露宴はまだしてないし、公式のお披露目は今回が初めて。国王陛下にはさすがに謁見していたから、もう社交界中が知ってみたい。

来る人、来る人、舐め回すようにわたしを見る。

苦行だわ。

辺境伯夫人になるには、あといくつ苦行を乗り越えればいいのか？注目を浴びるって思った以上にストレスがかかるものなのね。

「カービンダ辺境伯、ヨシユアニヴァンニカービンダ様ならびに伯爵夫人、アリエツテイ様」

幕越しにざわ、という声が聞こえた。

あああ。胃が痛い。

はあ、と深いため息をつくと、ぐ、と腰を押された。

「大丈夫。胸を張って。俯いているのはあなたらしくない」

そうね。わたしらしくないわ。

高いヒールだから、ヨシユア様にちゃんと掴まつかないと。

階段を降りて、王族に礼をして、顔をあげ、固まった。

・・・セシリア。

王族に並んで立つ、巫女姫の場所。

セシリアがにっこり笑って、わたしを見ていた。

なんでだろう、この裏切られた感じ。

どうして歌姫でも神官でもないはずのあなたが、そこに立っているのでしょうか？

両陛下ぐいす挨拶した後、巫女姫の前に立った。

「会いたかったわー。アリーー。」
わたし、今、どんな顔してるの？

ただ、無言で立っていることしかできなうんだけど。

「い結婚、おめでとーい致します。カービィダ伯爵。それに、わたしの親友、アリヒット様。お二人が信頼と愛情に満ちた日々を重ねていきますように。いつまでも女神のい加護とともにありますように」

あらあ、巫女姫直々に祝福がいただけるなんて、なんて光栄なんでしょうっか。

でも、わたし、笑えてる？

ヨシエ様が丁寧に礼をされたけど、わたし、動けなう。

つーと、わたしの鎖骨をセシリアの白い指が辿った。
「ねえ、アリー。人妻にしては、あまりにも可愛らしくない？。ピンクベージュなんて。でもオアシオルターを選んだのは良かったわ、この辺で色気を出さないと出るとうっかなうのだし。」

ぐ、とわたしに触れていた指をつかんだ。

「どーゆーこと?:セシリア」
「あらあ。怖い顔。新婚なのに黒いわよ。もう、本性出しちゃったの?:」

□□□□と笑う。

「この子は、この子は――」

人を手玉に取るような会話は、絶対この子のせうだと怒る――

「だってね、おとなしくしてたら、イエールとの結婚も推してくだ
さるってリチャード様が言うから」

はあ？イエールって、イエールってもしかしてリットイエールさん？

「な、な、な――」

「もう、アリ――。ここで倒れなうでも、披露宴まではいるんでしょ
？ゆっくりお話ししましょ」

やだ、もう。倒れたい。

次の方がいるからな、とヨシエア様に背中を押されたけど、足元が
おぼつかない。

抱いてやるのか？。ってヨシエア様が囁かれてやっと背中を伸ばした。

王都って怖い。お腹の中が真っ黒な人たちはっかり――

その小さい声で言って、もうカービングに帰りたいと思わず出た。

すると、トヘトヘとヨシエア様が手を繋いだまま、階段を少し降り
て、私のほうを見た。ちよつと下から見上げるように振り向いた。

「やはりあなたが巫女姫だ。カービングの巫女姫。ありがと。ト
リエッテ。一緒に帰ろう、カービングへ」

そう言つと本当に美しく、幸せそうに笑つた。

頬が染まるのが分かつた。

なんでこんな時に、そんなこと言つたの？

なんで、そんなに綺麗に笑つたの？

おおー！

真つ赤になつた顔を両手で覆つと、そんな可愛らしさで、しなで。とヨシユア様に囁かれた。

お願いします。もう限界です。

こんなところで公開処刑はやめてください……。

いつのまにか近くにオスカ一殿下がいらしていて、新婚だからってこんなところでイヤイヤするなと注意された。

他所でやれ、他所で。と大広間を追い出されたので、もう帰ると思つたのに、辺境伯たちに捕まつてしまい、取り囲まれて、次々とお祝いを言われた。

「なかなか大捕物だったな。コングラツトが悔しがつていたぞ」

ザドキエル辺境伯が豪快に笑つた。

「卿はお人が悪い。コングラツトを寄越すなんて。どれだけ人を焦らすのですか。おかげで大急ぎで籍を入れたんですよ」

ヨシユア様が拗ねたように言い募つた。あら、この前と随分違つた。

いんなに親しみのある仲だったの？

ザトキエル卿も他の辺境伯も本当に楽しそうに、ヨシエア様に話しかけている。

可愛がられているのは、本当だったのね。

「改めておめでとうございます。カービング卿。アリエツトイ夫人。辺境の守りにこれ以上心強いことはない」

ハイテル卿夫妻が優雅に礼をしてくれた。私達も正式礼で返す。

実はハイテル伯爵夫人は歌姫とのこと。

私とは親子ほど年が違つので、全く面識はないが、今回のことはとても気にかけてくださっていたのだ、と優しくお話してくれた。

487

「次は是非、我がザトキエルに本物の歌姫を迎えたいものだ」

「そうやって、孫たちを焚きつけるのはいいですが、火種を撒くのはやめてください」

「わははー。随分、恨まれたものだ。私とて、そんなに本気だと思つてなかったんだ。お前がうまく隠しているものだから」

「隠せとおっしゃったのはあなた方でしょうー。恨んで当然です」

もしかしてザトキエル卿も最初から囁んでいたの？

ヨシエア様を見ると、教えてくれた。

「この方たちは、私があなたに求婚するのをずっと止めていたんだ。

巫女姫と私との関係が変わったらあなたに悟られると言って。恨むならこの腹黒いオヤジ達だ」

「おやおや、言い訳するな。その気になれば私たちの言うことを聞きはしなくせに。巡業が動き出す前から奥方に首っただけだったのは、城下まで有名だったぞ。動きが遅れたのは、お前が不甲斐なかったからだろう？」

ザドキエル卿が笑った。

ヨシユア様は目元を赤くして、目をそらした。

ん？。なんか、リチャード様も、同じようなことをおっしゃってたような。

ヨシユア様は答える気はなれそうに、つん、と顔を逸らした。

ふーん。

あとでお屋敷でしっかり聞かせていただきます。

わたしだけでなく、ヨシユア様も含めてカービングはこの国の高位の方達にいいように利用されたってわけですね。

セシリアも知ってたのに、なーんにも教えてくれず。

あーもー。ほんと、こんな人たちの仲間やっていけるのかしら。

流石に辺境伯ばかりの集まりには、他の爵位の方たちは入ってこられず。

私たちは大広間に戻ることなく放免された。

踊らないのか、とおじ様たちが勧めていたが、ヨシユア様は、辺境

伯の中でも宴会嫌いで有名らしい。

それに顔が良いだけで実は女性が苦手なんだと、揶揄われてた。

あれ？ なんだかわたしの知ってる三ッエア様と違う。

なんだか、なんだか。

色んな事が意外。

披露宴は議会閉会直後にするつもりで、社交シーズには王都に
いることになった。

ほんとに、久しぶりに王都にいる。

けど、いろいろ落ち着かなくて、カーニングの、あのんびりした
空気が懐かしい。

シクシク。

茶会や、夜会の招待状は毎日山のよつに届けられるし、それにうち
うち目を通して、お断りのお返事を書くだけで、午前中が終わる。
ヨシア様は議会に出てるから、これはわたしの仕事だけど、社交
界に疎いわたしにはこれにお返事したらいいのかわからない。

助けてくれたのはセシリアだった。

王姉殿下の娘に当たるセシリアは本人はポヤポヤして一人で歩くの
も危なっかしいけど、それをちゃんとわかって支える人材で固めら
れていて。

セシリアの声かけで、王族の妃様やザドキエル辺境伯夫人が名乗り
出てくれて、社交界の指導を受けている。

それでもわたし一人では判断しきれないから、毎晩、遅くまでヨシ
ア様を待って、一応話し合ってる。

それでもなくても、披露宴の準備やら、どうしても出席しなきゃいけ
ないお茶会や夜会やら、屋敷のことやらで毎日てんてに舞う。

領主夫人って、ほんと大変なのね。ちょっと舐めてました。

おかげで、ピアノにも触れず。

明日、絶対に外せならお茶会に出なきゃいけないので、久しぶりにピアノを弾いて、あまりのひどい有様にちょっと涙が出た。

ベルセラムがとて無くて、わたしの横に跪いた。

大丈夫。泣かされてならわよ。自分が情けなかっただけ。

ベルセラムはわたしが、カービンズのタウハウスにトラウマを持っていたことに最初から気づいていたから、今でもわたしを守ろうと必死だ。

マーガレットのよつに、気強く言い返すことはしなけれど、絶対にわたしから目を離さない。

「めんね、心配かけて。

そういうと、ベルセラムは優しく笑って

「あなた様をお守りできるのは、わたしだけだって、ずっと思っていました。あなた様がわたしを強くしてくださったんです」

って、手を取ってくれた。

これには本当に涙が出てしまった。

最初はあるなおととして、カービンズの風習なんか、全く無視のわたしにビクビクしながらついてきてくれた可愛いお嬢さんが、いんなに頼りになる侍女に育つなんて思いもしなかった。

神殿のことも城のことも何も知らず、侍女教育もろくに受けてないベルセラムにとって、わたしのお守りは本当に大変だったろう。

に。

ベルセラムはあまり言葉で語らない。その距離感は今でもわたしには癒した。

休憩されますか？とお茶に誘ってくれたのを断って、ピアノを練習した。

明日は、セシリアのお母様、ゴトリア大公の主催するお茶会。

セシリアのお茶会、王妃様主催のお茶会、王太子妃様、ザトキエル辺境伯夫人、と続いている、明日。

社交シーズンが終わるまで、あと辺境伯夫人と王族主催のお茶会と夜会を外さずに行ったら、週に2・3回のペースで出席することになる。

いぬん、セシリア。
社交を舐めてました。

やっぱりわたしには向かないです。辞めておらうですか？

お茶会のたびにピアノを披露しなきゃならぬのにとんとん腕が落ちて、これじゃ歌姫を誇れない。

だけど、本当に社交は大事。

ヨシゴア様もあまりの忙しちに心配して、無理していかなくていいとおっしゃるけど、今シーズンばかりは多分、それは無理だと思う。

ロメリア様はガイネ港に、ローズはバスター王国に嫁いでいることを正式に発表されて、王妃様や王太子妃様から、出産のお祝いを渡されていると聞いた。

王都の社交界に受け入れられたことで、彼女たちの名譽は回復された。

そして、アリシア巫女姫やキックナ一子爵たち。

巫女姫の責務を全うしなかったことは神殿内のことなので巫女姫の廃位。キリアム様のたちに加担したこと、辺境伯に狼藉を働いたことでアリシア様の「実家」こと取り潰し。爵位返上の上、一族国外に追放となった。

命があるだけマシだと思え、と高位の方たちは口々に言った。

キックナ一子爵とその父親の宰相は神殿を巻き込んだ不遜な企みを反省せず、辺境伯に暴言を吐いたというところで、こちらは命を持って償いをさせられた。

キリアム様の「実家」も同様。

神殿の権威を弄び、あまつさえ大事な歌姫を金銭で売った。キリアム様とお父様の元神官長様はその命を持って償った。

これに怯えたのは、今まで辺境伯を軽く見ていた王宮文官の有爵家たち。

わたしはあまり知らなかったが、王宮官吏の有爵家の人たちは、辺境伯統括地域を一段下に見ていらしい。

それはもつ何十年も前から。少しずつ少しずつ。

議会が王都で開催されるために、王都は人が集まる。

またその議会の日程や、議会に関わる諸事に関わることで彼らは自分達こそ権力があると錯覚したのだらう。

それに加え、カービンやハイナル地域の度重なる厄災で、王都の巫女姫を差し向けると、その天災が収まるという奇跡が、巫女姫を保護している立場の王都を上押し上げたのだらうと、夫人方は教えてくれた。

つつらつつらは社交に出ないとわからない。

わたしは王都の一文官の家の娘で、継嗣でもなかったから、社交界に出るのはお嬢ちゃんを見つけるためしかなかった。

しかも歌姫。

社交になどでなくても、そのつち語がかかるといふ先輩たちの言葉を盾にとって、苦手な夜会や茶会は逃げてまわっていた。

本音を言えば、茶会に出られるほどの服装や談話が用意できなかったから。

下手に名前だけ格式が高くと、自分から男爵家や騎士爵位のお茶会に出させてくれなんて言えない。

それに、わたしは下ヒューもしてなかった。

社交界への下ヒューは、王宮で開かれる下ヒュータフトに出ること。歌姫は基本、15歳になれば、新年舞踏会に歌姫として出席し、そ

うが下ヒュータフトの代わりになる。

だが、普通、子爵位以上となれば、自分の家から下ヒュータフトに改めて出席させ、家名を背負って社交界に出させる。

そのすることによって社交界に年頃の子女がゐることを知らしめるのだ。

わたしの家でドレスコタヘトに出されてゐるのは、わたしだけだった。歌姫として王宮舞踏会に出たので、それでもよし、とされたものだった。

だけど、せめてドレスくらいは用意してよね？！

ドレスも神殿からの貸し出し。

この前の誓いの儀式と同じように、神殿に寄付されたドレスの中から体に合つものを貸してもらえただけど、小柄なわたしには合つものはあまりなく、仕立てが上手な神殿の召使いさんが直してくれていた。

そんなこんなで、わたしは神殿にいる頃から、伯爵令嬢としての扱いをされていなかったし、自分でも自覚がない。

ヨシユア様に伯爵家だろう、と何度も叱られたが、だってほんとにそんな扱いじゃなかったんだもん。

ヨシユア様が、私にそんなことを言わなくなったのは、実家に挨拶に行つて、本当にわたしが実家でないものだった分かった時。

ヨシユア様と実家に挨拶に行った帰りの馬車で、ヨシユア様は何も言わず私を抱きしめていた。

だけど、すこしく同情されているのは分かつて、ちよつとだけ涙が出た。

まあね、せめて妹が婚約したことぐらい教えてほしかったわ。

いくら辺境っていても、手紙で知らせてくれたら良かったのに。

婚約も何もなく、いきなり結婚の報告に行ったわたしたちも相当だけど。

お父様もそうだけど、スミス家は家柄は古うけど、古うだけで才覚がない。

処罰された王宮文官たちの一味ではなかったけど、時流を読むのは苦手で、わたしが巫女姫の候補になったこともよくわかってなかった。

もし、万が一、私が巫女姫になっていたらどうするつもりだったんだろう。

カービング辺境伯とはかなりの身分差にはなるんだけど、披瀝宴に呼ばないわけにはいかない。

ああ、なんか、貴族ってほんと、めんどくせー。

ケビンとか、ナーガの結婚をお祝いしたお茶会みたらに気楽にやりたい。

あの茶会は楽しかったなあ。

74 カービングの巫女姫..

王都での披露宴は、とても盛大だった。

カービングのタウンハウスで準備してただけど、国王一家も、現役の巫女姫も、臨席になるし、王族が多過ぎて警護が大変すぎる。国の一角を担う辺境伯の結婚を祝ったための宴として、国王主催の披露宴に趣が変わった。

聞いた時は流石に血の気が引いた。

ヨシエア様は王族に近いとは知っていたけど、そいつの聞いているのと現実では全く違う。

楽できて良かったな、とヨシエア様はにっこり笑いながら言っていた。

あなた、恐れ多いとか、ないんですか?!

たしかに、議会開会中に準備したから、同じ王宮で行われている議会に話めているヨシエア様を捕まえるのも簡単で、しかも不慣れなわたしには負担のないようにヨシエア様の手配してくれるから、楽だったけど。

それに、セシリアとかオスカー殿下とか、リチャード様もしょっちゅう顔を出してくれて、相談に乗ってくれたからあんまり苦労せずに済んだ。

あんまりみんなが協力してくれるから、疑いの目で見たら、悪いと思ってるんだってセシリアが言った。

「アリーにずいっと許してね、頑張ってねって思ってたのよ。一年で帰ってくるって思ってたのに、準備もろくにできないうちに連中だったから巡業は伸びるし。リチャード様が何度も十分だよって言っても、巡業を成功させますって返事が来るし」

セシリアが可愛らしく、口を尖らせた。

「でもね、天覧演技の後、あなたなんだから幸せそつで。なんとなく上手く行く気がしたから、大叔父様たちに協力することにしたの」

わたしは遠い目をして言い訳を聞いた。

セシリアがなんとなく、と言つ時は大概その通りになる。

セシリアの言う大叔父様とは、ヨシエ様の育て親になる王軍将軍のこと。

リチャード様はザトキエル卿としても仲良しで、ザトキエル卿は、ヨシエ様の育て親である王軍将軍ロードテア大公閣下と親戚関係。

この3人が、この国のほぼ頭脳に当たるんだって、やっとなかりました。

国王陛下の親世代の、経験も実力もある人達だから無視できないうわよね。

ヨシエ様は未来の王、王太子殿下とは10以上も歳が離れているけど、同じ王宮で兄弟のようになされて。もちろん王太子殿下とも懇意で、見てわかる感じでは、ヨシエ様の意外とキレやすい性格を温和な王太子殿下が弟ちゃんのようには抑えてくれてる感じだった。

王族に可愛がられてたんだなって、よく分かった。

でも、セシリアとは本当に面識がなかったんだって。ちょっとびっくり。

セシリアはちょっととろろじゃなく変わった子だから、ゴティア公爵領からほとんど出ることなく育って、歌姫になる時に王都に戻ってきた。

歌姫になるのも、国王陛下から随分反対されたんだって。

ちもありなん。セシリアは本物の歌姫だから、祈りの力がありすぎると、わたしも思う。

本気で願ったら、地震を収めるところか逆に地震でも起こせそう。

降嫁先も随分、陛下が頭を悩ませていらしいけど、まさか自分から平民と結婚したいと言ひ出すなんて、とまた王族に衝撃が走ったらしい。

しかも15歳も上の、決して美中年とは言えない、一見すると頭髪薄めのとろにでもいるおっちゃん。

本当は、今世の中に知らない人はいない、劇団長なんだけど。

考えるとわたしには意外と王族に知り合いが多くて、王宮で行われた披露宴も、王族や辺境伯は知ってる顔触ればかり。あんまり緊張せずに済んだ。

いいきっかけになった、わたしのおかげとヨシコア様は笑った。

辺境伯が王都で結婚式を挙げるのはもう何十年ぶり。

大体は継嗣の段階で結婚してしまつたので、王宮をお借りしてもっとしても爵位が低い、継嗣の若者。だけど、本来なら辺境伯は国王と同じ、国の統領の一人。

王族並の宴を開くことで、穏やかに辺境伯の威信を回復できた。と仰ってくれた。

披露宴の祝宴自体は決められた人数だけど、王宮なので、王宮に上がれる上位貴族は祝福の挨拶に並んでくれた。

この時も、継嗣が披露宴をする人数とは桁違いに多い数が訪れたそう。

とっても疲れました。おかげで本番の祝宴の記憶があまりありません。

心配していたわたしの家族も、王宮で披露宴をすることになって、やっとわたしがここに嫁ぐのが自覚できたらしく。

一応、家族揃って出席してきたから、忘れ去られてなかったって事で。

でも、やっぱりギクシヤクはしてた。もう仕方ない。だって、知らなかったんでしょ？巫女姫候補がどういふことが。

ヨシア様は家族が改めて挨拶してきた時、わたしの手をしっかりと絡み合わせてきた。

これから先、実家に戻すことは難しくなりますが、どうぞカービングの屋敷の方にお気軽にお越しください、とヨシア様に言われ、ああ、そうなんだ、って改めて思った。

降嫁と反対で、王族に近いところに入るから、簡単に実家に帰ることはできない。帰るとしても、この前みたいにつちの実家には分不相応なほどの警護と侍従を連れて行くことになるんだって。つちではそれは迎え入れられない。

これが身分差なんだ、と思った。

カービングに行くまで、侍従がつく生活なんてしたことがなかった。ベルセラムやケビンがついてまわることに、わたしはちょっと窮

屈だと思っていた。

だけど、本当に一夜にして変わってしまった。
この現実慣れることは、わたしはすぐにはできないんだらう。

わたしは勇気がなかったから。

一歩を踏み出して、2番手の自分の居場所から抜け出す勇気。1番と2番は全く違う。誰かの後ろから支えるのと、矢面に立って誰かを庇うのは全く違う。
どこかで判断を間違えて、何かを傷つけることになっても、1番だったら全部飲み込まなきゃいけない。

本当はそれを受け入れる覚悟がなかった。

だけど、ヨシユア様は待っていてくれた。
わたしの巫女姫に固執する気持ちを踏みにじらないように、最後の最後まで巡業と一緒に成功させようとしてくれた。
結果的に成功した巡業とは言えなかったけど、その結果も一緒に受け止めようとしてくれた。

ありがとついでに、と宴中に見上げて言った。ヨシユア様が不思議そうにわたしを見た。

とても綺麗な瞳。
少し冷たい印象の美しいお顔。
だけど、お顔から想像できないくらい計算高くて、だけど、どこか不器用で。

わたしを選んでくれてありがと。そう言いたかったけど、胸がい

っぱいと言えなかった。

「愛してます。ヨシア様。」

あなたが、認めてくれた。歌姫としてのわたしを。

とてもとても、辛かったけど、あなたがわたしを認めてくれたから。
わたし以上に、わたしを愛してくれているって分かっているから。

わたしも愛している。

カービンクの光のあなたを。

あなたと一緒にあの辺境の地に光りを届けたら。

わたしの持てる力の全てで。

カービンクに戻ったのは、春の日の祭りの直前だった。

披露宴の後片付けは、タウンハウスの人達に全部お願いして、披露
宴の次の日、船に乗り込んで帰ってきた。

なんだか、すみません。

カービンクの港からギルニガンゼ十城までは、ずっと領民が出てきて、祝福をしてくれた。

もう一度と帰ってこれないかもしれない、と思いつながら出て行ったのに。

ギルニガンゼ十城に着いたら、領中の盟主たちと騎士兵たちが勢ぞろいして跪いていた。

正直、引きました。これって、2回目。

「心配をかけた。無事、アリエッティを連れ帰った。わたしの妻だ」
わあああ……

拍手と歓声が沸き起こった。

すみません、あんまり泣かちなうでください。

カービングについて泣きすぎて顔の腫れが引かないんです。

ヨシユア様に留守を任されていたナーガがわたしに跪いた。

「お戻りくださりまして本当にありがとうございます。奥様。いっ主が不甲斐なかつたために、悲しい思いをお掛けして申し訳ありません。城の者達を代表してお詫ひ申し上げます」

「...お前...」

ヨシユア様が真っ赤になって後ずさった。

「ホントのことですよ。奥様が戻られなかつたら、せっかくあいつらを討ち取ってもカービングは崩壊だったんですからね」

あー。ナーガだいぶ、振り回されてたのね。

ヨシユア様には、わたしのあまりにもつれない態度に、言葉にする勇気がなかなか出なかつた、と謝られた。いや、あれだけ迫られたら言葉なんかいらしません。

そんなにつれない態度だったかしら？隠してるつもりではいたけど。

帰って次の日が春の日の祭り。

純白のドレスが用意されていた。

いいのかしら？わたしすっかり純潔は無くなってるのだけと。

総レースの、体に沿ったドレス。

これって、ギルニガンゼナ城の美術品が置いてある廊下に飾ってあるドレスとそっくり。

そういつと、ヨシユア様がにっこり笑った。

「そう。間にあって良かった。その昔、奪われた巫女姫をカービンが奪還した際に下賜されたものを模したんだ。ペヤン会頭にも願うしてたんだ」

え？。ロメリア様の旦那様？。

そこにも通じてるの！？。

もしかして、天覧演技の時から？。

「ああ、やっぱりよく似合う」

ヨシユア様がうっとりそう言って、手を取った。

「行こう。わたしの巫女姫。民が待っている」

巫女姫の祝福が頂けなかった舞台に、今度はわたしが立った。ヨシユア様と一緒に。

いつもの祈りの歌を歌う。

光あれ 光あれ 我がたつ杣に光あれ。

恵の風よ、吹け。女神の加護に感謝を。

歌い終わると会場から同じ歌が始まった。繰り返し繰り返し、歌は止まらない。

わたしが広めた賛美歌。

巫女姫と歌ってほしくて。

その夢は叶わなかったけど、それでも忘れないでいてくれた。

また涙が止まらない。

ちゃんと届いていた。わたしは巫女姫に拘っていたけど、カービングの人たちにはちゃんと女神の意思が届いていた。
わたしが広めた歌を忘れないでいてくれた。

ヨシユア様が、ひょい、とわたしを抱き上げた。
「アリエツティ、あなたが広めたんだ。歌を忘れた人々に歌の喜びを思い出させた。カービングの巫女姫はあなただ」

自分の頭より高くわたしを抱き上げて、ヨシユア様が言った。

この歌はわたしが選んだ。雄大で美しくて、だけど甘くはない自然に育まれたこの地の民に合う気がして。
単純で短い歌詞の賛美歌。

「祝福を授けてくれ、アリエツティ」

終わらない歌声の中、ヨシユア様が言った。

「ヨシユア＝ヴァン＝カービング」
わたしは巫女姫になれなかった。
ヨシユア様はカービングの巫女姫と言ってくれる。
だから、わたしもそうになりたい。
カービングだけの巫女姫になりたい。

「あなたの預かる女神の地に、安寧と光を届けよう。女神の民に幸福をもたらすなら、あなたは栄光の加護を受けるだろう」

特別な言祝ぎ。

ずっとあなたに言いたかった。

ロシエ様が眩しそくにわたしを見て、美しく笑った。
その額にキスをしようとして唇を寄せた時、急に頭を押さえられて、深く口づけた。

カービンクの巫女姫―カービンクの巫女姫―万歳―…

割れんばかりの歓声が急峻なカービンクの間々にとどまりました。

終

74 カイコハタの巫女姫..(後書お)

最期までも奮められたお母のやうにいじわるお母

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思っ存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<https://ncode.syosetu.com/n8699gx/>

2番手の女

2022年2月4日02時30分発行